# 千葉市奈木台・藤沢・中芝・清水作遺跡

1979年

千葉県道路公社
財団法人 千葉県文化財センター

# 千葉市奈木台・藤沢・中芝・清水作遺跡

—千葉大網白里有料道路建設工事に伴う調査—

千　葉　県　道　路　公　社
財団法人千葉県文化財センター

# 序　　文

房総半島のほぼ中央部を東西に結ぶ県道千葉一大網線（通称大網街道）は、近年、車の通行量に比し、道路幅が狭隘のため、特に千葉市周辺の交通渋滞をもたらし、これを緩和するため新しい道路の建設が急務となっていました。

そこで千葉県では「千葉一大網白里有料道路」を建設することになりました。千葉県教育委員会では、その路線内に所在する埋蔵文化財について事前には握するとともに、その取扱いについて、事業主体者である千葉県道路公社をはじめ関係諸機関と協議を重ねてまいりました。

その結果、事業の性格上からも路線変更に困難性が認められたので、路線内にかかる遺跡についてはやむを得ず記録保存の措置をとることになりました。

発掘調査については、その調査機関として財団法人千葉県文化財センターを指名し、昭和51年4月から昭和53年7月まで実施してきました。

このたび、その発掘調査の成果が「千葉一大網道路建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書」として刊行される運びとなり、学術的な資料としてはもちろんのこと広く一般に活用されることを期待しております。

終りに、千葉県道路公社の御協力と財団法人千葉県文化財センターの御尽力並びに調査に従事された調査員、調査補助員の皆様に心から謝意を表します。

昭和54年3月31日

千葉県教育委員会

教育長　今井正

# 例　　言

1．本書は、千葉大綱白里有料道路建設工区内の埋蔵文化財の発掘調査報告書である。

2．本事業名は、千葉市万花台遺跡（２地点）・千葉市中芝遺跡・千葉市辺田遺跡・千葉市万花台II遺跡とされているが、報告書においては、県教育庁文化課所有の千葉市埋蔵文化財包蔵地一覧台帳をもとに次のようにした。

万花台遺跡（第１地点）
　奈木台第５遺跡
万花台遺跡（第２地点）
　奈木台第６遺跡
万花台II遺跡
　藤沢遺跡
中芝遺跡
　中芝遺跡
辺田遺跡
　清水作遺跡

3．本書に所収された発掘調査報告は、下記のよう発掘・整理されたものである。

| 遺跡名 | 発掘調査 | 整理 |
|---|---|---|
| 奈木台第６遺跡 | 51．4．1～7．5 | 一部 2．12～3．31 |
| 奈木台第５遺跡 | 51．7．6～11．15 | |
| 中芝第１次 | 51．11．16～52．2．11 | |
| 清水作 | 52．4．1～9．3<br>9．30～12．6 | 一部 1．1～3．31 |
| 中芝２次 | 52．9．4～9．29 | |
| 藤沢 | 53．4．1～6．30 | 7．1～12．31 |

4．調査は、千葉県道路公社の依頼で、文化庁ならびに県教育庁文化課の指導を得て、財団法人千葉県文化財センターが実施した。

5．現地における発掘調査は下記のとうりである。

51年度　　奈木台第５遺跡・奈木台第６遺跡・中芝１次

　総括　故中村恵次、　調査研究員　杉山晋作・瀬戸久夫

52年度　　中芝２次・清水作遺跡

班長　野村幸希、　調査研究員　瀬戸久夫、　臨時職員　鈴木若雄

53年度　　藤沢遺跡

班長　岡川宏道、　調査研究員　瀬戸久夫・高橋博文

6．室内における整理作業及び報告書刊行作業は、瀬戸久夫、高橋博文が当たった。

7．室内撮影は瀬戸久夫、高橋博文が当たった。

8．本書の執筆は、杉山晋作、中山吉秀、瀬戸久夫、高橋博文、鈴木若雄がおこない、文末に文責を記した。また、第1章調査に至る経緯は県教育庁文化課によるものである。

9．発掘調査の実施及び報告書の刊行に至るまで、下記の諸機関、諸賢の御指導、御協力を賜わったことを記し、衷心より謝意を表します。

千葉県道路公社、千葉県教育庁文化課、千葉市教育委員会の諸機関には少なからず便宜を取り計らい頂き、御協力を頂いたことを謝する次第である。

なお、中山吉秀、古内　茂、山本　勇、小澤清男、中山一郎、田坂美代子、吉原滝雄、小林清隆の諸氏には、発掘調査、遺物整理に当たり特に専門的な御教示、御指導を賜わった。

10．実際の調査に当たり、酷暑の中、寒風の中を我々と苦楽を共に調査に従事して頂いた調査補助員の方々、及び室内における整理作業に当たって頂いた補助員の方々は本書の刊行に不可欠であり、終始御協力を頂き衷心より感謝の意を表します。

## 挿　図　の　凡　例

炉　跡

焼　土

繊維土器

須恵器

須恵器（中間焼成）

内黒土器

近世陶器

す　す

# 千葉市奈木台・藤沢・中芝・清水作遺跡

－千葉大網白里有料道路建設工事に伴う調査－

## 目　　次


序文

例言

第一章　発掘調査の経過と概要

第１節　発掘調査に至る経緯…… 1

第Ⅱ節　地理的環境…… 1

１項　周辺遺跡…… 1

２項　立地…… 9

第Ⅲ節　調査方法……10

第二章　奈木台第５遺跡

第Ⅰ節　地形と土層……15

第Ⅱ節　遺構と遺物……16

１項　先土器時代の遺構と遺物……16

２項　土　壙……18

３項　溝状遺構……21

４項　炭焼窯……23

(1)　００１……23

(2)　００２……24

(3)　００３……26

５項　包含層出土の遺物……26

第Ⅲ節　まとめ……34

第三章　奈木台第６遺跡

第Ⅰ節　地形と土層……35
第Ⅱ節　遺構と遺物……36
1項　炭焼窯……38
2項　包含層出土の遺物……38
3項　周辺遺跡採集の土器……40
第Ⅲ節　まとめ……43

第四章　藤沢遺跡
第1節　地形と土層……45
第Ⅱ節　遺構と遺物……45
1項　先土器時代の遺構と遺物……45
2項　方形状柱列……59
(1)　001……59
3項　土　壙……59
(1)　002……59
(3)　003……59
(3)　004……60
(4)　005……60
(5)　006……60
(6)　007……60
(7)　008……60
4項　焼土集中遺構……61
(1)　009……61
(2)　010……62
(3)　011……62
(4)　012……63
(5)　013……64
5項　包含層出土の石鏃……64
6項　包含層出土の土器……66
第Ⅲ節　まとめ……78

第五章　中芝遺跡第１次調査
第Ⅰ節　地形と土層……81
第Ⅱ節　遺構と遺物……81
１項　先土器時代の遺構……81
２項　方形土壙……82
(1)　００１……82
(2)　００２……82
(3)　００３……82
３項　不整形土壙……82
(1)　００４……82
(2)　００５……82
(3)　００６……87
４項　住居跡……87
(1)　００７……87
５項　包含層出土の遺物……88

第六章　中芝遺跡第２次調査
第Ⅰ節　遺構と遺物……99
１項　炭焼窯……99
(1)　００１……99
(2)　００２……99
２項　包含層出土の遺物……99
第Ⅱ節　まとめ……104

第七章　清水作遺跡
第Ⅰ節　地形と土層……111
第Ⅱ節　Ａ地点の遺構と遺物……111
１項　出土遺物……111
第Ⅲ節　Ｂ地点の遺構と遺物……113
１項　住居跡……113

(1) 001……113
(2) 002……115
(3) 003……118
(4) 004……120
(5) 005……124
(6) 006……124
2項 掘立建物跡……130
(1) 001……130
(2) 002……131
3項 溝遺構……132
(1) 001……132
4項 土塁遺構……132
5項 土 壙……134
(1) 001……134
6項 先土器時代……137
7項 包含層出土の遺物……138
(1) 1～4区……138
(2) 5～7区……140
(3) 8区……142
第Ⅳ節 まとめ……145

第八章 清水作古墳
第Ⅰ節 古 墳……149
1項 墳丘および周溝……149
2項 外部施設および内部施設……151
3項 遺物の出土状態……153
4項 遺物各説……153
第Ⅱ節 古墳下の遺構……158
1項 遺物出土状態……158
2項 遺物各説……159
第Ⅲ節 まとめ……171

# 図　版　目　次

## 奈木台第5遺跡


図版1．遺跡　1　北から調査区をのぞむ（発掘前）
　　2　南から調査区をのぞむ（発掘前）
図版2．遺跡　　調査完了（北方向）
図版3．遺跡　　調査完了（南方向）
図版4．遺構　1　001.002.003遺構配置図（北から）
　　2　001.002.003遺構配置図（西から）
図版5．遺構　1　001遺構
　　2　001遺構断面
図版6．遺構　1　001遺構完掘
　　2　001遺構煙道状態
図版7．遺構　1　001遺構煙道
　　2　001遺構焚出部
図版8．遺構　1　001遺構窯壁断面
　　2　001遺構窯壁断面
図版9．遺構　1　001遺構焚出部掘込み
　　2　001遺構完掘
図版10．遺構　1　002.003遺構配置状態
　　2　002.003遺構断面
図版11．遺構　1　002.003遺構完掘
　　2　002遺構窯壁断面
図版12．遺構　1　002遺構掘込み
　　2　002遺構焚出部
図版13．遺構　1　002.003遺構完掘
　　2　002遺構焚出掘込み
図版14．遺構　1　溝状遺構近景
　　2　土壙
図版15．遺構　　溝状遺構
図版16．遺物　　先土器時代遺物
図版17．遺物　1　縄文土器(1)　2・4縄文土器(5)
　　3　石皿
図版18．遺物　　縄文土器(2)
図版19．遺物　　縄文土器(3)


## 奈木台第6遺跡


図版20．遺跡　1　調査区全景（調査前）
　　2　遠景（東方向から）
図版21．遺跡　　調査完了
図版22．遺構　1　001遺構断面
　　2　001遺構完掘
図版23．遺物　　縄文土器
図版24．遺物　　縄文土器


## 藤沢遺跡


図版25．遺跡　1　調査区全景
　　2　遺構確認
図版26．遺構　1　調査完了
　　2　005遺構完了
図版27．遺構　1　008遺構断面
　　2　005遺構完掘
図版28．遺構　1　006遺構確認状態
　　2　006遺構断面
図版29．遺構　　007遺構断面
図版30．遺構　　007遺構完了
図版31．遺構　1　013遺構完掘
　　2　013遺構近景
図版32．遺物　　遺物出土状態(1)
図版33．遺物　　遺物出土状態(2)
図版34．遺物　1　先土器時代遺物出土状態（1群）
　　2　出土遺物
図版35．遺物　1　先土器時代遺物出土状態（2群）
　　2　出土状態（東方向）
図版36．遺構　1　土層断面（B・C－23）
　　2　土層断面（A・B－21）
図版37．遺構　1　土層断面（B－22－21）
　　2　土層断面（B－20・19）
図版38．遺物　1　先土器時代遺物（1群）
　　2　先土器時代遺物（2群）
図版39．遺物　1　石鏃
　　2　縄文土器
図版40．遺物　　縄文土器(1)
図版41．遺物　　縄文土器(2)
図版42．遺物　　縄文土器(3)
図版43．遺物　　縄文土器(4)
図版44．遺物　　縄文土器(5)
図版45．遺物　　縄文土器(6)

## 中芝第1次


図版46. 遺跡　調査全景（東方向）
図版47. 遺跡　調査完了
図版48. 遺構　1　001遺構確認状態
　2　001遺構断面
図版49. 遺構　1　001遺構完掘（西から）
　2　001遺構完掘（南から）
図版50. 遺構　1　002遺構確認状態
　2　002遺構完掘（南から）
図版51. 遺構　1　002遺構断面
　2　002遺構完掘（西から）
図版52. 遺構　1　003遺構確認状態
　2　003遺構断面
図版53. 遺構　1　004遺構確認状態
　2　004遺構断面
図版54. 遺構　1　007遺構断面
　2　007遺構完掘
図版55. 遺物　縄文土器(1)
図版56. 遺物　縄文土器(2)
図版57. 遺物　1　縄文土器(1)　2　縄文土器(2)


## 中芝第2次


図版58. 遺跡　1　遠景（東から）
　2　調査区全景（西から）
図版59. 遺跡　1　調査完了（西から）
　2　001遺構確認状態
図版60. 遺構　1　001遺構断面
　2　遺構断面
図版61. 遺構　1　001遺構煙道部
　2　煙道部近景
図版62. 遺構　1　001遺構焚口
　2　001遺構焚出部遺構
図版63. 遺構　1　002遺構近景
　2　002遺構


## 清水作遺跡


図版64. 遺跡　1　遺跡遠景
　2　遺跡近景
図版65. 遺跡　1　清水A地点（調査前）
　2　A地点調査完了
図版66. 遺構　1　001.002住居跡確認状態
　2　001住居跡完掘
図版67. 遺構　1　001.002住居跡完掘
　2　002住居跡貯蔵穴
図版68. 遺構　1　003.004住居跡確認状態
　2　003.004住居跡完掘
図版69. 遺構　1　006住居跡完掘
　2　005住居跡完掘
図版70. 遺構　1　001.002掘立建物跡
　2　001溝遺構
図版71. 遺構　土塁状遺構
図版72. 遺構　1　001土壙
　2　8区遺物出土状態
図版73. 遺構　1　古墳遠景
　2　古墳近景
図版74. 遺構　1　西側周溝（南から）
　2　東側周溝（南から）
図版75. 遺構　1　北側周溝（西から）
　2　南側周溝（西から）
図版76. 遺構　1　墳丘東側断面
　2　墳丘西側断面
図版77. 遺構　1　墳丘南側断面
　2　墳丘北西断面
図版78. 遺構　1　内部施設
　2　内部施設遠景
図版79. 遺構　1　内部施設近景（墳丘から）
　2　内部施設近景（周溝から）
図版80. 遺構　1　発掘後墳丘（南上から）
　2　発掘後墳丘（南から）
図版81. 遺物　1　直刀出土状態
　2　古墳下遺物状態
図版82. 遺物　A地点出土遺物
図版83. 遺物　先土器時代遺物
図版84. 遺物　住居跡出土遺物
図版85. 遺物　住居跡グリッド出土遺物
図版86. 遺物　1～4区出土遺物
図版87. 遺物　8区出土遺物
図版88. 遺物　古墳出土遺物(1)
図版89. 遺物　古墳出土遺物(2)
図版90. 遺物　古墳出土土器

# 挿 図 目 次


第1図　遺跡周辺地形図（1：100.000）…… 2
第2図　遺跡位置と周辺遺跡（1：25.000）…… 3
第3図　奈木台第5・6 遺跡周辺地形図（1：3.000）…… 8
第4図　奈木台第5遺跡調査区域図（1：2.000）…… 11
第5図　奈木台第5遺跡グリット設定図（1：1.000）…… 12
第6図　奈木台第5遺跡土層図（1：800）…… 15
第7図　奈木台第5遺跡遺構分布図（1：600）…… 16
第8図　先土器時代遺物出土状態図（1/80）…… 18
第9図　先土器時代遺物(1)（1/2）…… 19
第10図　先土器時代遺物(2)（1/2）…… 20
第11図　土壙実測図（1/60）…… 21
第12図　溝状遺構実測図（1/600）…… 22
第13図　炭焼窯配置図（1/60）…… 23
第14図　001遺構（炭焼窯）実測図(1/60）…… 24
第15図　002遺構（炭焼窯）実測図(1/60）…… 25
第16図　003遺構実測図(1/60）…… 26
第17図　縄文土器(1)(1/3)…… 27
第18図　縄文土器(2)(1/3）…… 29
第19図　縄文土器(3)(1/3）…… 30
第20図　縄文土器・石器(4)(1/3）…… 32
第21図　縄文土器・古銭(5)(1/2）…… 33
第22図　奈木台第6遺跡調査区域図(1：2.000）…… 35
第23図　奈木台第6遺跡グリット設定図（1：1.000）…… 36
第24図　奈木台第6遺跡土層図（1：800）…… 37
第25図　001遺構（炭焼窯）実測図(1/60）…… 38
第26図　縄文土器(1)(1/3）…… 39
第27図　周辺遺跡採集縄文土器(2)(1/3）…… 41
第28図　藤沢遺跡周辺地形図（1：3000）…… 46
第29図　藤沢遺跡調査区域図（1：2000）…… 47
第30図　藤沢遺跡グリット設定図（1：1000）…… 48

第31図　藤沢遺跡遺構土層図（1：600）……49
第32図　先土器時代遺物出土状態（1群）(1/80)……50
第33図　先土器時代遺物（1群）(1/2)……51
第34図　先土器時代遺物出土状態(2群)（1/80）……52
第35図　先土器時代遺物（2群）(1/2)……53
第36図　計測説明図……55
第37図　001遺構実測図(1/60)……59
第38図　002・003・004遺構実測図(1/60)……60
第39図　005・006遺構実測図（1/60）……61
第40図　007・008遺構実測図（1/60）……62
第41図　009・010・011遺構実測図(1/30)……63
第42図　012遺構実測図（1/30）……64
第43図　013遺構実測図(1/60)……66
第44図　石鏃（1/2)……67
第45図　縄文土器(1)（1/2)……68
第46図　縄文土器(2)（1/3)……68
第47図　縄文土器(3)（1/6)……69
第48図　縄文土器(4)（1/3)……70
第49図　縄文土器(5)（1/6)……71
第50図　縄文土器(6)（1/3)……72
第51図　縄文土器(7)（1/6)……73
第52図　縄文土器(8)（1/3)……74
第53図　縄文土器(9)（1/3)……75
第54図　縄文土器(10)（1/3)……76
第55図　中芝遺跡周辺地形図（1：3000）……83
第56図　中芝遺跡調査区域図（1：2000）……84
第57図　中芝遺跡グリット設定図（1：1000）……85
第58図　中芝遺跡遺構・土層図(1)（1：800)……86
第59図　中芝遺跡土層図(2)……87
第60図　第1次001・002・003遺構実測図(1/60)……89
第61図　第1次004・005遺構実測図（1/60）……89
第62図　第1次006遺構実測図(1/60)……90

第63図　第１次007遺構実測図（1/60）…… 91
第64図　第1 次007遺構カマド実測図(1/30）…… 92
第65図　第１次先土器遺物出土状態図（1/200）…… 93
第66図　第１次縄文土器(1)(1/2）…… 94
第67図　第１次縄文土器(2)(1/3）…… 95
第68図　第１次縄文土器(3)(1/3）…… 96
第69図　第１次土器・石器(4)(1/3）…… 97
第70図　第２次001遺構（炭焼窯)実測図(1/60）……100
第71図　第２次001遺構（炭焼窯)堀込図(1/60）……101
第72図　第２次002遺構（炭焼窯)実測図(1/60）……102
第73図　第２次出土遺物……103
第74図　清水作遺跡周辺地形図（１：3000）……107
第75図　清水作遺跡調査区域図（１：2000）……108
第76図　清水作遺跡Ａ・Ｂ地点グリット設定図（１：800)……109
第77図　清水作遺跡遺構分布図（１：1200）……110
第78図　清水作遺跡土層図（１：1200）……112
第79図　Ａ地点出土遺物（1/2)……113
第80図　001・002住居跡実測図（1/60）……114
第81図　001住居跡カマド実測図（1/30）……115
第82図　002住居跡炉跡・貯蔵穴実測図（1/30）……116
第83図　002住居跡出土遺物(1/4)(1/2）……117
第84図　003・004住居跡実測図（1/60）……119
第85図　003住居跡出土遺物（1/4）……120
第86図　004住居跡出土遺物（1/4）……120
第87図　004住居跡貯蔵穴実測図（1/30)……121
第88図　003・004住居跡カマド・炉跡実測図（1/30）……122
第89図　004住居跡炭化物サンプル採取状態図(1/60）……123
第90図　005住居跡実測図(1/60）……125
第91図　006住居跡実測図(1/60）……126
第92図　006住居跡出土遺物(1/4)(1/2）……127
第93図　006住居跡カマド実測図(1/30）……128
第94図　001掘立建物跡実測図(1/60）……130

第 95 図　002掘立建物跡実測図（1/60）…… 131
第 96 図　001溝実測図(1/80）…… 133
第 97 図　001溝出土遺物(1/4)…… 134
第 98 図　土塁遺物実測図(/160)…… 135
第 99 図　001土壙実測図（1/60）…… 136
第100図　001土壙出土遺物(1/4）…… 136
第101図　先土器時代遺物（1/2）…… 137
第102図　1～4区出土遺物…… 139
第103図　5～7区出土遺物（1/4）…… 141
第104図　8区遺物出土状態図（1/60）…… 143
第105図　8区出土遺物（1/4）…… 144
第106図　墳丘測量図（1/300）…… 149
第107図　発掘区設定図(1/300）…… 150
第108図　墳丘平面図（1/300)…… 151
第109図　墳丘断面図（1/20）…… 折込
第110図　遺物出土位置図（1/300)…… 152
第111図　内部施設（1/30）…… 153
第112図　直刀出土状態図（1/40）…… 154
第113図　古墳出土遺物(1)（1/50）…… 155
第114図　古出土遺物(2)（1/4）（1/2）…… 156
第115図　古墳盛土出土縄文土器（1/2)…… 157
第116図　古墳下遺物出土状態図（1/400)…… 158
第117図　土器片出土状態図（1/40）…… 161
第118図　石片出土状態図（1/40）…… 161
第119図　縄文土器（1/4)…… 162
第120図　石片接合資料(1)…… 164
第121図　石片接合資料(2)…… 165
第122図　石片接合資料(3)…… 166
第123図　石片接合資料(4)…… 167
第124図　石片接合資料(5)…… 168
第125図　古墳下出土土器片接合分布図 …… 172
第126図　古墳下出土石片接合分布図…… 173

# 表　目　次

第1表　1群出土石器……55

第2表　2群出土石器（1）……56

第3表　2群出土石器（2）……57

第4表　2群出土石器（3）……58

第5表　石鏃……65

# 第一章　発堀調査の経過と概要

## 第Ⅰ節　発掘調査に至る経緯

通称「大綱街道」と呼ばれる、県道千葉一大綱線は、昭和45年頃から車両の通行量が急激に増加する傾向にあり、新道路の計画にせまられていた。

昭和47年12月の県議会において、千葉一大綱白里有料道路の建設が可決され、昭和48年３月には路線認可、区域決定、県報告示と一連の事務手続がなされた。

その後、昭和48年４月と昭和49年10月に事業主体者の千葉県道路公社から千葉県教育委員会へ路線内の埋蔵文化財の所在について照会があり、路線内の現地調査を実施したところ、縄文式土器及び土師器散布地等４か所が所在することを確認し、同公社へその旨回答した。

この路線内の遺跡は、千葉市誉田町所在の万花台遺跡（２地点）、（奈木台第５・６遺跡）、同市高田町の中芝遺跡、同市辺田町の五反目（清水作遺跡）である。

これら４か所の遺跡について、千葉県教育委員会では千葉県道路公社とその取扱いについて、再三協議を重ねた結果、路線の変更に困難性が認められることから記録保存の措置をとることで協議が整い、財団法人千葉県文化財センターが発掘調査に当たることになった。

発掘調査は、昭和51年４月から昭和52年１月まで万花台遺跡（第１地点）、中芝遺跡（第１次調査）の調査を実施した。更に、昭和52年４月から11月まで清水作遺跡と古墳（１基）及び中芝遺跡（第２次調査）を調査した。

また、これらの遺跡の調査中、万花台遺跡（昭和51年度調査）に隣接する地点で新たに遺跡が所在することが確認され、昭和53年４月から６月にかけて発掘調査を実施した。

遺物整理、報告書作成等の整理作業については、昭和53年７月から12月にかけて実施した。

（文化課）

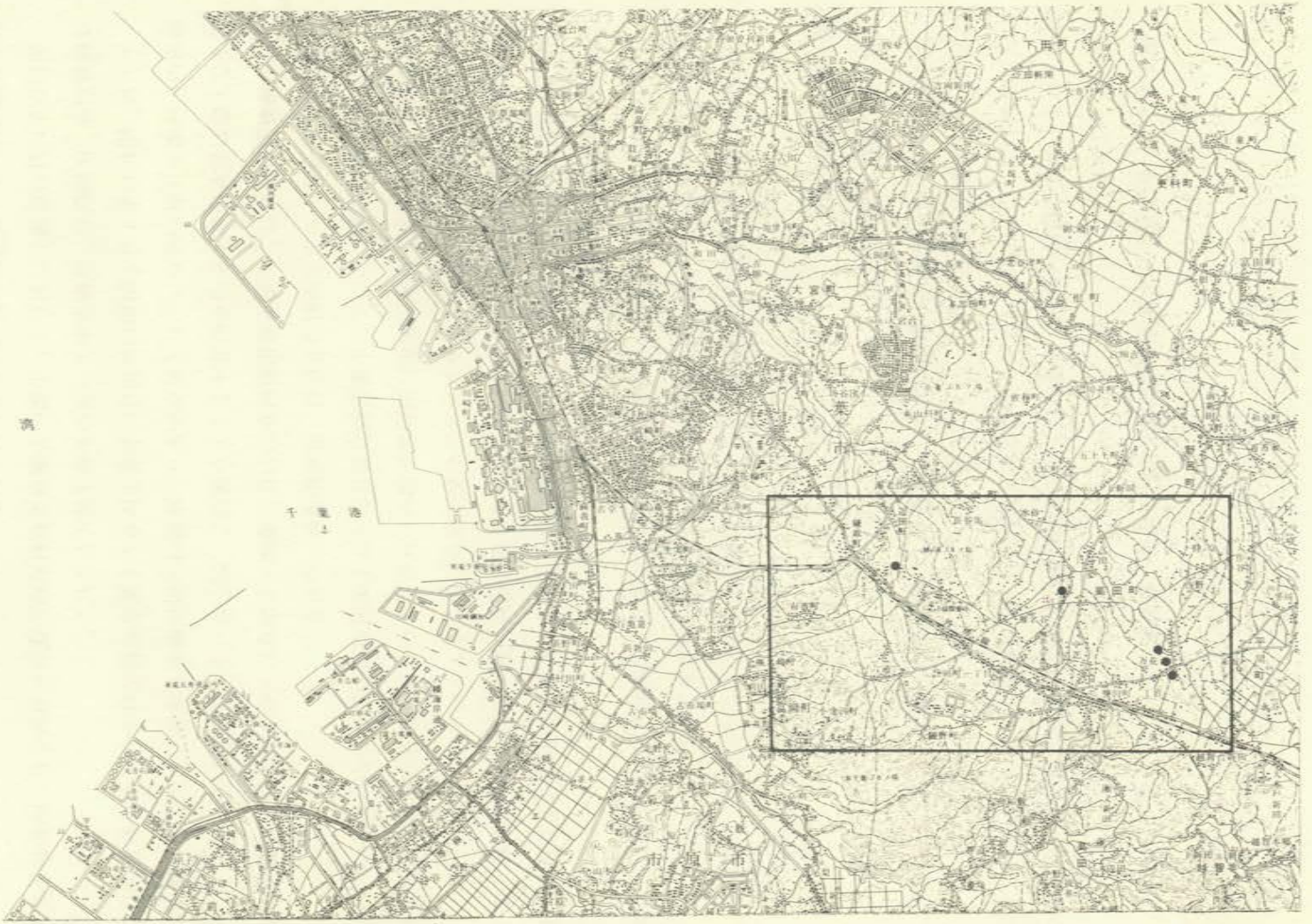
## 第Ⅱ節　地理的環境

### １項　周辺遺跡（第１・２図）

図示したのは、週辺遺跡の分布図であり、△は貝塚、○は散布地、●は古墳、∴は古墳群、□は城跡、■は供養塚である。

調査をおこなった奈木台第５遺跡・第６遺跡・藤沢遺跡・中芝第１次・第２次とも同一支流の支谷である。清水作遺跡Ａ地点・Ｂ地点は、別の支流に属するもので地理的環境は、各項目で記述することにする。

遺跡番号は、県教育庁文化課所有の埋蔵文化財包蔵地一覧台帳にならい同一番号を用いた。




第 1 図　遺跡周辺地形図 (1：100,000)

第 2 図　遺跡位置と周辺遺跡（1：25000）

| 番号 | 遺跡名 | 所在地 | 地目 | 種別 | 時代 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 596 | 平山 | 千葉市平山町長谷部 | 畑・山林<br>宅地 | 城跡 | 中世～室町 | 1部破壊 |
| 603 | 曲堀 | 〃 高田町曲堀 | 畑 | 包含地 | 縄文 | |
| 686 | 有吉 | 〃 有吉町宮前 | 畑・山林<br>荒地・境内 | 貝塚 | 縄文<br>土師 | |
| 687 | 馬ノ口 | 〃 有吉町馬ノ口東鞍台 | 畑・山林<br>荒地 | 包含地<br>古墳群 | 縄文・土師<br>古墳 | 円墳2基 |
| 688 | 鎌取 | 〃 鎌取町鎌取 | 畑 | 包含地 | 縄文<br>土師 | |
| 689 | 大角 | 〃 辺田町大角 | 畑 | 包含地 | 縄文<br>土師 | |
| 690 | 大作 | 〃 辺田町大作 | 畑 | 包含地 | 土師 | |
| 693 | 大木戸 | 〃 鎌取町鎌取大木戸野 | 畑 | 包含地 | 縄文<br>土師 | |
| 694 | 辺田向 | 〃 辺田町辺田向 | 山林 | 古墳 | 古墳 | 円墳 |
| 695 | 日照田(有吉北) | 〃 有吉町日照田 | 山林<br>敷地 | 貝塚 | 縄文 | |
| 701 | 大野羅 | 〃 辺田町大野羅 | 山林 | 古墳群<br>牧の遺構？ | 古墳<br>中近世 | |
| 703 | 山谷 | 〃 辺田町山谷 | 畑 | 包含地 | 縄文 | |
| 704 | | 〃 誉田1丁目榎作・山谷・鈴子 | 畑 | 包含地 | 縄文<br>土師 | |
| 705 | 山谷 | 〃 誉田1丁目山谷 | 畑 | 包含地 | 縄文<br>土師 | |
| 706 | 上深見沢 | 〃 誉田1丁目深見沢 | 畑 | 包含地 | 縄文 | |
| 707 | 下深見沢 | 〃 誉田1丁目深見沢 | 畑<br>宅地 | 包含地 | 縄文<br>土師 | |
| 709 | 南水砂 | 〃 誉田1丁目南水砂 | 畑 | 包含地 | 縄文 | |
| 710 | 東水砂 第1 | 〃 誉田1丁目東水砂 | 畑 | 包含地 | | |
| 712 | 東水砂 第3 | 〃 誉田1丁目東水砂 | 畑<br>宅地 | 包含地 | 土師 | |
| 713 | 東水砂 第4 | 〃 誉田1丁目東水砂 | 畑 | 包含地 | 縄文<br>土師 | |
| 714 | 東水砂 第5 | 〃 誉田1丁目東水砂 | 畑 | 包含地 | 土師 | |
| 715 | 東水砂 第6 | 〃 誉田1丁目東水砂 | 宅地<br>畑・荒地 | 包含地 | 縄文<br>土師 | |
| 716 | 善行 | 〃 誉田2丁目善行 | 畑 | 包含地 | 縄文 | |
| 717 | 椎名谷 第1 | 〃 誉田1丁目椎名谷 | 畑 | 包含地 | 縄文<br>土師 | |
| 718 | 椎名谷 第2 | 〃 誉田1丁目椎名谷 | 畑<br>宅地 | 包含地 | 縄文 | |
| 719 | 椎名谷 第3 | 〃 誉田1丁目椎名谷 | 畑<br>宅地 | 包含地 | 縄文 | |
| 720 | 椎名谷 第4 | 〃 誉田1丁目椎名谷 | 畑<br>宅地 | 包含地 | 縄文 | |
| 721 | 向 第1 | 〃 誉田1丁目向 | 畑 | 包含地 | 縄文<br>土師 | |
| 722 | 向 第2 | 〃 誉田1丁目向 | 畑 | 包含地 | 縄文<br>土師 | |
| 723 | 向 第3 | 〃 誉田1丁目向 | 畑<br>山林 | 包含地 | 縄文<br>土師 | |
| 724 | 向 第4 | 〃 誉田1丁目向 | 畑<br>山林 | 包含地 | 土師 | |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 725 | 椎名谷 第5 | 千葉市高田町椎名谷 | 畑<br>宅 地 | 包含地 | 縄 文 | | |
| 726 | 椎名谷 第6 | 〃 高田町椎名谷 | 畑 | 包含地 | 縄 文<br>土 師 | | |
| 727 | 椎名谷 第7 | 〃 高田町椎名谷 | 畑 | 包含地 | 縄 文<br>土 師 | | |
| 728 | 椎名谷 第8 | 〃 誉田2丁目椎名谷 | 畑 | 包含地 | 縄 文 | 馬蹄形 | |
| 729 | 誉田高田 | 〃 高田町貝塚 | 畑<br>山 林 | 貝 塚<br>古 墳 | 古 墳<br>縄 文 | 円墳 | |
| 730 | 冬 寒 台 | 〃 高田町冬寒台 | 畑 | 包含地 | 縄 文 | | |
| 731 | 中 芝 北 | 〃 高田町中芝 | 畑 | 包含地 | 縄 文 | | |
| 732 | 中 芝 | 〃 高田町中芝 | 畑 | 包含地 | | | |
| 733 | 椎 名 谷 | 〃 誉田2丁目南水砂 | 畑・宅地<br>果樹園 | 包含地 | 縄 文 | 環状貝塚 | |
| 734 | 長 谷 部 | 〃 平山町首理台 | ゴルフ場敷<br>地内 | 貝 塚 | 古 墳 | 前方後円墳3基<br>円墳6基 | |
| 735 | 中 原 | 〃 平山町中原 | ゴルフ場敷<br>地内 | 古墳群 | 古 墳 | 前方後円墳2基<br>円墳4基 | |
| 736 | 塚 原 | 〃 平山町塚原 | 山 林 | 古墳群 | 古 墳 | 円 墳 | |
| 737 | 下深見沢 | 〃 平山町下深見沢 | 畑<br>山 林 | 古 墳 | 縄 文<br>土 師 | 方形墳？ | |
| 738 | 中堀 第1 | 〃 高田町中堀 | 畑 | 包含地<br>古墳？ | 縄 文<br>土 師 | | |
| 739 | 中堀 第2 | 〃 高田町中堀 | 畑 | 包含地 | 縄 文 | | |
| 740 | 中堀 第3 | 〃 高田町中堀 | 畑 | 包含地 | 縄 文<br>土 師 | | |
| 741 | 中堀 第4 | 〃 高田町中堀 | 畑 | 包含地 | 縄 文<br>土 師 | | |
| 742 | 柊台 第1 | 〃 高田町柊台 | 畑 | 包含地 | 縄 文<br>土 師 | | |
| 743 | 柊台 第2 | 〃 高田町柊台 | 畑 | 包含地 | 縄 文<br>土 師 | | |
| 744 | 柊台 第3 | 〃 高田町柊台 | 畑<br>宅 地 | 包含地 | 縄 文<br>土 師 | | |
| 745 | 中之芝 西 | 〃 高田町中之芝 | 畑 | 包含地 | 縄 文 | | |
| 746 | 柊台 第4 | 〃 高田町柊台 | 畑<br>山 林 | 包含地 | 縄 文<br>土 師 | | |
| 747 | 柊台 第5 | 〃 高田町柊台 | 畑<br>山 林 | 包含地 | 縄 文 | | |
| 748 | 内野 第1 | 〃 高田町内野 | 畑・山林<br>宅 地 | 包含地 | 縄 文<br>土 師 | | |
| 749 | 中 之 芝 | 〃 高田・野呂町中之芝 | 畑<br>宅 地 | 包含地 | 縄 文<br>土 師 | | |
| 750 | 中之芝 東 | 〃 野呂町中之芝 | 畑 | 包含地 | 縄 文 | | |
| 751 | 内野 第2 | 〃 高田町内野 | 畑・山林<br>宅 地 | 包含地 | 縄 文 | | |
| 752 | 内野 第3 | 〃 高田町内野 | 畑<br>山 林 | 包含地 | 縄 文<br>土 師 | | |
| 753 | 内野 第4 | 〃 高田町内野 | 畑 | 包含地 | 縄 文 | | |
| 754 | 内野 第5 | 〃 高田町内野 | 畑 | 包含地 | 縄 文<br>土 師 | | |
| 755 | 内野 第6 | 〃 高田町内野 | 畑 | 包含地 | 縄 文<br>土 師 | | |
| 756 | 爪 ヶ 子 | 〃 高田町爪ヶ子 | 畑 | 包含地 | 縄 文<br>土 師 | | |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 757 | 爪ヶ子南 | 千葉市高田町爪ヶ子 | 畑 | 包含地 | 縄文<br>土師 | |
| 758 | 天保 | 〃 高田町天保 | 畑 | 包含地 | 縄文<br>土師 | |
| 759 | 西狩ノ原北 | 〃 野呂町西狩ノ原 | 畑 | 包含地 | 土師 | |
| 760 | 西狩ノ原 | 〃 野呂町西狩ノ原 | 畑 | 包含地 | 縄文 | |
| 761 | 西狩ノ原東 | 〃 野呂町西狩ノ原 | 畑 | 包含地 | 土師 | |
| 763 | 内野、第7 | 〃 高田町内野 | 畑 | 包含地 | 縄文<br>土師 | |
| 764 | 花見堂、南 | 〃 高田町花見堂 | 畑<br>山林 | 包含地 | 縄文<br>土師 | |
| 765 | 花見堂、西 | 〃 高田町花見堂 | 畑 | 包含地 | 縄文<br>土師 | |
| 806 | 上ノ台、北 | 〃 小金沢町上ノ台 | 畑 | 包含地 | 縄文 | |
| 809 | 篠堀 | 〃 椎名崎町篠堀 | 畑 | 包含地 | 土師 | |
| 810 | 六通 | 〃 大金沢町六通 | 山林・宅地<br>畑・果樹園 | 貝塚 | 縄文<br>土師 | 馬蹄形貝塚 |
| 812 | 白鳥 | 〃 大金沢町白鳥 | 畑・山林<br>宅地 | 包含地 | 縄文<br>土師 | |
| 814 | ムコアラク | 〃 大金沢町六通台 | 畑・山林<br>宅地 | 古墳群 | 古墳 | 円墳4基 |
| 815 | 六通辺田 | 〃 大金沢町六通辺田 | 畑・山林<br>境内 | 包含地 | 縄文<br>土師 | |
| 816 | 六通 | 〃 大金沢町六通辺田 | 畑・山林<br>境内 | 古墳群 | 古墳 | |
| 818 | 大膳野、南 | 〃 大金沢町左り作 | 畑<br>荒地 | 包含地 | 縄文 | |
| 819 | 椎名崎 | 〃 椎名崎町道作 | 荒地 | 貝塚 | 縄文<br>土師 | |
| 820 | 長作 | 〃 小金沢町長作 | 畑 | 包含地 | 縄文 | |
| 821 | 月山 | 〃 椎名崎町御塚台 | 畑 | 包含地<br>三山 | 土師<br>中近世 | 方形墳 |
| 822 | 金山 | 〃 大金沢町向田西 | 畑<br>荒地 | 包含地 | 縄文<br>土師 | |
| 823 | 太田法師 | 〃 大金沢町小山 | 畑<br>荒地 | 包含地 | 土師 | |
| 826 | 椎名崎 | 〃 大金沢町道作 | 畑<br>山林 | 包含地<br>古墳群 | 縄文<br>古墳 | 前方後円墳1基<br>円墳1基 |
| 829 | 小金沢 | 〃 小金沢町堂面 | 山林<br>道路敷地 | 貝塚 | 縄文 | 環状貝塚 |
| 831 | | 〃 小金沢町堂面 | 山林 | 供養塚 | 中近世 | 方形墳 |
| 832 | 六通 | 〃 大金沢町向田西 | 山林 | 古墳 | 古墳 | 円墳 |
| 833 | 鈴子 | 〃 誉田1丁目鈴子 | 畑 | 包含地 | 縄文<br>土師 | |
| 835 | 椎名道 | 〃 誉田1丁目椎名道 | 畑 | 包含地 | 縄文<br>土師 | |
| 836 | 南宅地尻 | 〃 誉田1丁目南宅地尻 | 畑<br>宅地 | 包含地 | 縄文<br>土師 | |
| 837 | 白鳥台 | 〃 誉田1丁目白鳥台 | 畑・山林<br>荒地 | 包含地 | 縄文 | |
| 838 | 鷹見塚 | 〃 誉田1丁目鷹見塚 | 畑<br>果樹園 | 包含地 | 縄文<br>土師 | |
| 839 | 大膳野、北 | 〃 大膳野町大膳野 | 畑<br>宅地 | 貝塚 | 縄文<br>土師 | |
| 840 | 居原ノ山 | 〃 大膳野町居原ノ山 | 畑<br>宅地 | 包含地 | 縄文<br>土師 | |

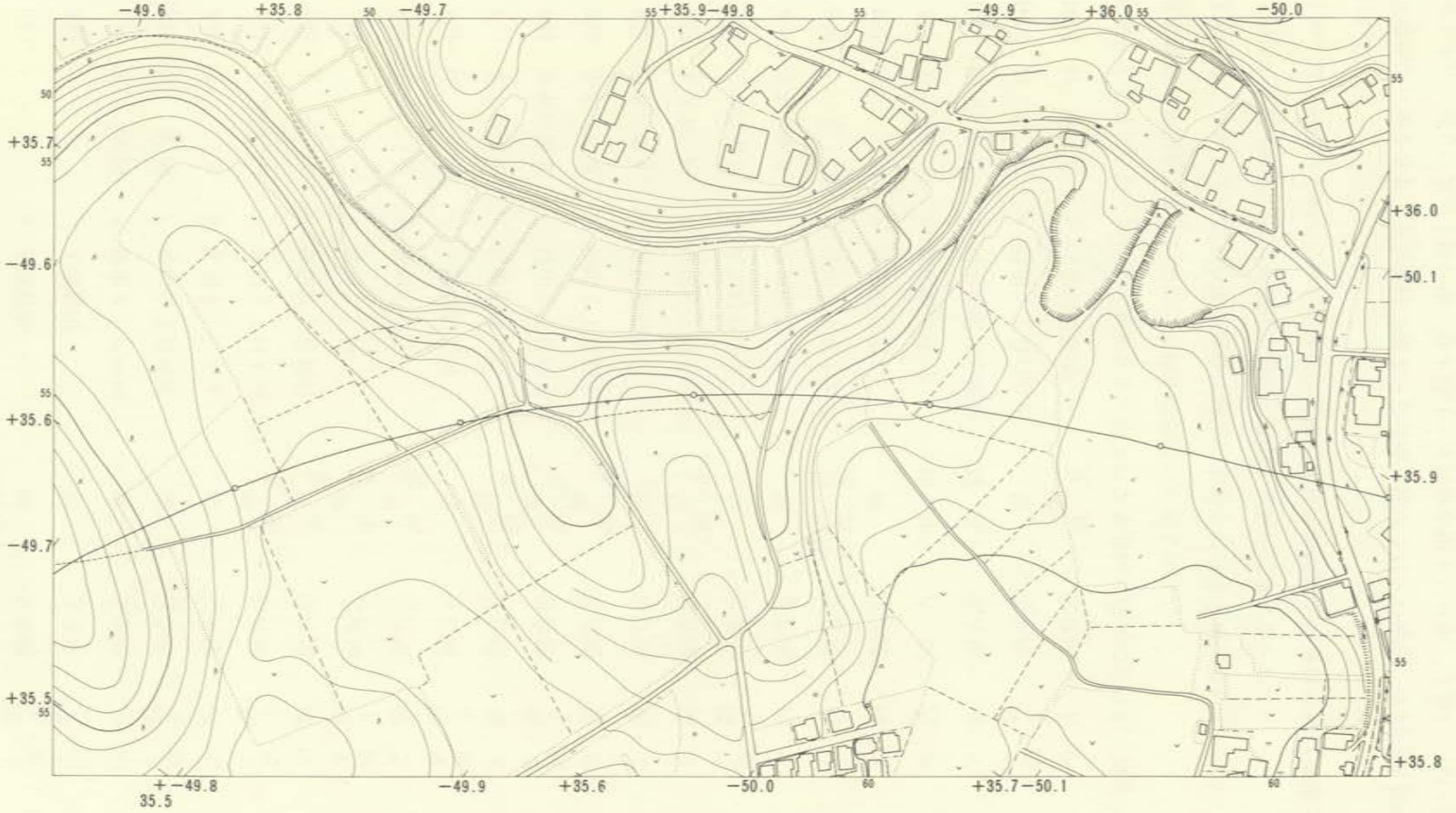
| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 841 | | 千葉市大膳野町 | 畑・宅地<br>果樹園 | 包含地 | 縄　文 | | |
| 842 | | 〃　大膳野町 | 畑 | 包含地 | 縄　文<br>土　師 | | |
| 843 | | 〃　大膳野町 | 畑 | 包含地 | 縄　文<br>土　師 | | |
| 844 | 笊　堰西 | 〃　誉田２丁目笊堰 | 畑 | 包含地 | 土　師 | | |
| 845 | 笊　堰南 | 〃　誉田２丁目笊堰 | 畑 | 包含地 | 縄　文<br>土　師 | | |
| 846 | 清　　水 | 〃　誉田２丁目清水 | 畑 | 包含地 | 縄　文 | | |
| 847 | 大滝辺田 | 〃　誉田３丁目大滝辺田 | 畑<br>宅　地 | 包含地 | 縄　文<br>土　師 | | |
| 848 | 十　文　字 | 〃　誉田２丁目善行 | 畑<br>荒　地 | 包含地 | 縄　文 | | |
| 849 | | 〃　誉田２丁目 | 畑<br>荒　地 | 包含地 | 縄　文<br>土　師 | | |
| 850 | 中　　芝 | 〃　高田町中芝 | 畑<br>荒　地 | 包含地 | 縄　文 | | |
| 851 | 長　　堀 | 〃　大膳野町長堀 | 畑 | 包含地 | 縄　文<br>土　師 | | |
| 853 | 奈木台第１ | 〃　高田町奈木台 | 畑<br>宅　地 | 包含地 | 縄　文 | | |
| 854 | 奈木台第２ | 〃　誉田２丁目奈木台 | 畑<br>宅　地 | 包含地 | 縄　文<br>土　師 | | |
| 855 | 奈木台第３ | 〃　誉田２丁目奈木台 | 畑<br>宅　地 | 包含地 | 縄　文 | | |
| 856 | 奈木台第４ | 〃　高田町奈木台 | 畑 | 包含地 | 縄　文 | | |
| 857 | 十文字　西 | 〃　誉田２丁目十文字 | 畑<br>宅　地 | 包含地 | 縄　文 | | |
| 858 | 奈木台第５ | 〃　高田町奈木台 | 畑 | 包含地 | 縄　文<br>土　師 | | |
| 859 | 奈木台第６ | 〃　高田町奈木台 | 畑 | 包含地 | 縄　文 | | |
| 860 | 十　文　字 | 〃　誉田２丁目十文字 | 畑・山林<br>宅　地 | 包含地 | 縄　文 | | |
| 861 | 藤　　沢 | 〃　高田町藤沢 | 畑 | 包含地 | 縄　文 | | |
| 865 | 万　花　台 | 〃　高田町万花台 | 山　林 | 古　墳 | 古　墳 | 円　墳 | |
| 1001 | 鍛冶屋坊 | 〃　椎名崎町鍛冶屋坊 | 裸　地 | 包含地 | 縄　文 | | |
| 1002 | 白　鳥　台 | 〃　誉田１丁目白鳥台 | 畑 | 包含地 | 縄　文<br>土　師 | | |
| 1004 | 長　堀　北 | 〃　大金沢町長堀 | 畑<br>宅　地 | 包含地 | 土　師 | | |

今回報告する万花台第１地点は、№８５８・奈木台第５遺跡で縄文の包含地と確認されているが、道路幅のみの調査であったので、明確な遺構はつかめなかった。

第２地点は、№８５９・奈木台第６遺跡で縄文、土師の包含地と確認されているが、調査開始時には台地の大部分の表土を削平され、遺物・遺構とも検出できなかった。

第３地点は、台帳に記載のない新規発見の遺跡で、諸関係機関との連絡で藤沢遺跡と命名することにした。

中芝遺跡は、№７３２・中芝遺跡で縄文の包含地と確認されているが、今回の調査時には、表土を削平され一部分に縄文土器片等、歴史時代の住居跡が出土したが、遺跡の主体は、南側の台




第 3 図　奈木台第5・6遺跡周辺地形図

0　100m
1：3000

地の中央部附近であろうと考えられる。

辺田遺跡は、台帳に記載のない新規発見の遺跡で、万花台第3地点同様に清水作遺跡と命名することにした。

（瀬戸久夫）

## 2項　立　地

奈木台・藤沢遺跡（第3・28図）は、千葉市高田町の万花台に在り、国鉄外房線の誉田駅から約1㎞強北東に位置する。この奈木台遺跡の立地する台地は千葉市内を西流して東京湾に注ぐ都川の1支流の最奥部に当たる。すなわち、都川を遡ると大宮町付近で東と南東の2支流に分かれるが、その東の支流は高根町付近で南へ遡り、高田町付近へたどりつく。奈木台遺跡は、この最奥部の支谷をのぞむ標高55m代の平坦面の余り広くない、むしろ傾斜面の多い台地上に位置し、現在の水田面との比高も小さい。また、水量の多い小支流もなく、都川の起点とも言える地域である。東の隣接台地は、北流して印旛沼へ注ぐ鹿島川の流域に属し、また、南は東京湾へ注ぐ村田川の流域となっている。

今回の調査区域は、台地の中央部を横切る道路敷部分のみであり、凹地によって3地点に区分されるため、調査順に、第1・第2・第3地点と呼んだ。各地点の遺跡の中心が、今回の調査区にあると言えないことを加えておく。

（杉山　晋作）

中芝遺跡（第55図）は、千葉市高田町の中芝に在り、国鉄外房線の誉田駅から約1㎞北に位置する。中芝遺跡は、奈木台遺跡と同じく都川の東の支流の奥部にあり、奈木台遺跡よりは支流に近い。標高55㎜代であるが、水田面との比高は奈木台遺跡のそれよりも大きい。台地上の平坦面は南北に長い形状を呈し、調査区域は、これを横断する形の道路敷部分のみであった。中央部に凹地があり、また、調査を2次に分けたため、第1次調査区、第2次調査区に分け呼んだ。

（杉山　晋作）

清水作遺跡（第74図）は、千葉市辺田町25－2番（字清水作）に所在する。

下総台地は、多くの水流により開析され、樹枝状の小支谷を形成する。本流となる支谷は、高田町を源としもう1つの支流が、千葉市大宮町付近で東南方向に分れる。平山町付近で、東方に平山支谷、南方に辺田支谷（野田谷津）と二分し、平山支谷は誉田町を源流としており、辺田支谷のほぼ中間の東側に位置する。

調査地A地点は、谷津縁辺の堆積地で水田面との比高4mを計る。

古墳及びB地点は、水田面との比高9m、A地点との比高5mを計るつき出た尾根上に古墳は立地し、B地点は標高30～35mの間に立地する。

（瀬戸　久夫）

## 第Ⅲ節　調査方法

奈木台第５遺跡（第４・５図・図版１）

基本的にグリッド法を用いて調査し、土層観察及び排土運般を考え土手を残し調査をおこない遺構確認の場合土手を排除し拡張することにした。グリッドの方法は、道路建設の中心杭を長軸として５×５ｍのグリッドを組んだ。道路幅をＡ～Ｉのアルファベット付し、長軸を10～36までのアラビア数字を付した。なおＡＢラインが図示してないのは、調査区域ではあるが、耕作地の崩壊等道路の屈曲による幅の変化等を考慮して十分余裕を取ったものである。調査は、全グリッドを調査し遺構検出に努めた。

奈木台第６遺跡（第22・23図・図版20）

本跡も第５遺跡の方法を踏襲して名称を付した。道路幅をＡ～Ｈのアルファベットに、長軸を１～30のアラビア数を用い、５×５ｍのグリッドに区画した。この第６遺跡は、全域にわたり表土を削平されており遺構の検出も望めなかったので、一応、２・４・６の偶数列を調査し遺構確認に応じて拡張の方法をとった。

藤沢遺跡（第29・30図・図版25）

本跡第５・６遺跡の方法を踏襲しグリッド調査法でおこなった。名称は北側から１～24までアラビア数字を付し、道路幅にＡ～Ｄまでのアルファベットを付した。グリッドは、５×５ｍとし土層観察及び、排土運般用の土手を１ｍ巾でのこし遺構を確認することにした。遺構確認が進行するに従ってＡ－11・12・13に遺物が多く出土したので、この西側に３区もうけＺ列とした。また、先土器時代遺物２群が24列以上に広がる可能性を示したため25列２グリッドを設け調査をおこなった。

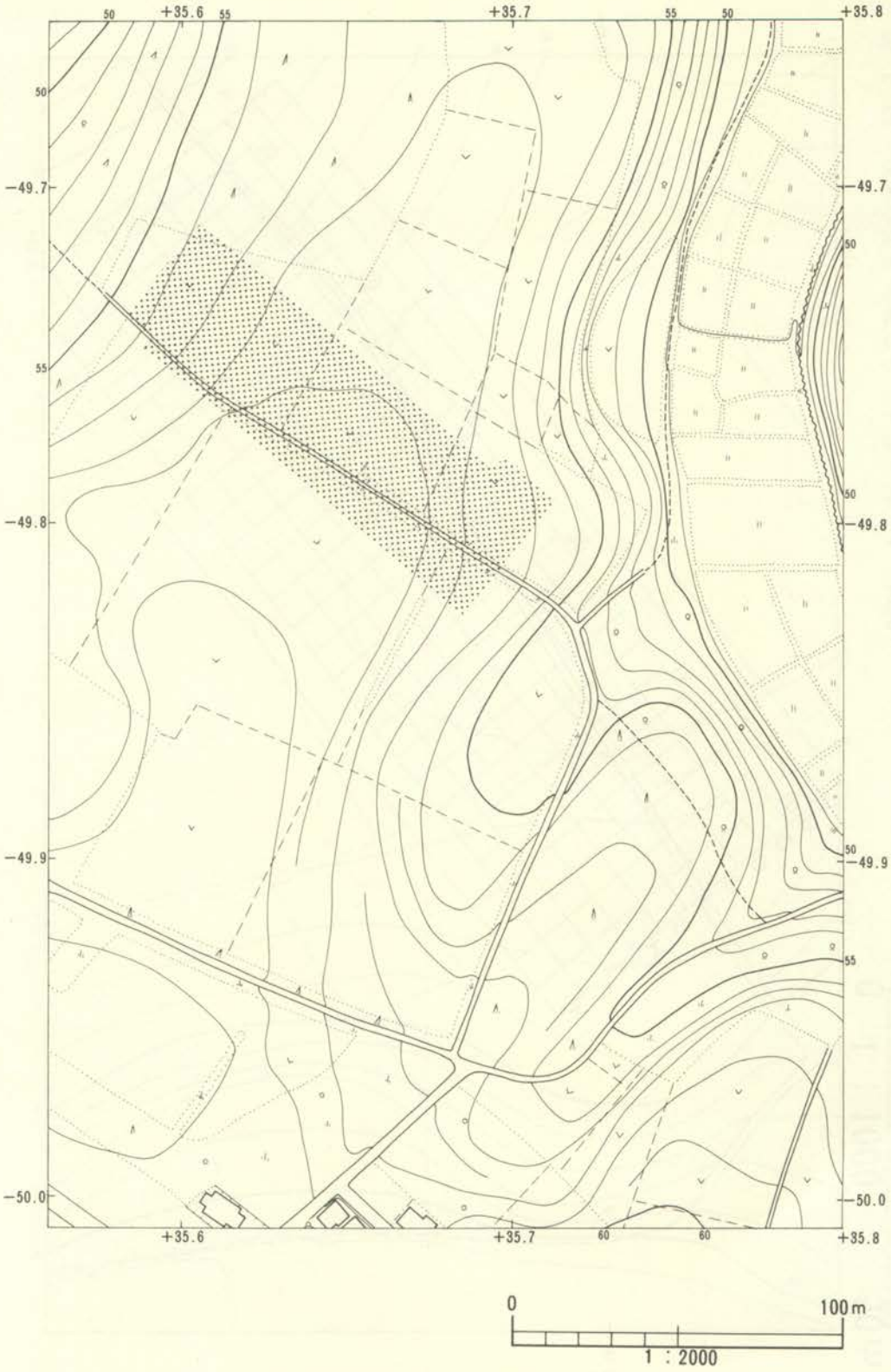
中芝１次（第56・57図・図版46・58）

本遺跡は、当初幅45ｍ・長さ 160 ｍを調査する予定であったが、諸般の事情により第１次調査を幅45ｍ・長さ80ｍに変更して調査に至った。

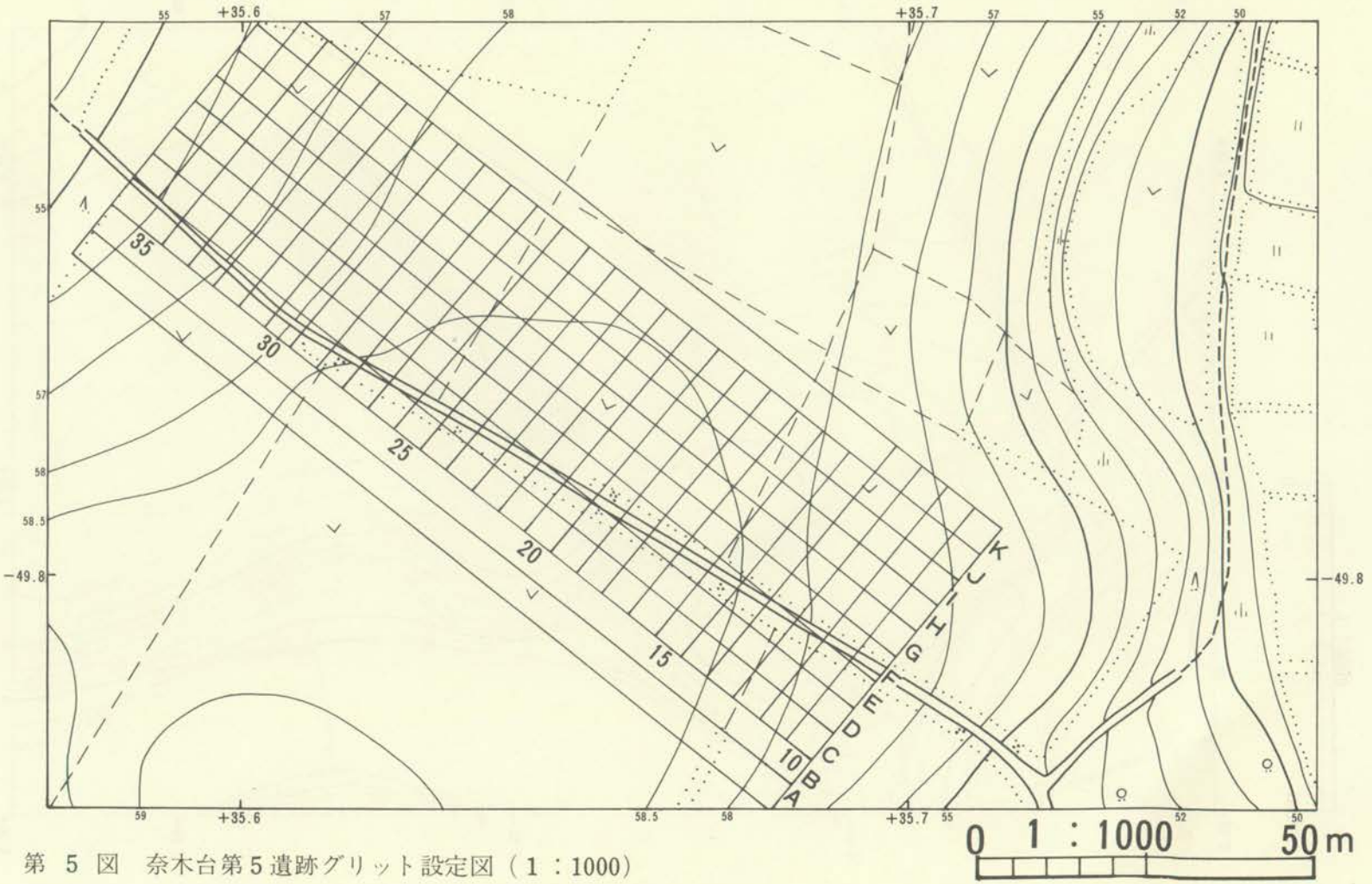
基本的にトレンチグリッド法を採用した。すなわち道路建設の中心杭をよく長軸として、５×20ｍのトレンチとした。南北のトレンチをＡ～Ｉまでのアルファベットを付し、東南のトレンチを２～５のアラビア数字を付した。２から初めたのは、東斜面の調査を考慮に入れていたため一応このように呼称した。なお幅５ｍのトレンチには、排土運般用の土手を１ｍ残し調査することにした。

中芝２次

１次調査時は、道路幅45ｍであったが第２次調査の52年度には、道路幅30ｍに設計変更となりその部分の調査をおこなった。調査の方法は第１次調査を基本的には踏襲し長さ20ｍ・幅５ｍのトレンチとしたが、第２次調査では排土処理が不能であったため、幅5mを1/2に分割し千鳥に調




第 4 図　奈木台第5遺跡調査区域図




第 5 図　奈木台第5遺跡グリット設定図（1：1000）

査することとし、遺構検出後に拡張する方法をとった。

南北のアルファベット、東西のアラビア数字は、第１次同様の方法をとった。

清水作遺跡（第75・76図・図版65）

本遺跡は、当初、谷部の畑地の試堀のみであったが、調査前の踏査時に古墳１基が確認されたのであわせて調査することになった。

Ａ地点畑地の調査は、基本的にトレンチ法を採用した。すなわち、道路建設の中心杭を長軸とし、20ｍ×２ｍのトレンチとした。試掘調査を前提としたため、遺構検出可能を考慮に入れ、全面にグリッドを組む事にし、まず南北の中心トレンチ、（Ｂ・Ｃ・Ｂ・Ｃ・Ｂ）を千鳥に調査し地形を観取することにした。その結果３列から６列まで急激に落込み４列～５列にかけては、深い谷が形成される事が判明したため、１・２・３列を、精査する事にした。

古墳及びＢ地点（第107図・図版73）

清水作古墳の調査は、円墳１基のみが対象のため次の方法によった。

まず盛土の築造状態を観察するため墳丘４割線を墳頂部中心に東西南北に設定し、この分割線に沿って幅１ｍのトレンチを設定し、盛土部分は攪乱の認められなくなる深度までを、周溝は流土および埋土を除去し周溝底まで発堀することにした。また、古墳の南東側の平坦地に周溝確認と、古墳造築の周辺整地の有無を確認するため１ｍ幅のトレンチを入れた。名称は、図示したとおりで、４方位を略記号で表記した。

トレンチ発堀の結果、円墳であることが確認されたので、４分割線を断面観察用のベルトとして残した。墳頂部で直刀が検出されたが、内部施設は検出できなかったので、盛土部を堀り下げることにし、土層断面測量後平面的に旧表土を平面的に精査した。旧表土下に石片が多数確認されたため、旧表土下を精査することとした。

Ｂ地点は、古墳調査時の南東トレンチに住居跡らしき落込みが確認されたので、周構より約10ｍ拡張したところ、住居跡２軒が検出された。これによって平坦面に、住居跡の存在する可能性が大になったので、協議の結果発堀調査区域を65ｍ南方向に延長した。調査区の幅は、工事用道路の工事により、２ｍ～15ｍとまちまちであった。

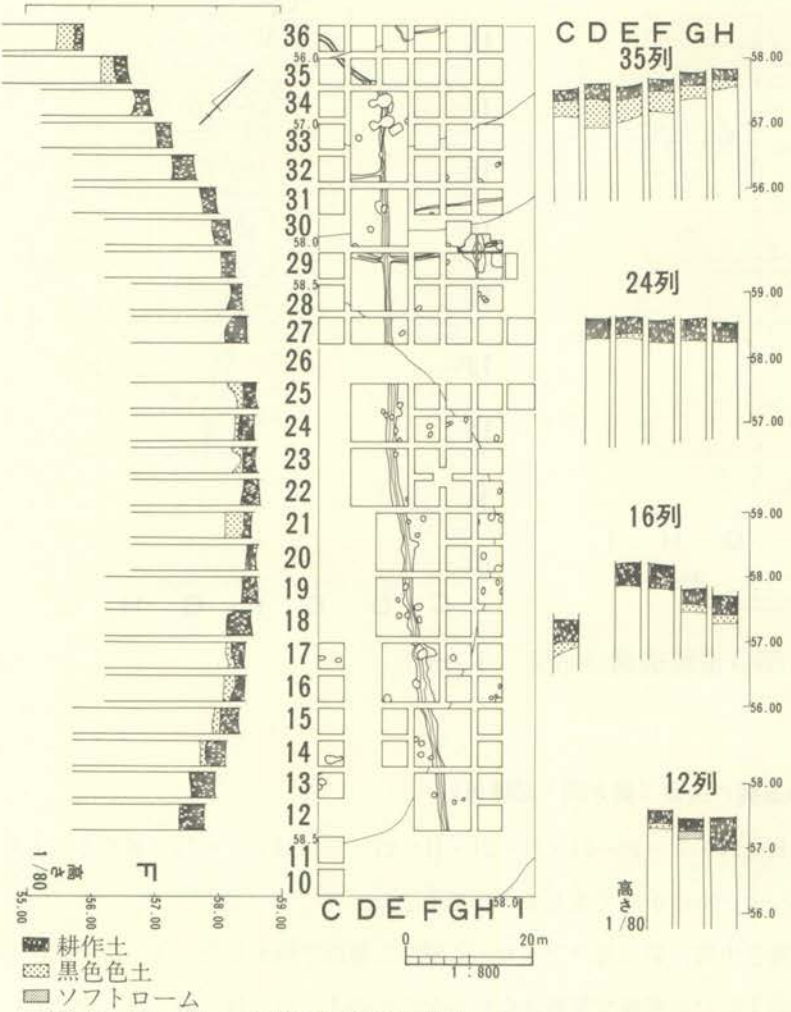
グリッドの呼称は、Ａ地点と同様南北をＡ・Ｂのアルファベットに、東西を１・２のアラビア数字にし、10ｍ×２ｍのグリッドに組み調査をおこない遺構の検出につとめた。

（瀬戸　久夫）

# 第二章　奈木台第5遺跡

## 第Ⅰ節　地形と土層（第6図）

本跡は、北方向へのびる舌状台地の基部が調査区域である。Fラインは調査区域の台地を縦走する柱状図で12列付近は、標高58mを測り、15～27列では急激な傾斜をなす。36列付近では、標高56mとなり急激におちこむ。この比高差は、2.5mを測る。35列では、HからCにかけてなだらかに傾斜している。24列は、ほぼ平坦であり16列はCにおいて急激に傾斜しG・Hにかけても傾斜がはじまる。12列においては、ほぼ平坦である。




第 6 図　奈木台第5遺跡土層図

### 土層

本遺跡の土層は、グリッド発掘により標準的な土層として第Ⅰ層～第Ⅳ層を設定した。

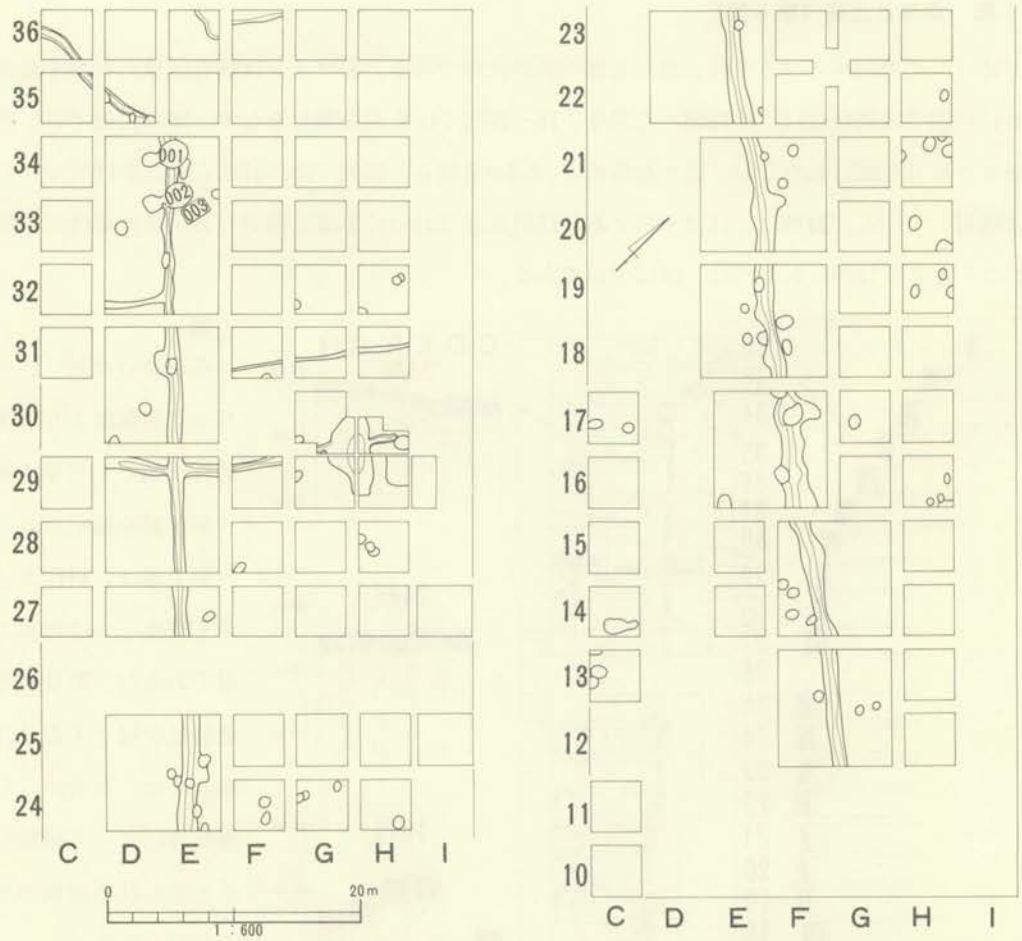
第Ⅰ層は、耕作土による撹乱をうけた表土層であるが、第Ⅱ層を遺物包含層とする包含地点では、本層からも撹乱等によって移動したと思われる遺物の出土が見られる。

第Ⅱ層は、縄文時代以後に堆積した自然層と思われ、腐食土を多量に含み暗黒色を呈している。縄文時代の遺物包含層は、主に本層の中～下部に認められた。

第Ⅲ層は、洪積世末期に堆積した風成火山灰層で、いわゆるソフトロームである。柔らかく赤味を帯びた褐色を呈している。

第Ⅳ層は、地山でいわゆるハードロームである。褐色を呈し硬い。

（瀬戸　久夫）




第 7 図　奈木台第５遺跡遺構分布図（１/600）

**第II節　遺構と遺物**

Ｉ項　先土器時代の遺構と遺物（第８図・図版16）

先土器時代の遺物は、Ｆ－14・Ｉ－20～21・Ｈ－21・Ｈ－27・Ｇ－24・Ｉ－24の各グリッドで出土したが、特にＨ－27，Ｉ－27にかけてまとまって出土した。

出土土層は、第II層暗褐色土層、第三層ソフトローム層の二層間で出土した。Ｉ－27では、10個のチップ・フレークが出土したが明確な製品はなかった。このＩ－27・Ｈ－27・Ｈ－28グリッドは、舌状台地の基部にあたりこの付近を境に谷に移行する地点である。本調査区内で、集中して出土した地点はこのグリッドのみである。今後この台地の調査がなされれば、これと関連する先土器時代の遺構が、確認できるであろう。今後の調査に期待したい。

遺物（第９・10図）

１はＦ14グリッドから出土したもので、出土土層はソフトローム上面でメノウ製のフレークで表面の稜はタタキつぶされて火打石様の母岩からの剝落片であるかもしれない。

2はI20グリッドのソフトローム上面で出土したもので、チャートの礫片で表面は表皮部をのこし、多少の摩滅が見られる。

3はI21グリッドのソフトローム上面から出土したもので、(2)同様チャートの小礫片で外皮をのこす。

4はI21グリッドのソフトローム上面から出土したもので下部に打調痕らしきものが観察されるが、不鮮明である。

5はH21グリッドのソフトローム上面から出土したもので、母岩からの剝落片であろうと思われ表皮部をのこす。

6はG24グリッドのソフトローム上面より出土したもので、石質はメノウで周縁部はタタキによりつぶしている。火打石かとも考えられる。

7はI24グリッド出土で、石質はチャートで先端部にリタッチ様の痕跡が見られるが、打調としてはとらえがたい。外皮を若干のこす。

8はI25グリッド出土でソフトローム上面出土のチップである。石質はチャートで外皮を1部のこす。

9はH27グリッド出土で暗褐色土中層で出土したもので、表面に数条の剝離面がのこり、打面部は平坦である。石質はメノウである。

10はH27グリッド出土でメノウのチップである。

11はH27グリッド出土で(10)同様メノウのチップである。

12はH27グリッド出土で暗褐色土中層出土で不定形剝片で、石質はチャートである。

13はH27グリッド出土のチップで、石質はメノウである。

14はH27グリッド出土のチップで、石質はチャートであり外皮をのこす。

15はH27グリッド出土のフレイクで、石質はチャートである。表皮をわずかに残す。

16はH27グリッド出土の縦形フレイクで、石質はチャートで打面は平坦である。表皮をわずかにのこす。

17はH27グリッド出土で、表皮部を打面した小剝離面が表面にみられる。石質は硅岩である。

18はG27グリッド出土の不整形のフレークで、石質はメノウであり外皮をわずかにのこす。

19はH27グリッド出土で、コブシ大の礫を用いた石核と思われる。一部に表皮をのこしているが、上下両端面を打ち落し、上端もしくは上下両端面から剝離をおこなう。このような剝離は多く見られる類例であるが、本例は、外郭部の調整段階のものであろうか、剝離面にバラツキがみられる。石質は硅質粘板岩であろうか。　　(瀬戸　久夫)

2項　土壙（第７・11図・図版14）

第Ⅲ層で確認された。多くの土壙状の落ち込みが検出されたが、層位も２層であり自然堆積であろうと思われる。これらの土壙状の落込みからは遺物は皆無であった。これらの落込みのうち比較的大型でプランの明確なものだけ記載することにする。

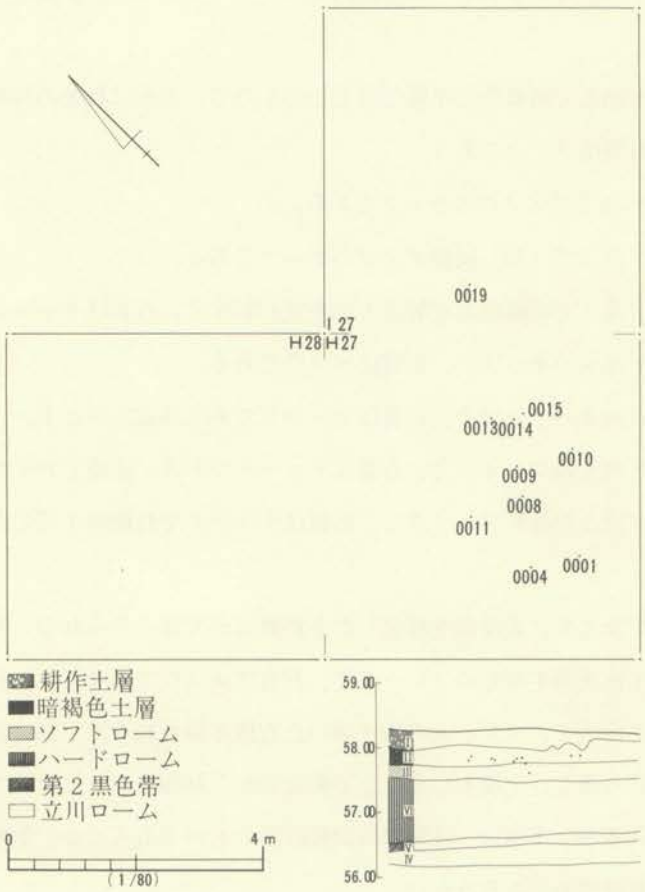
１．上面のプランは不定形を呈しており、床面のプランは略方形を呈している、深さは50cmを測る。底面はフラットではあるが軟弱である。

２．上面プランは不定の長方形で、床面も不定形を呈しており、深さは20cmで浅く、いわゆる皿状の落込みである。底面はフラットを呈し軟かい。

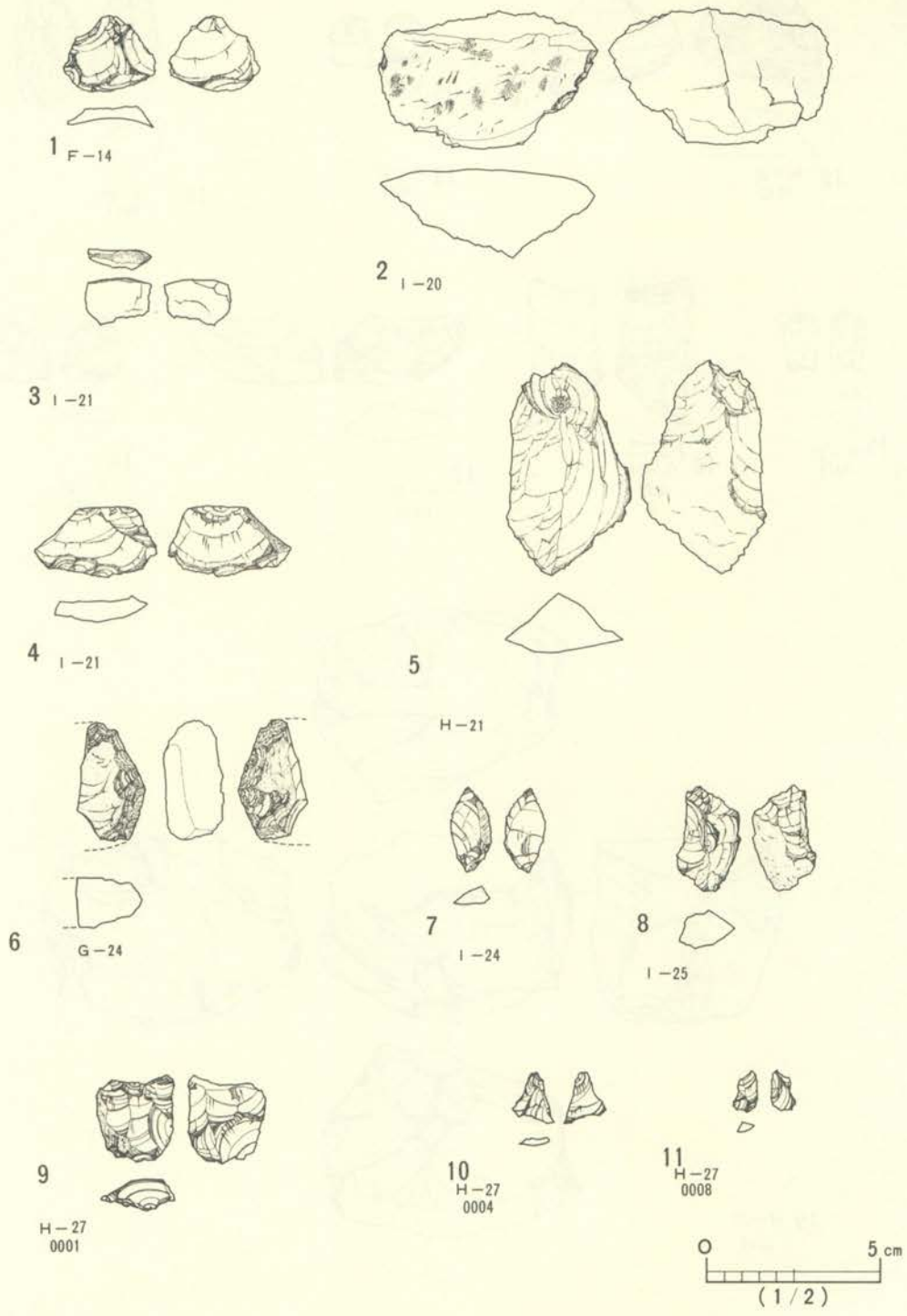
３．上面プランは略長方形を呈しており、底面プランも上面と同様であるが、深さは90cmありかなりの深さを呈する。底面はフラットの面をもち、かなりしっかりしている。

４～６．上面プランは正円形を呈し、底面プランも円形を呈する。４・５は30cmの落込みで、底面はフラットである。

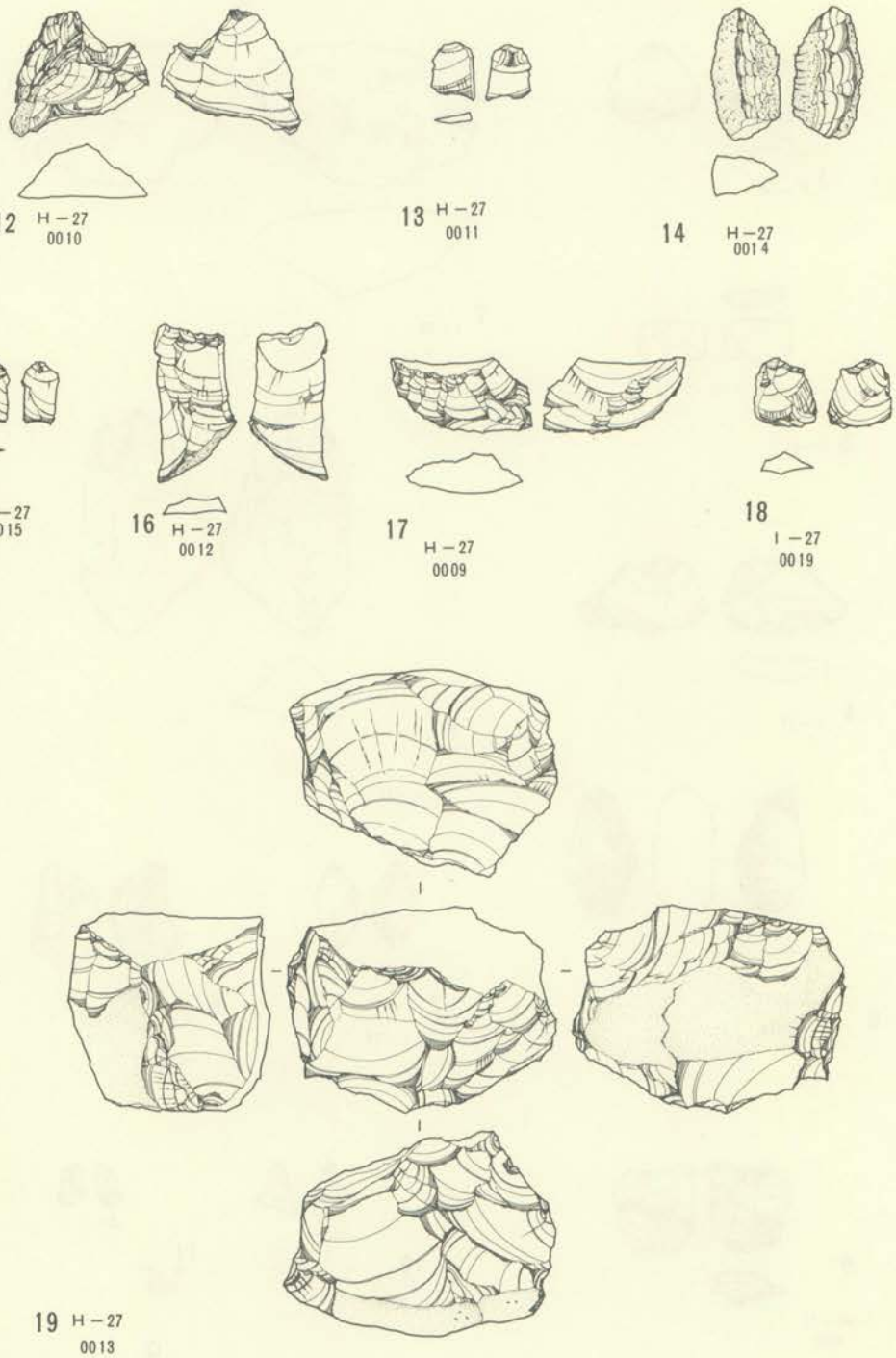
（瀬戸　久夫）



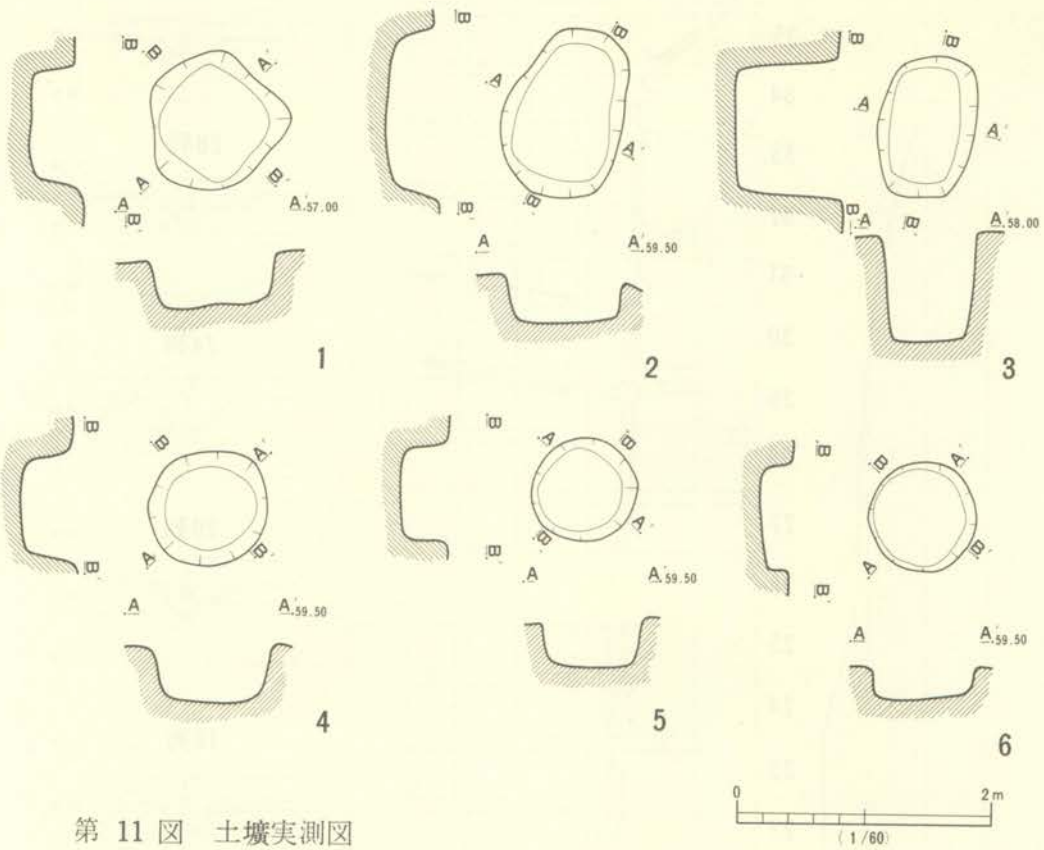

第　8　図　先土器時代遺物出土状態図（1/80）




第 9 図　先土器時代遺物(1)（1/2）




第 10 図　先土器時代遺物(2)（1/2）

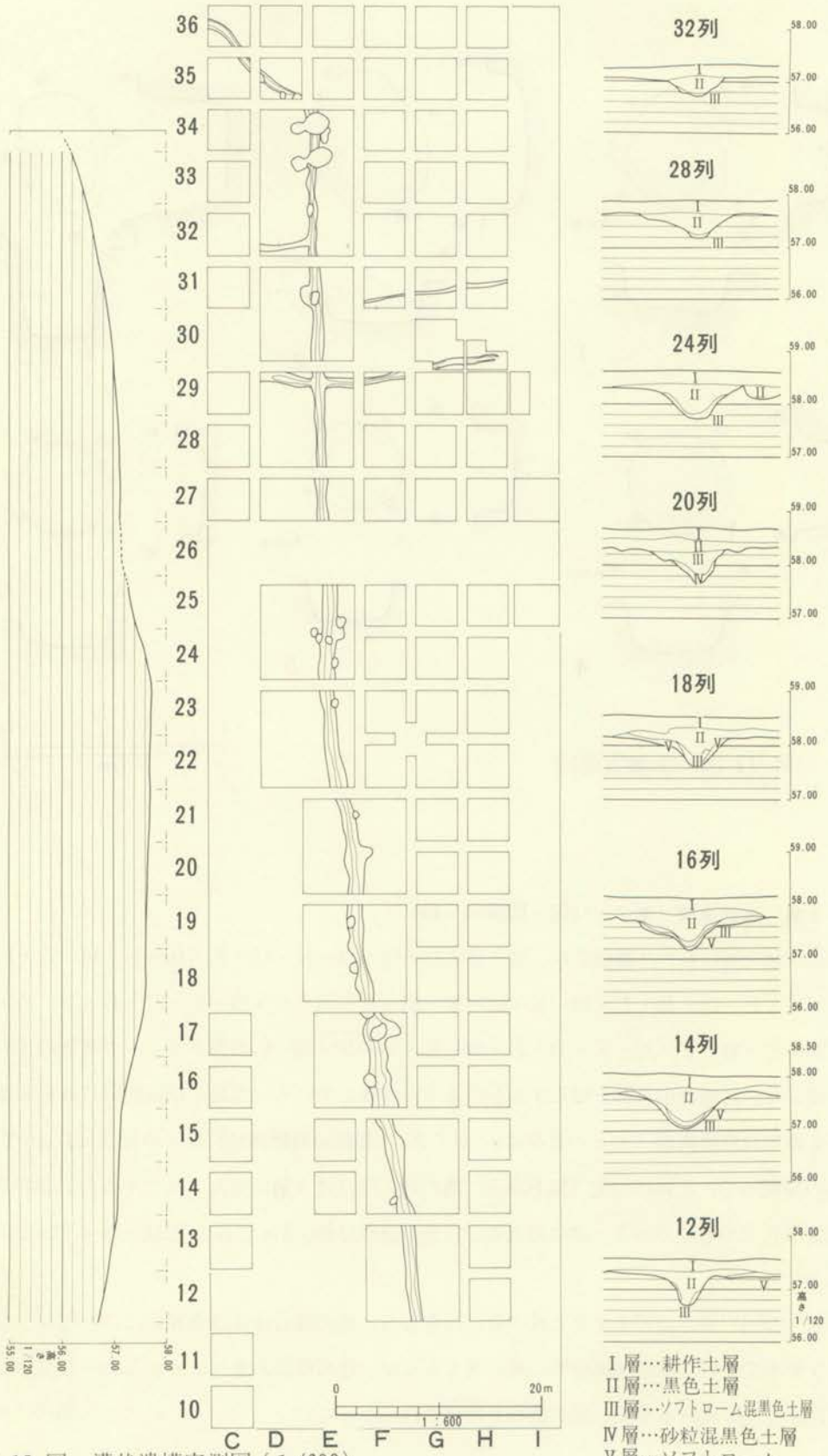



第 11 図　土壙実測図

### 3項　溝状遺構（第7・12図・図版14・15）

調査区域全域にわたり確認され、12－G・13－G・14－G・15－F・16－F・17－F・18－F・19－E・F・20－E・F・21－E・22－E・23－E・24－E・25－E・27－E・28－E・29－E・30－E・31－E・32－E・33－E・34－E・35－D・36－Cの各グリッドで黒色の落ち込みを確認した。台地の中央部を縦走するかのように遺存している。台地の標高約57.7mを測る。中央部と南側12列標高56.7mとの比高は1.0mであり、北側34列標高56.1mとの比高は1.6mである。南側の勾配1/55で、北側の勾配1.6/55を測る。溝の埋土はほぼ3層に分れ、ソフトローム湿黒色土・砂粒混黒色土の層位である。溝の最大幅は1.5m・深さは約0.5mであり、形状はゆるやかなU字形である。

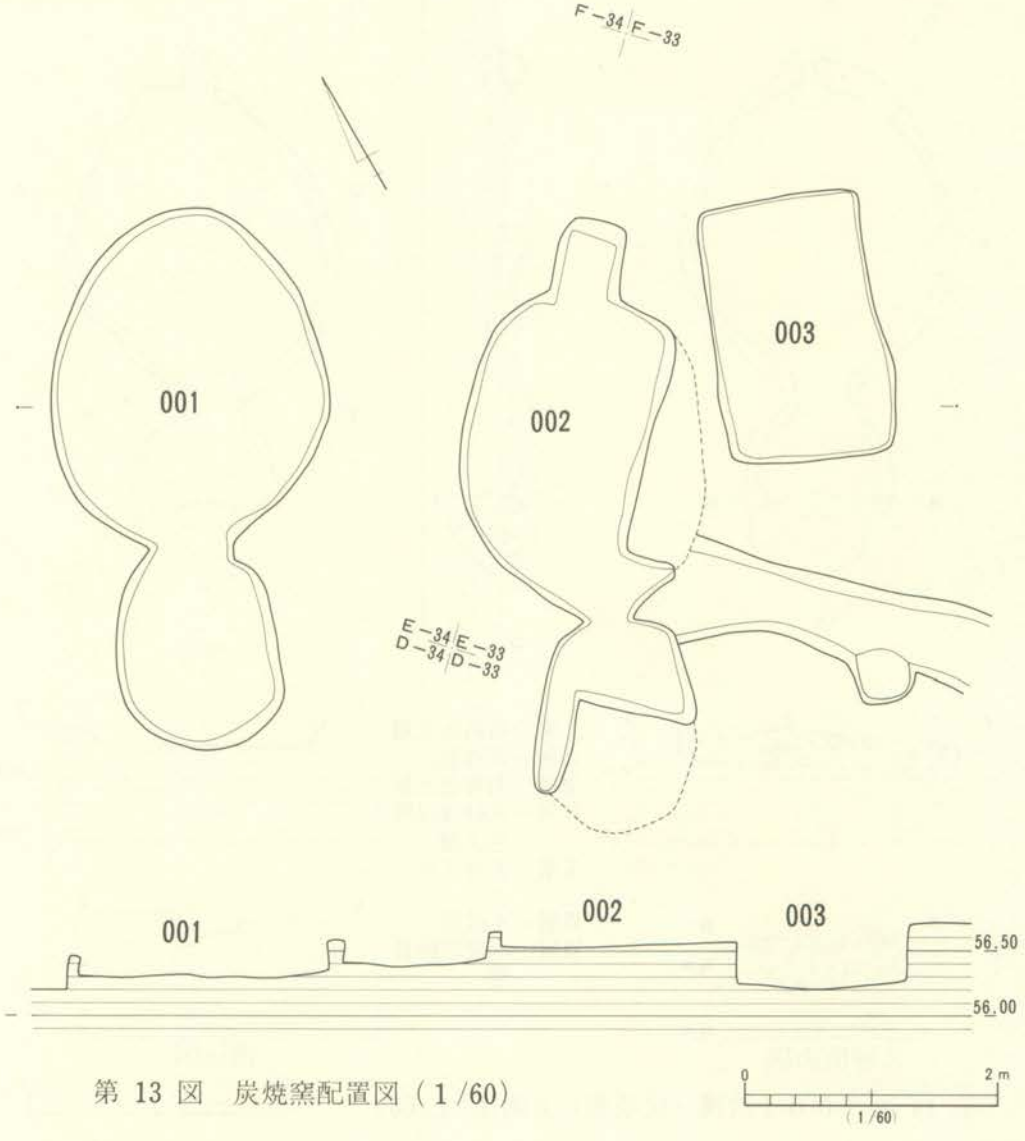
16列・20列の部分に若干テラス状の弱い段をもち、他の部分はほぼ直線的に落ち込み、壁面はあまり堅牢でない。床面は部分的に硬い所もあるが、他の所はあまりふみかためられていない。これに伴う付帯施設もなく、出土遺物も確認されなかった。　（瀬戸　久夫）




第 12 図　溝状遺構実測図（1/600）

4項　炭焼窯（第13図・図版4）

D－34・D－33・E－34・E－33のグリッド内で検出され、第II層（褐色土層）の面で確認された。001・002・003ともほぼ北東方向に並んで構築されており、002においては東側の壁は完全でなかった。

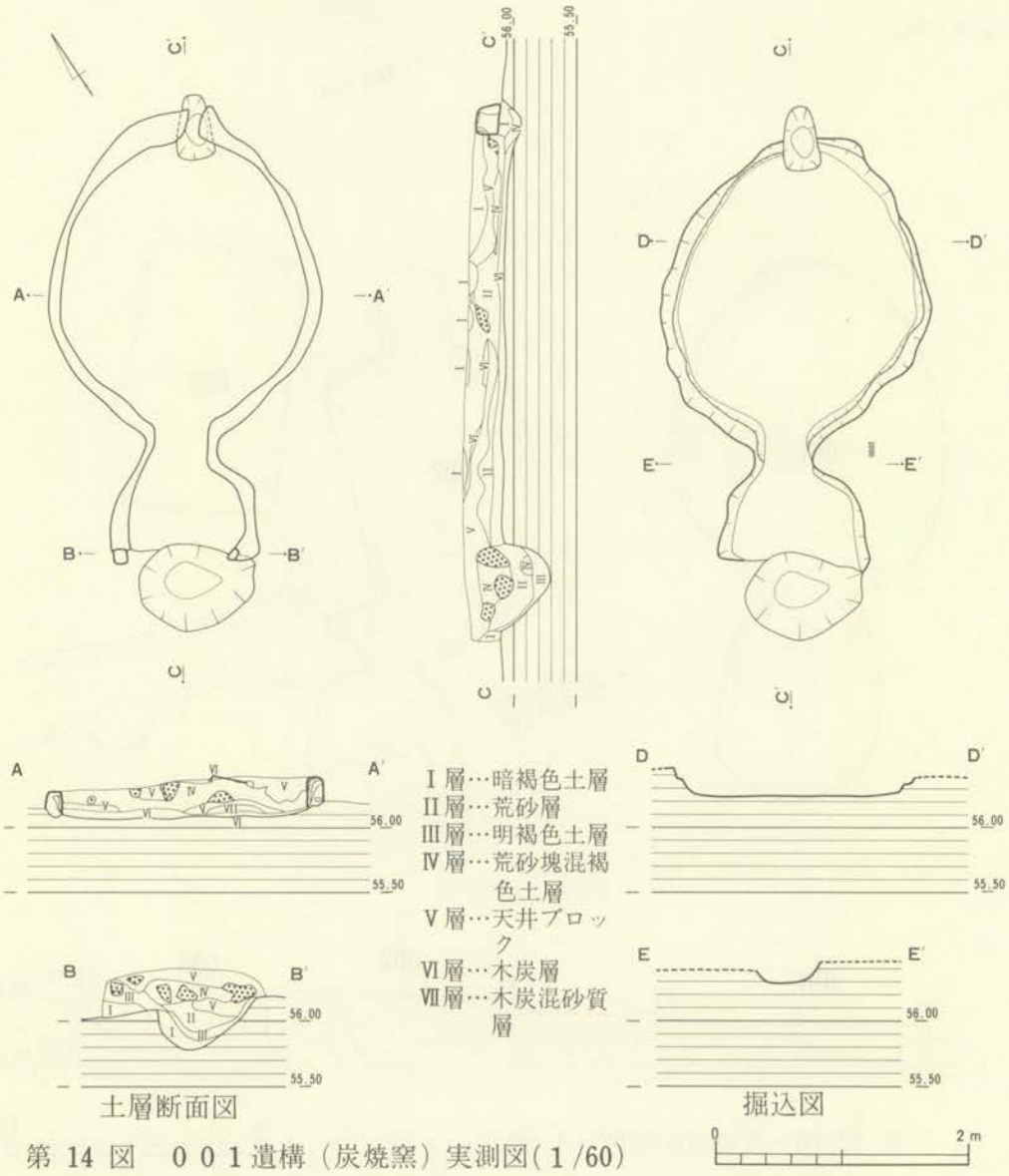



第 13 図　炭焼窯配置図（1/60）

（1）００１炭焼窯（第14図・図版5～9）

主軸方向はN－35°－Eであり、全長4.15m・焼成部長2.6m・焼成部幅2.15mを測り、楕円形を呈しており、壁厚さ0.15mを測り、焼成部はほぼ平坦であるが、中央部がわずかに凹を呈しており、壁面はわずかに内傾し、旧地表面を切り込んで構築している。焚口幅0.6m・焚出部長1.55m・幅1.15mを測り、半円形を呈し、焼成部と同様わずかに中央部がくぼんでいる。焚出部は、長径0.9m・短径0.7m・深さ0.4mの楕円形を有する。窯内の層位は、木炭層・荒砂ブロック層・荒砂

層と大別できる。熱変をうけた天井部と思われるものが、かなり窯内に層をなしている。焚出部に付随する楕円形のピットには、大きな閉塞ブロック、木炭などがかなり確認された。



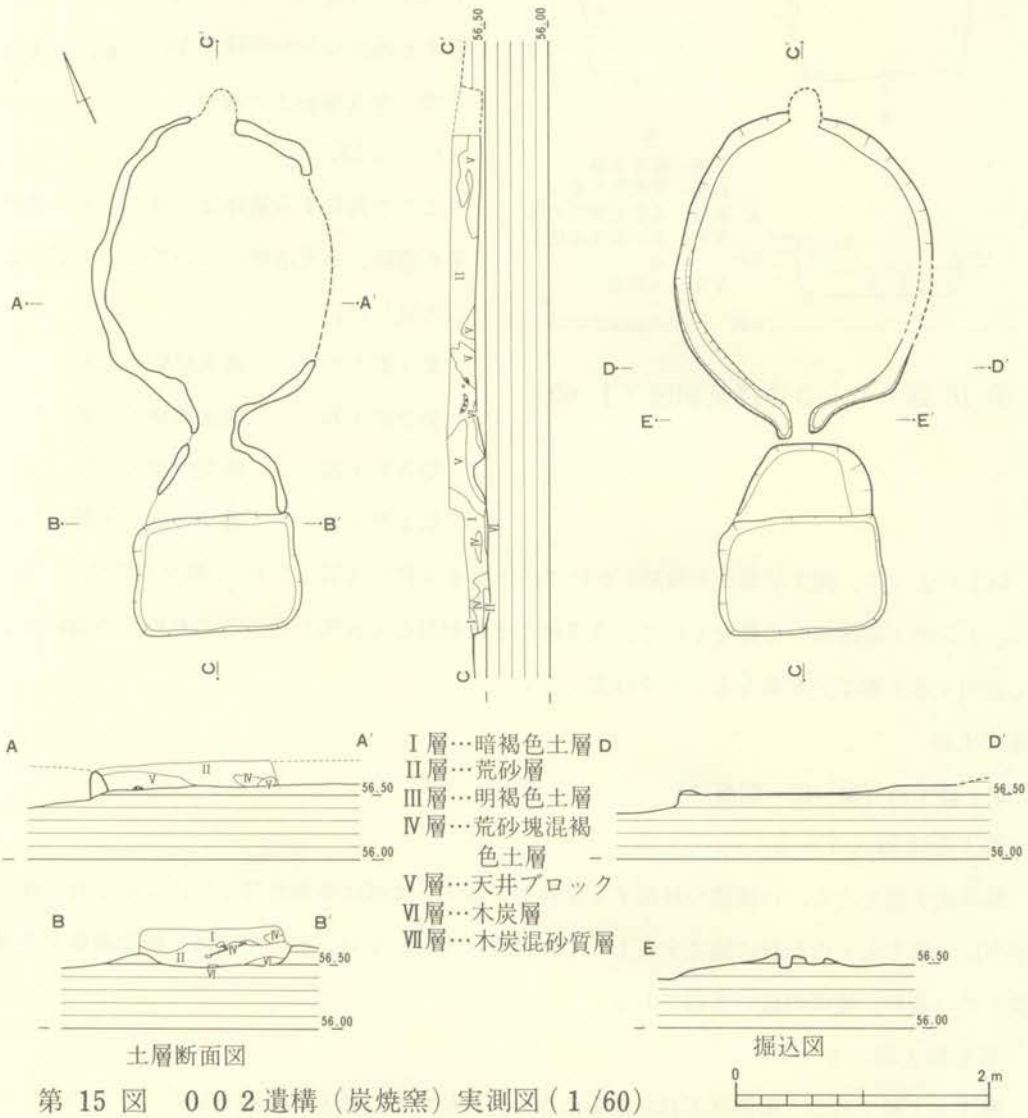

第 14 図　００１遺構（炭焼窯）実測図(１/60)

（２）　００２炭焼窯（第15図・図版10～13）

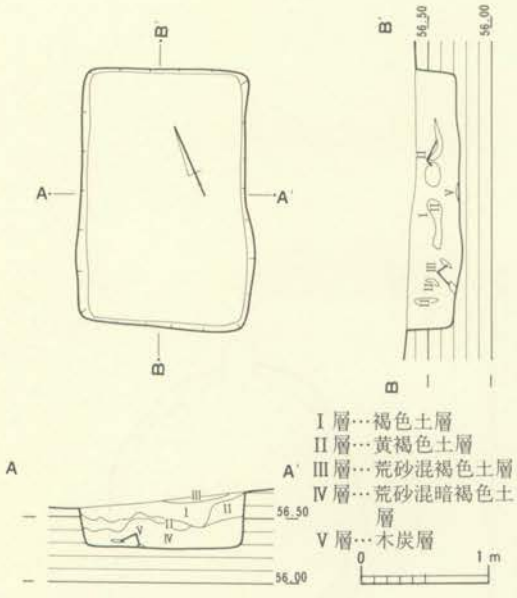
主軸方向はＮ－25.5°－Ｅであり全長4.2ｍ・焼成部長2.5ｍ・幅2ｍ・壁厚さ0.13ｍを測り、床面は平坦でありプランは楕円形を呈する。焚口幅0.4ｍ・焚出部長1.7ｍ・幅１ｍを測り、焚出部に長軸1.3ｍ・短軸0.9ｍの浅い方形の堀り込みを有している。

窯内の層位は、右半分が完全でないため明確ではないが、001 窯と比べて天井部と思われるブロック状のものは少なく、壁材のブロックも熱変していない。これからみて、使用前もしくは構

築中、空焚中に崩壊してしまったのかもしれない。




第 15 図　００２遺構（炭焼窯）実測図（1/60）




第 16 図　００３遺構実測図（１/60）

（３）　００３炭焼窯（第16図・図版10～11・13）

主軸方向はＮ－25°－Ｅであり長径２ｍ・短径1.4ｍの方形のプランを呈する。床面は平坦であり層位は木炭層はなく、荒砂混合層からなっており、壁面、床面とも熱変はうけておらず、この003遺構が窯であるのか、炭焼窯に付帯する施設なのか明確でない。(瀬戸　久夫)

## 5項　包含層出土の遺物

### 1.　土器について

ここで報告する遺跡は、奈木台第５遺跡、第６遺跡、中芝遺跡については、下記のように大別した。

第１群土器　　縄文早期の土器
第２群土器　　縄文前期の土器
第３群土器　　縄文中期の土器
第４群土器　　縄文後期の土器

以上のように、縄文早期から後期にかけての土器を４群に大別したが、個々の群別については、上記の３遺跡の中で異なるので、各遺跡ごとに細別して説明した。このため、各遺跡によって説明する土器型式が異なることを注意したい。

縄文土器

**第２群土器（第17図・図版17）**

第１類土器（１～５）

黒浜式土器である。口縁部の外反する深鉢形土器で、文様は半截竹管工具による平行沈線文を斜方向・横方向・山形状に施文するもので、縄文はみられない。胎土中には、植物繊維を多量に含んでいるが、焼成の良い土器である。

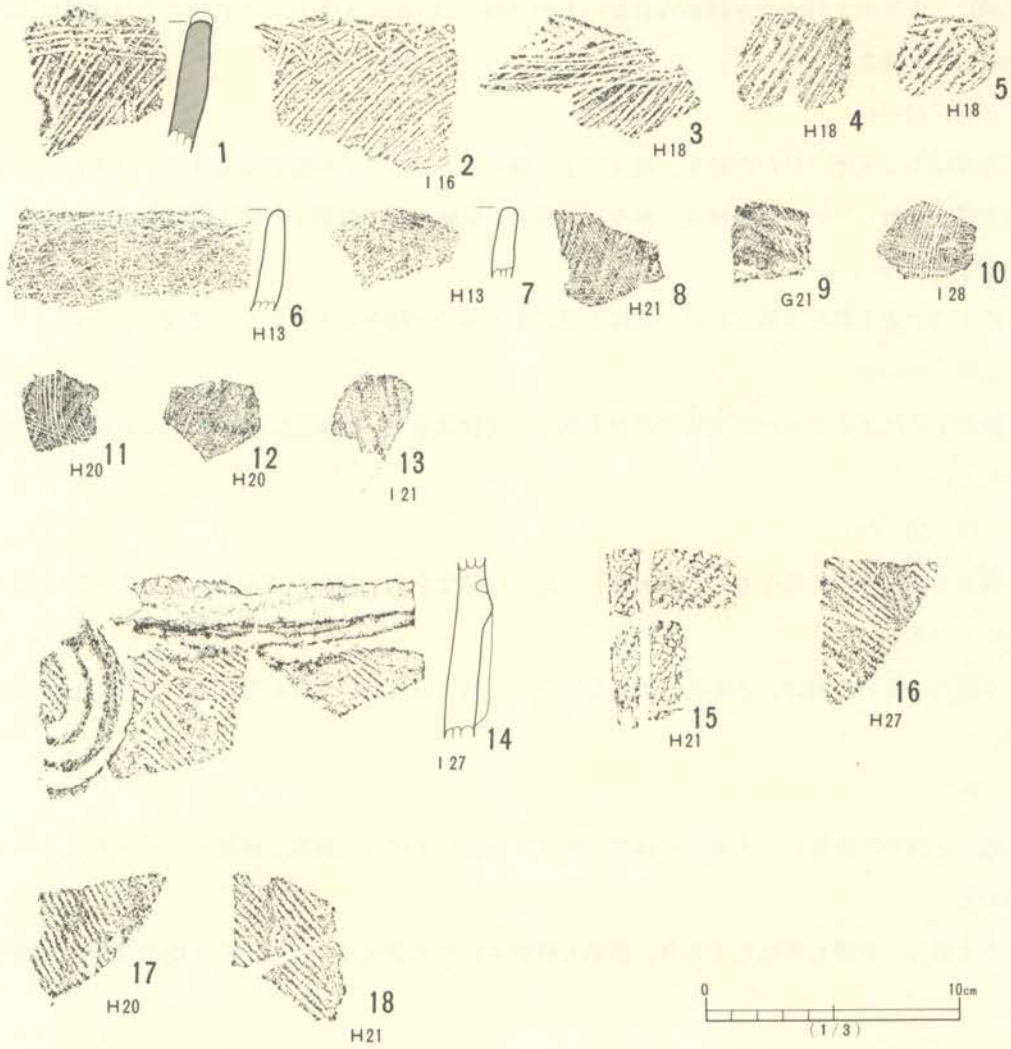
第２類土器（６～13）

興津式土器である。櫛歯状工具による条線を何単位かを一組として施文しているもの（８～13）と単位の不規則なもの（６・７）があり、いずれも斜方向から曲線的な〈〉文様としている。

色調は、赤褐色、茶褐色が多く、焼成の良い土器である。

**第３群土器**

縄文中期、加曾利Ｅ式土器が若干出土している。深鉢形土器の胴部破片で、その一部に加曾利Ｅ式土器特有の渦巻文をもつもの（14）や、沈線による懸垂文のみられるもの(15)がある。




第 17 図　縄文土器(1)

本群土器は、出土量としては少なかった。

**第 4 群土器**

本群は、縄文後期の土器を一括した。型式別第 1 類土器から第 4 類土器に分けて説明したい。

第 1 類土器（第18図・図版18）

称名寺式土器を本類とした。文様の異なるところから a 種から c 種に分けて説明する。

a 種（19～27）

半截した竹管の先端部を一方向から強く押しつけて文様とするものである。本種は、中期加曾利E式土器でも新しい型式からみられるものである。

b 種（28～41）

太い沈線文の間に、等間隔に列点文の施文されるグループである（29～32）。　土器によっては、

沈線による区画で列点文が認められないもの（28・33～41）があり、これからの口縁部には円形の刺突文が施文されている。

C種（42～44）

沈線による区画された内側を、縄文により飾られる土器で、口縁部は無文帯で、それ以下を沈線と縄文で飾っている。本種は、神奈川県称名寺貝塚の第1群第2類の土器に類似する。

第2類土器

堀之内I式土器を本類とした。文様を異にするのでa種からb種にかけて説明したい。

a種（45～49）

櫛状工具によるコンパス文様で器面を飾る。文様は全て、曲線的に施しており直線的なものはなかった。

b種（50～63）

器面を縄文のみで飾るもの（55～60）と地文に縄文をもち沈線を組み合せたもの（50～54・61～63）がある。

本種の土器の色調は、茶褐色・黒褐色をなし、胎土中に砂粒を含むためかザラザラした土器が多い。

C種

壺形土器の口縁破片である。口縁部は無文で頸部以下には沈線文と隆帯による文様をもつものである。

本土器は、色調も黒褐色であり、器面も研磨されて光沢をはなっている焼成の良好な土器である。

第3類土器（第19図・図版19）

加曾利B式を本類とした。いわゆる粗製土器、半粗製土器が多く精製土器は、図示しなかったが僅かな量しかなかった。加曾利BI式のものはなく、いずれも加曾利BII～III式と呼ばれる加曾利B式土器の中でも型式の新しいものが多い。

a種

綾杉状ないし格子状の沈線文で器面を飾る土器である。これらの中には、波状口縁で半精製土器のもの（70・71）もある。これらは、加曾利BII式と思われる。

b種（99～104）

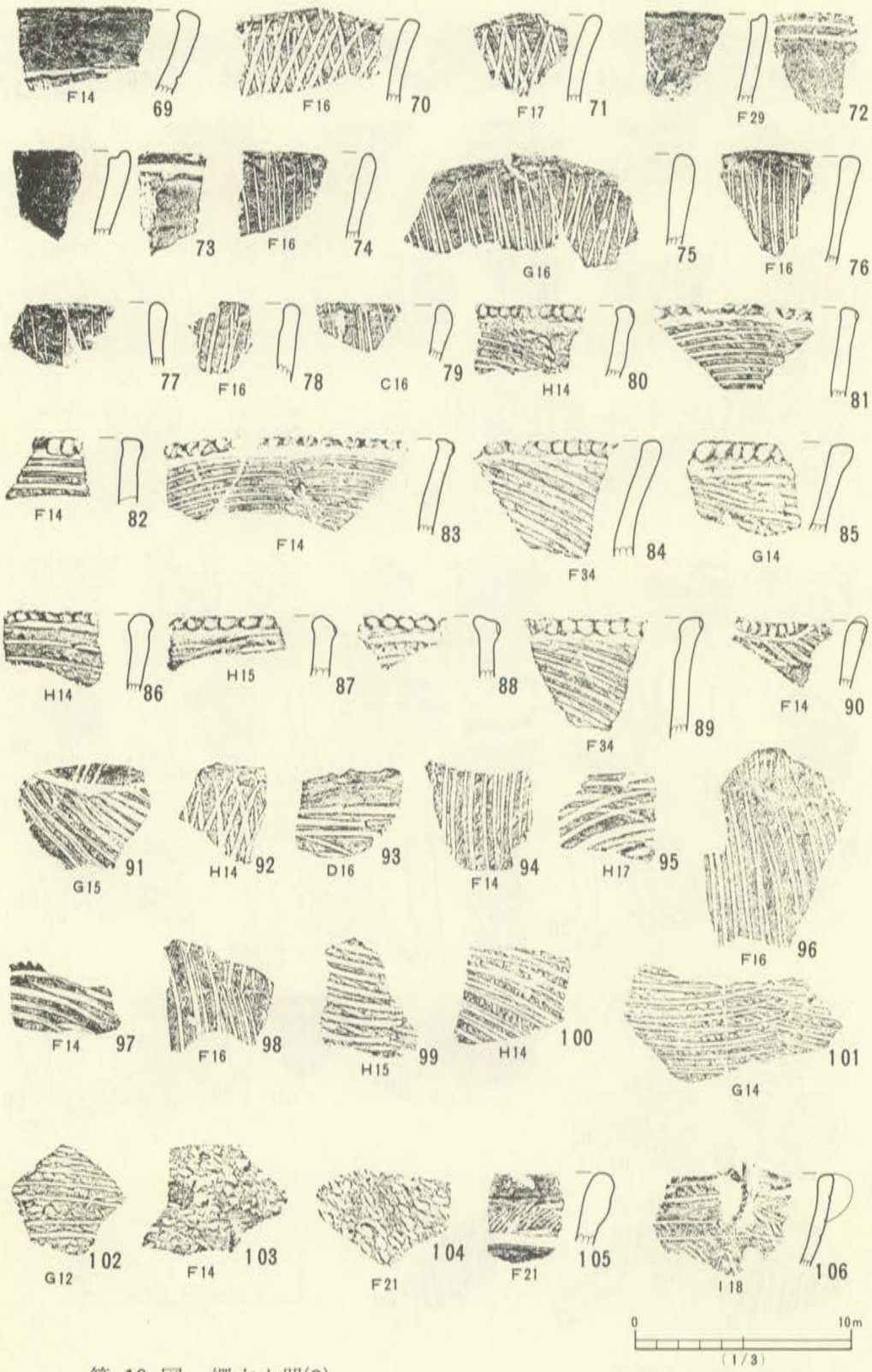
粗製土器で、口唇部と頸部に刻みをもつ隆帯を有し、地文には粗雑な縄文を施文している。これらは、加曾利BIII式であり、（99～104）は加曾利BII式の胴部破片であろう。

第4類土器

安行I式を本類とした。

I 21 19
H21－6 20
F14 21
H21 22
I 20 23
H21 24
H21 25
H21 26
H21－5 27
H21 28
H21 29
G21 30
G22 31
H22 32
I 21－6 33
G21－16 34
I 27 35
H27 36
I 20 37
G21－1 38
F29
39
I 21 40
H22 41
H21－53 42
I 28－1 43
44
H20 45
G21－2 46
H21－71 47
G20－4 48
H21－30 49
I 17 50
I 21－6 51
F33 52
H28 53
D24 54
H27 55
H22 56
E31 57
G17 58
H13 59
G16 60
H20 61
H21－18・31 62
H21－25 63
H21－54 64
H21－3 65
H13 66
H19
I 18 67
I 19 68
0
10cm
(1/3)

第 18 図　縄文土器(2)


F14
69
F16
70
F17
71
F29
72
73
F16
74
G16
75
F16
76
77
F16
78
C16
79
H14
80
81
F14
82
F14
83
F34
84
G14
85
H14
86
H15
87
88
F34
89
F14
90
G15
91
H14
92
D16
93
F14
94
H17
95
F16
96
F14
97
F16
98
H15
99
H14
100
G14
101
G12
102
F14
103
F21
104
F21
105
I 18
106
0
10m
(1/3)

第 19 図　縄文土器(3)

この中には、口唇部の厚味をもつ条痕状の沈線をもつもの（74～79）や帯縄文とよばれる土器で、波状口縁の頂部に粘土による貼り付けのあるもの（106）が認められる。中には（105）のような平縁の土器もみられ、これは安行II式かもしれない。

底部

底部で計測可能なものを図示した。底部近くのため文様はないが、底部で張っているものや、底部が小さいものもみられる。また、１点ではあるが、アジロ痕とかアンペラ痕とよばれる敷物の痕跡をもつものもあり、後期中葉の時期であろう。

石皿

Ｉ－25グリッド出土で、全体の約⅓遺存する。復元するとほぼ17～20ｍの円形を呈すると思われる。表裏とも使用による摩滅が見られ中央部に小穴が見られる。縁辺厚さ５cmに対し中央部厚さ３cmとかなりの差がみうけられる。石材は安山岩で重量は1.39kg。　　（中山　吉秀）

縄文土器（第21図・図版17）

１は甕である。Ｅ－24・Ｄ－24グリッドから出土したもので推定口径21cmを測る。口唇部には１段の稜を持ち、口唇部より下は縄文を施し、頸部には沈線が横走する。内面は横方向にていねいなヘラ状工具によるナデがおこなわれている。外面の色調は全体に明褐色を呈し、内面は口縁部から胴下半にかけては褐色を呈する。胎土はかなり大きな粒子を多く含み、焼成は普通である。

２は小型甕である。G25グリッドより出土し、口縁部・胴下半部が遺存している。口径は19.5cmを測り、口唇部はほぼ平滑であり、口縁部はゆるやかに外反する。口縁下部に２条の沈線を有し、地文は２条の沈線で区画された以外は、縄文を施した上に細い沈線で斜格子文を形成している。底部に近い部分は、縦方向に地文を消すようにていねいにナデをおこなっている。２条の区画された部分は、横方向にていねいにナデをおこなっている。底径は６cmを測る。口縁部内面はていねいな横方向のナデをおこなっており、胴下半部は縦方向のナデによってよく成形されている。外面の色調は褐色を呈し、内面の色調は暗褐色を呈している。胎土は細粒を含むよく精選されたものである。焼成は非常に良い。

３は甕である。Ｇ－23・Ｍ－25グリッド出土の土器で胴部のみ遺存する。推定胴径26cmを測る。口縁部はゆるやかに開き、胴部は丸味をおびる形である。地文は縄文を基本とするが、口縁部と胴部には入組文で区画された以外はヘラ状工具による摩消しが見られる。内面の整形は、頸部においては横方向、胴部では斜方向のナデをおこなっている。外面色調は黒褐色を呈し、内面は光沢のある暗褐色を呈する。胎土は砂粒を含む、焼成は良好である。

古銭（４－１～４－４）

４－１

景徳元寶であり、Ｅ－22グリッド出土で、径2.3cmを測り0.7cmの方形孔を有し、文字は片面に

のみ鋳出されている。遺存は良好であった。

4－2

皇宋通寶であり、Ⅰ－20グリッド出土で、径2.5cmを測り0.7cmの方形孔を有する。遺存は悪い方で表面の文字の腐食はいちじるしい。

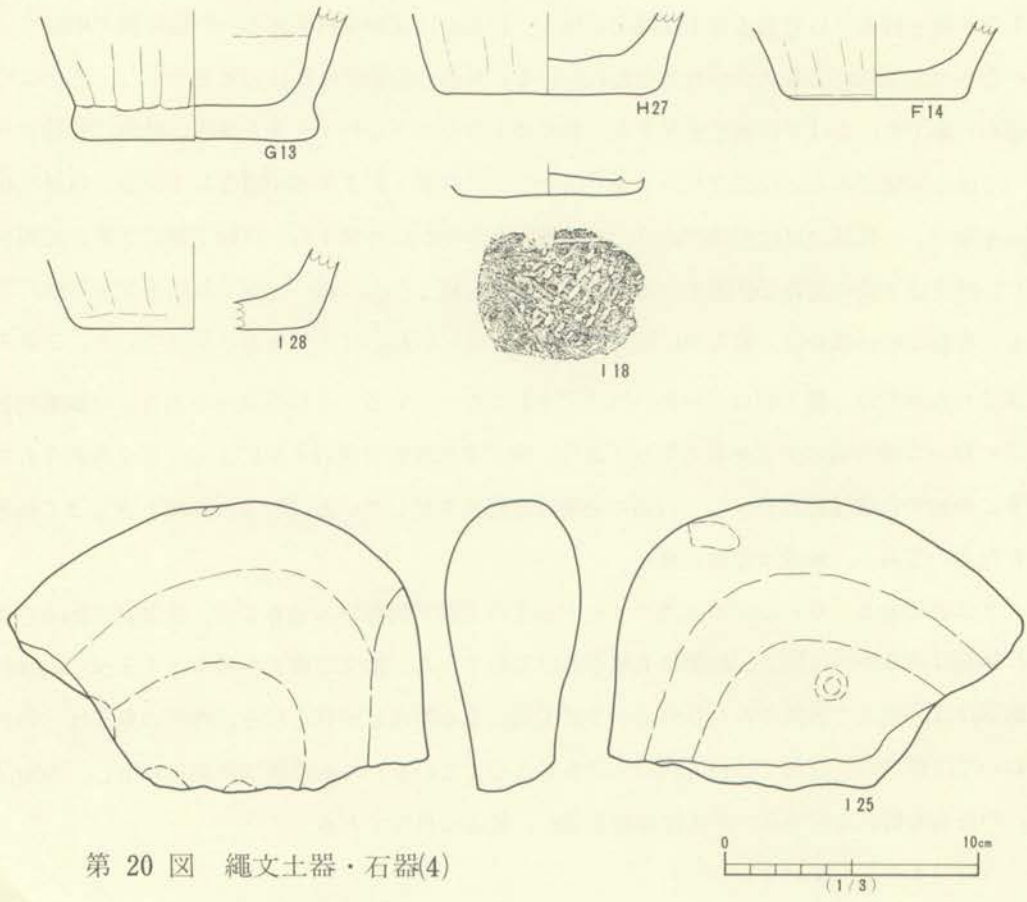
4－3

寛永通寶であり、F－21グリッド出土で、径2.4cmを測り0.6cmの方形孔を有する。遺存は良好である。

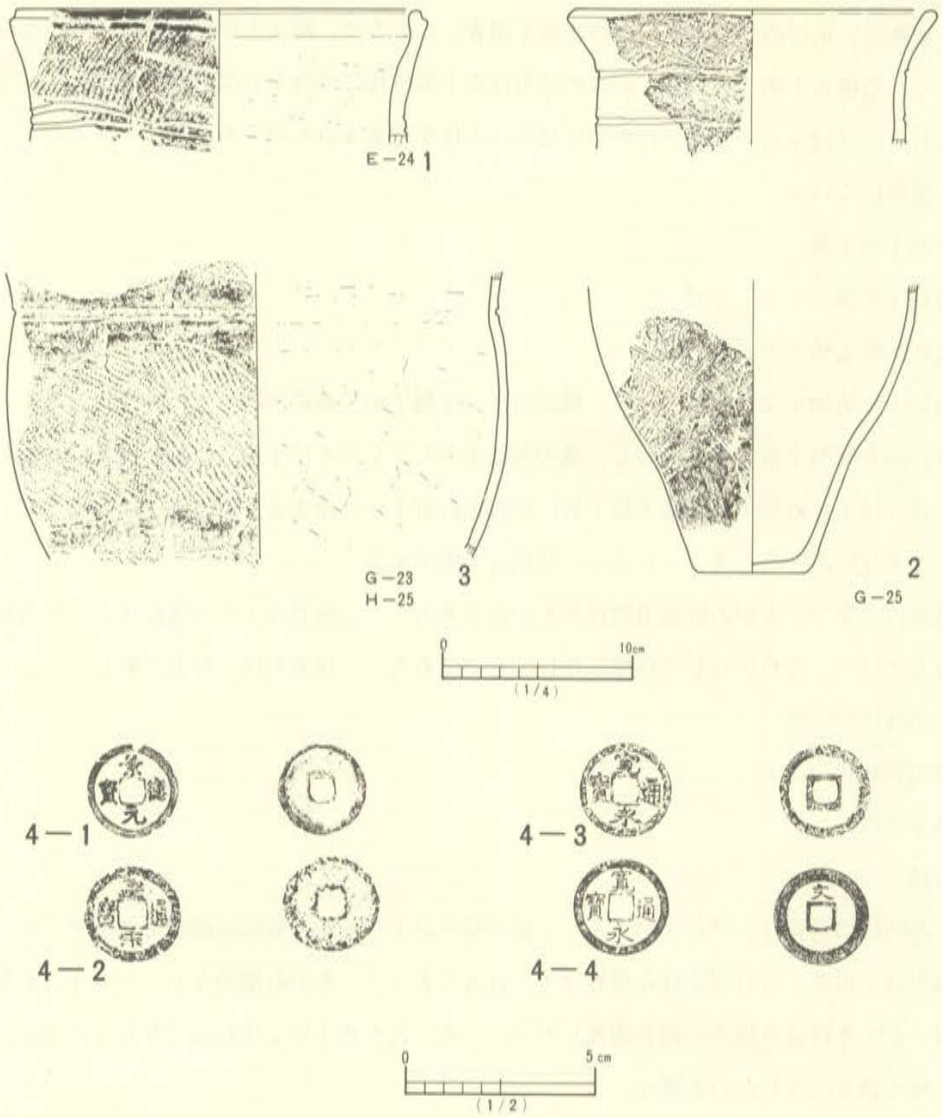
4－4

寛永通寶であり、F－22グリッド出土で、径2.5cm、裏面に「文」が鋳出されており0.6cmの方形孔を有する。遺存は良好である。

（瀬戸　久夫）




第 20 図　縄文土器・石器(4)




第 21 図　縄文土器・古銭(5)

## 第Ⅲ節　まとめ

1．遺跡について

第5遺跡は、東にのびる舌状台地の基部を調査したもので、縄文土器片の散布は認められたがすくなく、遺構も不明であった。調査の結果は先土器時代の遺物をも認めることができ、この遺跡もこれらの状況からみて舌状台地の中央部に主体が位置するものであろう。

2．遺構について

時期不明土壙

時期不明溝……1ヵ所

近代炭焼遺構……3基

土壙は出土遺物がなく明確でない。確認面は、2層下部で農耕の時のものと考えられる。

溝は台地を縦断するようにあって、溝の形は主としてV形を呈する。しかし遺物は出土しなかった。溝の埋土を観察すると溝の最下層に黒色の砂質土が堆積する。このことから考えて、ある時期には水流があったと考えられるが、時期は不明である。

炭焼窯は2基で、方形の貯蔵遺構様のものが1基あった。前者は土地の人によると炭焼窯の記憶があるという。これからして時期は近代のものであろう。後者も同一時期と解したい。

3．遺物について

先土器時代

縄文土器

古銭

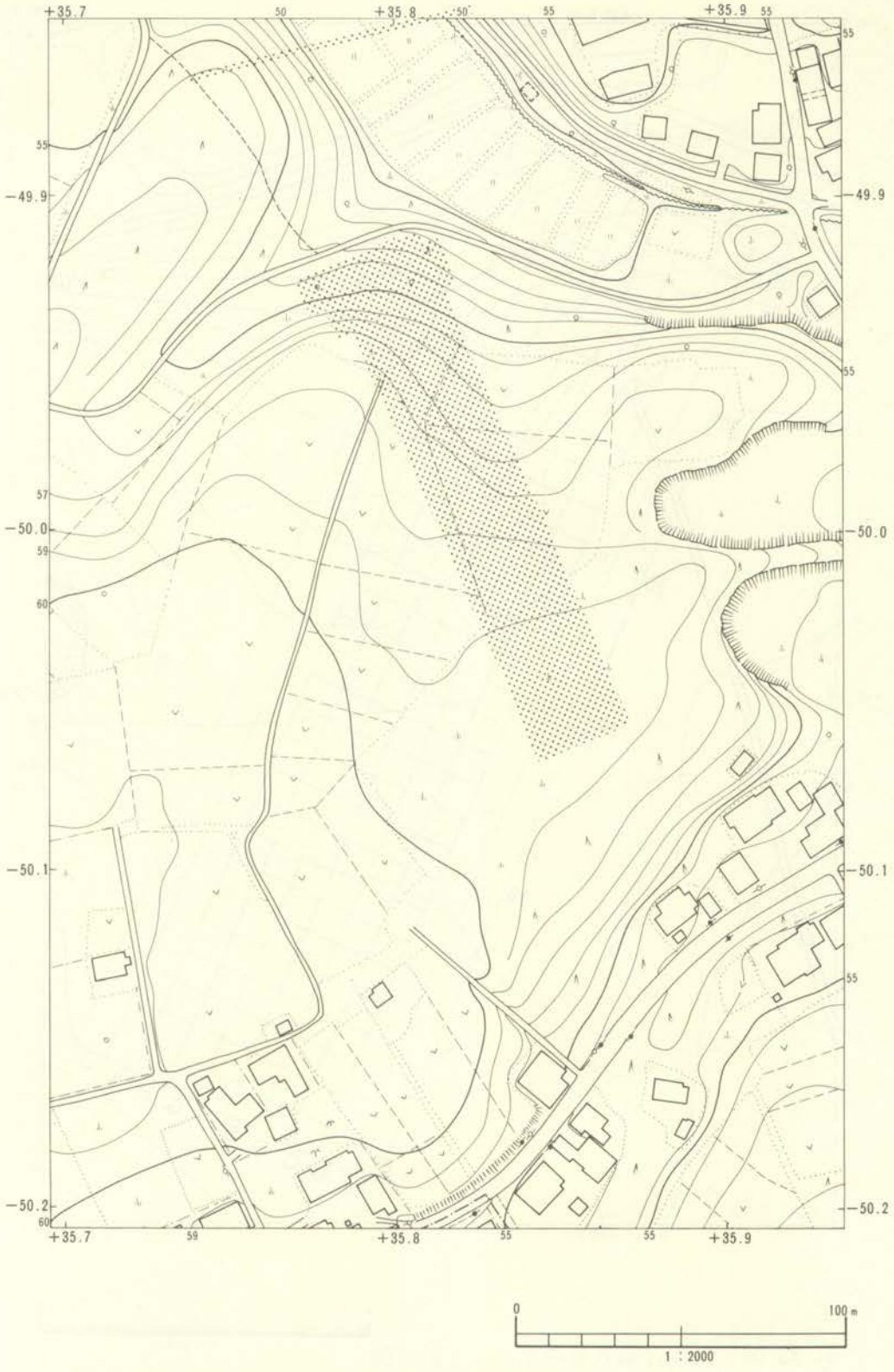
先土器時代の遺物は、フレイク、チップ類20数点出土したが、製品は確認できなかった。その検出地点は平坦部から谷部に移る境界ライン付近であって、その時期のキャンプサイト的なものであろうか。本跡は台地の一部を調査したのみであったため十分な検討はできなかったか、今後台地全域の調査にまちたいと思う。

縄文土器は、前期前半～後期までの土器片が出土し、また出土地点の疎密はなかった。多いのは中期の土器片であり、この台地の縁辺部には中期の生活跡の存在も考えられる。

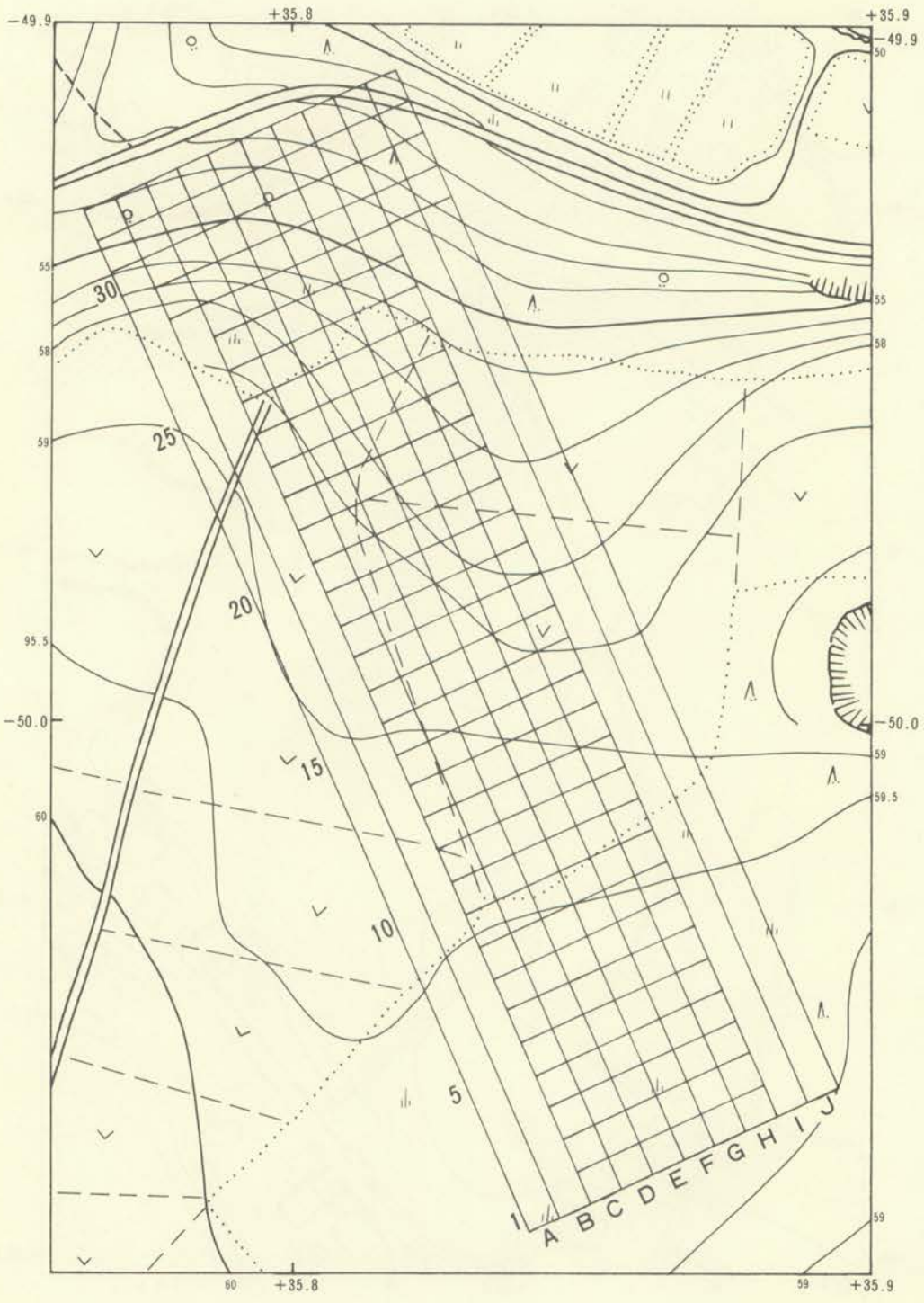
古銭は3種4枚出土した。すなわち景徳元寶（1004年鋳造）1枚、皇宋通寶（1039年鋳造）1枚、および寛永通寶（1636年鋳造）の2枚である。これらがどのようにして流入したかは確認できなかった。

（瀬戸　久夫）

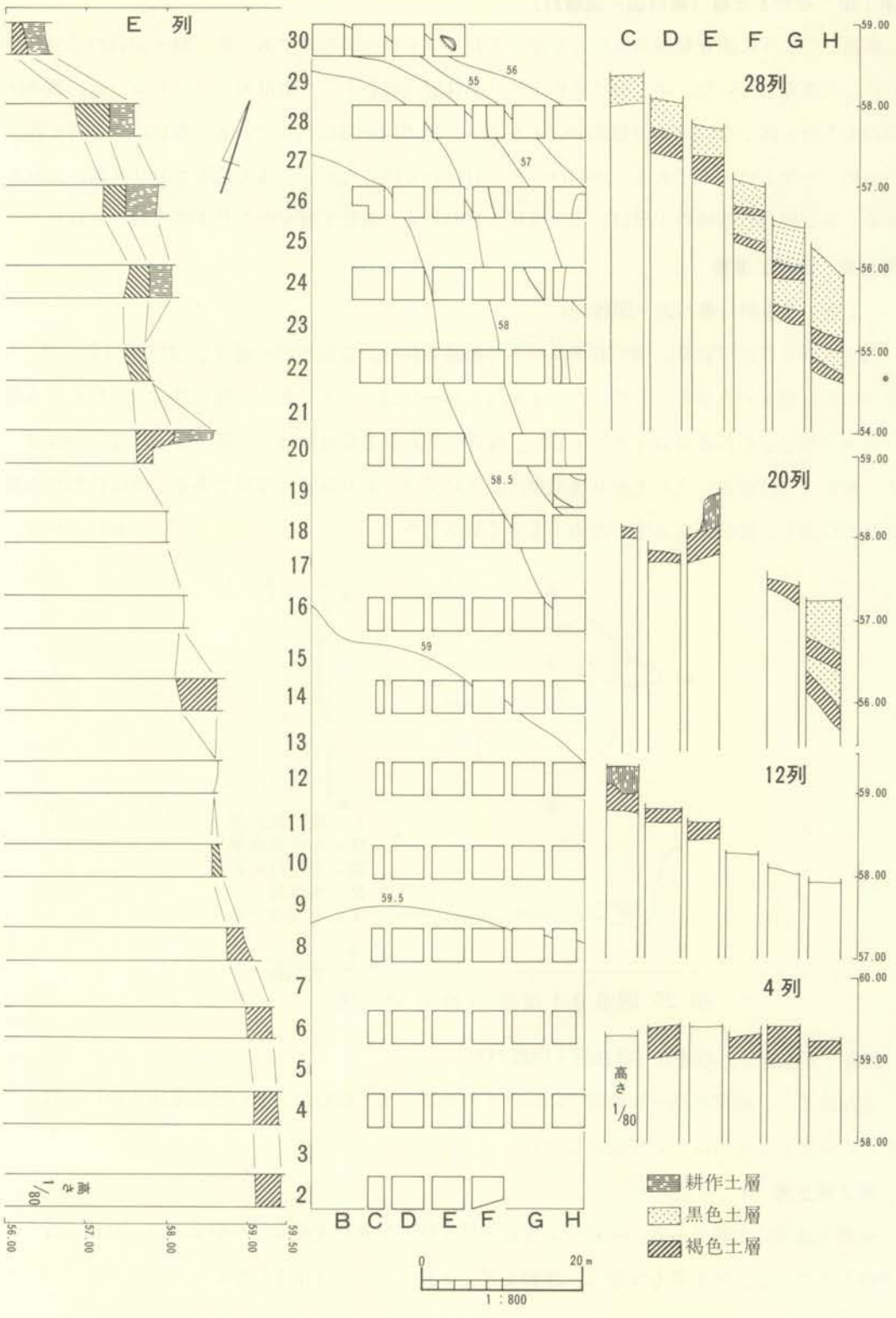
# 第三章　奈木台第6遺跡




第 22 図　奈木台第 6 遺跡調査区域図




第 23 図　奈木台第 6 遺跡グリッド設定図




第 24 図　奈木台第 6 遺跡土層図

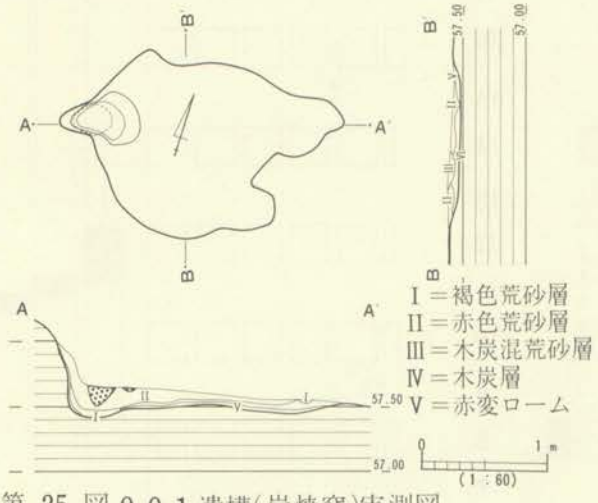
### 第Ⅰ節　地形と土層（第24図・図版21）

前述したように調査範囲の大部分が削平されソフトロームのみであった。24～30列の部分は幸いにして遺存していた。第Ⅰ層（耕作土）・第Ⅱ層（褐色土）・第Ⅲ層（ソフトローム）調査区域の南方向が高くなっており標高59.5mを測り、北方向が谷におちている。層位は大部分が削平のため、ソフトロームである。28列は、G・Hにいくにしたがって落ち込んでおり比高が2mを測る。谷と思われる所の土層は、二次堆積と思われる。褐色土層がかなり下部で観察された。

### 第Ⅱ節　遺構と遺物

#### 1項　炭焼窯（第25図・図版22）

表土を削平されており、20－Dグリッドで確認された。煙道部のみ遺存しており窯体部には、床面の木炭、焼土のみが存在していた。主軸は、W－10.35°－Sである。煙道部付近と思われる部分に天井部と思われるブロックが点在し、床面と思われる部分には、木炭・砂・灰などが確認され、煙道はほぼ垂直に立ち上がり煙道壁は黒色にやけており非常に堅牢である。煙底は黒色の炭化物が付着し、部分的に赤変した焼土も多く見られた。　（瀬戸　久夫）




第25図001遺構(炭焼窯)実測図

#### 2項　包含層出土の遺物（第26図・図版23）

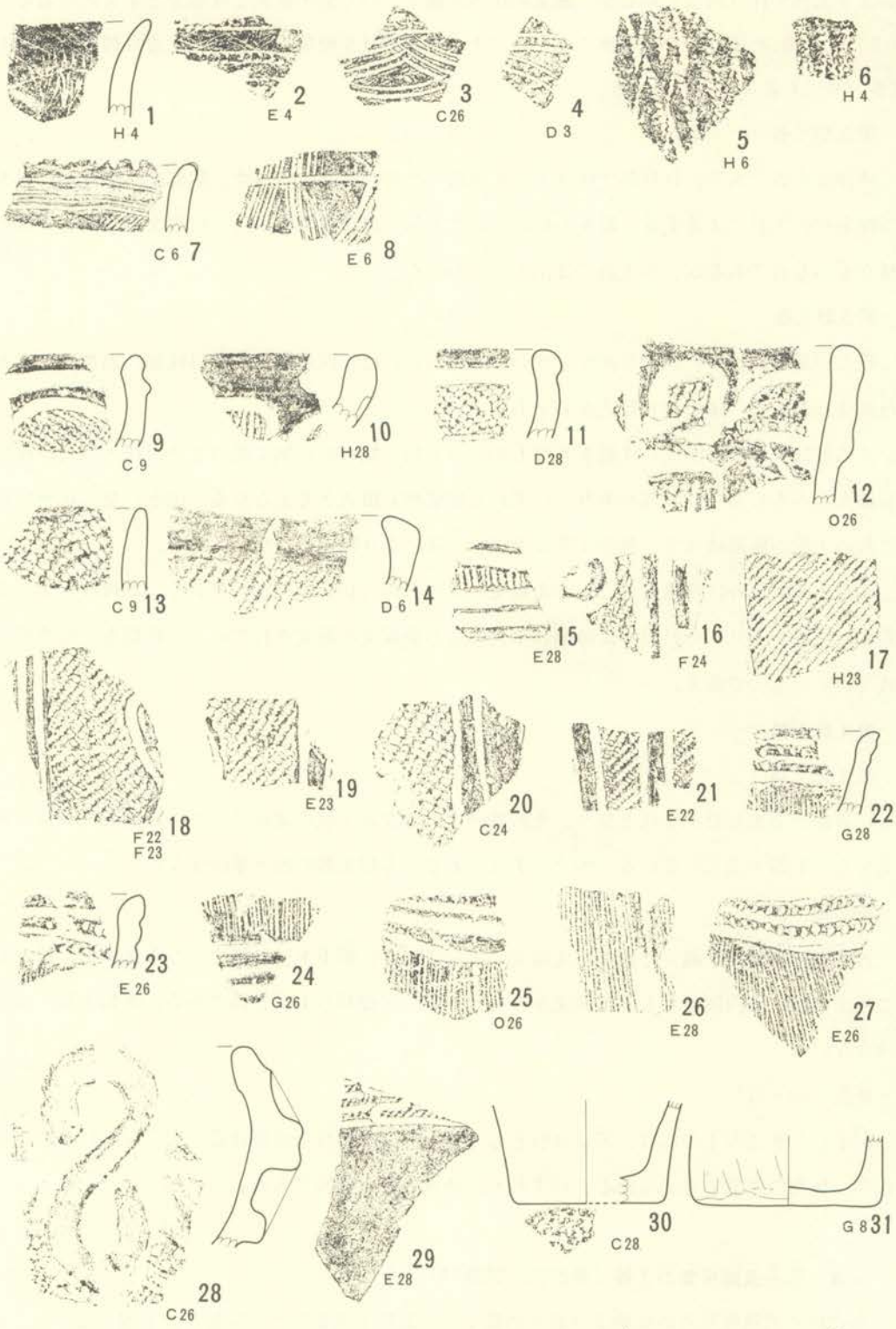
本地点では、縄文前期～後期前半にかけての土器が出土したが、その出土量は少ない。以下、群別に分類したものについて説明したい。

**第2群土器**

前期の諸磯式土器である。半截した竹管工具を使った並行沈線文や爪形文のみられる土器で、諸磯b式である。出土量も少なく、諸磯a式、c式については出土しなかった。

第2類土器

浮島式土器である。ハマグリの腹縁を交互に移動させて、連続する貝殻腹縁文をつくる。口縁


1 H4
2 E4
3 C26
4 D3
5 H6
6 H4
7 C6
8 E6
9 C9
10 H28
11 D28
12 O26
13 C9
14 D6
15 E28
16 F24
17 H23
18 F22 F23
19 E23
20 C24
21 E22
22 G28
23 E26
24 G26
25 O26
26 E28
27 E26
28 C26
29 E28
30 C28
31 G8
0 10cm
(1/3)

第 26 図　縄文土器(1)

部より文様を作り出しているが、施文の仕方が雑で、いく分不規則な状態をなすものがある。（1）この他、ハイガイやサルボウなどのアナダラ属の貝を使用して、連続する貝殻腹縁文のもの（5・6）も若干出土している。

第3類土器（7・8）

興津式土器である。口唇部に棒状工具を連続して押しつけた口縁で、胴部には横位から斜方向の櫛歯状の工具による条線で器面を飾るものである。興津式土器には、貝殻文と摩消し手法の文様をもつものであるが、本遺跡では出土しなかった。

**第3群土器**

縄文中期の土器が、かなり出土している。これらには、深鉢形土器で口縁部に渦巻文による口縁部文様帯をもつ加曽利EII式が若干ある。(12)

この他は、口縁部に太い沈線をもつもの（9・11）、幅の広い無文帯のもの（10・14）、口縁部から縄文のみのもの（13）等があり、いずれも加曽利EIII式と考えられる。図示した（16～21）はこれら上記の胴部破片で、懸垂文間は摩消し手法により無文帯となっている。

また、縄文以外に櫛状工具による条線文のみのもの（15・23～27）がある。口縁部は2～3状の太い沈線が走り、それ以下には櫛状工具による条線文が施文されている。時期も、加曽利EIII式と新しいものである。

**第4群土器**

第1類土器

口縁部が突出した把手状となり、その部分に大きなS字状の文様をもち、口縁部に2列の列点文をもつ土器が出土している。堀之内I式である。本類土器の出土量は少ない。

第2類土器

器面上部を摩消し縄文と数条の沈線文によって飾り、胴下半では無文となる深鉢形土器がある。この土器の口縁内側にも太い沈線文がみられるが、加曽利BI式土器である。本類土器も出土量は少ない。

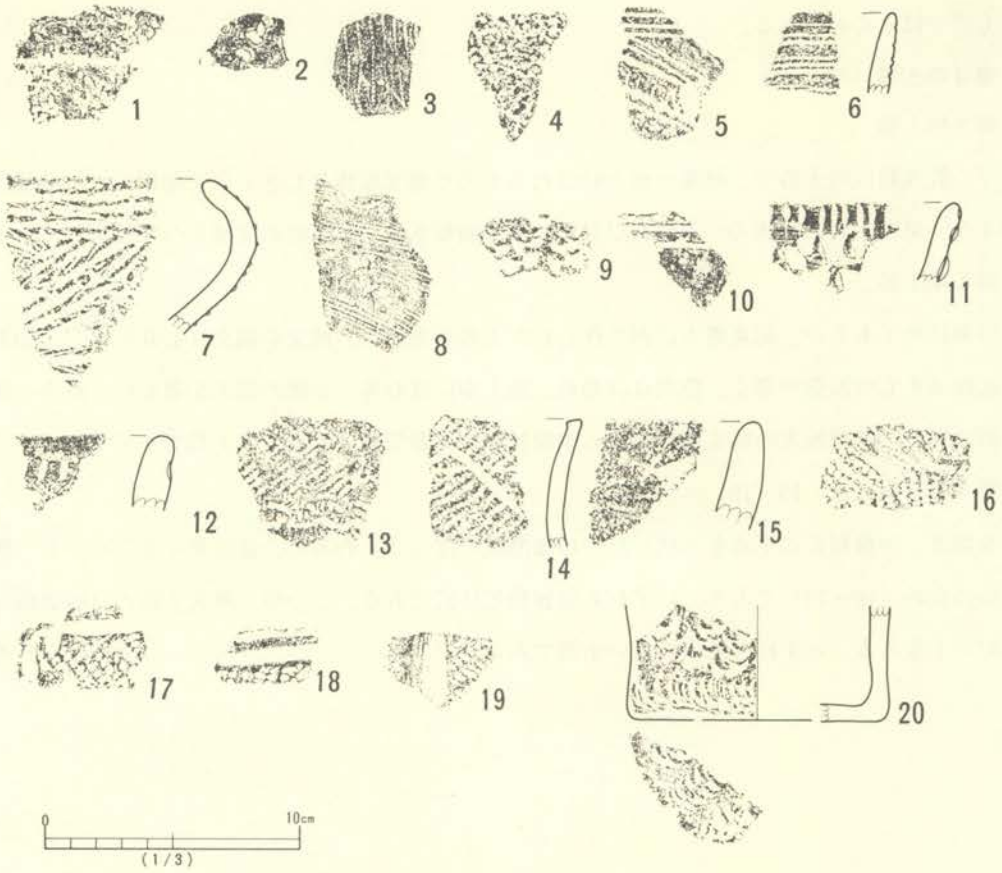
底部（30・31）

図示した底部の1つには、アジロ痕をもっている。これらの底部は器形やアジロ痕をもつことから、後期の底部と考えられる。いずれも、焼成の良いものである。

（中山吉秀）

### 3項　周辺遺跡採集の土器（第27図・図版24）

本遺跡の道路敷地外の畑地より若干の縄文式土器片を採集した。採集した土器片は僅かな量であるが、以下若干の説明をおこなう。土器片についての標記は、本遺跡における細別に順ずる。なお、第1群土器の採集はなかった。




第 27 図　周辺遺跡採集縄文土器(2)

**第２群土器**

第１類土器（１・２）

黒浜式土器である。撚りの粗雑な縄文（ＲＬ）をもち、（１）は粘土帯の貼付け部分が明瞭に観察できる。色調は赤褐、胎土中に植物繊維を含む。焼成は普通。

第２類土器（３～７・10）

諸磯式土器を一括する。おそらく胴下半部と思われる縄文のみのもの（３・４）、平行沈線文に爪形文を組合せたもの（５）、平行沈線文のみのもの（６・10）、浮線文のもの（７）があり諸磯のａ～ｂ式とされるものである。

第３類土器（８・９・11・20）

本類は、茨城県、千葉県に広く分布圏をもつ浮島式土器、興津式を一括した。これらの中には連続爪形文をもつ浮島Ⅱ式のもの（９・20）があり、この中で（20）の底部にまで連続爪形文が施文されている。この他、口縁部下に縦状の連続した刻みをもち、更に棒状工具の先端を押しつけた文様の見られる浮島Ⅲ式のもの（11）、この他櫛歯状工具による条線の文様の（８）がある。

これらの土器は、茶褐色ないし赤褐色で、胎土中には石英粒、砂粒を含んでいる。焼成は良好なものがほとんどである。

第3群土器（12～19）

第2類土器

下小野式類似の土器で、結束一種と呼ばれるもので縄文原体ＲＬとＬＲを使用し、羽状縄文をつくり、更にＬＲの原体の一方に結び目をつけて回転させ、Ｓ字状の文様をつくり出している。

第1類土器

中期初頭であるが、関東地方以西で作られた土器と思われ、地文を縄文（ＬＲ）とし、山形状の沈線文をもつ器壁が薄く、色調は淡褐色、胎土中には石英、小礫の混入が著しい。焼きの堅い土器である。関西地方の縄文前期末から中期初頭の土器型式に該当する土器であろう。

第3類土器（12・15～19）

本類は、加曾利Ｅ式土器を一括した。口縁部破片は（2）のみで、他はキャリーパー型の胴部破片のもの（16～19）であり、いずれも加曾利ＥⅡ式である。この他、無文土器の口縁部破片(15)が1片ある。いずれも焼成の良い土器である。（中山　吉秀）

## 第Ⅲ節　まとめ

1．遺跡について

第6遺跡は、表土削平のため正確な実体は、は握しえなかったが遺跡の中心部は西方向に入った所であろうと思われる。

2．遺構について

近代炭焼遺構……1か所

前述したようにこの地点は、表土を削平されていて遺構の確認が不可能であった。削平された炭焼遺構が形をとどめていた。明確な時期は不明であるが、第5遺跡と同一時期と考えたい。

3．遺物について

縄文土器

縄文土器は、前期～後期までの時期のものが出土した。量は多くない。　　（瀬戸　久夫）

# 第四章　藤　　沢　　遺　　跡

## 第1節　地形と土層（第31図・図版25・36・37）

本跡は、第6遺跡と比高差5mを測る小谷をはさみ南の方向に広がっている。小谷は、現在県道菅田～中野のバス路線として利用されている。この小谷が南西に入り込み小支谷を形成している。これら南西の小支谷は、昭和の初めまで水流があったとのことである。また、南東方向には、弁天池とよばれる小池がある。本跡は、標高55m～60mの間に存在する。これらの小支谷にはさまれた北方向に開く台地で、本跡は台地の西側に位置するといえよう。

本跡の1グリッドと25グリッドの間には、3.2mの比高差をもち、谷へと落ち込んでいる。土層は、18列傾斜にしたがって第II層に新規テフラが存するが、19例～25例ではみられない。テフラ層の下部に暗褐色土層が観取され、III層はソフトローム、IV層はハードロームとなる。

遺構の分布をみると、標高59m～60mの平坦部から傾斜する付近に、ブレのユニットが検出される。標高59m～57mの徐々に傾斜する部分に縄文の遺物、遺構が検出されている。

（瀬戸　久夫）

## 第II節　遺構と遺物

### 1項　先土器時代の遺構と遺物

本遺跡では、先土器時代の文化層を確認するために、南側の19～25までの20グリッドを関東ローム層の第二黒色帯の下部まで掘り下げた。その結果、第二黒色帯から石器の集中地点が2カ所確認された。確認された文化層は、小谷に落ち込む台地の端に近い地点から発見されている。関東ローム層も小谷へ向って緩やかに傾斜している。文化層は傾斜する第2黒色帯と同一レベルで確認され、約10mの距離を隔てて発見された。北側の石器群と南側の石器とに分かれる。

なお、ここでは北側の石器群を1群、南側の石器群を2群とし区別して記述する。

#### 1群（第32・33図・図版34・38）

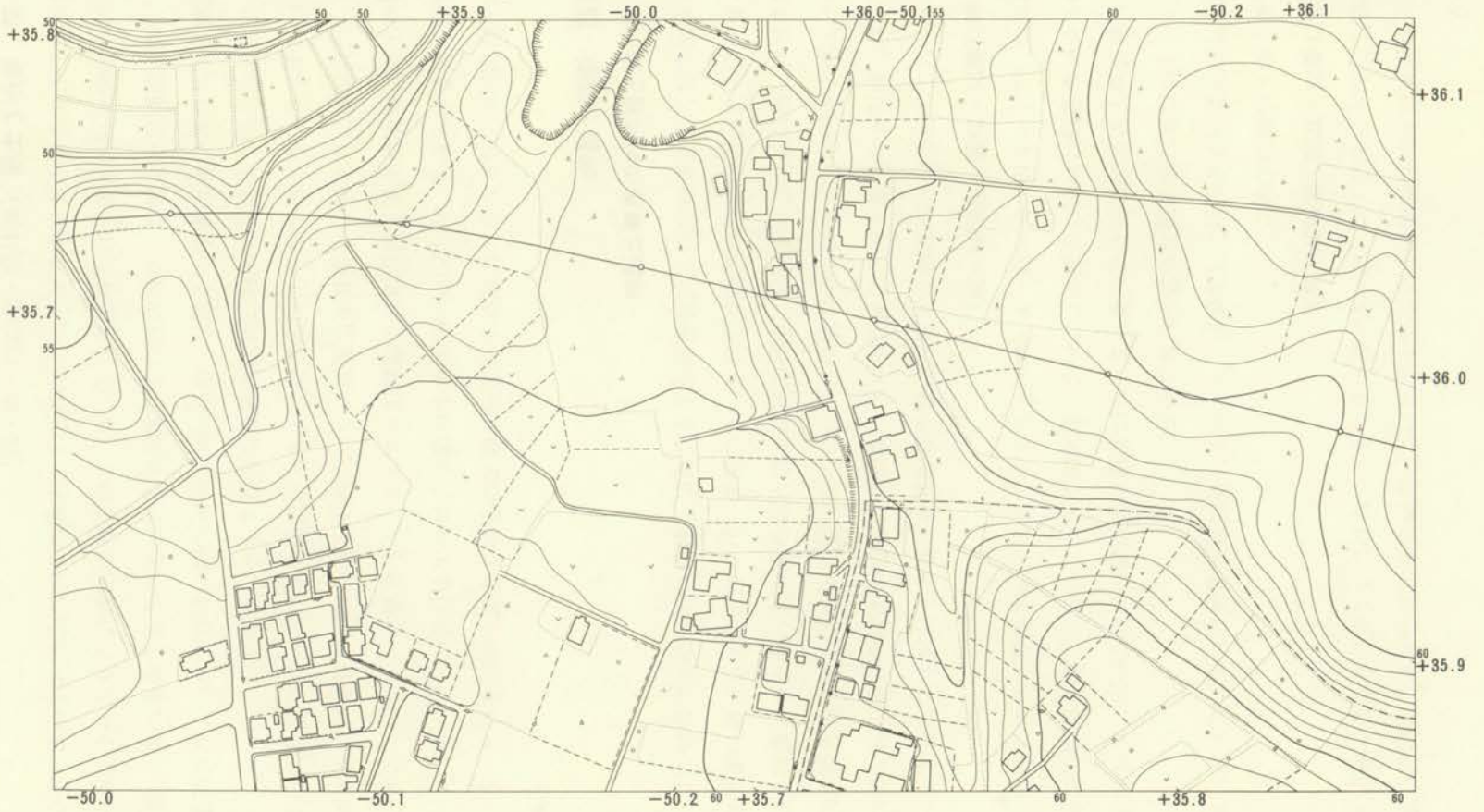
本群は、グリッド19・20・21－A・Bの6グリッドにわたって発見された。剥片※のみ13点が12m×6mの範囲にわたって散在していた。第32図がそれである。一部を第33図に示した。1・6は打撃面のある基部が折れている。2・5は基部と先端部が折れている。3は先端が折れている。2と3には縁に細部調整が加えられている。

本群は13点ながらその石質は黒曜石、チャート、安山岩と多種にわたっている。2群の黒曜石だけのものと対照的である。

#### 2群（第34・35図・図版35・38）

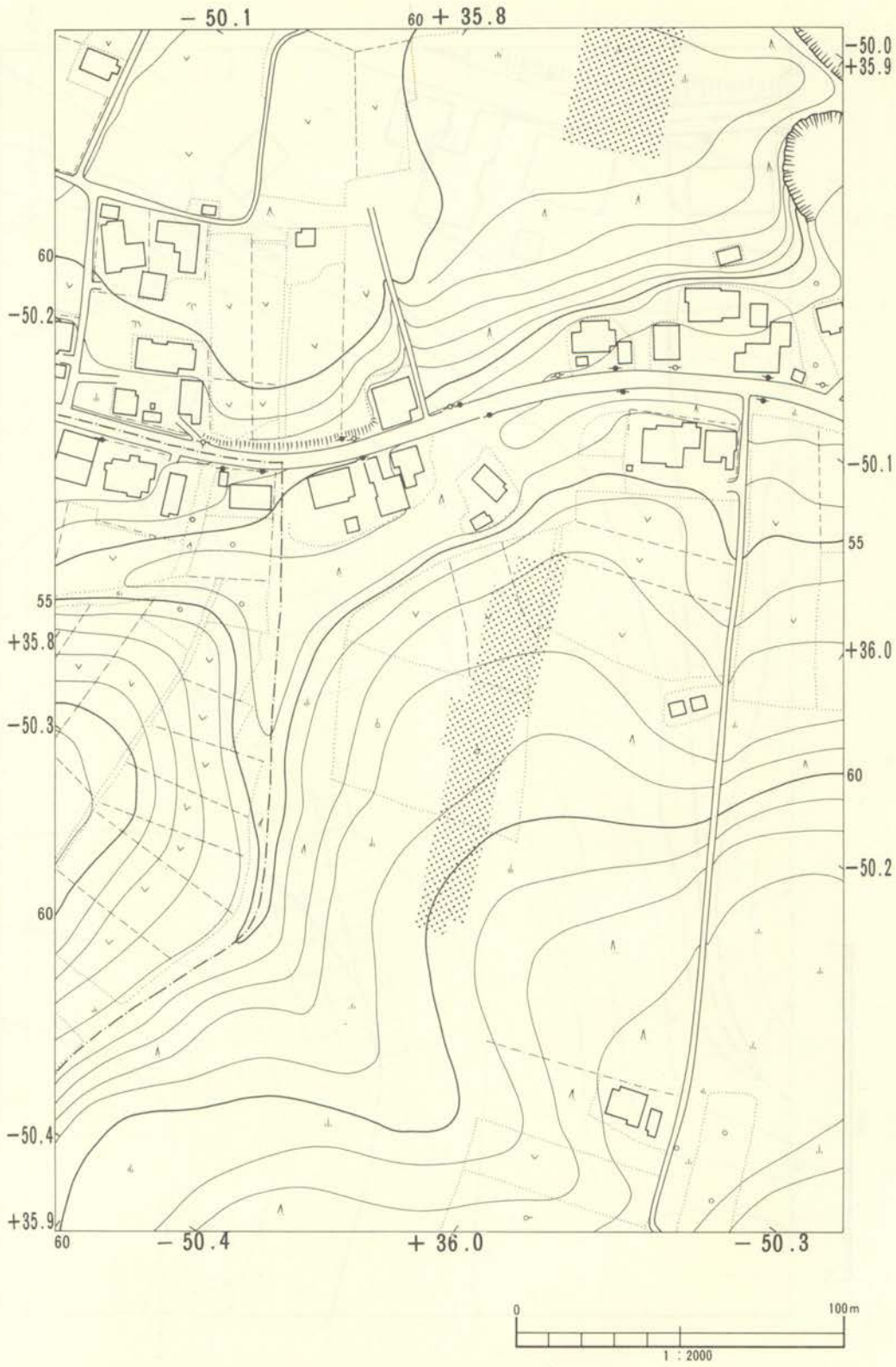
本群は、グリッド23・24・25－A・Bの6グリッドにわたって発見された。石器・剥片は、約8mの直径を描く円の範囲内に9点出土している。第34図がそれである。第35図には一部を示している。

本群では2個の石器が確認された。第35図1と2がそれである。1は大形剥片の縁に細部調整

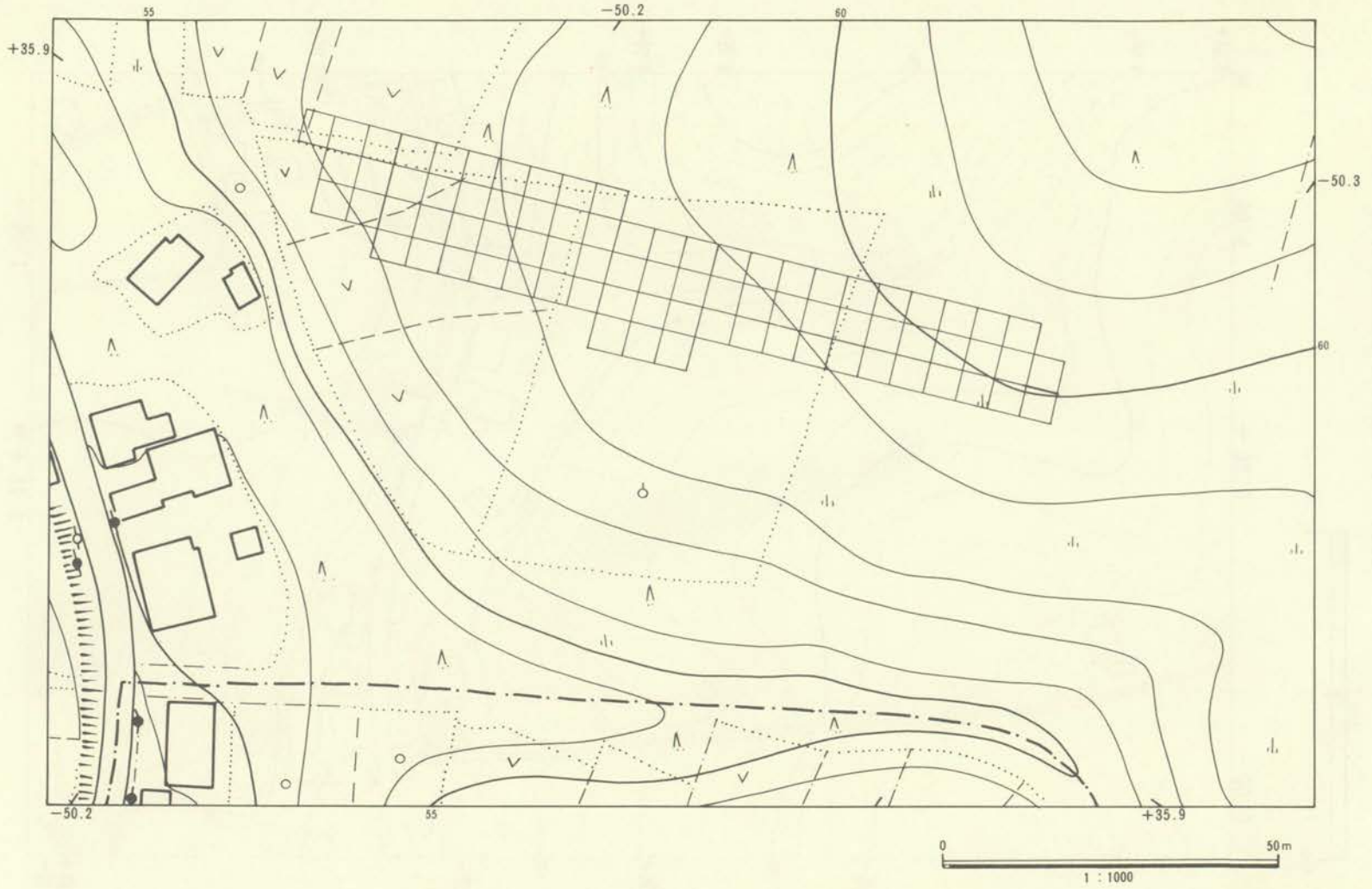



第 28 図　藤沢遺跡周辺地形図(1 : 3000)

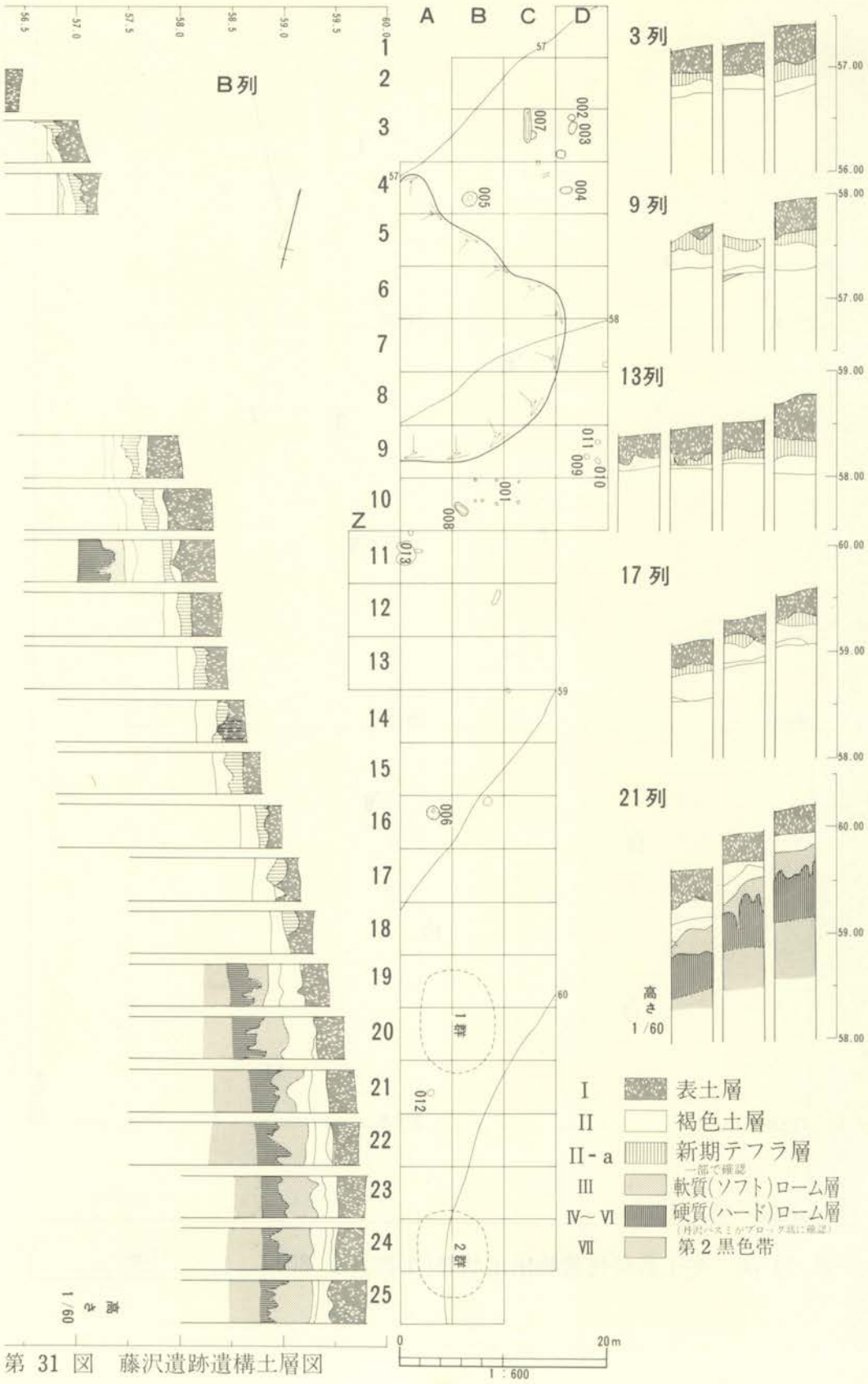
0　100m
1 : 3000



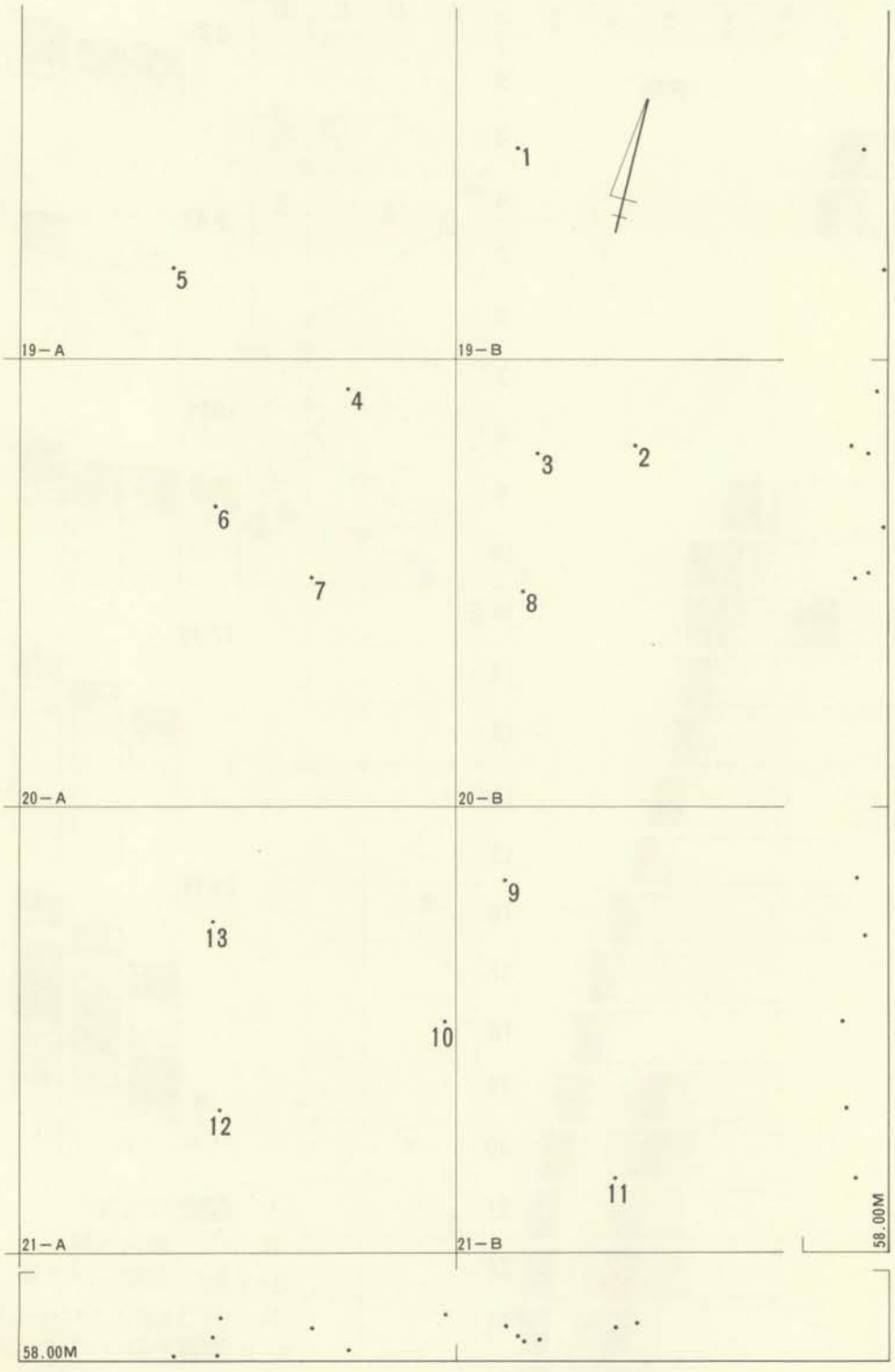

第 29 図　藤沢遺跡調査区域図（１：2000）



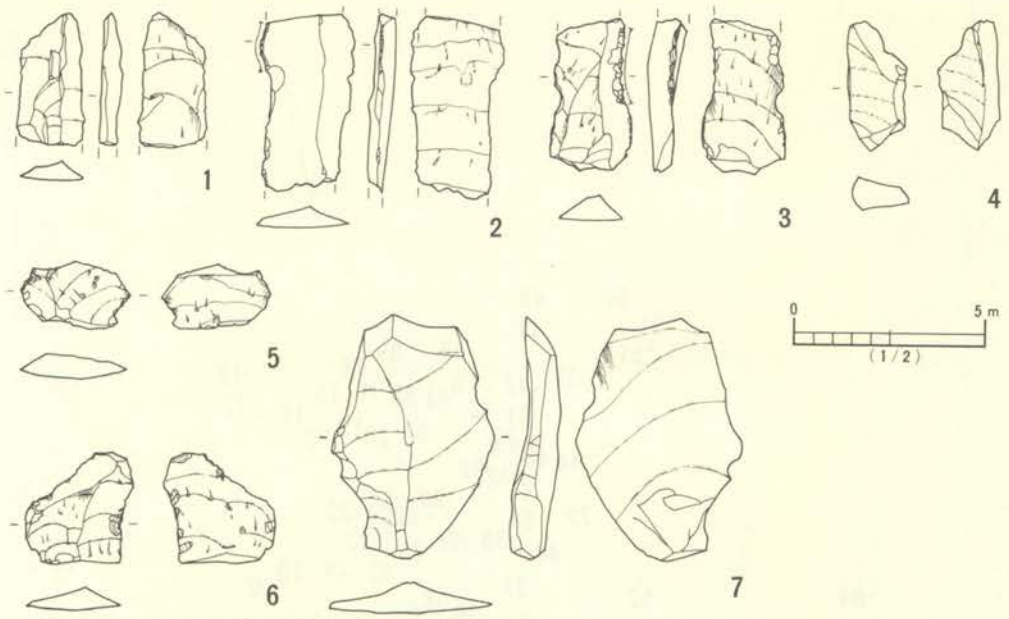

第 30 図　藤沢遺跡グリット設定図（1 ：1000）




第 31 図　藤沢遺跡遺構土層図




第 32 図　先土器時代遺物出土状態(1群)(1/80)



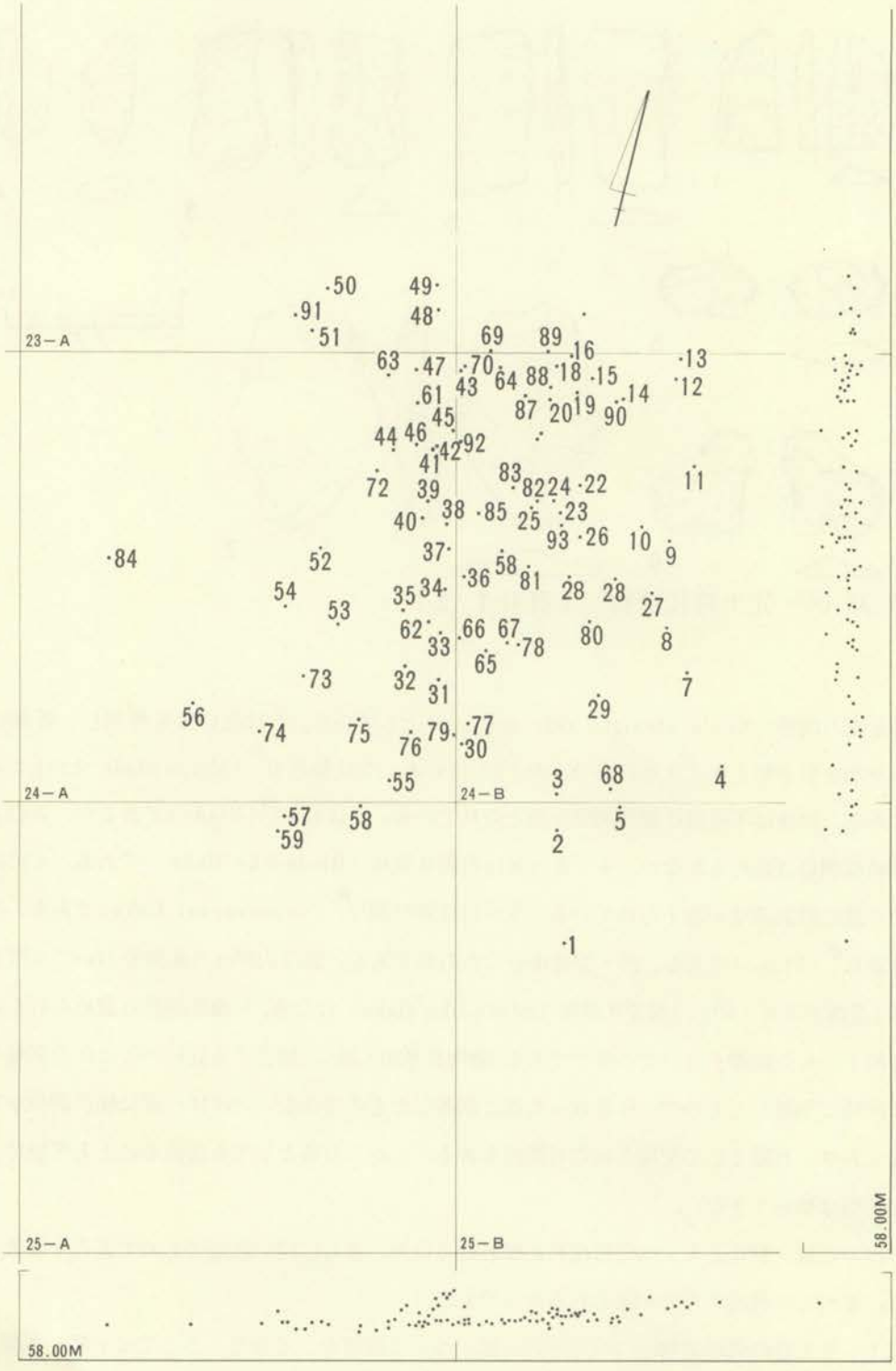

第 33 図　先土時代遺物（1群)(1/2)

を加え直刀削器（Simle straight side scraper)としている。2は鋭い縁を利用し、背部には調整を加え形を整えナイフ形石器(Knife)としている。3は細石刃※（Micro-blade)といわれるものである。両縁は不連続に細部調整が加えられている。5は石刃※(Blade)であるが、3のようには細部調整は認められない。4・6～8は石刃状剥片（Blade-like flake）である。4には両縁の一部に細部調整が加えられている。9～11は横形剥片※（Transversal flake)である。12～25は剥片※（Flake)である。26・27は接合した石器である。26は約80cmの距離をおいての接合である(遺物番号8・10)。石刃状剥片（Blade-like flake）になる。 細部調整は認められない。27は約1.1mの距離をおいての接合である(遺物番号20・24)。接合する資料のAはBを剥離した時に同時に剥離したもので、Bを取った後に剥離したものではない。Bは一部に細部調整が加えられており、石器として使用された可能性もある。しかし石核としても認めることも可能であり、その性格は断定できない。

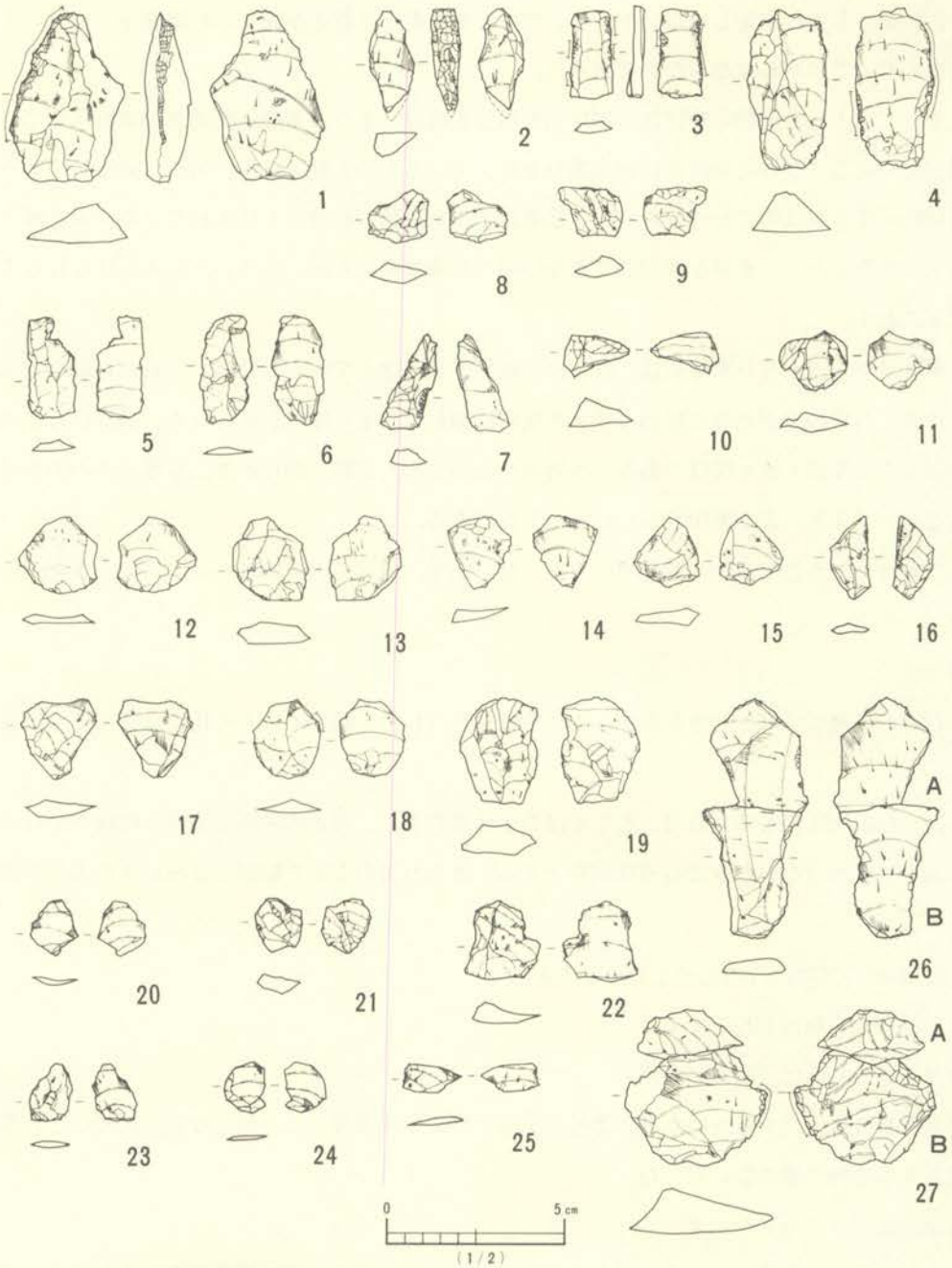
本群の石器、剥片ともすべて黒曜石が使われていた。さらに同一産地のものであろうと考えられる。すべてに共通のものが見られるからである。

以上、先土器時代の遺物についてその一部について説明をしてきた。ここでは1群・2群をまとめて全体としてのまとめをしてみたい。

1群と2群は、その遺物の在り方が非常に対照的である。1群は、剥片のみの13点と数が少なく広く散在しており、石質も多種にわたっている。対して2群は、剥片に加えて石器（2点であ




第 34 図　先土器時代遺物出土状態（２群）（１/80）




第 35 図　先土器時代遺物（２群)(１/２)

るが）を含めて93点と数も多く、狭い範囲に集中しており、石質は黒曜石のみが使われている。全く性格を異にする石器群なのである。しかしその反面、１群・２群ともほぼ同一レベルに確認され、黒曜石に限って見ると同一系統の石質である。また２つの群の距離が10m とあまり離れて

いないのである。調査区域も細長い範囲であり、調査面積も少し少ないと考えているわけであるし、結論としては決定しがたいが、ここで示した1群と2群とが同一の石器群としてとらえる可能性も考えておかねばならないであろう。

また、出土した遺物の中には、剥片の基部、先端部、または基部と先端部が切断されているものが見られる。さらに切断面に細部調整を加えているものも見られる。何のためにそういう加工（切断）するかは明らかではないが、他遺跡の出土遺物、石器にも見られている。本遺跡では出土する数も少なく、充分な検討はできないので結論は避けるが、そういうものが見られることを記しておく。

本遺跡から出土した黒曜石は、非常に不純物を多く含んでいる。結果、原石から剥片を取り出す時に、打撃の力が充分に伝わらず、不規則に割れてしまう傾向が見られる。剥片からより小さな剥片を取り出す時も同様である。本遺跡から出土した石器、剥片の中にも多くその例を見つけることができる。表で※印で示した所がそれである。

今回は、出土した遺物の数も105点と少ないので、すべての遺物についてのデータを表に示した。

※（注）

石刃も広義には剥片とされるが、ここでは長さ（L）と幅（$\ell$）との比で以下のように分類する。

L／$\ell$ ≧2／1のものを石刃、もしくは石刃状剥片とし、両者の区別は稜線と両縁が平行のときは石刃、平行でないときは石刃状剥片とする。また石刃のなかで幅が1.2㎝以下のものを細石刃とする。

2／1≧L／$\ell$ ≧1／1のものを剥片とする。

1＞L／$\ell$ を横形剥片とする。

※表を見るために（第36図参照）

◎遺物番号は、出土した時点での番号である。図で示す番号とは一致しない。図で示した番号は該当する遺物の備考欄に記した。

◎地域は、グリッドを示す。

◎地点は遺物の位置を示すものである（第36図2）。　グリッドの南西隅を0として東への距離をX、北への距離をYとし、遺物のレベルは標高で表わしZで示す。

◎第36図1の要領で計測し、Lは最大長、$\ell$は最大幅，dは最大厚を示す。表では最大長×最大副×最大厚の順で示してある。

◎細部調整が行なわれているものには○印を記して示した。

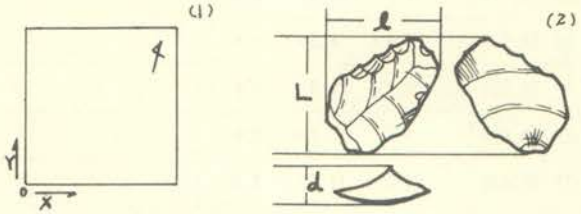
◎石（剥片）を剥離したときの打撃面を以下のように分類した。

原面打面：打面の原面が残存しているもの

剥離打面：剥片からの剥離によって出来た平坦面が残存しているもの。

点状打面：点状にかすかに打面が残存するもの。

（高橋　博文）




第 36 図　計測説明図

| 遺物番号 | 地　域 | 地点 X | 地点 Y | 地点 Z | 最大長×最大幅×最大厚 | 細部調整 | 打面の種類 | 石　質 | 名　称 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 19－B | mm 0.72 | mm 2.41 | mm 58.280 | mm 15.6× mm 25.9× mm 7.8 | | | 黒曜石 | | |
| 2 | 20－B | 0.08 | 4.04 | 58.480 | 34.5× 17.8× 5.7 | | 欠　損 | 硅　岩 | 折れた石刃 | |
| 3 | 20－B | 2.96 | 3.97 | 58.223 | 47.4× 24.1× 6.1 | ○ | 欠　損 | 〃 | 折れた石刃 | |
| 4 | 20－A | 0.75 | 4.65 | 58.135 | 15.9× 28.2× 6.3 | | 欠　損 | 黒曜石 | 横形剥片 | |
| 5 | 19－A | 3.56 | 1.06 | 58.003 | 6.3× 9.6× 1.9 | | | 〃 | | |
| 6 | 20－A | 1.25 | 3.17 | 58.055 | 8.7× 6.3× 0.6 | | | 〃 | | |
| 7 | 20－A | 2.36 | 2.57 | 58.360 | 18.9× 14.9× 4.9 | | 剥離面 | 〃 | 剥　片 | |
| 8 | 20－B | 3.77 | 2.43 | 58.210 | 38.0× 21.4× 7.1 | ○ | 欠　損 | 〃 | 折れた石刃 | |
| 9 | 21－B | 0.99 | 4.17 | 58.382 | 17.9× 17.4× 7.2 | | | 〃 | | |
| 10 | 21－A | 0.89 | 2.60 | 58.523 | 33.8× 16.2× 10.0 | | | 安山岩 | 剥　片 | |
| 11 | 21－B | 4.87 | 0.83 | 58.395 | 61.3× 42.9× 8.8 | | 剥離面 | チャート | 〃 | |
| 11 | 21－A | 1.99 | 1.61 | 58.475 | 28.3× 28.1× 6.6 | | | 黒曜石 | 〃 | |
| 13 | 21－A | 2 23 | 3.51 | 58.262 | 9.9× 3.0× 4.1 | | | 〃 | | |

第１表　１群出土石器

| 遺物番号 | 地域 | 地点 X | 地点 Y | 地点 Z | 最大長×最大幅×最大厚 | 細部調整 | 打面の種類 | 石質 | 名称 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 25－B | 1.27 | 3.45 | 58.510 | 21.2× 11.7× 4.7 | | | 黒曜石 | 剥片 | 17 |
| 2 | 24－B | 1.17 | 4.70 | 58.535 | 13.1× 16.4× 5.0 | | 剥離面 | 〃 | | * |
| 3 | 24－B | 3.16 | 0.11 | 58.560 | 44.0× 22.2× 12.2 | ○ | 〃 | 〃 | 石刃状剥離 | 4 |
| 4 | 24－B | 1.04 | 0.41 | 58.653 | 19.5× 14.8× 5.4 | | | 〃 | | 19 |
| 5 | 24－B | 4.89 | 4.97 | 58.447 | 29.1× 21.9× 11.2 | | 欠損 | 〃 | 剥片 | |
| 6 | 24－B | 4.15 | 0.71 | 58.652 | 7.5× 6.2× 1.1 | | | 〃 | 〃 | |
| 7 | 24－B | 2.66 | 1.45 | 58.600 | 5.4× 6.1× 1.0 | | | 〃 | | 26(B) |
| 8 | 24－B | 2.24 | 2.32 | 58.716 | 31.8× 28.0× 5.5 | ○ | | 〃 | | 26(B) |
| 9 | 24－B | 2.44 | 2.91 | 58.527 | 8.8× 6.5× 2.5 | | | 〃 | | 26(A) |
| 10 | 24－B | 2.13 | 3.09 | 58.627 | 10.5× 28.3× 4.6 | | | 〃 | | 26(A) |
| 11 | 24－B | 2.74 | 3.75 | 58.635 | 5.7× 5.7× 2.0 | | | 〃 | | 3 |
| 12 | 24－B | 2.53 | 4.71 | 58.620 | 24.8× 11.9× 3.0 | ○ | | 〃 | 細石刃 | 5 |
| 13 | 24－B | 2.59 | 4.95 | 58.645 | 27.0× 13.0× 3.4 | | 欠損 | 〃 | 石刃 | 12 |
| 14 | 24－B | 1.93 | 4.50 | 58.580 | 21.0× 21.7× 2.5 | | 点状 | 〃 | 剥片 | 12 |
| 15 | 24－B | 1.59 | 4.72 | 58.507 | 14.1× 14.5× 3.0 | | | 〃 | | |
| 16 | 23－B | 1.33 | 4.98 | 58.508 | 9.3× 9.3× 1.3 | | | 〃 | | 6 |
| 17 | 24－B | 1.48 | 0.44 | 58.560 | 29.4× 14.6× 5.2 | | 点状 | 〃 | 石刃状剥片 | 6 |
| 18 | 24－B | 1.18 | 4.88 | 58.512 | 5.0× 4.2× 1.2 | | | 〃 | | * |
| 19 | 24－B | 1.39 | 4.57 | 58.527 | 15.6× 11.7× 1.1 | | | 〃 | | 27(A) |
| 20 | 24－B | 1.09 | 4.48 | 58.580 | 31.1× 13.3× 4.3 | | | 〃 | 剥片 | 27(A) |
| 21 | 24－B | 0.93 | 4.07 | 58.530 | 7.4× 8.0× 1.7 | | | 〃 | | |
| 22 | 24－B | 1.43 | 3.54 | 58.517 | 16.1× 11.4× 2.7 | | 剥離面 | 〃 | 剥片 | 23 |
| 23 | 24－B | 1.20 | 3.24 | 58.515 | 5.8× 10.3× 3.5 | | | 〃 | | |
| 24 | 24－B | 1.12 | 3.37 | 58.483 | 33.2× 39.2× 13.7 | ○ | 剥離面 | 〃 | 石核？ | 27(B) |
| 26 | 24－B | 0.86 | 3.30 | 58.560 | 9.0× 5.4× 1.4 | | | 〃 | | |
| 26 | 24－B | 1.41 | 2.95 | 58.518 | 10.1× 8.1× 2.2 | | | 〃 | | |
| 27 | 24－B | 1.84 | 2.49 | 58.480 | 11.0× 6.5× 1.1 | | | 〃 | 剥片？ | 折れている |
| 28 | 24－B | 1.31 | 2.52 | 58.575 | 17.2× 13.1× 5.4 | | | 〃 | | * |
| 29 | 24－B | 1.62 | 1.20 | 58.463 | 8.7× 12.9× 3.0 | | 剥離面 | 〃 | | * |
| 30 | 24－B | 0.08 | 0.66 | 58.464 | 13.5× 18.8× 5.1 | | | 〃 | 剥片 | 9 |
| 31 | 24－A | 4.79 | 1.37 | 58.625 | 13.5× 12.7× 2.1 | | | 〃 | | |
| 32 | 24－A | 4.40 | 1.52 | 58.661 | 12.1× 12.0× 2.6 | | | 〃 | | * |

第２表　２群出土石器(1)

| 遺物番号 | 地域 | 地点 X | 地点 Y | 地点 Z | 最大長×最大幅×最大厚 | 細部調整 | 打面の種類 | 石質 | 名称 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | mm | mm | mm | mm mm mm | | | | | |
| 33 | 24－A | 4.82 | 1.88 | 58.735 | 24.4× 20.3× 6.5 | | 剥離面 | 黒曜石 | 剥片 | 13 |
| 34 | 24－A | 4.88 | 2.38 | 58.463 | 9.8× 15.8× 3.3 | | | 〃 | | * |
| 35 | 24－A | 4.36 | 2.15 | 58.588 | 25.5× 13.0× 6.3 | ○ | 欠損 | 〃 | 石刃状剥片 | 7 |
| 36 | 24－B | 0.09 | 2.51 | 58.465 | 6.4× 5.0× 1.8 | | | 〃 | 石刃状剥片 | |
| 37 | 24－A | 4.91 | 2.85 | 58.750 | 12.8× 8.6× 2.1 | | 剥離面 | 〃 | 剥片 | |
| 38 | 24－A | 4.91 | 2.85 | 58.712 | 15.9× 11.1× 2.6 | | | 〃 | 剥片 | * |
| 39 | 24－A | 4.89 | 3.11 | 58.515 | 9.9× 10.8× 3.1 | | | 〃 | | |
| 40 | 24－A | 4.61 | 3.18 | 58.445 | 2.5× 8.9× 2.1 | | | 〃 | | |
| 41 | 24－A | 4.72 | 3.95 | 58.585 | 14.5× 18.6× 4.8 | | 欠損 | 〃 | 横形剥片 | 8 |
| 42 | 24－A | 4.77 | 3.98 | 58.695 | 7.3× 7.5× 3.1 | | | 〃 | | |
| 43 | 24－B | 0.07 | 4.81 | 58.615 | 7.8× 13.4× 1.5 | | 点状 | 〃 | 剥片 | |
| 44 | 24－A | 4.27 | 3.94 | 58.470 | 10.5× 8.4× 3.6 | | | 〃 | | * |
| 45 | 24－A | 4.95 | 4.14 | 58.785 | 7.8× 8.9× 2.1 | | | 〃 | | * |
| 46 | 24－A | 4.54 | 4.00 | 58.420 | 8.8× 7.9× 1.4 | | 剥離面 | 〃 | 剥片 | |
| 47 | 24－A | 4.57 | 4.82 | 58.545 | 8.9× 4.7× 1.5 | | | 〃 | | |
| 48 | 23－A | 4.80 | 0.50 | 58.460 | 9.8× 12.3× 2.2 | | | 〃 | | |
| 49 | 23－A | 4.78 | 0.78 | 58.474 | 5.4× 10.0× 1.6 | | | 〃 | | |
| 50 | 23－A | 3.52 | 0.52 | 58.415 | 10.9× 12.6× 3.8 | | | 〃 | | * |
| 51 | 23－A | 3.34 | 0.34 | 58.425 | 13.6× 14.1× 12.5 | ○ | | 〃 | 剥片 | 細部調整あり |
| 52 | 24－A | 3.45 | 2.83 | 58.430 | 10.7× 11.0× 2.8 | | | 〃 | | |
| 53 | 24－A | 3.61 | 2.96 | 58.388 | 13.7× 15.0× 2.5 | | 点状 | 〃 | | |
| 54 | 24－A | 3.04 | 2.19 | 58.426 | 21.8× 22.3× 5.3 | | 剥離面 | 〃 | 剥片 | 22 |
| 55 | 24－A | 4.21 | 0.26 | 58.420 | 11.5× 18.4× 8.3 | | 欠損 | 〃 | 横形剥片 | 10 |
| 56 | 24－A | 1.97 | 1.11 | 58.410 | 18.7× 11.5× 7.7 | | | 〃 | | |
| 57 | 25－A | 3.01 | 4.86 | 58.436 | 14.9× 13.0× 2.9 | | 原面 | 〃 | 剥片 | 26 |
| 58 | 25－A | 3.89 | 4.98 | 58.405 | 10.3× 12.2× 3.5 | | | 〃 | | |
| 59 | 25－A | 2.96 | 4.67 | 58.555 | 15.3× 18.8× 5.0 | | 点状 | 〃 | 剥片 | 11 |
| 60 | 24－B | 1.78 | 0.15 | 58.435 | 20.1× 17.9× 4.7 | | 剥離面 | 〃 | 剥片 | 14 |
| 61 | 24－A | 4.53 | 4.46 | 58.415 | 19.2× 18.6× 4.4 | | | 〃 | 剥片 | 15 |
| 62 | 24－A | 4.67 | 2.01 | 58.440 | 15.5× 15.3× 12.2 | | | 〃 | | |
| 63 | 24－A | 4.22 | 4.77 | 58.380 | 9.1× 10.3× 1.4 | | | 〃 | | * |
| 64 | 24－B | 0.52 | 4.85 | 58.450 | 14.7× 13.7× 4.6 | | 点状 | 〃 | 剥片 | 2 |

第３表　２群出土石器(2)

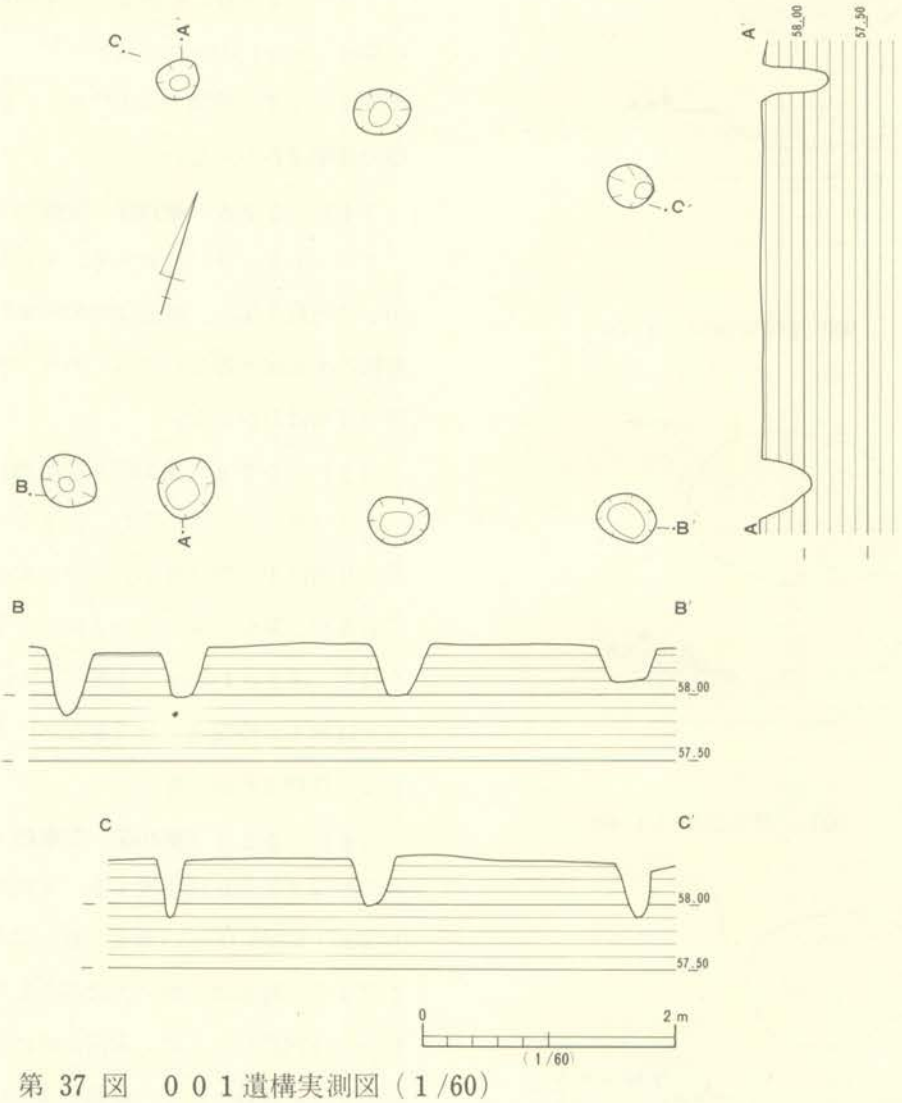
| 遺物番号 | 地域 | 地点 X | 地点 Y | 地点 Z | 最大長×最大幅×最大厚 | 細部調整 | 打面の種類 | 石質 | 名称 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 65 | 24－B | 0.35 | 1.19 | 58.435 | 7.3× 4.7× 0..8 | | | 黒曜石 | | |
| 66 | 24－B | 0.02 | 1.74 | 58.434 | 11.6× 8.2× 2.9 | | | 〃 | | * |
| 67 | 24－B | 0.58 | 1.78 | 58.435 | 10.0× 6.9× 1.6 | | | 〃 | | |
| 68 | 24－B | 0.55 | 2.82 | 58.438 | 11.3× 7.0× 3.6 | | | 〃 | | * |
| 69 | 23－B | 0.40 | 0.03 | 58.435 | 9.9× 5.6× 1.1 | | | 〃 | | |
| 70 | 24－B | 0.10 | 4.86 | 58.427 | 4.8× 5.1× 1.4 | | | 〃 | | |
| 71 | 24－A | 0. | | .3 | × × | | | 〃 | | 欠番 |
| 72 | 24－A | 4.08 | 3.72 | 58.355 | 5.3× 3.2× 1.0 | | | 〃 | | |
| 73 | 24－A | 4 23 | 1.41 | 58.467 | 5.2× 3.1× 0.9 | | | 〃 | | |
| 74 | 24－A | 3.74 | 0.79 | 58.312 | 13.0× 9.6× 3.5 | | | 〃 | | * |
| 75 | 24－A | 2.38 | 0.96 | 58.312 | 8.0× 11.6× 2.3 | | | 〃 | | * |
| 76 | 24－A | 3.47 | 0.80 | 58.415 | 4.9× 6.9× 1.0 | | 点状 | 〃 | 剥片 | * |
| 77 | 24－B | 4.14 | 0.90 | 58.437 | 8.0× 16.1× 2.6 | | 点状 | 〃 | 剥片 | 25 |
| 78 | 24－B | 0.72 | 1.77 | 58.451 | 6.0× 7.3× 1.2 | ○ | 欠損 | 〃 | 剥片 | |
| 79 | 24－A | 0.97 | 0.77 | 58.419 | 20.7× 18.6× 4.2 | | 点状 | 〃 | 剥片 | 18 |
| 80 | 24－B | 4.52 | 2.02 | 58.467 | 27.8× 12.5× 7.3 | ○ | 点状 | 〃 | ナイフ形石器 | 2 |
| 81 | 24－B | 1.84 | 2.64 | 58.440 | 6.9× 13.1× 2.2 | ○ | 欠損 | 〃 | 石刃(?) | *折れている |
| 82 | 24－B | 0.93 | 3.36 | 58.444 | 9.7× 3.8× 1.5 | | | 〃 | | |
| 83 | 24－B | 0.66 | 3.51 | 58.452 | 9.0× 9.1× 1.6 | | | 〃 | | |
| 84 | 24－A | 0.00 | 2.71 | 58.404 | 12.8× 14.8× 7.3 | | | 〃 | | * |
| 85 | 24－B | 1.25 | 3.24 | 58.405 | 5.0× 4.4× 0.8 | | | 〃 | | |
| 86 | 24－B | 0.00 | 4.13 | 58.460 | 10.8× 12.0× 3.8 | | | 〃 | | * |
| 87 | 24－B | 1.79 | 4.63 | 58.782 | 46.7× 31.1× 11.8 | | | 〃 | 直刃削器 | 1 |
| 88 | 24－B | 0.08 | 4.62 | 58.550 | 6.3× 18.5× 4.5 | ○ | 欠損 | 〃 | | * |
| 89 | 24－B | 1.06 | 0.03 | 58.424 | 6.3× 4.7× 1.5 | | | 〃 | | |
| 90 | 24－B | 0.83 | 4.47 | 58.475 | 22.5× 10.6× 5.5 | | | 〃 | 剥片 | 16 |
| 91 | 24－B | 3.17 | 0.43 | 58.365 | 12.8× 5.0× 1.0 | | 剥離面 | 〃 | | |
| 92 | 24－B | 0.06 | 4.04 | 58.393 | 7.3× 6.0× 1.2 | | | 〃 | | |
| 93 | 24－B | 1.22 | 3.12 | 58.432 | 13.7× 1.9× 2.2 | | 点状 | 〃 | 剥片 | 24 |

第4表　2群出土石器(3)

2項　方形状柱列

（1）００１（第37図）

グリッド10－B・Cに位置する。柱穴様の落込みが7ヶ所のみ確認された。住居跡の柱穴のように並ぶが、その他の施設は認められず、また出土土器もなく、その性格、時期など詳細はわからない。




第 37 図　００１遺構実測図（1/60）

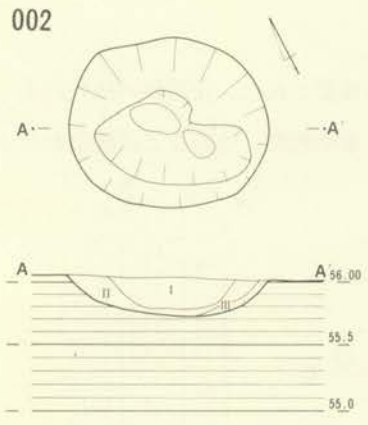
3項　土壙

（1）　００２（第38図）

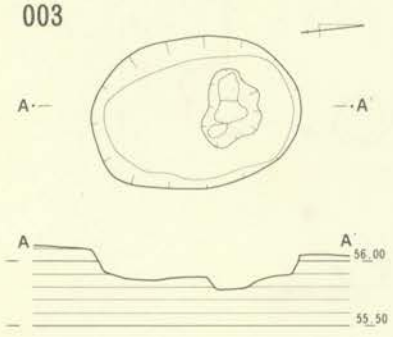
グリッド3－Dに位置する。平面形は長径1.60m、短径1.30mの楕円を呈する。断面形は鍋底状を示す。遺物の出土は土器小片が2片のみであり、時期決定はできない。性格もまたはっきりわからない。

（2）　００３（第38図）

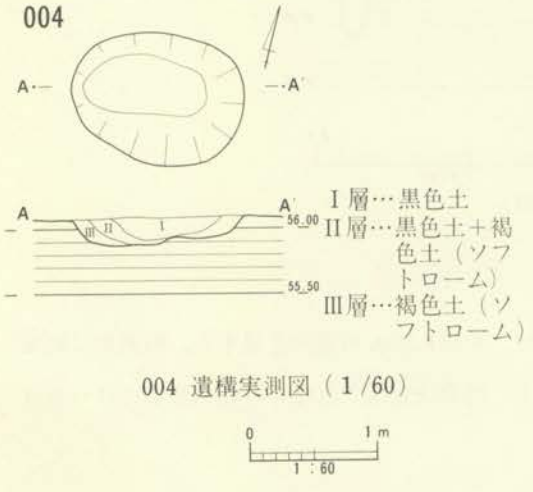
グリッド3－Dに位置し、002と北側で接している。長径1.65m、短径1.20mの楕円形を呈し、




002 遺構実測図（1/60）




003 遺構実測図（1/60）




004 遺構実測図（1/60）

第 38 図　002·003·004遺構実測図(1/60)

断面は鍋底状を示す。遺物の出土は無く、時期・性格など詳細はわからない。

（3）　004（第38図）

グリッド4－Dに位置する。平面形は長径1.35m、短径1.00mの楕円形を呈し、断面は鍋底状を示す。遺物の出土は無く，時期、性格の詳細はわからない。

（4）　005（第39図・図版26・27）

グリッド4－Bに位置する。平面形は径1.60mの円形を呈し、断面はやや円錐形を示す、遺物の出土は土器2片のみであり、時期・性格の詳細はわからない。

（5）　006（第39図・図版28）

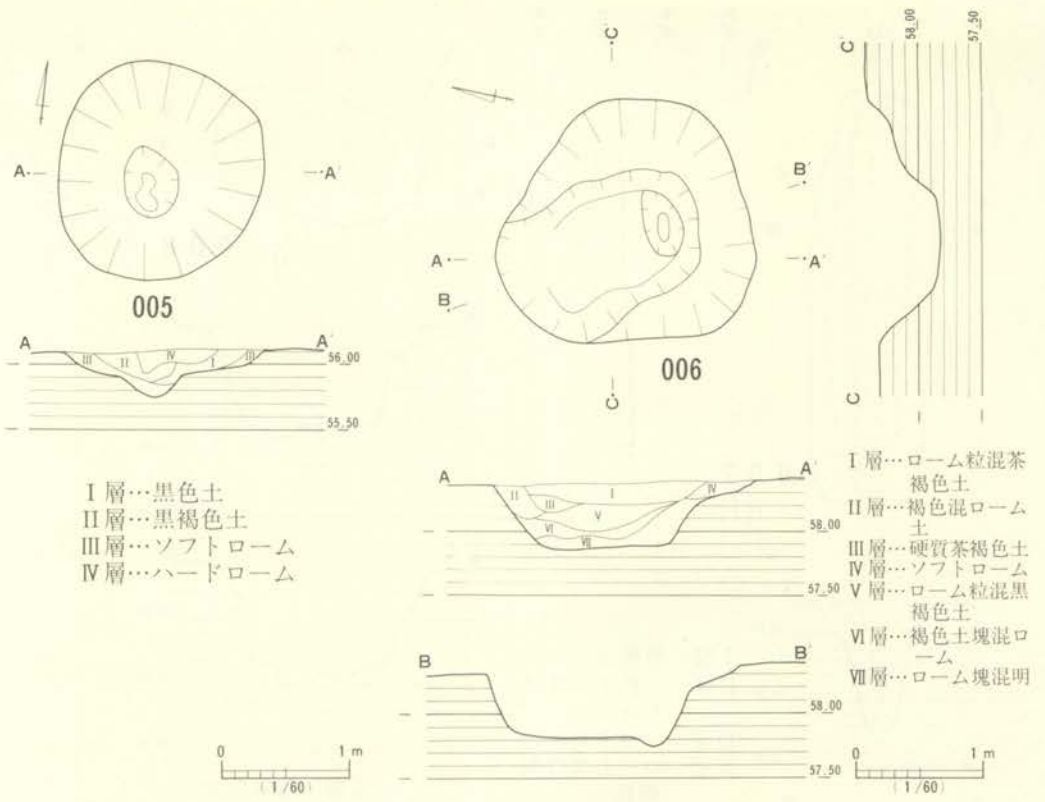
グリッド16－Bに位置し、いままでの遺構群より南に1つだけ存する。平面形は不整形であるが、東から南に広がる緩やかな落込みを持ち、深さが約50cmの土壙である。遺物の出土は無く、時期決定はできない。また施設もなく性格はわからない。

（6）　007（第40図・図版29・30）

グリッド3－Bに位置する。平面形は長径3.20m・短径1.00mの南北に長い隅丸長方形を呈する。断面は、短い方は漏斗形を示し、長い方は円筒形を示す。床面南側に径10cmの穴が2カ所認められる。遺物の出土はなく時期はわからない。

（7）　008（第40図・図版27）

グリッド10－Bに位置する。平面形は長径4.20m・短径2.50mの隅丸長方形を呈し、断面は円筒状を示す。床面には2カ所、小さな浅いピット状落込みが認められた。出土遺物は石鏃1点と土器小片が2片である。時期はわからない。




第 39 図　００５・００６遺構実測図（１/60）

以上今回の調査で確認された遺構について述べてきたのであるが、時代のわかるものは皆無であり、詳細のわからぬ遺構が多かった。001は住居跡の柱穴とも考えられるが、他の施設もなくはっきりと住居跡とは決定し難いものである。002 ～006の土壙状の落込みの詳細も不明である。今回の調査は藤沢遺跡の西側の一部を調査しただけであり、今後広範囲に調査をおこなえば、これらの土壙状落込みの性格もはっきりとわかるであろう。

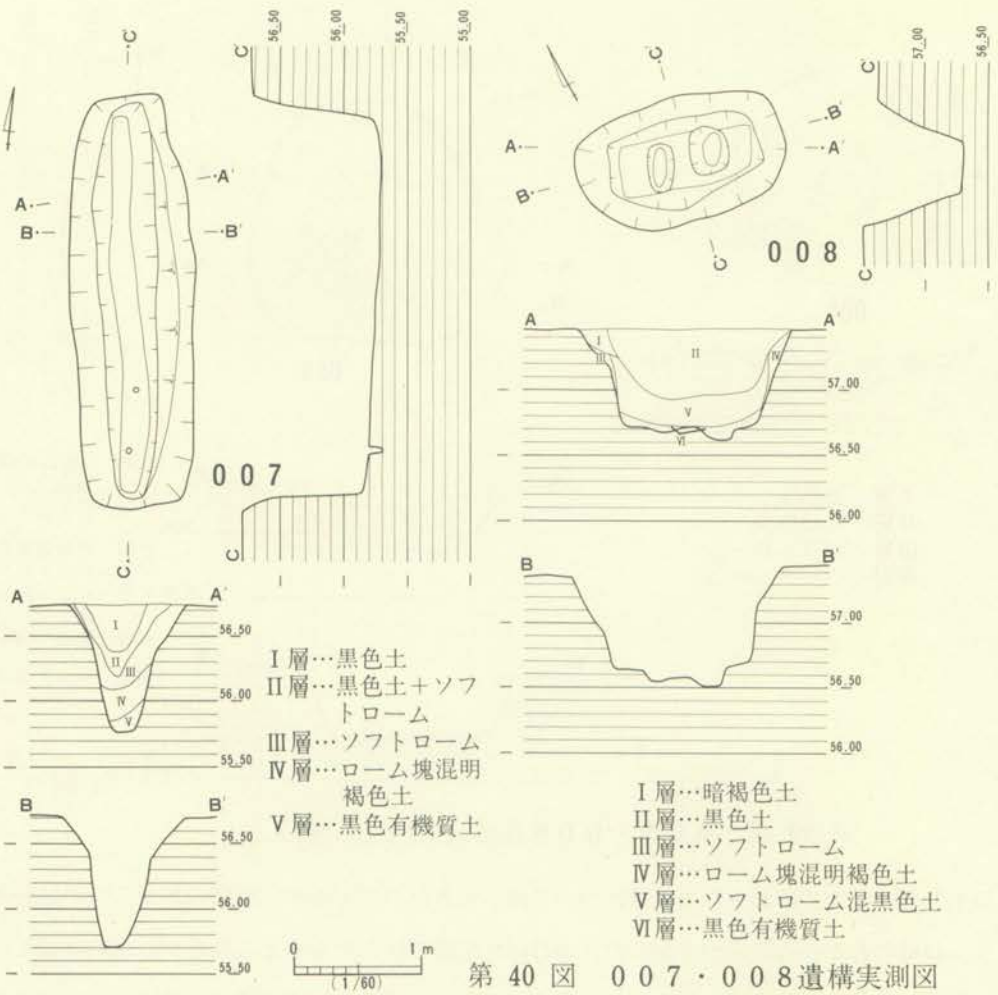
007 および008 は、一般に陥穴といわれるものに形態が類似しており、陥穴としてよいと考える。しかしこれらが遺跡での一地域の調査での検出であり、その性格をはっきりつかめないことも事実であり、決定は今後にゆだねることにしたい。

（高橋　博文）

**4項　焼土集中遺構**

**（１）　００９遺構（第41図）**

９－Ｄグリッド II 層下部で確認され、焼土粒の集中を確認した。焼土粒の量はさほど多くはなかった。精査した結果長径67cm・短径52cm・深さ12cmを測り、主軸方向は西方向である。埋土は３層にわかれる。焼土は上部層のみに集中し、その上部層も粒子の大きい部分と小さな部分とに二分される。上部層から土器が１片出土したが流れ込みと思われる。皿状の落込みであるが壁面は熱変化をうけた状態ではなく床面もやわらかい状態であった。



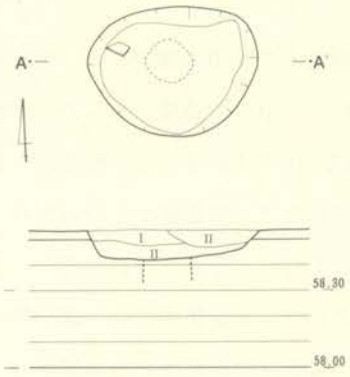

第 40 図　００７・００８遺構実測図

**（２）　０１０遺構（第41図）**

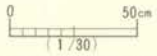
009遺構の南東側にあり距離は２ｍほど離れている。確認も同一層であった。焼土粒の集中はあまりなかったが精査した結果、長楕円形の掘込みとなった。長径 1.1ｍ・短径52cm・深さ24cmを測るがほぼ中央部にピットを有する。ピットは長径25cm・短径23cm・深さ29cmを測る。主軸方向はＮ－55°－Ｗである。埋土は５層にわかれる。第Ｉ層は焼土粒のみであるが、第II層・III層には炭化物も若干混じる。中央部のピットはII層の時期で掘り込まれたと考えられるが性格は不明である。壁面はなだらかで皿状を呈する。壁面・床面にも二次的変化は認められなかった。出土遺物も皆無であった。

**（３）　０１１遺構（第41図）**

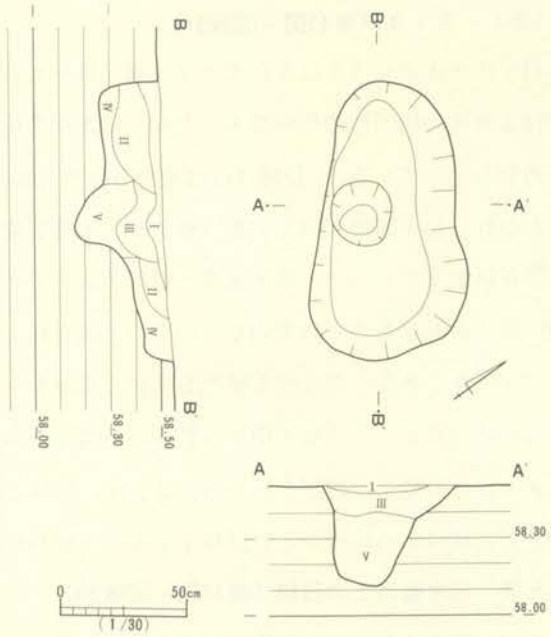
９－Ｄグリッドで確認され、009・011の近くに認められたものである。少量の焼土粒の集中を観察したので精査をおこなった。プランは不整形の楕円形を呈している。長径1.02ｍ・短径70cm・深さ20cmを測る。主軸方向はほぼ北方向である。北側がわずかに掘り込まれており浅い皿状を



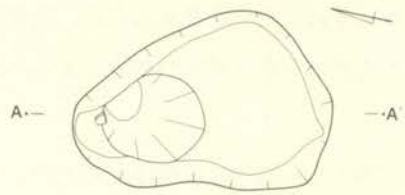

Ⅰ層…ローム粒・焼土粒混暗褐色土
Ⅱ層…焼土粒混ローム
Ⅲ層…暗褐色土

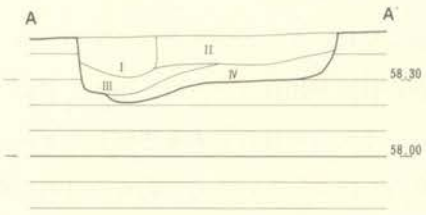



009遺構実測図（1/30）

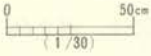



010遺構実測図（1/30）




Ⅰ層…焼土粒混褐色土
Ⅱ層…褐色土
Ⅲ層…暗明褐色土
Ⅳ層…軟質黒色土




011遺構実測図（1/30）

第41図 009・010・011遺構実測図

呈する。壁面はかなりの角度をもっており皿状を呈する。埋土は3層にわかれる。これらの各層は焼土粒はあまり多量ではない。壁面・床面ともに火による二次変化は認められず軟弱である。焼土粒の集中のみで炉という概念ではとらえられるべきものではないかもしれない。

**（4） 012遺構（第42図）**

21－Aグリッドで確認されたものであり、円形状に焼土粒の集中を認めた。精査したところほぼ円形の掘込みとなった。長径75cm・短径60cm・深さ12cmを測る。埋土は3層にわかれる。第Ⅰ層～第Ⅲ層までの各層に焼土粒を多く含んでいた。しかし第Ⅰ層の上部が特に多量であった。主軸はN－7.5°－E方向で、西壁と東壁に掘込みを有するが深いものではない。壁面はゆるやかに落込み、壁面・床面とも熱による二次的変化は認められなかった。

（5）　013（第43図・図版31）

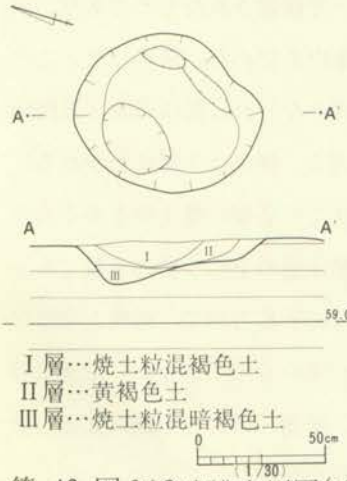
11－Z・Aグリッドにかけてテフラ層（II－2）上面で多量の焼土の集中を確認した。確認面では2カ所の楕円形の集中であったが、精査が進行するにしたがって単一の遺構となった。不整楕円形を呈している。　長軸はほぼ東西方向で1.3mを測り、南方向は1.1mを測る。埋土は5層にわかれ、第I層焼土粒集中層（軟質）・第II層焼土粒＋焼土ブロック・第III層焼土粒混褐色土・第IV層焼土ブロック・第V層焼土粒混黄褐色である。遺構中に小ピットを有しそれらのピット中には、垂直なもの、斜方向などのものが見られ、焼土粒・焼土ブロックが集中する。部分的にはピット底が熱変化をうけて硬化している部分もみうけられた。床面は平坦部と凹凸を呈するところが見られる。この焼土中から数片の土器片が出土した。土器片は全て前期後半に属するものであり、この焼土が確認された面には、同一個体に接合できる土器が散逸していた。これらから考えて後期後半の炉跡かそれに類するものと思われる。　（瀬戸　久夫）

5項　包含層出土の石鏃（第44図・図版39）

今回の調査で出土した石鏃は、表面採集で得られたものを含めて23点であった。石質は黒曜石が中心で他にチャートのものも見られる。完形品は4点と少なく、他は脚部または先端部などが欠損したものである。8は脚部のみであった。いずれもが二等辺三角形を基本形とし、22を除き腹抉を有している。また今回の調査では遺構から出土したものは007遺構の21のみである。他はすべて包含量からのものである。

今回の調査では住居跡などの遺構は確認できなかった。出土した遺物はそのほとんどが包含層からの出土であった。石鏃もその列外ではなかった。しかし注目すべきことが在ったので次に述べることにする。

今回の調査区域のほぼ中間のグリッド11－A・Z、および12－A・Zの4グリッドの10m×10mの狭い範囲から石鏃が10点（2～11）出土していることであり、さらにそれらの材料である黒曜石やチャートの剝片が約250点も出土しているのである。さらに南側の2グリッド13－A・Zまで範囲を広げると約360点にものぼる。この範囲からは住居跡は認められず、11－A・Zにわたって焼土が広範囲にわたって認められている。また出土する土器は、縄文時代中期前半の五領ヶ台式や阿玉台式土器がほとんどを占めているが、時代は決定できない。その性格もはっきりとはわからない。石器製作跡なのであろうか。



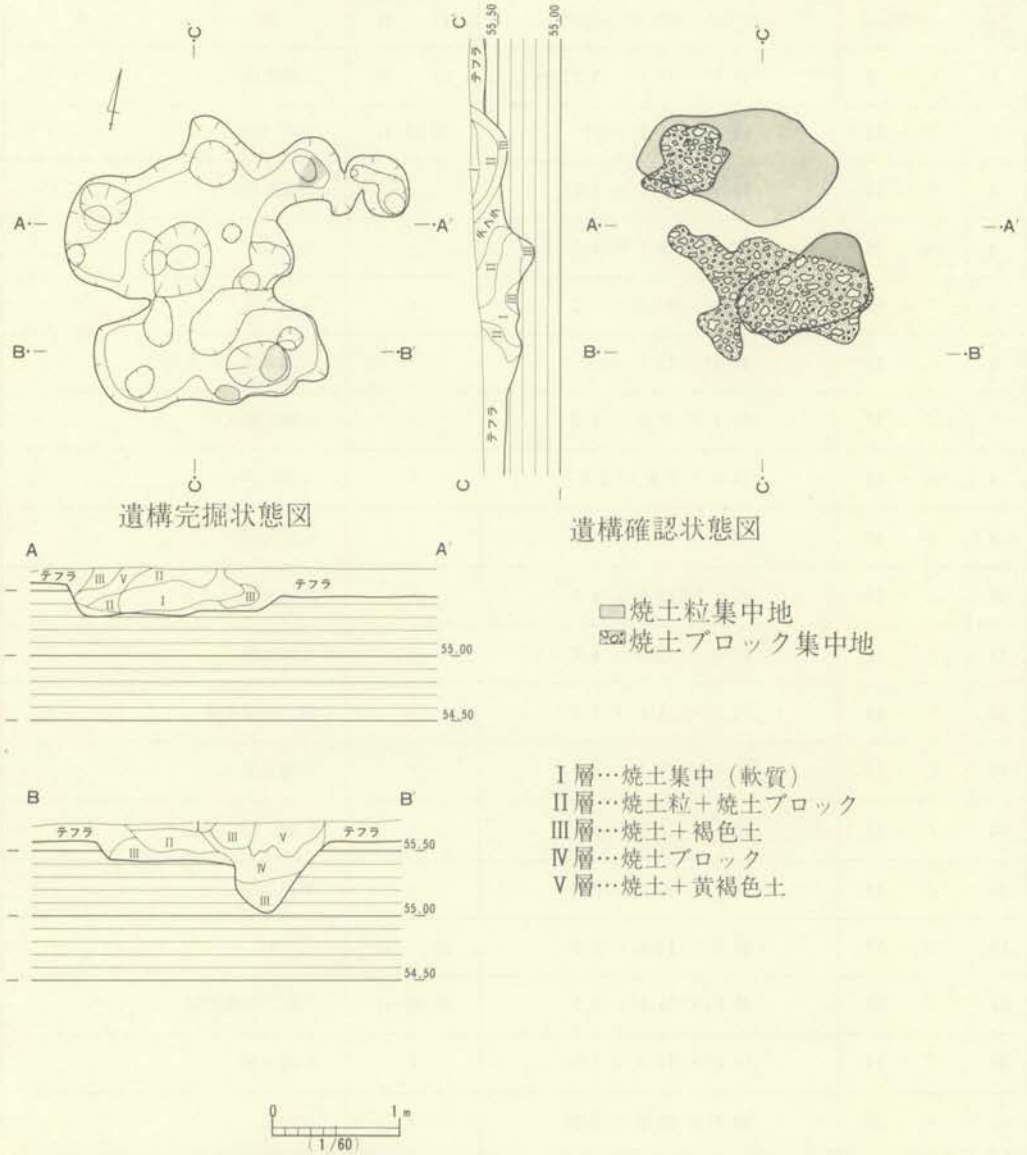
第 42 図012遺構実測図(1/30)

なお、石鏃の出土地点、石質などは表のとおりである。

（高橋　博文）

| 挿図番号 | 出土地点 | 最大長×最大巾×最大厚 | 石　質 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | C － 4 | 19.2 ×(16.6)× 3.5 mm | 硅　岩 | 片脚欠損 |
| 2 | Z － 11 | 15.4 × 15.1 ×3.7 | 黒曜石 | 片脚(M部)欠損 |
| 3 | Z － 11 | (27.5)× 17.7 × 5.0 | 〃 | 尖端欠損 |
| 4 | A － 11 | (16.8)× 10.7 × 4.0 | 〃 | 半　欠 |
| 5 | Z － 12 | (20.8)×(13.2)×(5.2 ) | 〃 | 基部欠損 |
| 6 | Z － 12 | (20.2)× 13.7 ×3.2 | 〃 | 尖端欠損、制作途中 |
| 7 | Z － 12 | (15.1)× 17.5 × 4.0 | 〃 | 片脚尖端欠損 |
| 8 | A － 12 | (10.9)×(6.4 )×3 0 | 〃 | 片脚のみ |
| 9 | A － 12 | (13.0)× 13.9 × 3.0 | 〃 | 尖端欠損 |
| 10 | A － 12 | 17.6 ×(12.0)× 4.1 | 〃 | 片脚欠損 |
| 11 | A － 12 | 17.9 ×(12.0)× 4.7 | 〃 | 片脚欠損 |
| 12 | B － 12 | (10.5)×(11.4)×(2 5 ) | 〃 | 脚、尖端欠損 |
| 13 | C － 12 | (16.5)× 19.1 × 4.0 | 〃 | 尖端欠損 |
| 14 | Z － 13 | 15.7 ×(14.3 × 4.1 | 〃 | 片脚(一部)欠損 |
| 15 | Z － 13 | (18.8)×(16.7)× 2.9 | 〃 | 基部欠損 |
| 16 | B － 13 | 25.8 ×(14.4)× 5.7 | 砂　岩 | 完　形 |
| 17 | B － 14 | (15.8)×(16.1)× 3.7 | 黒曜石 | 片脚、尖端欠損 |
| 18 | C － 14 | (19.0)× 17.5 × 3.9 | 〃 | 尖端欠損 |
| 19 | A － 16 | 33.2 × 23.0 × 6.2 | 〃 | 完　形 |
| 20 | C － 20 | 28.6 × 19.8 × 6.4 | 砂　岩 | 完　形 |
| 21 | 0 0 7 | 13.2 × 12.4 × 2.6 | チャート | 完　形 |
| 22 | 表面採集 | (23.0)× 18.6 × 4.2 | 黒曜石 | 尖端欠損 |
| 23 | 表面採集 | (19.4)×(14.1)× 4.3 | チャート | 片脚、ほか一部欠損 |

第5表　石鏃　　＊＊（　）は現存部の計測値




第 43 図　０１３遺構実測図

**6項　包含層出土の土器（図版32・33）**

今回の調査によって出土した土器は、それほど多くはなく、整理箱（54cm×33cm×15cm）に約10箱であった。土器はほとんどが縄文式土器であり、他時代の土器は極めて少ない。また土器の遺構からの出土は皆無といってよく、そのほとんどは包含層からの出土であった。以下に順を追って述べることにするが、大別して4群に分類し示すことにする。

第1群　縄文時代前期前半　　繊維土器を主とする。

第2群　縄文時代後期後半　　2類に分類　　a 類　諸磯式土器を主とする。

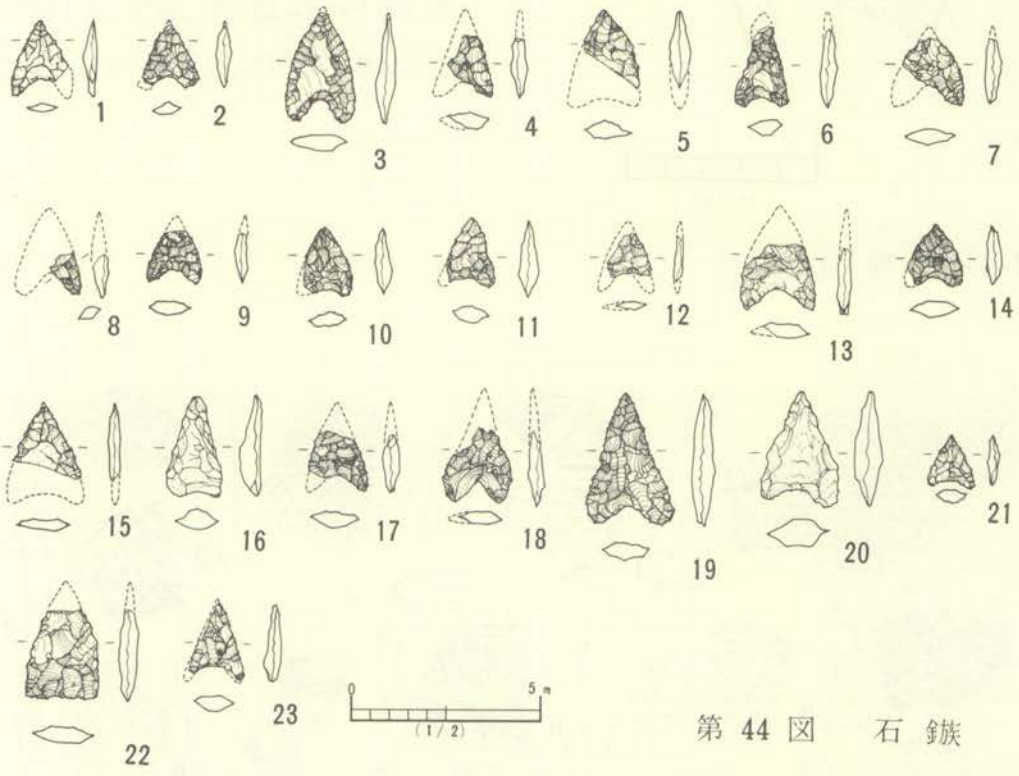
b 類　浮島式土器を主とする。

第３群　縄文時代中期前半　　２類に分類

a 類　五領ヶ台式土器を王とする。

b 類　阿玉台式土器を主とする。

第４群　縄文時代中期後半　　加曽利Ｅ式土器を主とする。

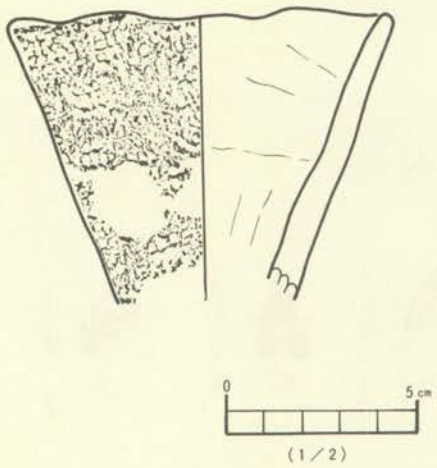



第 44 図　石 鏃

**第Ⅰ群土器（第45・46図・図版39・44）**

本群は縄文時代前期前半のいわゆる繊維土器を一括した。

第45図の土器は、小形の深鉢形を呈する土器であり、器面にはアナダラ属の貝の腹縁を押圧して文様を施文している。１～２はいずれも頸部附近の土器で、地文にはループ文、斜行縄文を施し、さらにその上に半截竹管による平行沈線で幾可学的文様を描いている。平行沈線の間に竹の先を利用して連続刺突して爪形文を施し、交点には粘土を瘤状に貼り付けている。３～６は羽状縄文の土器群である。３はループを持つ撚りの違う縄文を施文している。４・６は結束による羽状縄文。５は撚りの違う縄文を施文して羽状縄文としている。７～８は、無文の土器面に半截竹管を用いて幾可学的文様を描いている。７は文様帯以下に箆先を刺突している。９～14は斜行縄文の土器である。９は多条縄文の斜行縄文である。10は無節の縄文を押日している。11は口縁部に竹管の先を刺突し、円形の凹みを加えている。

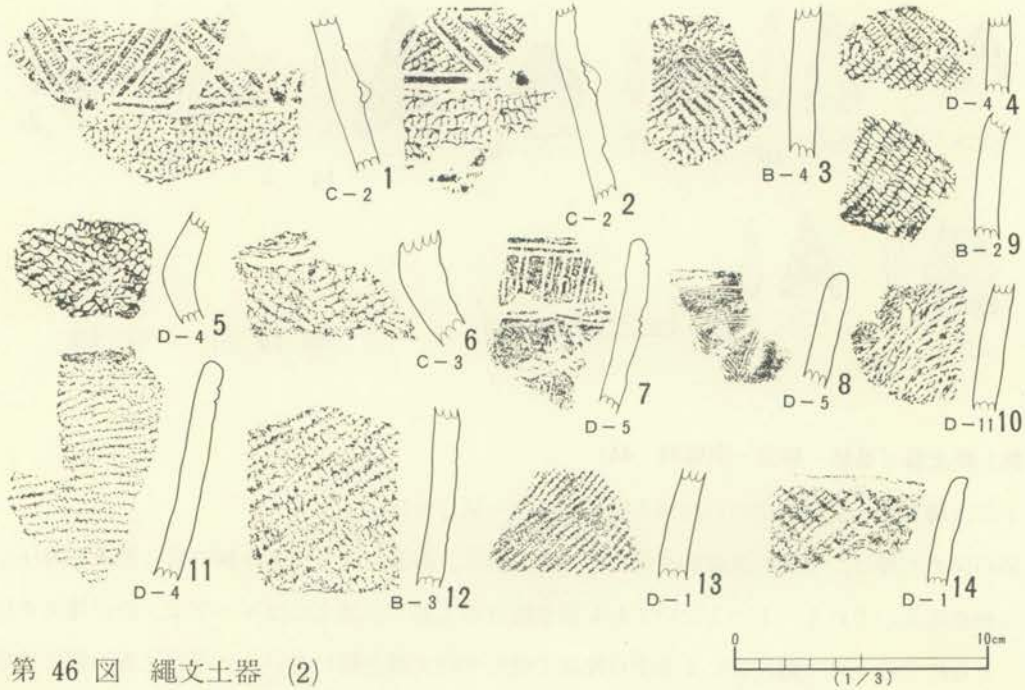



第 45 図　縄文土器(1)

以上の土器群は、繊維土器であるが、１・２は関山式土器に、７・８は黒浜式土器に属すると考えられるが、その他はどちらとも決定しがたい。

**第２群土器**

本群は縄文時代前期後半に位置する土器群である。文様構成などによりａ類とｂ類に区分される。

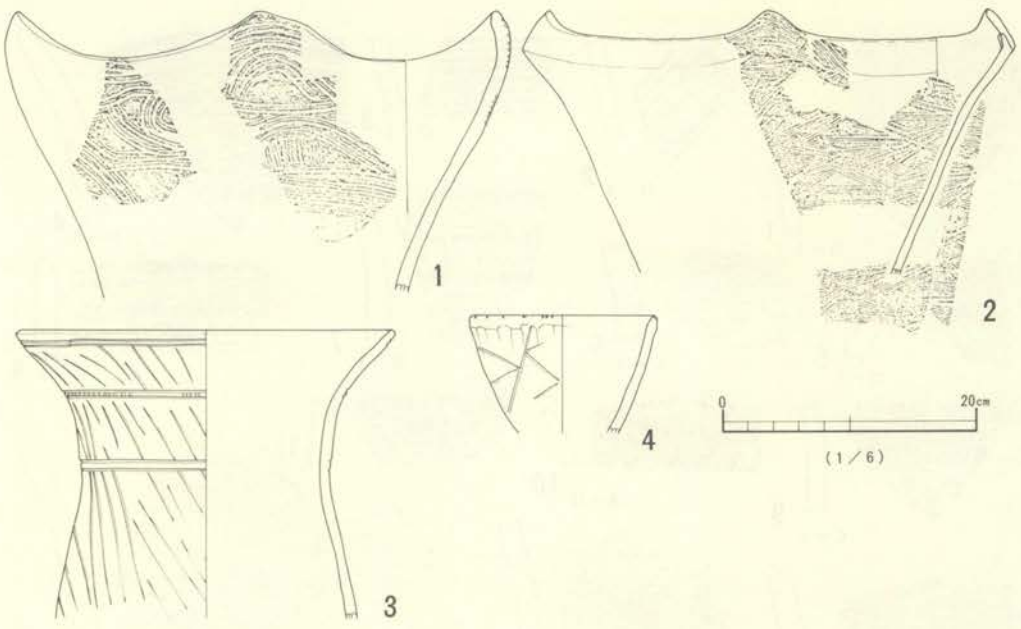



第 46 図　縄文土器 (2)

ａ類（第47・48図・図版40・44）

本類は、諸磯式土器を主としている。

第47図１・２は破片のみの出土であるが、波状口縁を有する深鉢形を呈する土器である。地文は無く無文であり、器面全体に半截竹管様工具で平行沈線で文様を描いている。３は平縁を有し、頸部でくびれ、胴部はやや張る深鉢形を呈すると考えられる。地文は無く、無文の器面に箆様工




第 47 図　縄文土器 (3)

具で条線を引いている。その上から半截竹管様工具で平行沈線を口縁部から頸部にかけて3カ所施しており、頸部のものには篦先を刺突し凹みを加えている。4は平縁の小形の鉢形を呈する。口唇部には篦先できざみを加え、器面には篦様工具で沈線の文様を描いている。

第48図1～6は地文に縄文を施文し、その上を半截竹管様工具で文様を描いている。1・2は連孤文を描いている。いづれも口縁部で波状口縁の谷部付近である。3・4は口縁に沿って平行沈線が描かれており、竹管または篦様工具の先で刺突が加えられている。5・6は半截竹管で平行沈線を描いている。7～11は無文の地に篦様または半截竹管を用いて文様を描いている。7・8は半截竹管の先端を押圧しながら引いて文様を描いている。9・10は口唇部に細い棒を押圧して凹凸を加えている。11は半截竹管様工具を用いての平行沈線を施文している。地文にはかすかではあるが、縄文が施文してある。12は地文に縄文を施し、さらに上を粘土でわずかに隆起させ幾可学的文様を描いている。この粘土紐には篦先で刻みが施され、間には篦先を刺突し凹みを付けている。補修孔が見られる。13・14は頸部附近の土器である。地文に縄文を施文し、櫛歯様工具で条線を施している。15～17は無文の器面に篦様工具で文様を描いている。17は底部付近の土器である。18～20は、地文を施文を施文し、その上に細い粘土紐を貼り付けて文様を描き、さらに粘土紐には篦様工具で刻みを施している。21～23は器面を縄文のみを施文している土器である。24～26は器面全体にソーメン状の細い粘土紐を貼り付け、さらにその上を篦様工具で刻みを施している。25・26は、地文として器面全体に条線が横走している。この3片の土器片は、諸磯式に続く十三堤台とした方がよいかも知れない。

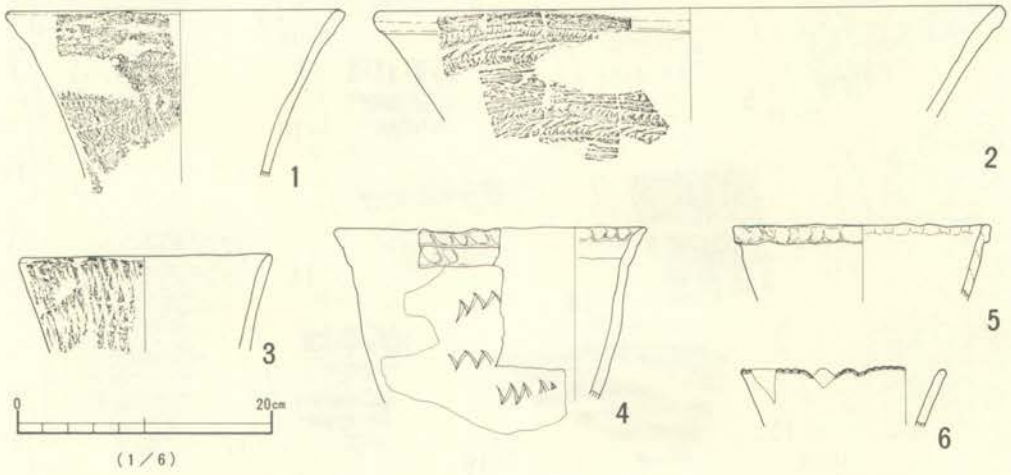
D－4 1
D－3 2
D－1 3
D－3 4
D－7 5
C－4 6
B－4 7
D－3 8
C－5 9
A－18 10
11
B－13 14
D－8 12
A－12 13
B－10 15
D－10 16
C－11 17
A－11 18
D－5 19
D－12 20
D－4 21
D－2 22
D－10 23
B－12 24
B－16 25
C－15 26
0 10cm
(1／3)

第 48 図　縄文土器 (4)

b 類（第49・50、図版41・44・45）

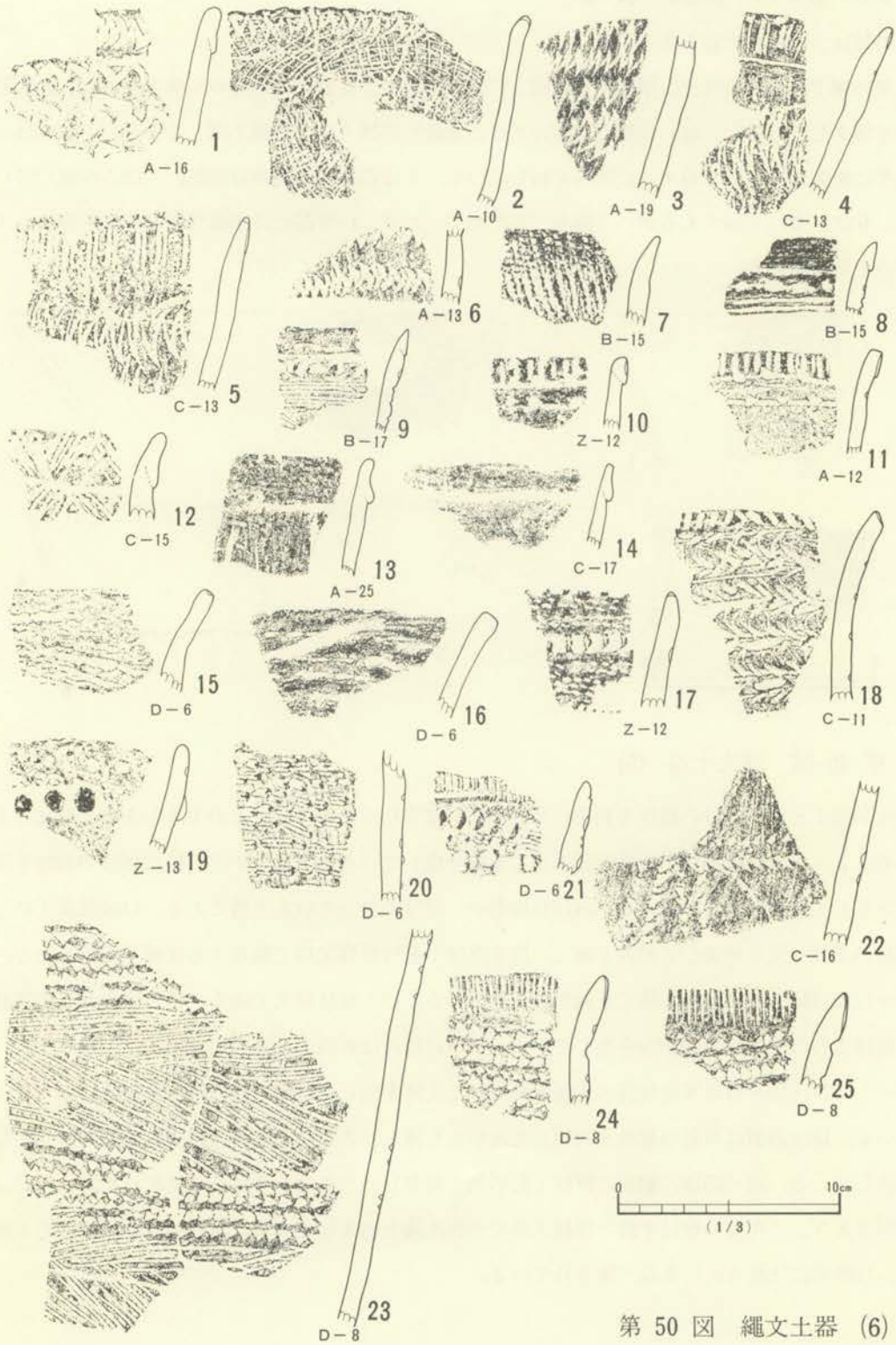
本類は、浮島式土器を主とする。

第49図１～３は口縁部が平縁で外に向って大きく開く。器面には貝殻の腹縁を利用しての波形文を施文している。２は、波形文の上にさらに半截竹管様工具で条線を施している。４・５は口縁部に指先を押圧してわずかに凹みを施している。５は器面の内側の口縁部にも凹みが施している。６は無文の土器であるが、口縁を一部凹めていたり、口唇部には半截竹管様工具を押圧して刻みを施している。




第 49 図　縄文土器 (5)

第50図１～６は貝殻の腹縁を利用して波形文を施文している。２はその上から条線文を施している。３・４は口縁部に半截竹管様工具で条線を施している。７はアナダラ属の貝殻の腹縁を連続押圧して文様としている。８～14は口縁部が一段厚くなっている土器である。口縁部真下には棒様の工具の先を刺突して凹みを施し、篦または半截竹管様工具で横走する沈線を施している。９～12は口縁部には篦様工具で条線が施されている。13・14は無文である。15・16の土器の器面に篦様工具の先で小さな凹みを施している。また口唇には棒様の工具の先を刺突して凹みを施している。17・19～21は半截竹管の先端を刺突して文様を施している。19は粘土を瘤状に貼り付けている。18は器面に貝殻の腹縁を利用して波形文を施し、さらに上から篦様工具で刺突して文様を施している。22～25は，器面に篦様工具の先を刺突し、三角文を連続して施文している。23は胴部であり、三角文の他に半截竹管様工具で平行沈線を施文している。24・25は、口縁部の土器で、口縁部には縦方向に条線が施されている。


A－16 1
A－10 2
A－19 3
C－13 4
C－13 5
A－13 6
B－15 7
B－15 8
B－17 9
Z－12 10
A－12 11
C－15 12
A－25 13
C－17 14
D－6 15
D－6 16
Z－12 17
C－11 18
Z－13 19
D－6 20
D－6 21
C－16 22
D－8 23
D－8 24
D－8 25
0 10cm
(1/3)

第 50 図　縄文土器 (6)

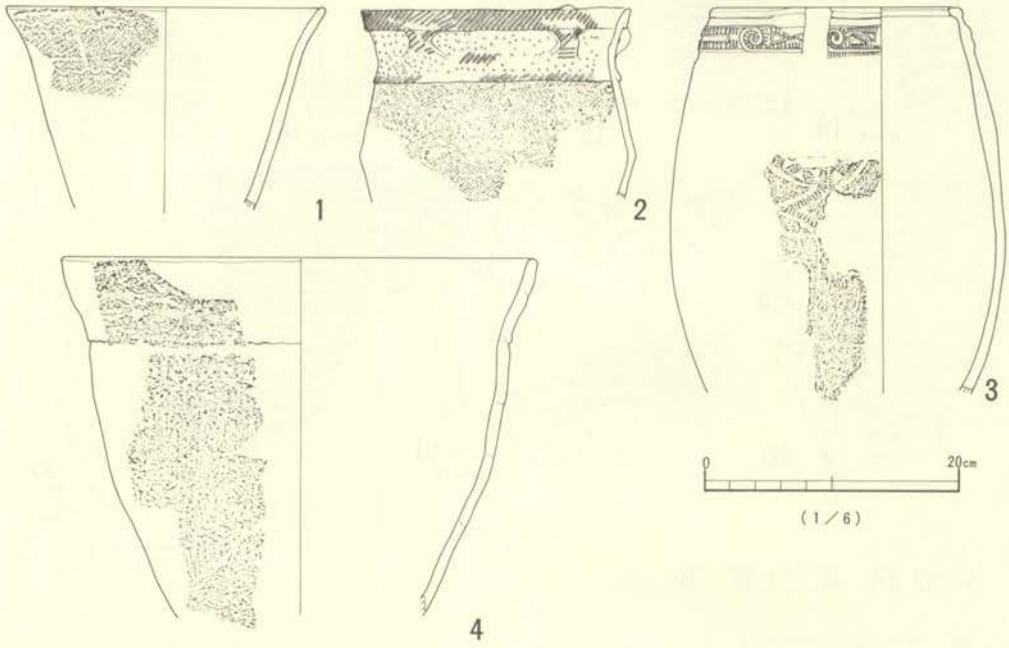
**第３群土器**

本群は、縄文時代中期前半に位置する。文様等によりａ類・ｂ類の２つに区分される。

ａ類（第51・52、図版42・45）

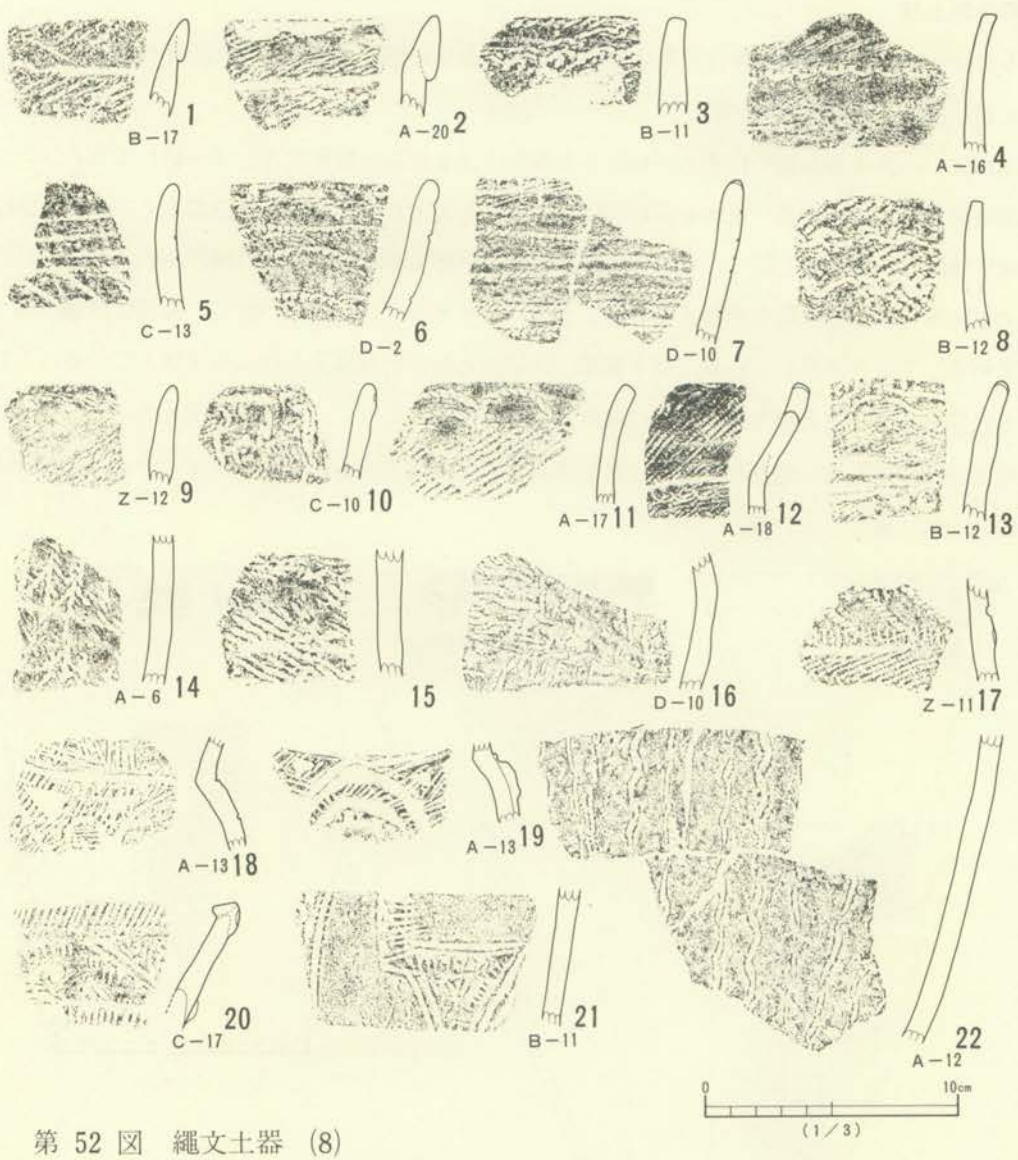
本類は、いわゆる五領ヶ台式といわれる土器群に含まれる土器を主として一括してある。

第51図１は、結節を持つ原体を回転押圧して文様を施文している。２は頸部でく字形にくびれ、口縁は外に向って大きく開く。口縁部は細かい縄文が施文されている。口縁部から頸部にかけて粘土を貼り付け、橋状把手を加えており、土器には６ヵ所付けたと思われる。頸部には細い棒の先を刺突して凹みを施している。以下胴部には結節文が、斜行縄文と伴に施文されている。３は粘土の帯を貼り付け文様を描き、上には篦先で刻みを施したり、三叉文を施文している。胴部には結束縄文が縦方向に施されている。器形は胴がやや張っている深鉢形を呈する。４は結節文を土器面全体に施文している。




第 51 図　縄文土器 (7)

第52図１～17は器面全体を縄文のみによって文様を施している土器である。１・２は粘土を折り返し、口縁を厚くしている。いずれも斜行縄文のみを施文している。４は、附加条縄文の結束と結節による縄文を施文している。５～６は単節の縄文を押圧している。13は口唇部に縄文原体を押圧して凹みを施している。18～21は、沈線もしくは粘土帯によって文様を描き、さらに篦様工具で刻みを施したり、刺突して三叉文様に文様を描いている。22は胴部の破片で結節文を縦方向に施文している。

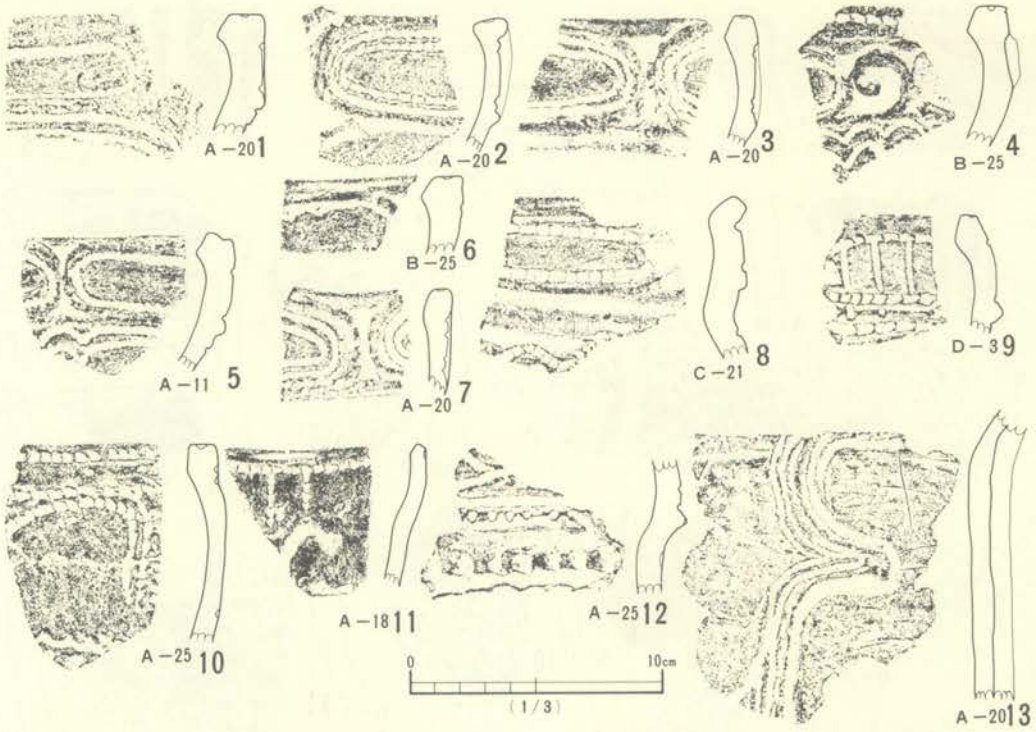



第 52 図　縄文土器 (8)

b 類（第53図、図版42）

本類は阿玉台式土器を主としている。

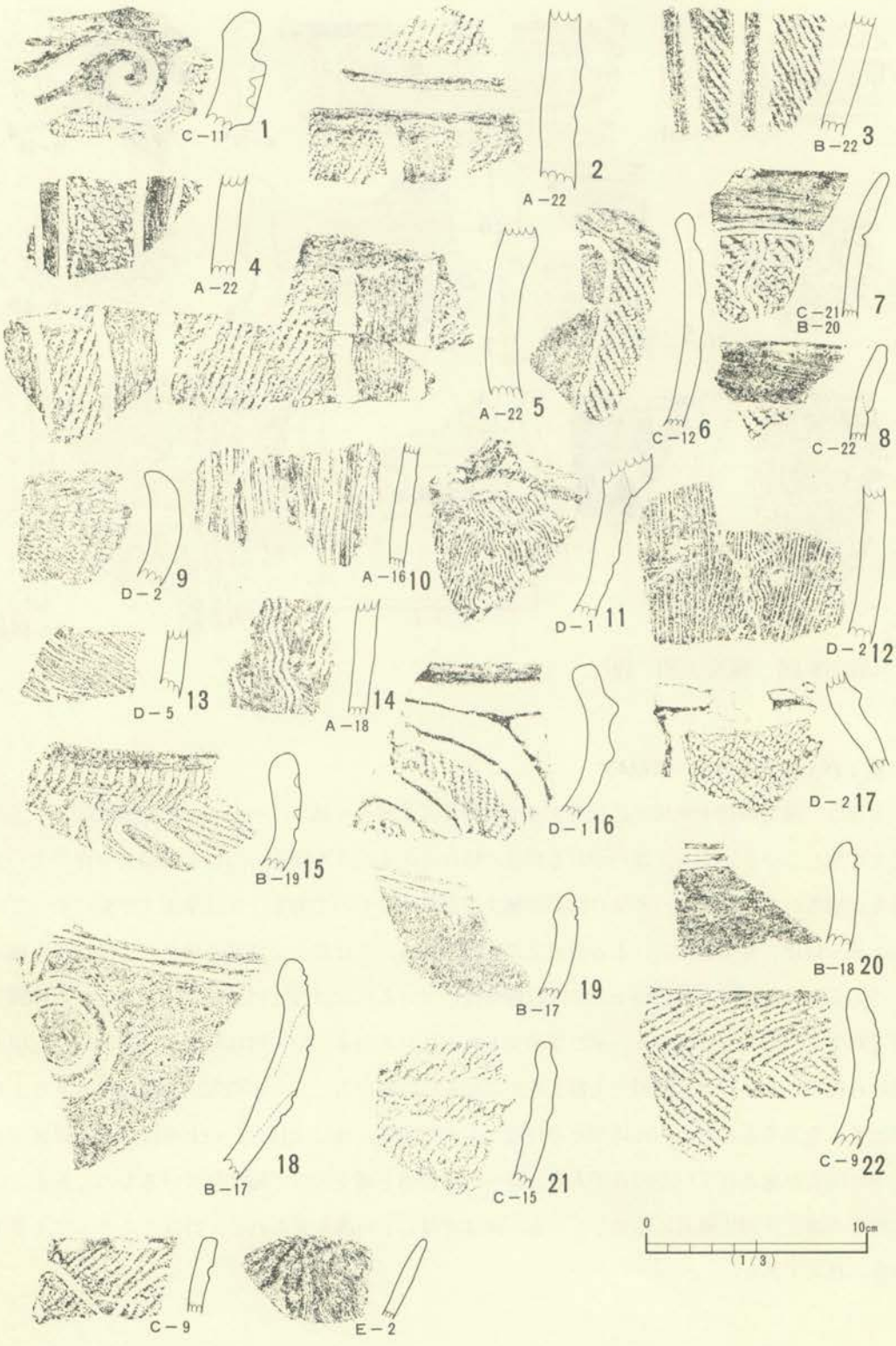
第53図１－９はいづれも口縁部である。口縁部はいづれも内湾している。口縁部は分厚く作られている。口縁部は隆起線文によって区画され、X字状の隆起線の突起が付けられている。また４のように区画の接点に隆起線による渦巻文も見られる。区画内は、棒様工具で角押文が施されており、区画の直下にも同じ文様が施されている。10・11は隆起線文による区画は無く、棒様工具による角押文によって文様が施されている。12は隆起線文によって文様が区画されており、角押文も見られる。隆起線には棒の面を押圧して凹みを作っている。13は胴部の破片である。粘土紐を貼り付け隆起線文を作っている。一方には棒様工具の先を押圧して角押文を施している。




第 53 図　縄文土器 (9)

**第 4 群土器（第54図・図版43）**

本群は、縄文時代中期後半に位置する加曽利E式土器を一括している。1は隆起線によって渦巻文を施している。2～5はいづれも胴部の破片である。3を除きいづれも摩消文を作り太い懸垂文が施されている。6～8は口縁部に無文帯を有するものである。6は摩消文が縦に走っている。9～14は、櫛歯様工具による条痕文の土器である。9は地文に縄文を施し、上に条線を施文している。11は口縁部付近の土器で隆起線が付いている。12は地文に縄文を施し、上から棒様工具で刺突文が施文されている。また摩消文も施文されている。13・14は断面が三角形の隆起線が付けられている。15～17は同一土器と考えられる。口縁に沿って2本の太い沈線が横走する。口縁は波状を呈すると考えられ15がその付近のものである。他は文様らしいものは無く、器面にわずかに縄文が施されているのみである。18～20は器面を縄文のみで施文しているものである。19は無節の縄文を羽状縄文に施文している。20は沈線らしい溝が見られる。21はミニチュア土器である。無文である。


C－11 1
A－22 2
B－22 3
A－22 4
A－22 5
C－12 6
C－21
B－20 7
C－22 8
D－2 9
A－16 10
D－1 11
D－2 12
D－5 13
A－18 14
D－1 16
D－2 17
B－19 15
B－18 20
B－17 19
B－17 18
C－15 21
C－9 22
0 10cm
(1/3)
C－9
E－2

第 54 図　縄文土器 (10)

今回の調査で出土した土器は、すべて土器破片のみで、完形または半分以上を復元することが可能な土器は発見されなかった。また文様を中心に型式分類をしたが大別して6類に分類できた。これらの型式分類した土器は、ある程度のまとまりはあるものの、広い地域にわたって分布している。中心を占める土器は2群土器と3群土器（五領ヶ台式土器）である。他は少ない。2群の土器でのa類とb類は、ほぼ同時期に地域を異にして存在する土器で、遺構を伴なわないが、同一遺跡から出土してきており、その比は近いものである。また五領ヶ台式土器も北西関東地方に分布の中心を持つものであり、北総の利根川流域にその分布の中心を持つほぼ同一時期の下小野式土器が少ないのは何故であろうか。

これらの出土した土器の地域的な広がりは、型式でやや異なる傾向も見られたが、明確に分けることはできなかった。また出土層位による差異も明確に把握できなかった。

（高橋　博文）

## 第Ⅲ節まとめ

1．遺跡について

藤沢遺跡は、東方向に湧水点の弁天池があり、そこを中心とした周辺の畑地には、藤沢遺跡出土土器と同様の破片が採取できる。つまり藤沢遺跡も遺跡の端部ではなかったかと思われる。また遺跡の南側では、前期の遺物は出土せず中期の縄文土器片が主流であった。これらの事実は時代による遺跡の立地なのであろうか。

2．遺構について

方形状柱列

土壙……7カ所

焼土集中遺構……5カ所

以上各種の遺構が検出されたが、方形状柱列は住居跡とも考えられるが、他の施設・床面等は検出できなかった。しかしこの方形状柱列の検出された周辺の遺物は、縄文前期前半～前期後半を主体とする遺物が多い。またこれらの時期の住居跡は明確な事列は少ない。積極的推考はできないが一応この時期の住居跡としたい。

土壙は、7カ所検出されたが、出土遺物もなく形体も画一性を欠いている。しかし007，008遺構は上部が広く下部にしたがって狭くなるもので、近年各所で検出される遺構と類似するもので、現在の所陥穴とされている。一応この藤沢遺跡の場合を同種のものと考えた。これらの遺構はある一定の方向をもって備えられるときくが、この遺跡では2カ所しか検出されなかったが、調査範囲外でどのような広がりをするものか興味深いものである。

焼土集中遺構は、5カ所検出されたが多くはテフラ層上面と下面であった。明確に炉跡であろうと考えられるのは、013遺構のみであった。ほかの集中遺構は、上部のみ集中しているものや、中部まで集中しているものなどまちまちであり、壁面も2次的焼成のあとは確認できなかった。

3．遺物について

先土器時代

石鏃

縄文土器

先土器時代の遺物は、2群にわたって検出された。1群は13個体、2群は93個体であった。

石鏃は、表面採集で得られたものを含めて23点であった。石質は黒曜石が中心で、ほかにチャートのものもあった。これらは二等辺三角形を基本としている。これらの石鏃のうち，11－A・Z，12－A・Zの4グリッドから10点出土した。またこれらのグリッドからは、土器片はもちろんのこと、黒曜石やチャートの破片が約250点出土し、13－A・Zまで含めると約360点にものぼる。これらの石片の出土するレベルと同一レベル上では、縄文中期前半の土器片が出土する。

このように狭い範囲で集中するのは、何らかの人為的要因によるものであろうと考えられる。調査区域外のため範囲を拡張できなかったため十分な資料が得られなかったが、石鏃等の工房跡・加工跡と考えてよいものであろうか。

縄文土器は、縄文前期前半から中期後半までの時期差をもって出土した。しかしこの遺跡では、時期によって若干の出土状況が違うように思われた。まず前期の土器は1～10グリッド付近まで集中し、中期前半の土器は11～20グリッド付近、中期後半の土器は20～25グリッド付近に集中するのがみられた。つまり前期のものは、北方向の大きな谷の付近に、中期前半は台地の中央部付近に、中期後半は台地の奥の付近に集中する。これらの出土様相は何を示すか狭い調査区域で明確ではないが、時代差の違いがあるのではなかろうか。

（瀬戸　久夫）

# 第五章　中芝遺跡第１次調査

## 第1節　地形と土層（第58・59図・図版47）

本跡は、東方向に都川の源である支谷をかかえ、調査対象地との比高は13mを測る。遺跡は南方向へのびる台地の先端部に位置する。西方向の第2地点とは低地をはさんで地続きである。この遺跡は標高55mを測る。

土層は、第1層耕作土・第Ⅱ層暗褐色土層・第Ⅲ層ソフトローム・第Ⅳ層ハードロームとなっている。地1地点は、第Ⅰ層・第Ⅱ層を削平した部分もあり場所によっては、第Ⅲ層から形成されている所も見られる。第1地点では、4列から2列にかけて第Ⅰ層が徐々に厚く推積している。また第2地点では、7・6列の中央低地にむかって厚く推積している。

南北方向では地形からゆくと、徐々に北方向に傾斜する。2列ではほぼ水平を呈している。Fはブルによって削平されていた。4列はE～Iまでブルによって削平されていた。A～Dまでは約1mの差があり北方向に傾斜している。6列では54.5mで、D付近が低地になっており南側に若干傾斜している。8列では南北ともほぼ平坦であり標高約55.8mを測る。

遺構の分布状況は第1地点に集中している。住居跡・土壙とも谷に傾斜する付近に集中していることが観取される。（瀬戸　久夫）

## 第2節　遺構と遺物

### 1項　先土器時代の遺構（第65図）

本跡では、F2・3，G2・3，H2・3グリッドでチャートの小剝片が確認されたので精査した結果、各グリッドで剝片が出土した。またこれらのグリッドで炭化物の細片が出土した。一応その範囲を図にとどめた。土層は黒色帯と思われる層位中で検出した。

出土遺物は、小片のチップで実測は不可能に近かかったので図示しなかった。

ローム中から出土した炭化物を集収して$C^{14}$の測定をおこなった所、次のようなデータが得られた。

$C^{14}$測定は、社団法人、日本アイソトープ協会に依頼した。

**測定結果報告書**

C－14試料2個の測定結果がでましたのでご報告します。

| N－29当方のコード | 依頼者のコード | C－14年代 |
|---|---|---|
| N－2953 | 027　木灰 | 7900±180Y.B.P.(7670±175Y.B.P.) |
| N－2954 | 027　〃　ローム | 化学処理をしたがC含有量少なく測定出来ず。 |

2項　方形土壙

（1）　001（第60図・図版48）

G－5グリッドで確認され、長方形と方形の2つの土壙が重復している。長方形の土壙は、方形土壙の上に構築されている。長軸2.25m・短軸1.35mを測る。主軸の方向は、N－35°－Eでのピットと、15cmの斜向するピットを有する。ほぼ垂直に立ち上がる壁をもち、深さは長方形床面から30cmを測る。床面は平坦でよくしまっている。遺物の出土はなかった。

（2）　002（第60図・図版50・51）

A－4グリッドで黒褐色の落込みで確認され、長方形のプランを呈し、主軸方向は、N－28.5°－Eであり、長軸は、2.43m・短軸12.5mを測り、壁はゆるい角度をもち立ち上がる。床面はほぼ平坦で、よくふみかためられている。落込みの埋土は、Ⅰ層暗褐色・Ⅱ層焼土粒混黒褐色・Ⅲ層焼土炭混土層であり、自然堆積の層位と思われる。

（3）　003（第60図・図版52）

D－3グリッドで黒褐色の落込みで確認された方形のプランを呈し、主軸方向は、E－10°－Sであり、長軸は、1.45m・短軸1.35mを測り、中央部に30cm×36cmのほぼ円形の浅いピットを有する。壁面はかなりの傾斜をもって立ち上がる。床面はほぼ平坦でふみかためられている。落込みの埋土は、Ⅰ層褐色土・Ⅱ層褐色土混ローム粒混土・Ⅲ層木炭混褐色土・Ⅳ層焼土粒混褐色土・Ⅴ層木炭混褐色土であり、中央部のピットは使用されていたような状況を呈していた。出土遺物なし。

3項　不整形土壙

調査区域内で、5か所の不整形の土壙（？）が確認されたが、全て調査した結果3か所について図示する。

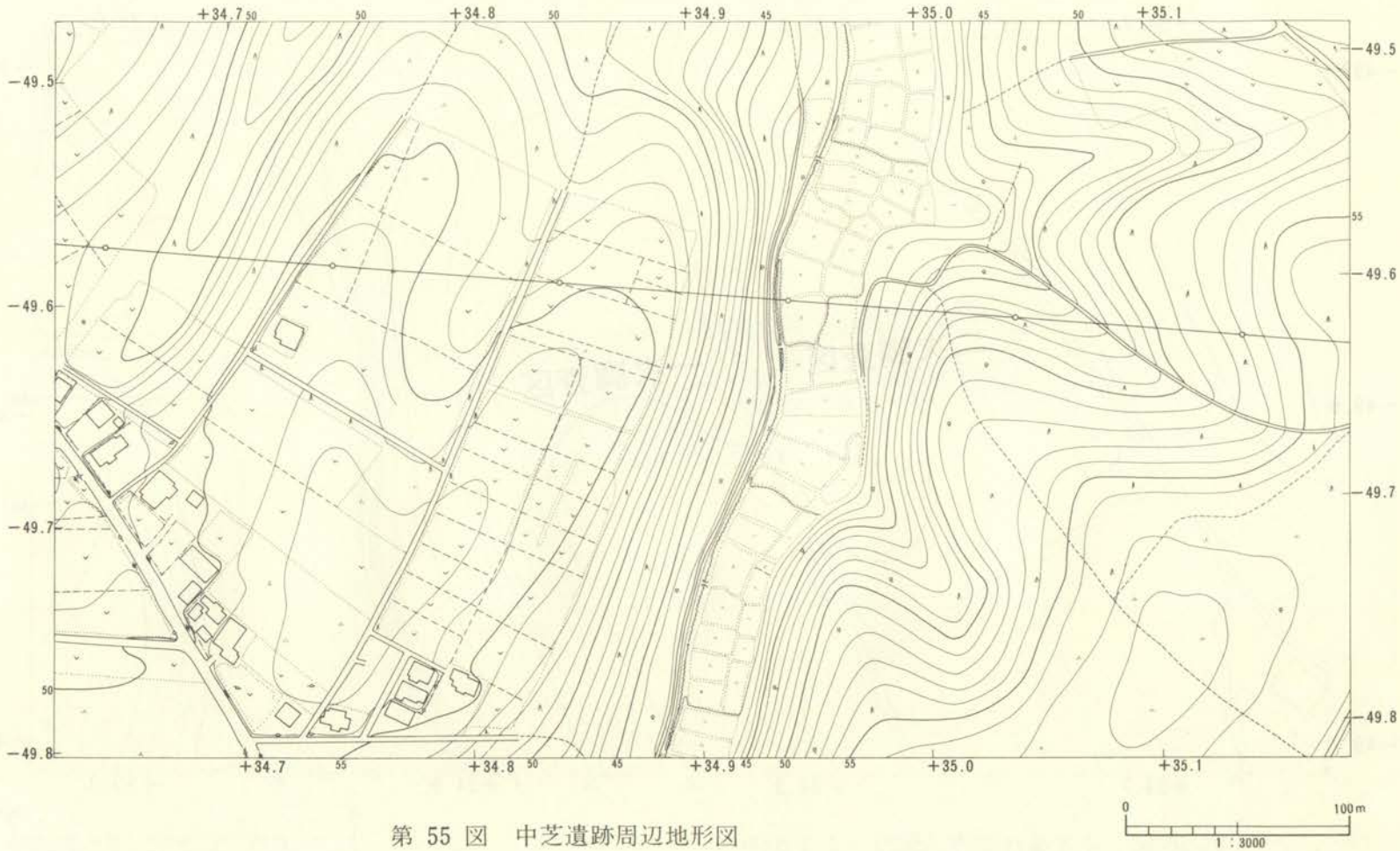
この5か所の土壙については、表土から確認した状況を図示し、調査後プランを図示したた。

（1）　004号（第61図・図版53）

F－5と、G－5グリッドの両方にまたがって第Ⅱ層面で確認された。確認面ではソフトロームを中心に、ローム塊混土ソフトロームなどで構成されており、長径2.5m・短径1.9m、形状は不整形を呈する。断面の土層は複雑に入り、底部にしたがってハードローム塊を多く含む土層である。出土遺物は皆無であった。底部と思われる所もかなり軟弱で浮いた状態にある。

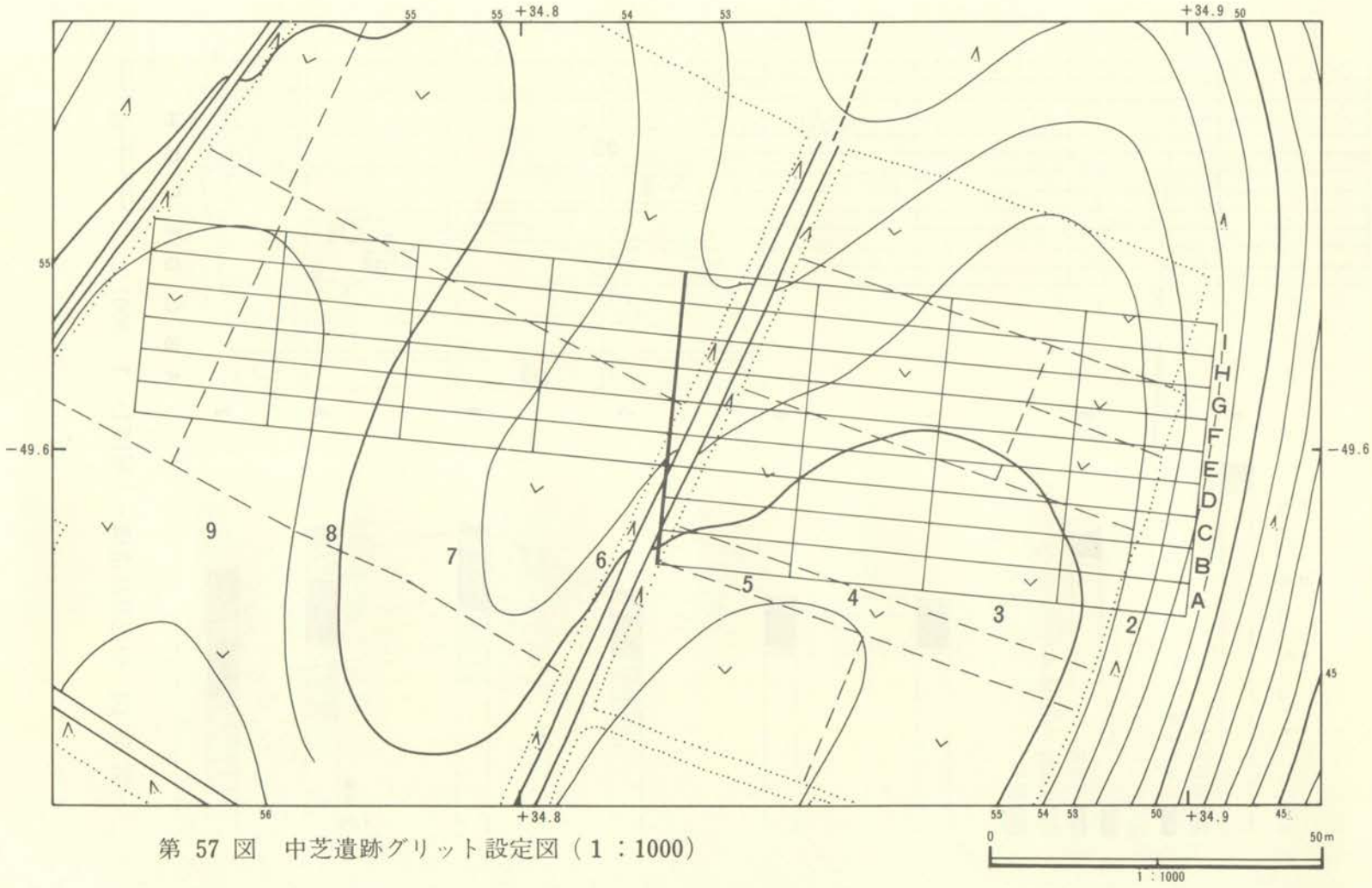
（2）　005（第61図）

D－3グリッドで確認され、確認面では黒色土・ソフトローム・ハードローム塊混土　などが不規則に入り込んでいた。長径2.3m・短径2.3mの不整円形状を呈する。断面の層位は、土壙の内壁面には、耕作土、黒褐色土層が流れ込んでいる。中央部にソフトローム・ハードロームが位置している状態であった。

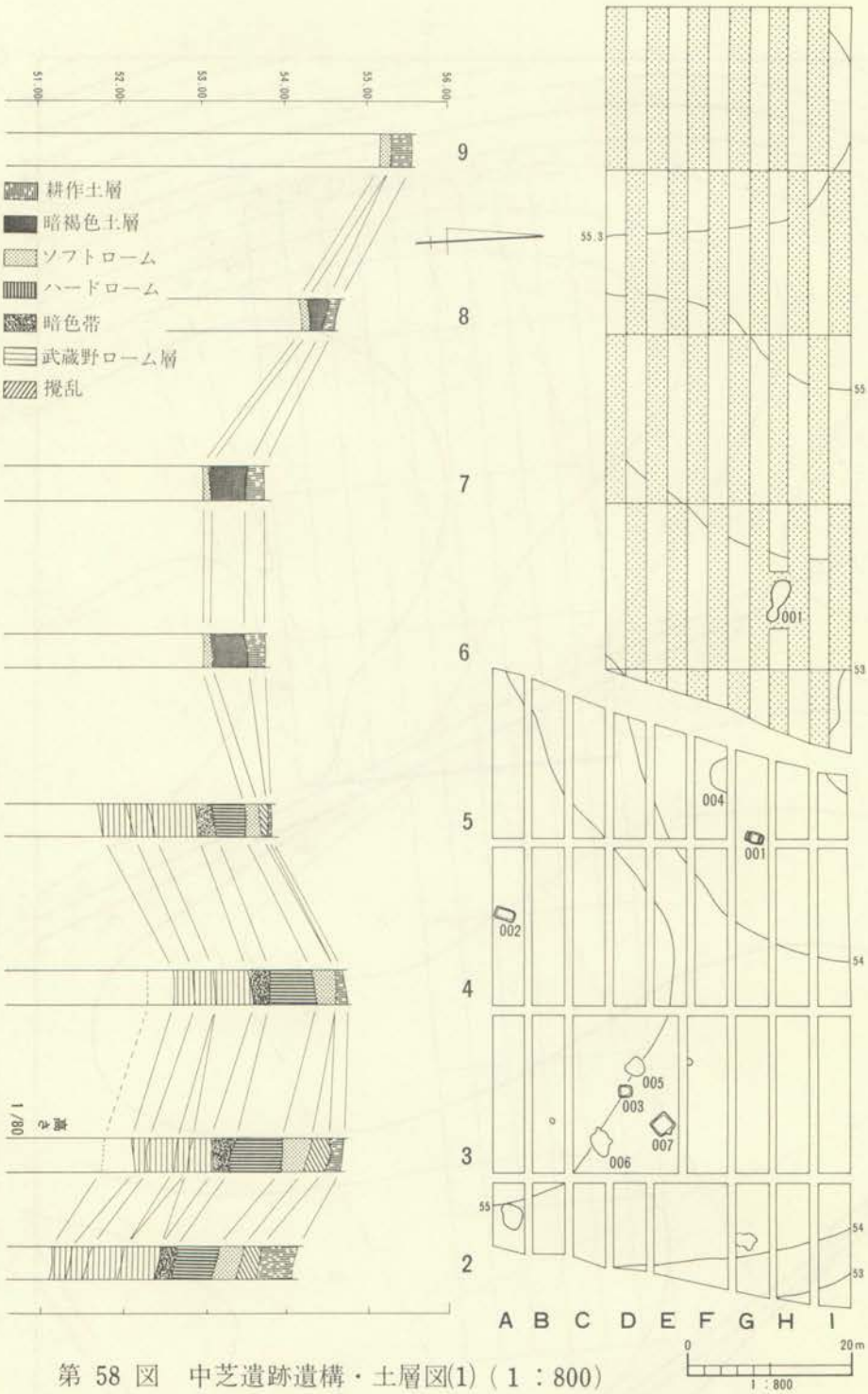



第 55 図　中芝遺跡周辺地形図

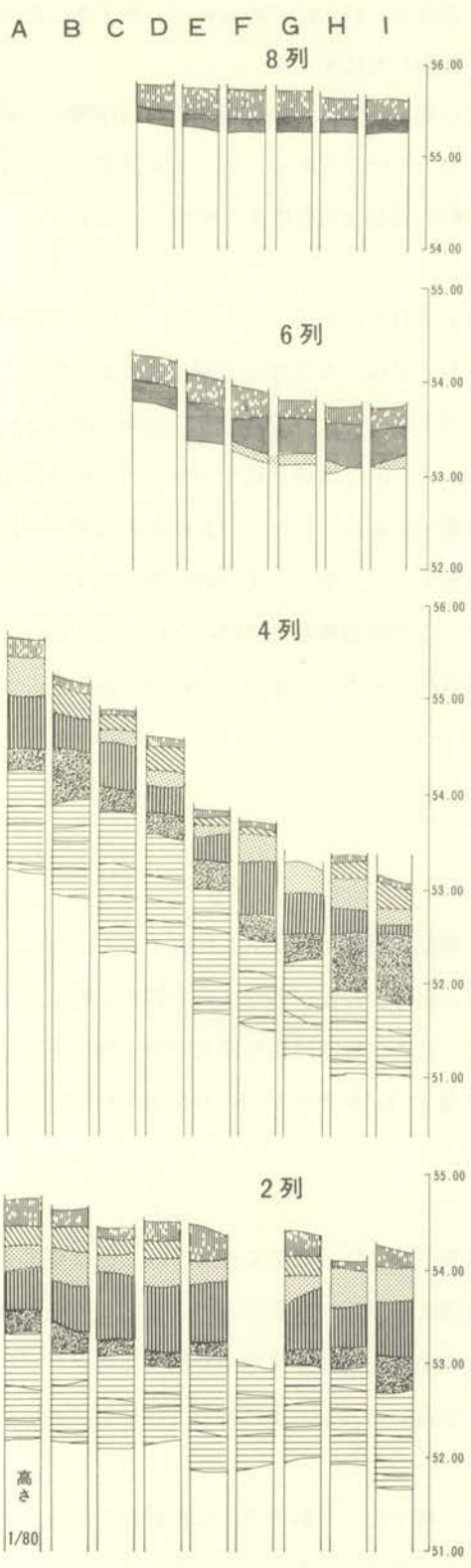
第 56 図　中芝遺跡調査区域図（1 ：2000）




第 57 図　中芝遺跡グリット設定図（1 ：1000）




第 58 図　中芝遺跡遺構・土層図(1)（1：800）




第 59 図　中芝遺跡土層図(2)

壙形は擂鉢状を呈する、底部は001で記したように軟弱であり浮いた状態である。遺物は皆無であった。

（3）００６号（第62図）

Ｃ－３グリッドで確認され、確認面では、黒褐色土・褐色土・ソフトローム・ハードローム塊混土、などが不規則に入り込んでおり、長径3.7 m・短径2.5 mの不整楕円形を呈する。断面は浅い擂鉢状を呈し、土層は黒褐色土を中心とし、ハードローム・ソフトロームの混入がみられ、壁面は褐色土が流れこんでいる。底部は001・002と同様に軟弱で浮いた状態であった。遺物は皆無であった。

（瀬戸　久夫）

4項　住居跡

（1）　００７（第63・64図・図版54）

東西辺の方位が25°西に偏する方形の竪穴住居跡である。便宜的に四方位の呼称にて説明を加えると、カマドは東辺の中央部に構築されている。規模は、カマドのある東辺が短かく約2.1 m、対する西辺が長く約2.5 m、北辺・南辺とも約2.2 mを測り厳密には梯形を呈する。平均して約0.4 mの深さに掘り込まれた後、壁沿いに幅15cm前後の極めて浅い溝をめぐらしている。この溝は北辺の中央部で約30cm、南辺の東寄り、すなわちカマドの右側で約50cmの長さだけ、認められなかった。将来、

出入口の位置を考察するうえでの傍証となる可能性もあろう。柱穴は認められず、わずかに西壁沿いの中央部に径20cm・深さ3cmの極めて浅い凹みを検出したにすぎない。

カマドは、煙道のみが壁外に出るように構築されている。煙道は、傾斜角30°、外口径20cmを測る。右袖は長さ30cm・左袖は長さ35cmを測る比較的小形のカマドである。灰・木炭は認められなかったが、カマドの前面に焼土粒が散在していた。比較的良好な遺存度を示す例と言える。

遺物は覆土中からも、一切検出されなかった。

この住居跡は、床面から木炭および多量の焼土も検出されず、前述したように、カマドも清掃された状態のままで、また、遺物も認められないことなどから、火災等の不測事態により廃棄されたものでなく、転居等により意識的に廃棄されたものと考えてよいであろう。遺物が検出されなかったため、その所属時期は明らかでないが、覆土が人為的な堆積状態を示さず、自然埋没的堆積を示していることから、近時の遺構でないことは確かである。また、いわゆる国分期の土師器を有する住居跡の多くが、一辺3m内外の小規模形態を示し、かつ、1つの台地上に1軒単独で存在する例も比較的多く見られることを考慮すると、この住居跡もその例に含めてもよいのではないかとする考えも成り立つ。そうであれば、古代後期から中世にかけての時期に属することになる。

（杉山　晋作）

### 5項　包含層出土遺物

#### 第Ⅰ群　土器（第66図・図版55）

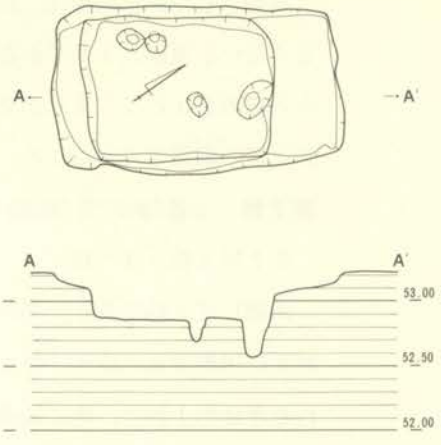
第1類土器（1～4）

井草Ⅱ式を本類とした。井草Ⅰ式土器が、口縁部、頸部、胴部の三文帯を構成するのに対し、本類土器は頸部文様帯が無文帯となる。また、口縁部の肥厚、外反が井草Ⅰ式土器と比較して著るしくないのを特長とする。これらの口縁部（1～4）は、口唇部に単節縄文が短く施文され、胴部以下にも同様の縄文であるが、(4)の胴部は無節の縄文（R）か撚糸文（R）か施文されているが、器面が摩滅しているので明瞭でない。

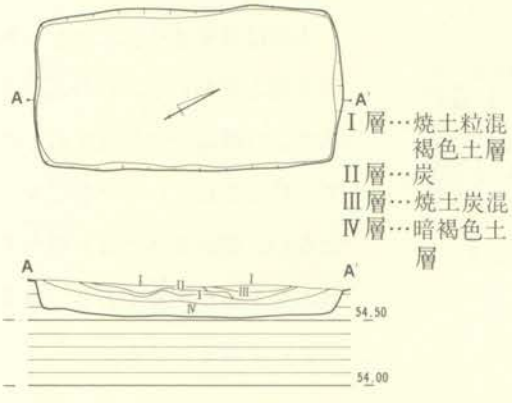
第2類土器（5～15）

撚糸文系土器の胴部破片を便宜的に本類とした。本類の中には、撚糸文のもの(5)、他は縄文がが施文されている。撚糸文の原体は（L）で、縄文の原体は→単節のRLのもの（6・8・9～14）、LR（7・15）で圧倒的に単節RLが多い。なお(15)は撚糸系土器の底部でやや尖った砲弾型のものである。また下総台地では一般的には縄文が多く、武蔵野台地から多摩丘陵では撚糸文の原体が多い。

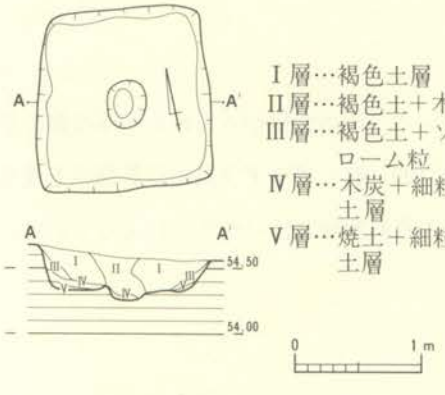
これらの土器の色調は、赤褐色・茶褐色・淡褐色と一様でなく、胎土中には細砂粒の混入が著しい。器壁は薄く、器面も二次的火熱を受けて、焼成も不良に近いものになっている。




001 遺構実測図（1/60）

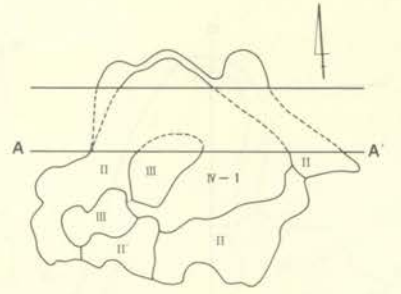


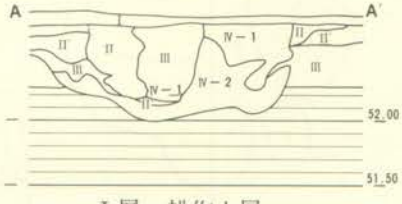

002 遺構実測図（1/60）



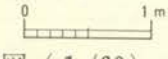

003 遺構実測図（1/60）

第 60 図　第1次001・002・003 遺構実測図

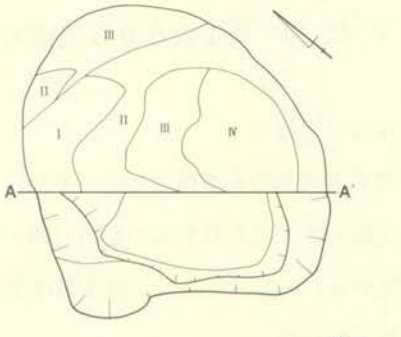


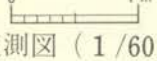

I層…耕作土層
II層…黒褐色土層
II層…黒褐色土＋ソフトローム
III層…ソフトローム
IV層…ハードローム｛1…小塊集中 2…塊 集 中




004 遺構実測図（1/60）

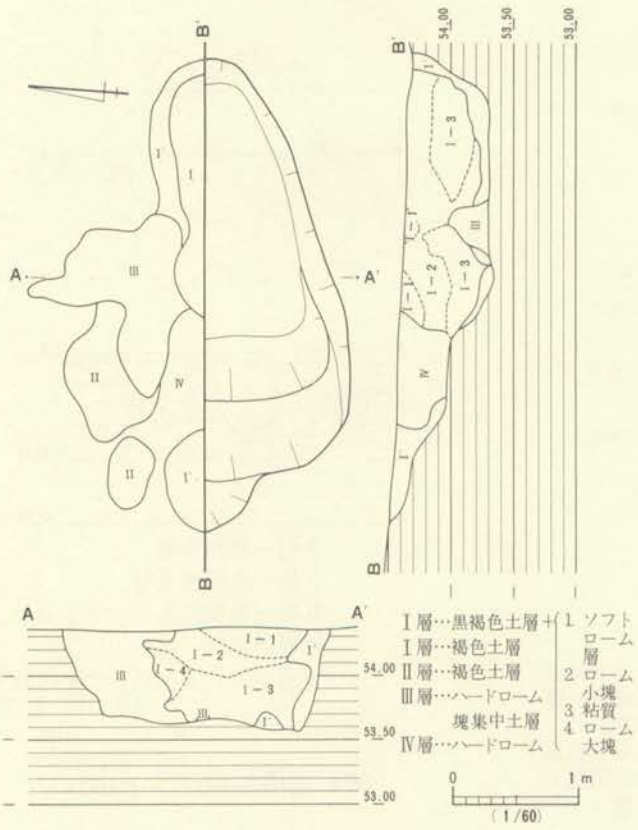


I層…黒色土層
II層…暗褐色土層
III層…ソフトローム層
IV層…ハードローム塊




005 遺構実測図（1/60）

第 61 図　第1次004・005 遺構実測図




第 62 図　第１次００６遺構実測図

本類とした胴部破片は、井草Ⅱ式ないし夏島式土器であるが、(5)の撚糸文土器は大丸式か夏島式土器の胴部と考えられる。

**第２群　土器（第67図・図版57）**

第１類土器（16～18）

諸磯Ｃ式土器である。集合条線文に円形浮文の貼付けのみられる深鉢形土器で、他に諸磯式土器の出土はなかった。

第２類土器（19～22）

本類は浮島式土器に伴なう無文土器と思われる。口唇部は丸味で、口縁はやや外反するもので、特にこれといった特長をもたない。器面全体には、横ナデ状の整形痕が明瞭であり、焼成のよい土器といえる。

第３類土器

浮島Ⅱ式土器を本類とした。本類には、器種、文様の異なる土器があり、平行沈線文のみのもの（23・25）。変形爪形文のもの（26・27）輪積み痕の明瞭な部分に棒状工具の押しつけたもの(28)等がみられる。しかし、出土量は少なかった。

第４類土器

本類は浮島Ⅲ式である。本類土器も第３類土器同様、いくつかの文様がみられるが本遺跡で出土したものは、変形爪形文に平行沈線文を組合せたもの（29～31）、アナダラ属の貝殻腹縁を連続に何段も施文したもの（32～36）があり、中でも（36）の貝殻腹縁文はハマグリによるものか、所謂三角文を貝殻の交互押圧により作り出している。

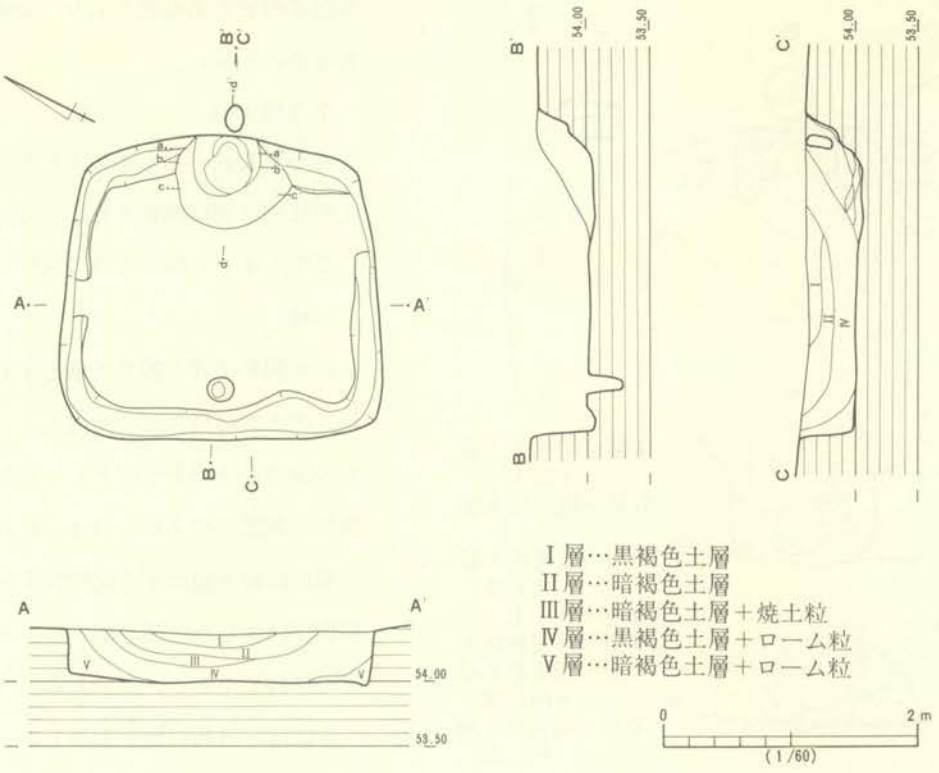
**第３群土器（第68図・図版56）**

第１類土器

阿玉台式土器を本類とした。文様を異にするところからａ種からｃ種に分けて説明したい。

ａ種（37～39）

無文土器であるが、口唇部に刻目をもつもの(37)、口縁部付近に小突起をもつもの（38・39）が




第 63 図　第１次００７遺構実測図

ある。

b 種（40～44・46）

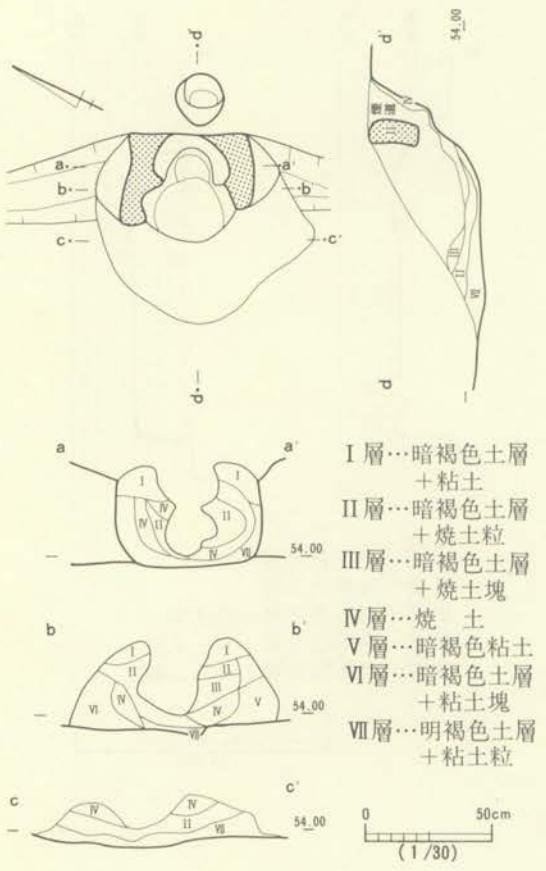
本種は、一列ないし二列の角押文（連続結節沈線文）を主文様とする。これらの器形は、口縁の直立するか外反する深鉢形土器であり、文様も口縁部付近に集約されている。

c 種（47・48）

口縁部付近に楕円形の隆帯による枠をもち、その枠内には、沈線による文様がみられる。縄文の施文されていることや口縁部の屈曲することから、浅鉢土器であろう。

第２類土器

勝坂式土器である。本類土器の出土量は僅かである。器形については、深鉢形土器のもの（45・49・50）、浅鉢のもの（51）がある。文様は、口縁部に沿って１列の爪形文のみられるもの(49)口縁部の下を横に半截竹管工具により沈線をつくり、更にその中側を交互刺突した文様のもの、(50・51)がある。これらの土器は、第１類土器の比較的新しい時期に伴なうものと思われる。色




第 64 図　第1次００７遺構カマド実測図

調は赤褐色・茶褐色であり、焼成も良好なものが多い。

第3類土器

加曽利E式土器を本類とした。本類土器は型式別に細別されているので、ここでもａ～ｃ種に分けて説明したい。

ａ種

加曽利ＥＩ式土器を本種とする。これらの土器の特色は、所謂キャリパー型の深鉢形土器を主体とし、口縁部・頸部・胴部等の文様に分けられるが、一般的に粘土紐による貼付け文が多い。拓影図に示した（52～55）は、その一連の深鉢形土器の一部である。これらの中には、波状口縁をもつもの（52・53）平縁のもの(55)がある。なお(64)の口縁部も本種のものであろう。

ｂ種（56～63）

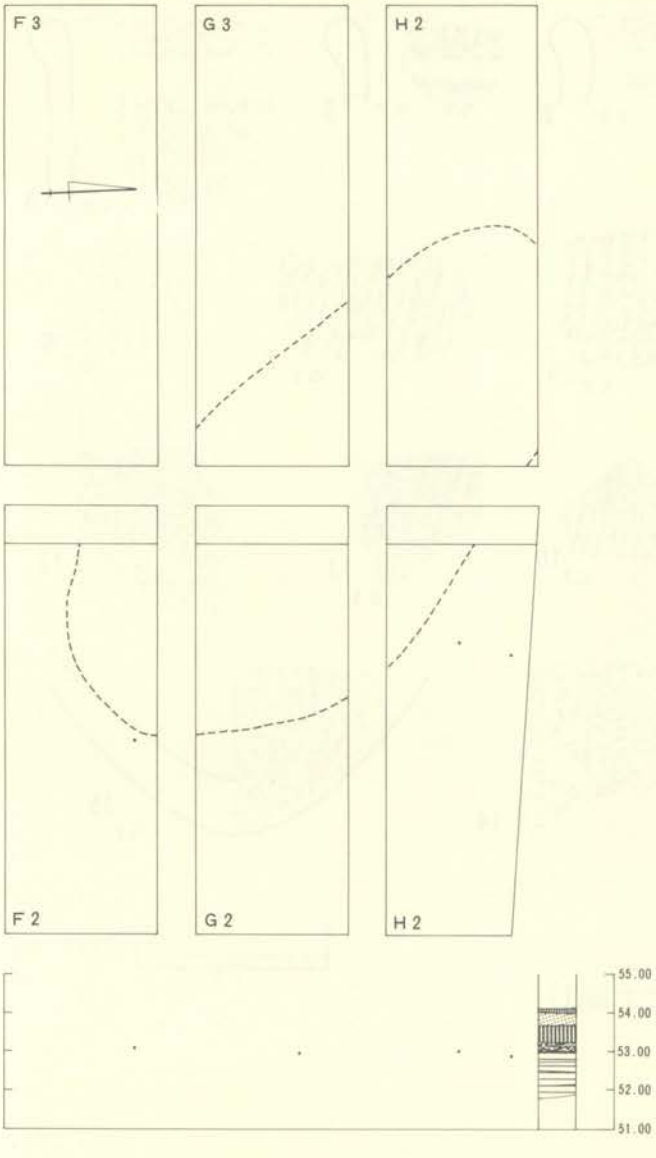
本種は加曽利EII式である。

粘土紐の貼付けによる隆帯の懸垂文(56)、沈線による渦巻き(57)、深鉢形土器の胴部で縦にジグザグ状の沈線を施文するなどの特徴をもっている。その他の破片は、縄文を密に施文しているのみで、これといった特徴は見出せない。

また、縄文を施文している以外に、櫛歯状工具による条線文で器面を飾るものもある。(66）は、口縁部に2条の太い沈線をもちそれ以下は、条線文が施文されている。所謂キャリパー状の深鉢土器ではなく、円筒状の深鉢土器と考えられ、(67～71）はその同一破片である。条線の単位は、不規則に施文されているので観察することができない。

ｃ種(65)

口縁部文様帯を持たず、若干の無文の口縁部から下を縄文のみで飾る土器がある。加曽利Ⅲ式土器として分類されているが、本遺跡での出土は僅かであった。




第 65 図　第１次先土器遺物出土状態図

### 第４群土器

（第68図・図版57）

第１類土器

堀之内Ⅰ式土器である。出土量は全体的に少ない。

これらの中には、口縁部に列点文をもち胴部を縄文で飾るもの(72)、無文地に沈線と刺突文を組み合せたもの(73・74)、櫛歯状工具でコンパス文を表わすもの(75)がある他、胴部破片で蛇行する沈線のみえるもの(76・77)もある。

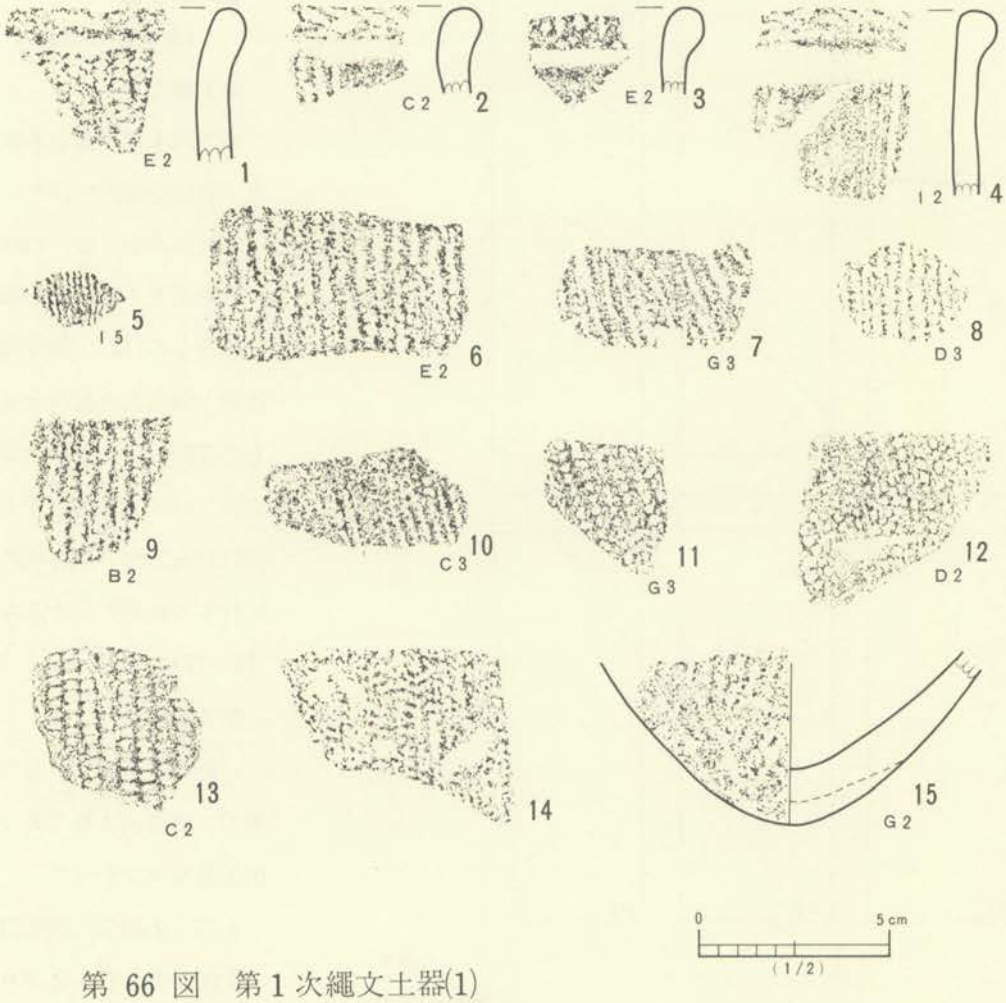
第２類土器

いわゆる帯縄文をもつ土器で、安行式土器であり、出土量も少なかった。

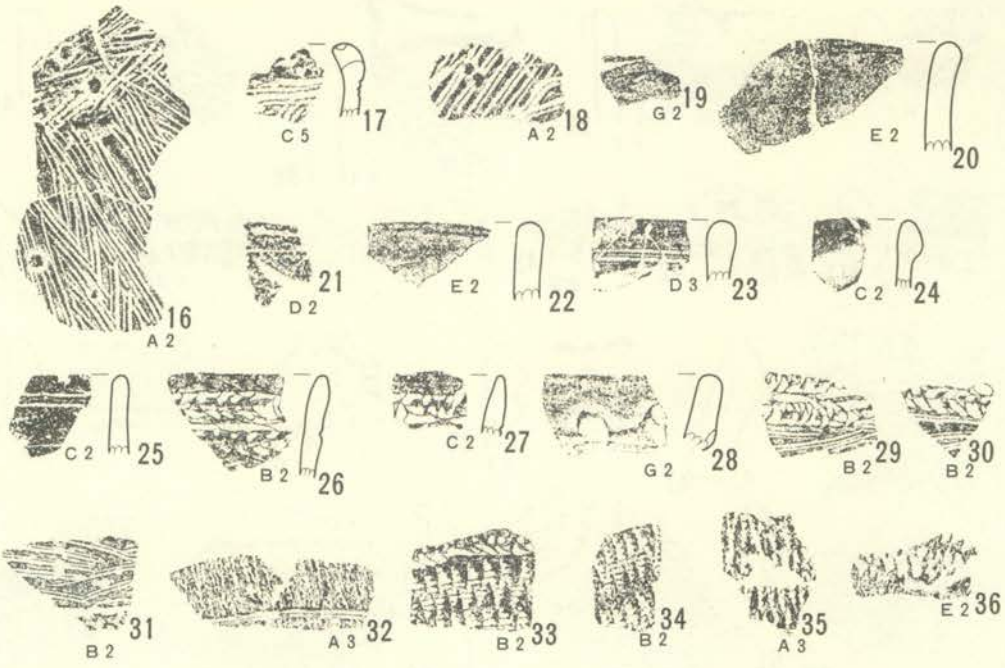
石器（第69図・図版57）

１は石斧でC－２グリッド第Ⅱ層で出土し、幅５cm・厚さ3.5cmを測る。石質は砂岩である、この破片は破損後熱をうけており、表裏とも熱変している。重量は124ｇを量る。

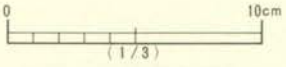
２は磨石でB－２グリッド第Ⅱ層で出土し、両面とも使用したものと思われ、摩耗している。石質は安山岩である。重量は309gを量る。

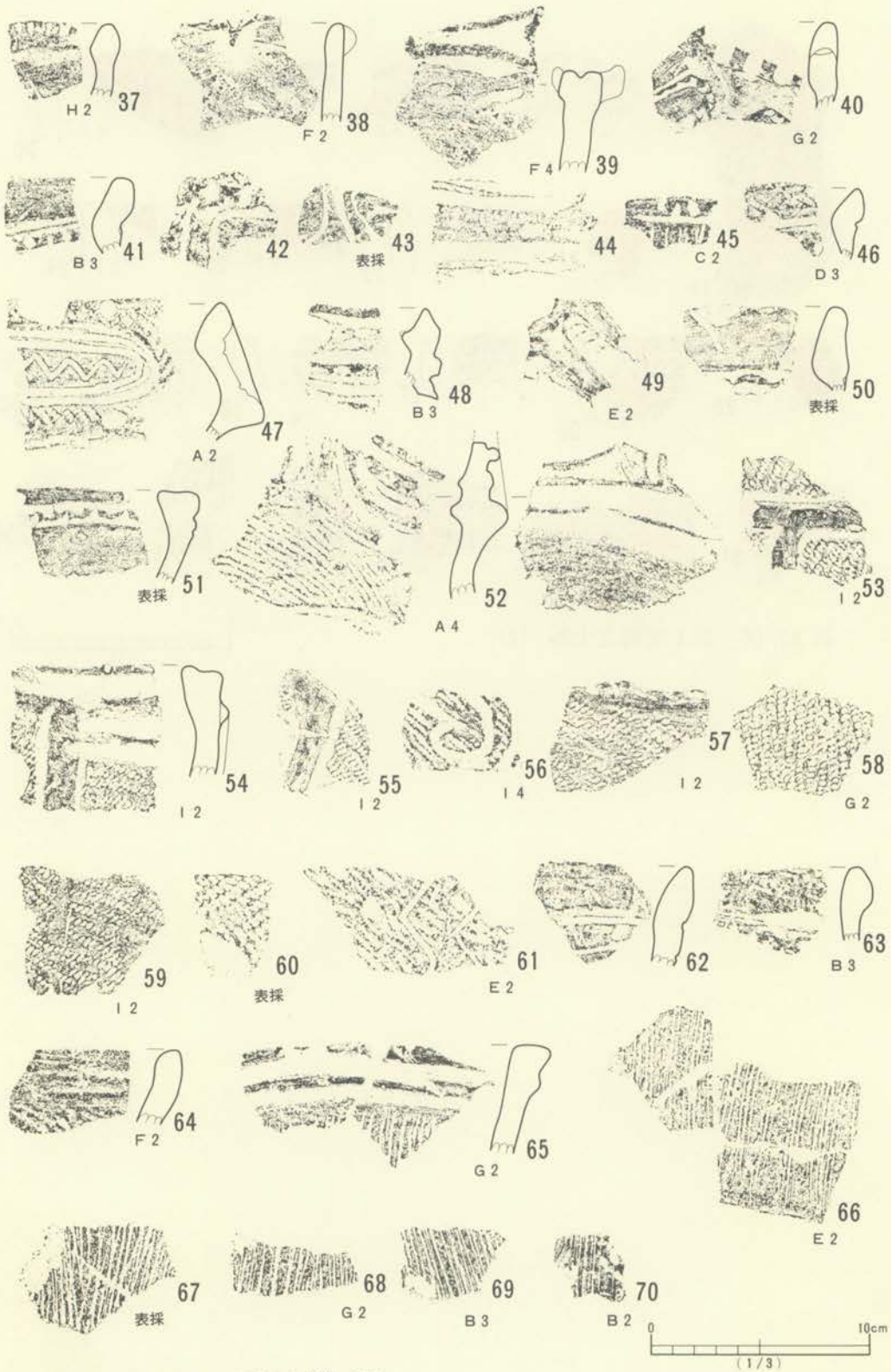



第 66 図　第 1 次縄文土器(1)

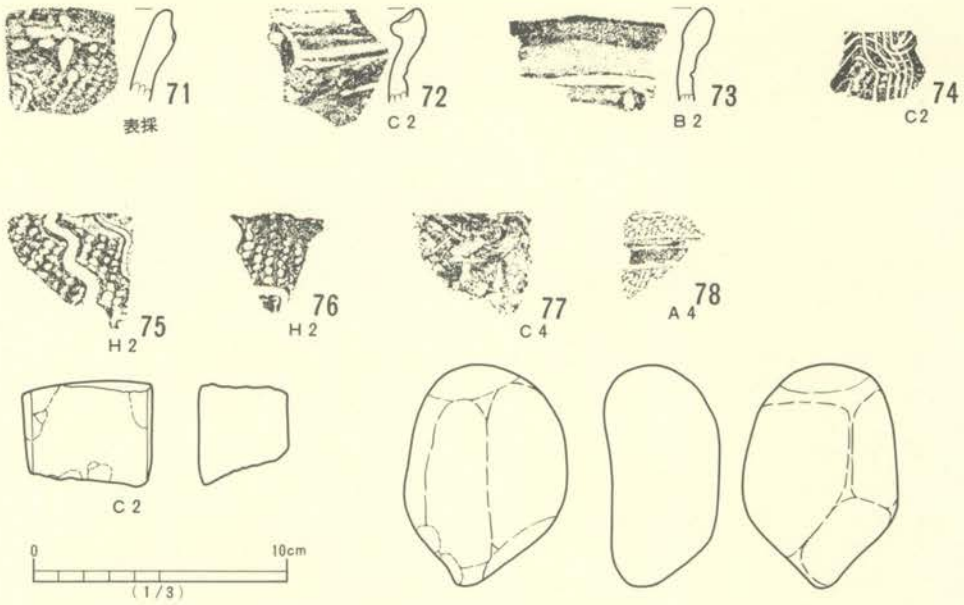



第 67 図　第 1 次縄文土器 (2)






第 68 図　第 1 次縄文土器 (3)




第 69 図　第 1 次土器・石器 (4)

# 第六章　中芝遺跡第2次調査

## 第Ⅰ節　遺構と遺物

### 1項　炭焼窯

H－6のグリッドで検出され、第Ⅱ層下部で確認された。確認当初、001号のみと考えていたが、調査が進行するにしたがって001号床面から方形の002号窯跡が検出された。

#### (1)　001号炭焼窯（第70・71図・図版59～62）

主軸方向は、N－55°－Wであり全長、11.4m、焼成部長7.5m、焼成部幅5.8mを測る。楕円形を呈し、焼成部は、中央部が若干くぼんでおり、壁面はわずかに内湾する。壁面は、幅10mを測り非常に良く焼けておりかなり使用された事をものがたっている。焚口幅40cm、焚出部長2m、幅1.9mを測り、焚出部には、長径1.5m、短径1.1m、深さ60cmの楕円形の掘込みを有する。

窯内の層位は、耕作土・荒砂・木炭層と大別でき、床面には、10cm～15cmにわたって木炭が堆積している。窯内には、天井部と思われるブロックは、多くなかった。焚出部に付随するピット中には、木炭天井部、もしくは、閉塞石と思われるブロックがかなり堆積していた。

#### (2)　002号窯跡（第72図・図版63）

主軸方向は、N－55°－Wであり、長軸1.6m・短軸1.3mの方形である。壁は、ほぼ垂直に落ちる。深さは001号床面より4.5cmを測る。層位・耕作土・木炭・砂質褐色土に大別でき、木炭層は中中位に存在する、床面・壁面は非常によくしまっており、床面はほぼ平坦である。壁面付近には焼土粒がかなり存在しているこの方形のプランを有する遺構が、炭焼窯跡と把えることができるか明確でない。　　（鈴木　若雄）

### 2項　包含層出土の遺物（第73図）

合子(1)

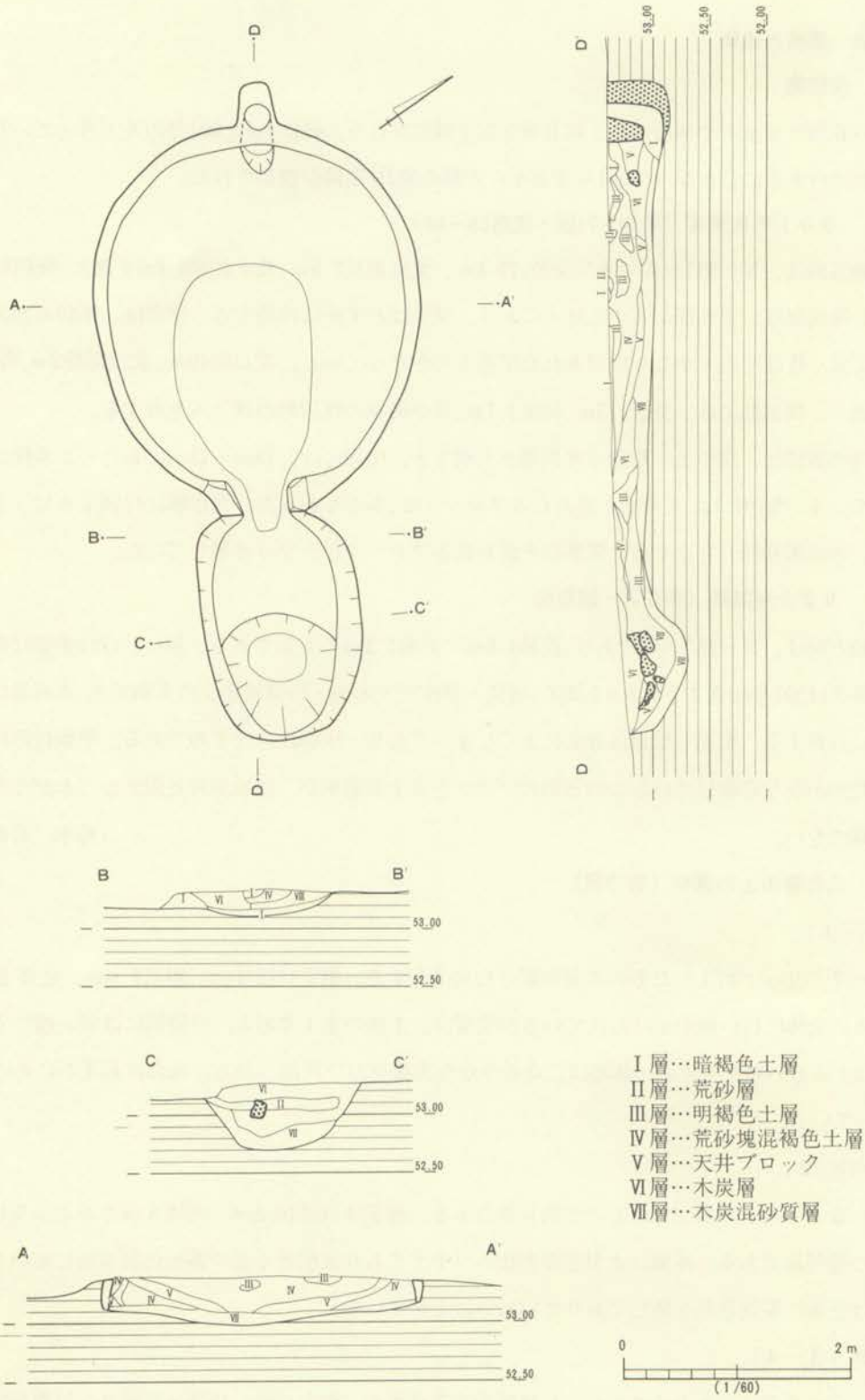
E－7グリッド出土したもので身の部分約⅓遺存する。推定口径4cm、器高2.4cm，底径3cmを測る。全体に白い釉がかけられているが受部は、生地のままである。口唇部には弱い稜をもち、受部はするどい稜を呈する。体部は、ゆるやかな丸味をおび底部へ移る。底部はわずかにあげ底になっている。

燈明皿(2)

E－6グリッドで出土したもので約⅓遺存する。推定外口径10.3cm、内径8cmを測る二重口縁をもつ燈明皿である。外側は水引き整形後ヘラナデであり底部近くまで茶褐色釉を施している。内側は全面に茶褐色釉を施しておりていねいにナデている。

擂鉢（3～4）

3はD－6グリッド出土のもので口縁部のみ遺存する。推定口径、15.8cmを測り、口唇部は平坦で口縁部には強い稜を有する。内面口縁部外面全体に茶褐色の光沢のある釉が施されている。胎土は非常に良好である。

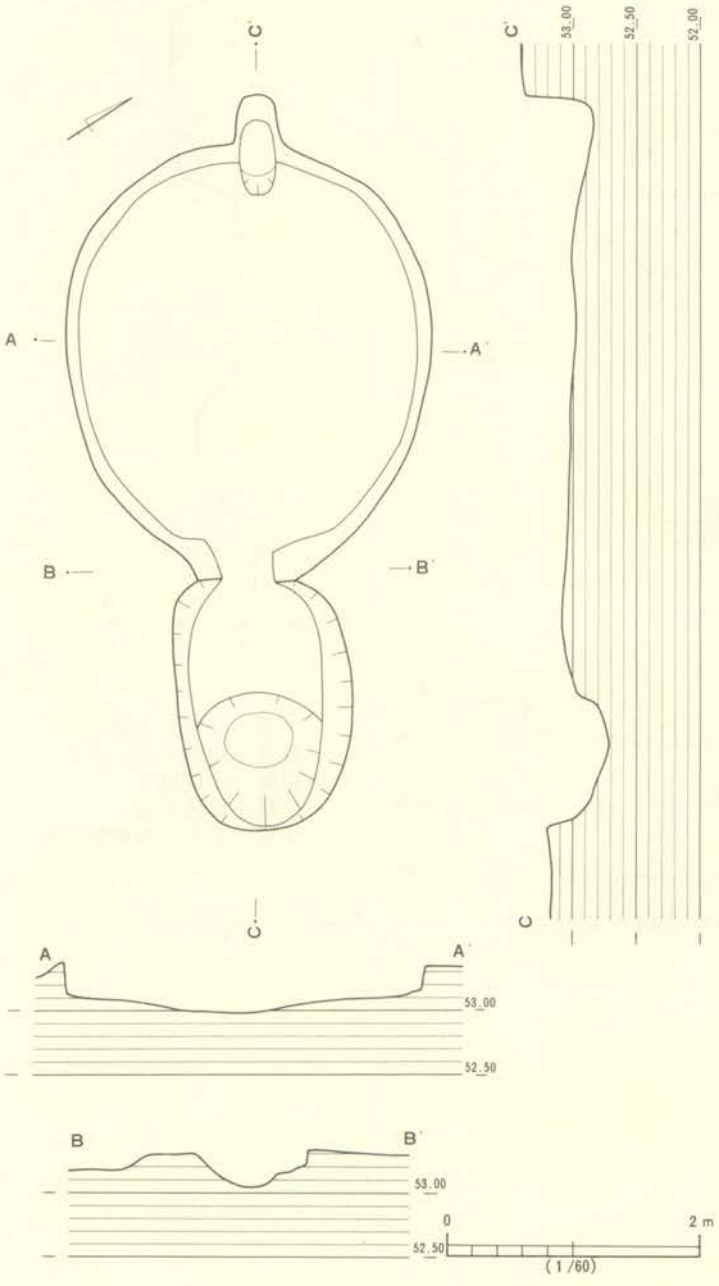



第 70 図　第２次００１遺構（炭焼窯）実測図

4はG－6グリッド出土のもので口縁部のみ遺存する。推定口径、24cmを測り、口唇部はわずかに丸味を呈し、口縁部には稜をもたない。内面口縁部、外面全体に茶褐色の釉が施されている。胎土は、3よりも荒い。おそらく、美濃・瀬戸系のものであろうと思われる。

焙烙(5)

G－9グリッド出土で、口縁部小片のみ遺存する。推定口径25.5cm、で内耳を有するものである。胎土は荒く色調は、淡褐色を呈する。口唇部は丸味をおび口縁部はわずかにくぼみを呈して胴部に移るものと思われる。

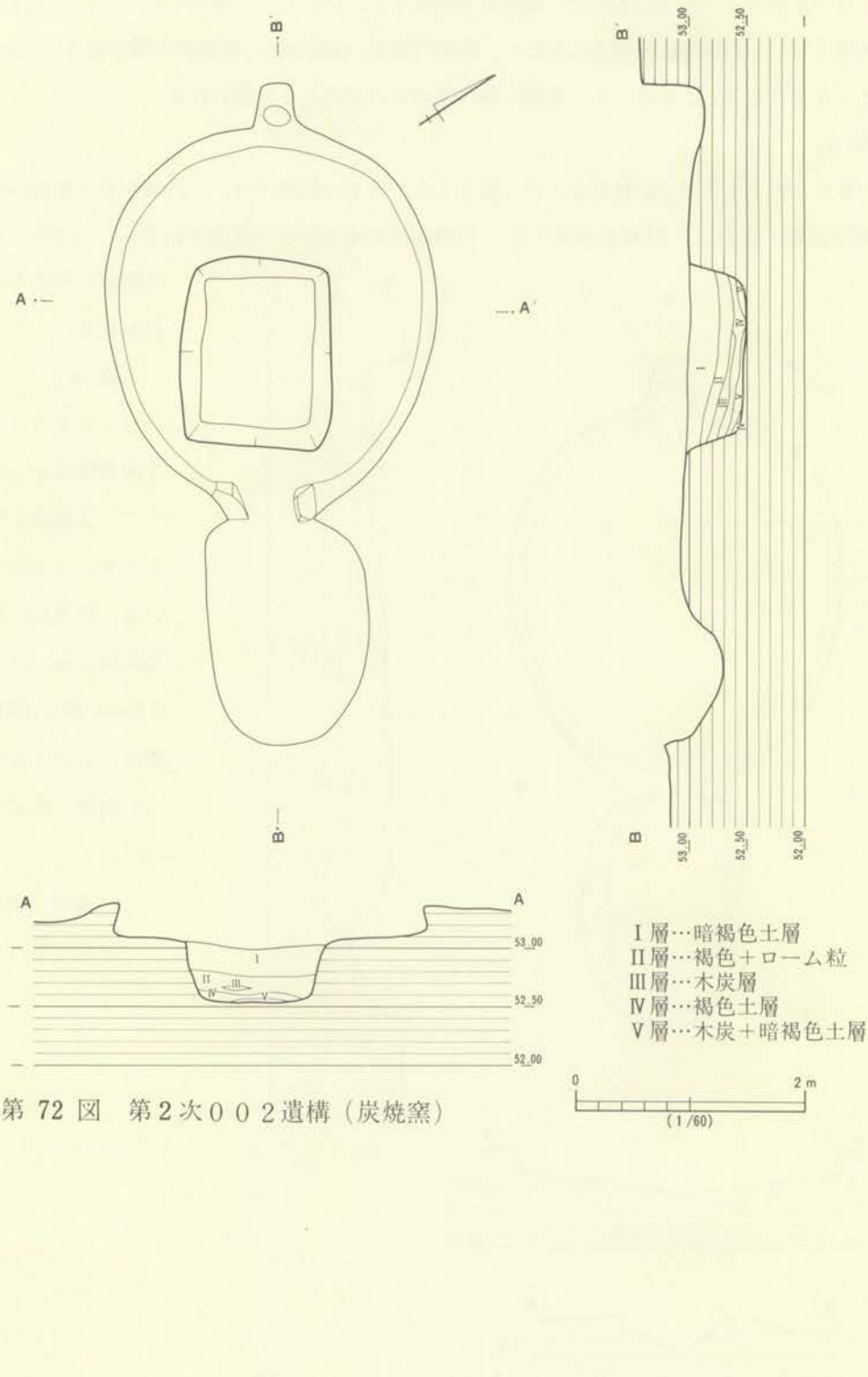



第71図　第2次001遺構（炭焼窯）掘込図

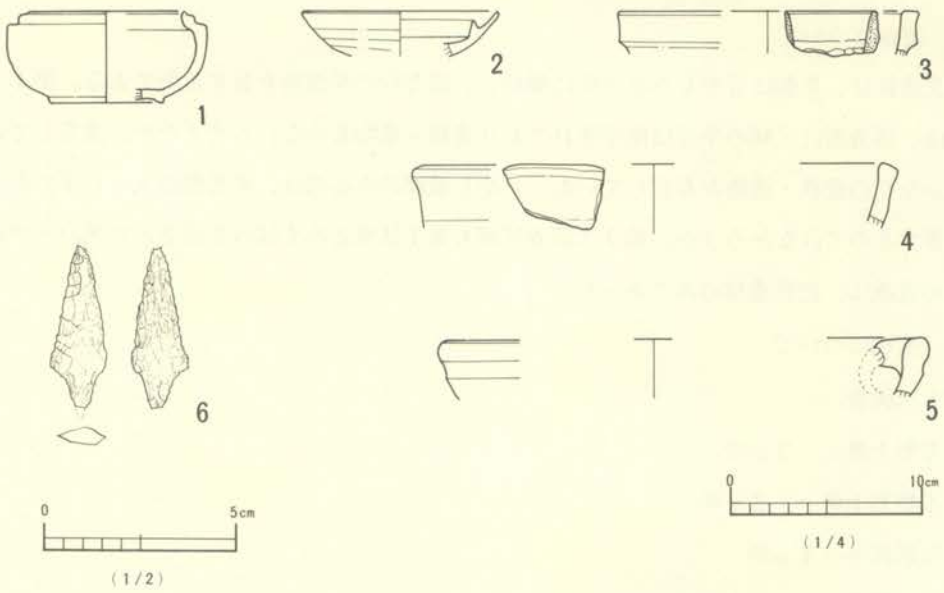
石器(6)

G－6グリッド第Ⅰ層耕作土からの出土で、先端部と茎部がわずかに欠損している。現在長8.3cm基部幅3cm、厚さ0.9cmを測る。調整は雑な感じがするもので石質は、頁岩であろう。

（瀬戸　久夫）




第 72 図　第2次００２遺構（炭焼窯）




第 73 図　第 2 次出土遺物

## 第Ⅱ節まとめ

1．遺跡について

中芝遺跡は、東側に谷をもち北方向に傾斜し、南方向の平坦地を有する所である。第1次調査区域は、調査前に区域の半分は削平されており遺構・遺物も少ないと考えたが、遺存していた半分はかなりの遺構・遺物が存在していた。しかし遺跡の中心部は、南奥部に入った平坦面の部分に位置するのではなかろうか。第2次調査区域も第1区域と小くぼみをはさんだ狭い平坦面であるため遺構は、近世遺構のみであった。

2．遺構について

第1次調査

方形土壙……3か所

不整形土壙……3か所

住居跡……1か所

第2次調査

炭焼窯……2基

方形土壙3か所を調査したが、遺物の出土は見られず時期の決定はしがたい。しかしこの方形土壙は地籍図を見ると地境に位置するもので、農耕時の貯蔵穴と考えられる

不整形土壙3か所調査したが、埋土の状態、壁、底面の形態などから考えて風倒木痕である可能性が大きい。前述したように埋土の一定の層位に黒色土が流入したりしている。

住居跡1か所を調査したが、調査区域が幅45mであったため、1か所だけの単独の住居跡なのか不明である。近年各地の調査により1か所単独の住居跡形態の様相も解明されつつあるが、当遺跡の住居跡かこれにあたるか不明である。

第2次調査では、炭焼窯1基であった。奈木台第5遺跡において検出された003方形の遺構が、炭焼窯に付随する施設であろうと考えたが、今回の調査では同類の方形遺構に炭焼窯を設けているという事例である。今回の方形遺構には木炭・焼土があり、壁面・床面とも熱変化をうけているのが観察された。この方形の遺構は、窯として用いていたとの土地の方の話であった。これは少量の木炭を得るとき使用するもので、多量の木炭生産の場合はいわゆる平窯形式のもので生産するということであった。この方形窯とこの上部に構築された平窯との時代差は明確ではないが生産量の違いで窯の形態も変化したと思われる。

3．遺物について

第1次調査

先土器時代

縄文土器

石器

第2次調査

陶器類

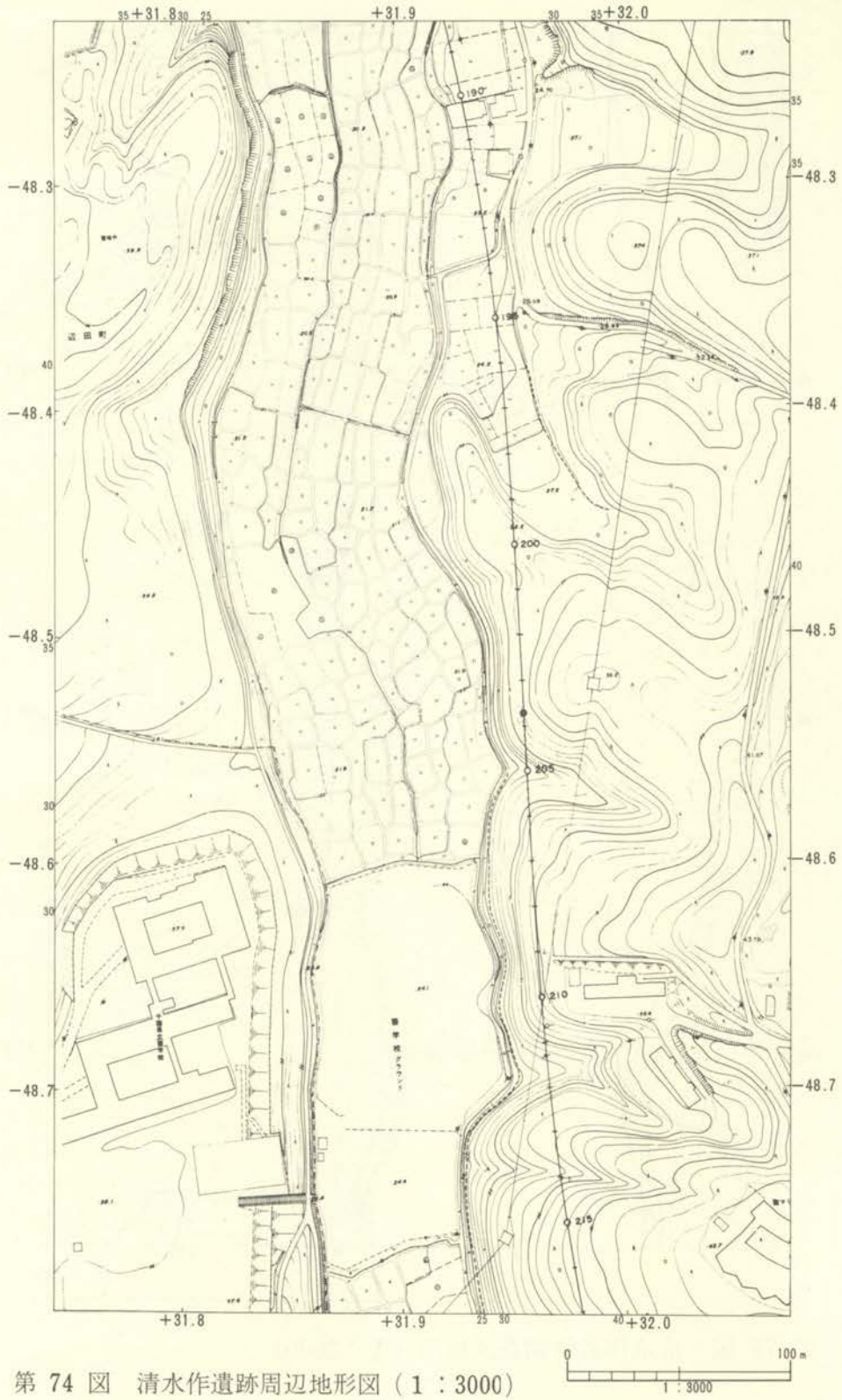
第1次調査において、先土器時代の遺物が数点出土したが、フレイク、チップ数であり製品は皆無であった。出土地点は、東側の谷部へ傾斜しはじめる地点である。

縄文土器は、早期～後期までにわたり出土したが、撚糸文系の土器が比較的多く、前期末の土器片も比較的多かった。遺跡の近くに後期の貝塚である誉田高田貝塚があるが、ここでは後期の土器片はさほど多くはなかった。

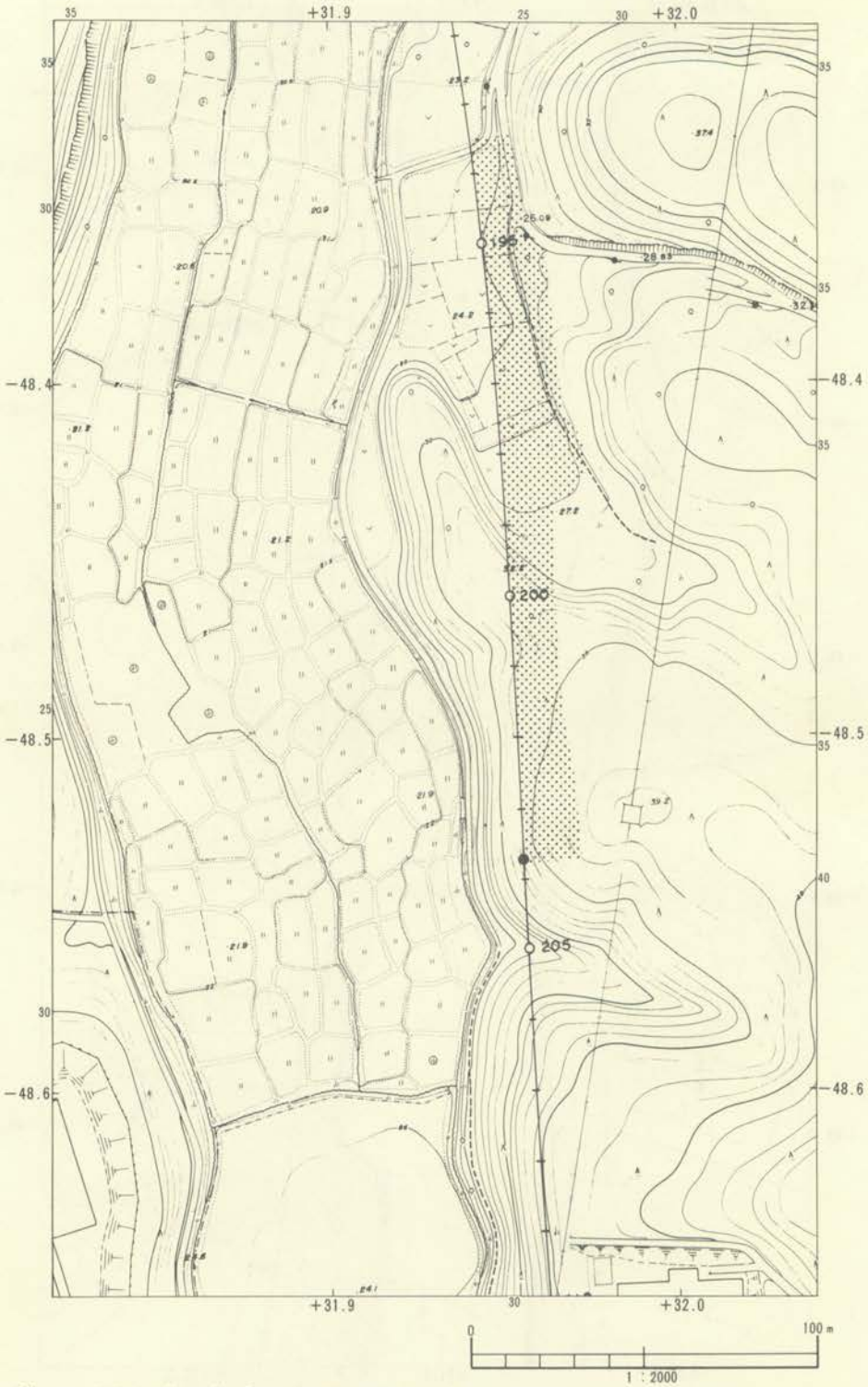
石器は、石斧・磨石の2点だけであった。生活用石器は、散在することは少なく、遺跡の群の中に遺在するものと考える。

第2次調査の陶器類であるが、合子・燈明皿等の仏具・擂鉢・焙烙などであった。近くに神社祠等の存在を確認したが、見ることはできなかった。しかし現在は存在しなくてもかっては存在していた可能性もある。　（瀬戸　久夫）

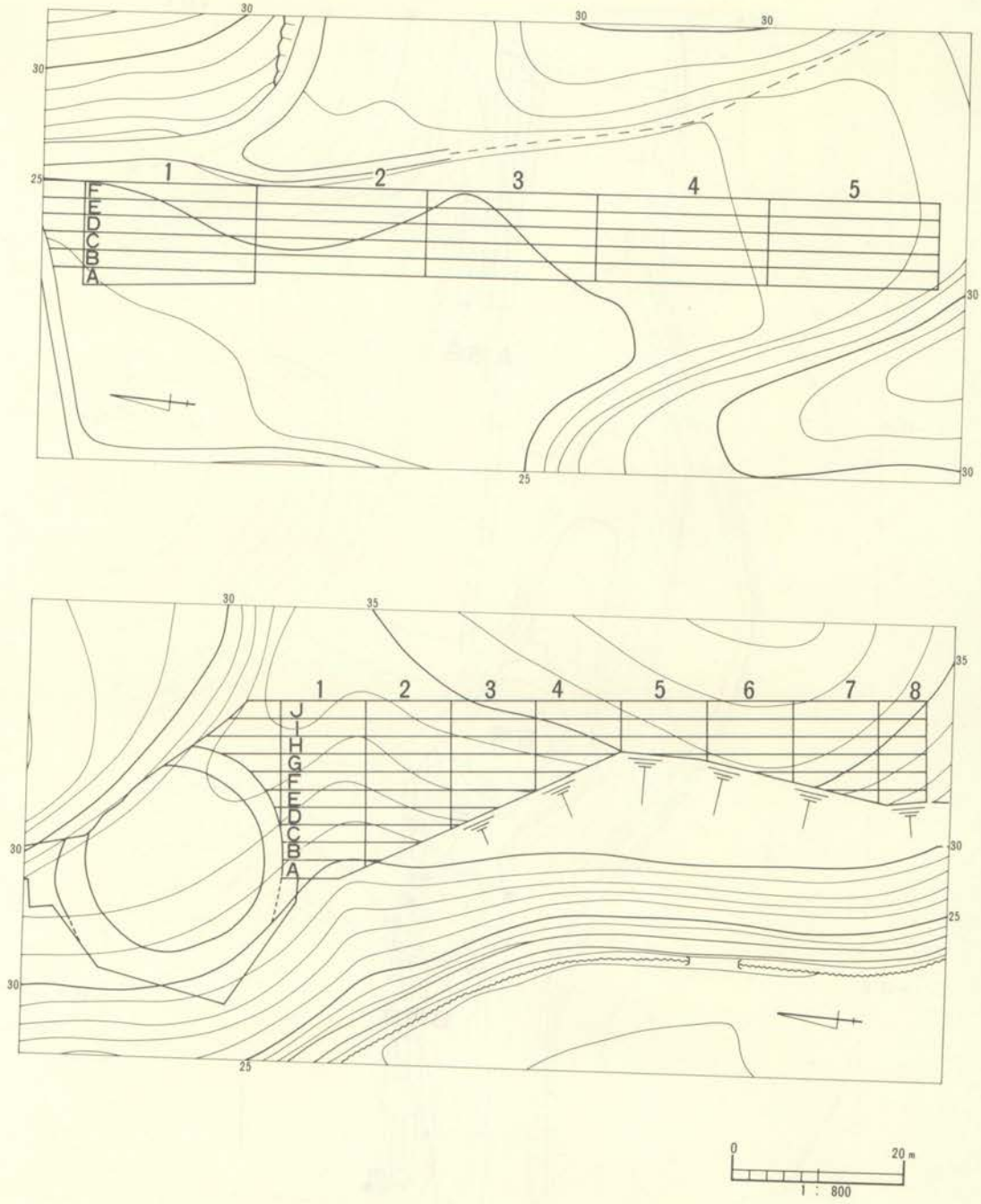
# 第七章　清　水　作　遺　跡



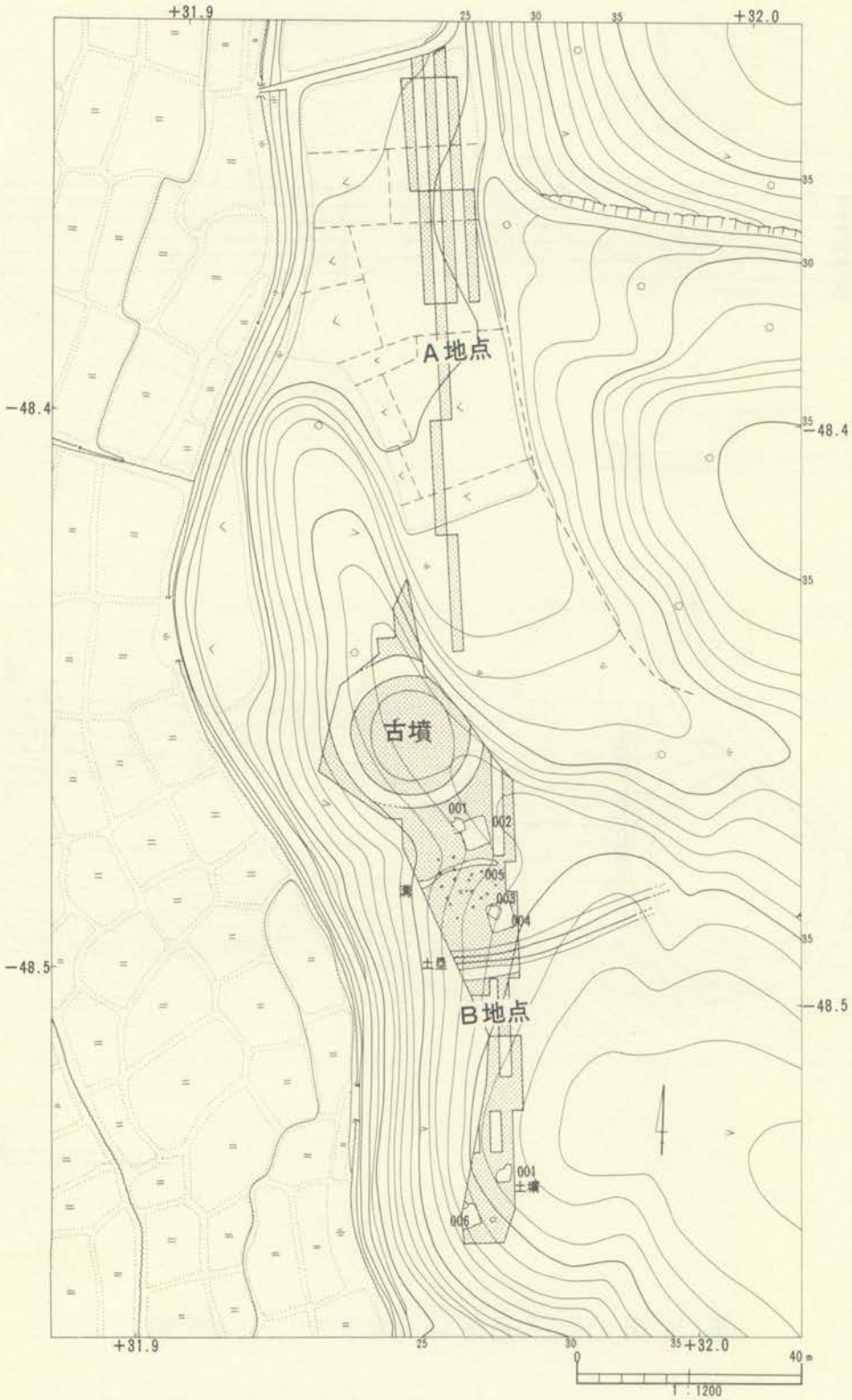

第 74 図　清水作遺跡周辺地形図（1 ：3000）




第 75 図　清水作遺跡調査区域図（1 ：2000）




第 76 図　清水作遺跡A・B地点グリット設定図




第 77 図　清水作遺跡遺構分布図（1：1200）

## 第1節　地形と土層（第78図・図版65）

A地点は、北西方向に開口する谷津地で，B区は背後の台地の影響をうけ張り出し部になっており、第Ⅰ層黒褐色土・第Ⅱ層ソフト粒層がみられA区では徐々にさがりはじめ、第Ⅰ層砂質暗褐色土、第Ⅱ層暗褐色土などがみられる。C・D区は、谷津の中央部に位置し急傾斜で落込み、このトレンチには逆転位層が見られ、下部では水分を多く含んだ水量の多い土層であり、D区のある部分では湧水もみられた。またD・E区のⅤ層粘質黒色土、Ⅳ層の粘質黒色土褐層中からは、縄文土器片がわずかであるが出土した。現在でも梅雨期になるとC・E区の中央部付近が水道になるとのことである。E・F区では、E区の南側から高くなっておりF区では、D区の比高が2mを測ることができる。

B地点は、標高30mの舌状台地の先端部に位置している。A地点との比高は、3mを測る。この地点は、標高30m～35mの間に狭い平坦面があり、遺構はこの平坦面に位置する。

## 第二節　A地点の遺構と遺物

### 1項　出土遺物（第79図）

縄文土器

1はB－1トレンチ出土で、波状口縁を呈する甕の口縁部で口唇部が肥厚する。口縁部に縄文を施しその下に深い2条の条線を施し胴部に何本かの条線を有すると考えられ、条線との間に縄文を有する。裏面の口唇部は横方向のていねいなナデであり、口縁下に弱い稜線を有する、色調は暗褐色を呈し、胎土は細い粒子を含む、焼成は良好である。

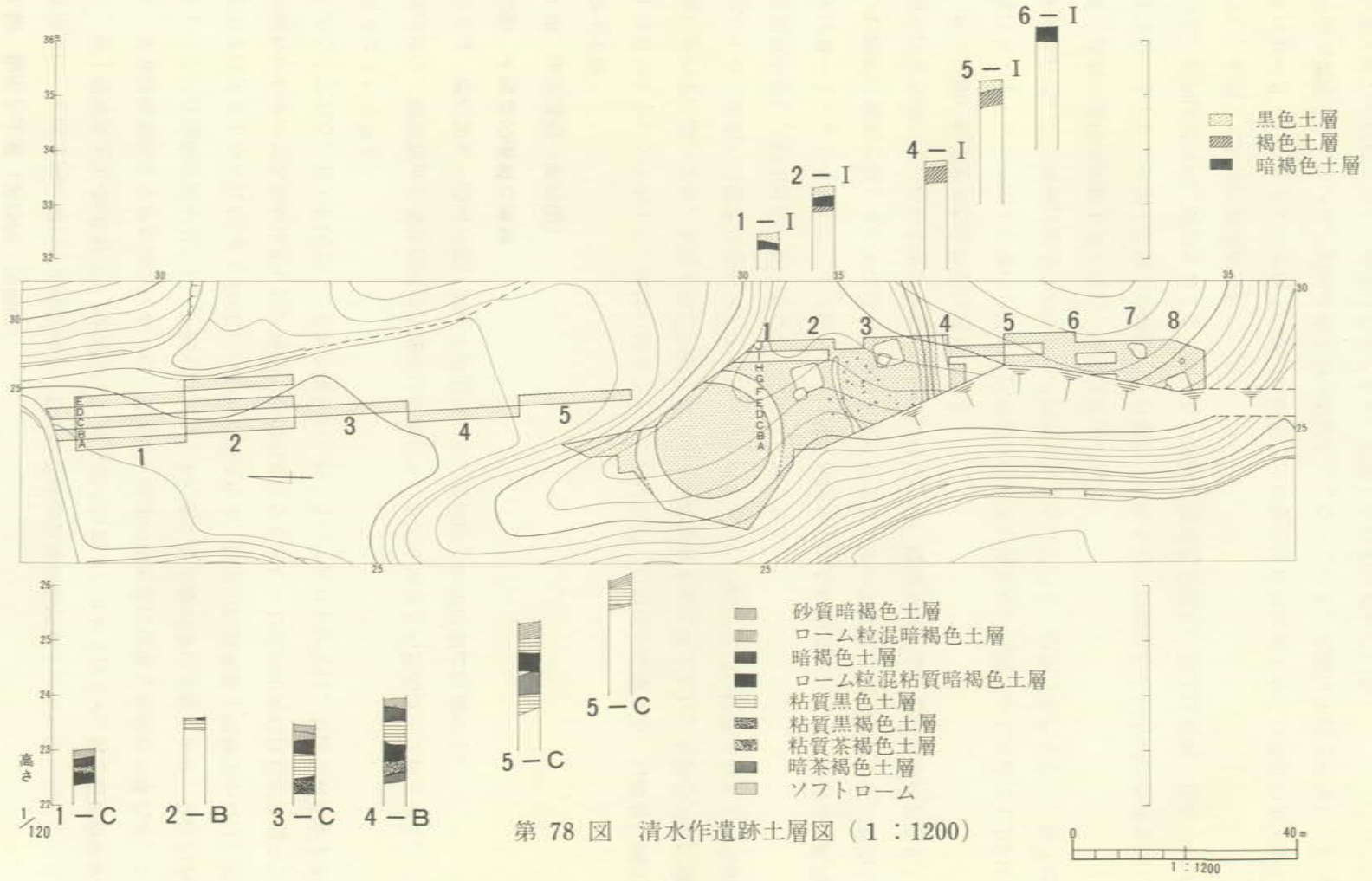
2はB－1トレンチ出土で、1と同じように波状口縁を呈する口縁部であろう。口唇部は肥厚し、口縁部に縄文を施しその下に深い2条の条線を有する。その下部にも縄文を有する。裏面の口唇部は横方向のていねいなナデをおこない、口縁下に弱い稜線を有する。色調は暗褐色を呈しし、胎土は細い粒子を含む、焼成は良好である。

3はB－1トレンチ出土で甕の口縁部で凸帯頂部に刺突が施され、凸帯部から垂直に上方向から刺突されている。裏面は縦方向のケズリの調整をおこなっている。色調は褐色を呈し、胎土は石英・長石・雲母の細粒を多く含む、焼成は普通である。

4はD－3トレンチ出土の甕の口縁部で、口唇部は丸味をおび口縁部から斜方向に条線を施している。裏面は横方向に調整をおこなっている。色調は暗褐色を呈し、胎土は石英・長石の粒子を含む、表裏とも非常に器面が荒れている。

5はB－3・D－3トレンチ出土の甕の口縁部で、口唇部は自然に細くなり口唇部の直下から斜方向の条線を施している。裏面は横方向の調整をおこなっている。色調は明褐色を呈し、胎土は石英・長石の細粒を含む、焼成は普通である。表裏とも器面は荒れている。

6はF－3グリッド出土の甕の口縁部で、波状形を呈し、口唇部は内側に弱い稜をもち若干外



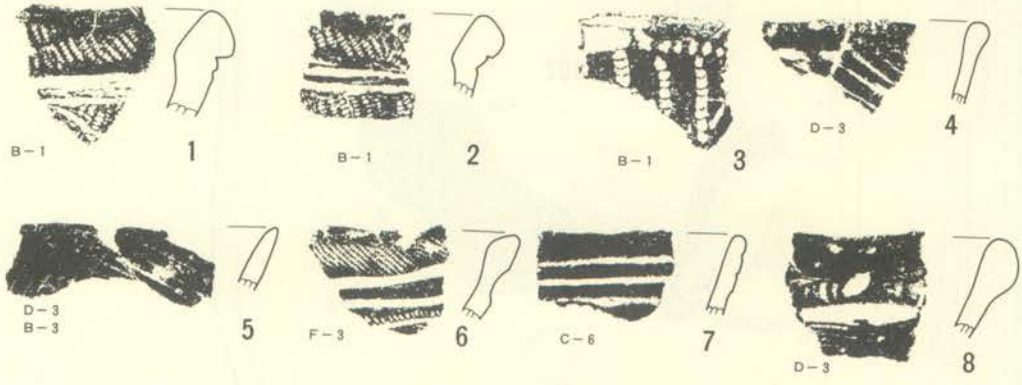

第 78 図　清水作遺跡土層図（1：1200）

反する口縁で細い縄文帯を有し、縄文帯の直下にヘラによる区画を作りだし、その下にヘラ状の工具による刻目を有する。色調は明褐色を呈し、胎土は精選され密であり、焼成は良好である。

7はC－6グリッド出土の甕の口縁部で、口唇部はゆるやかな丸味を呈し、口唇部直下から細い縄文を施している。口縁部は縄文を施したのち2条の条線により区画され頸部へと移行する。内面は横方向のナデにより調整されている。色調は暗褐色を呈し、胎土は精選され密であり、焼成は良好である。表裏とも器面は非常に荒れている。

8はD－3トレンチ出土の甕の口縁部で、わずかに外反する口縁部を呈し、口唇部は大きく肥大する。口唇部には竹管によると思われる爪形文を施し、口縁下は斜方向の条線を施している。内面は横方向の調整をおこなっている。色調は赤褐色を呈し、胎土は石英・長石の細粒を含み、焼成は良好である。

これらA地点出土の土器片は、縄文中期中葉から後期中葉の時期に含まれるものと考えられる。このA地点の出土状態からみて流れ込みであろうと考えられ、後背の台地上にこれらの時期の遺跡が存在すると思われる。（鈴木　若雄）




第 79 図　A地点出土遺物

## 第Ⅲ節　B地点の遺構と遺物

### Ⅰ項　住居跡

#### （Ⅰ）００Ⅰ（第80・81図・図版66・67・85）

1－E・1－Fグリッドで確認され、北方向に砂質粘土を検出した。一応の広がりを有する点からカマドのものであろうと判断された。遺構の埋土は、暗褐色土の単一層でありカマドの周辺には、焼土粒がかなり見うけられた。

〈遺構〉

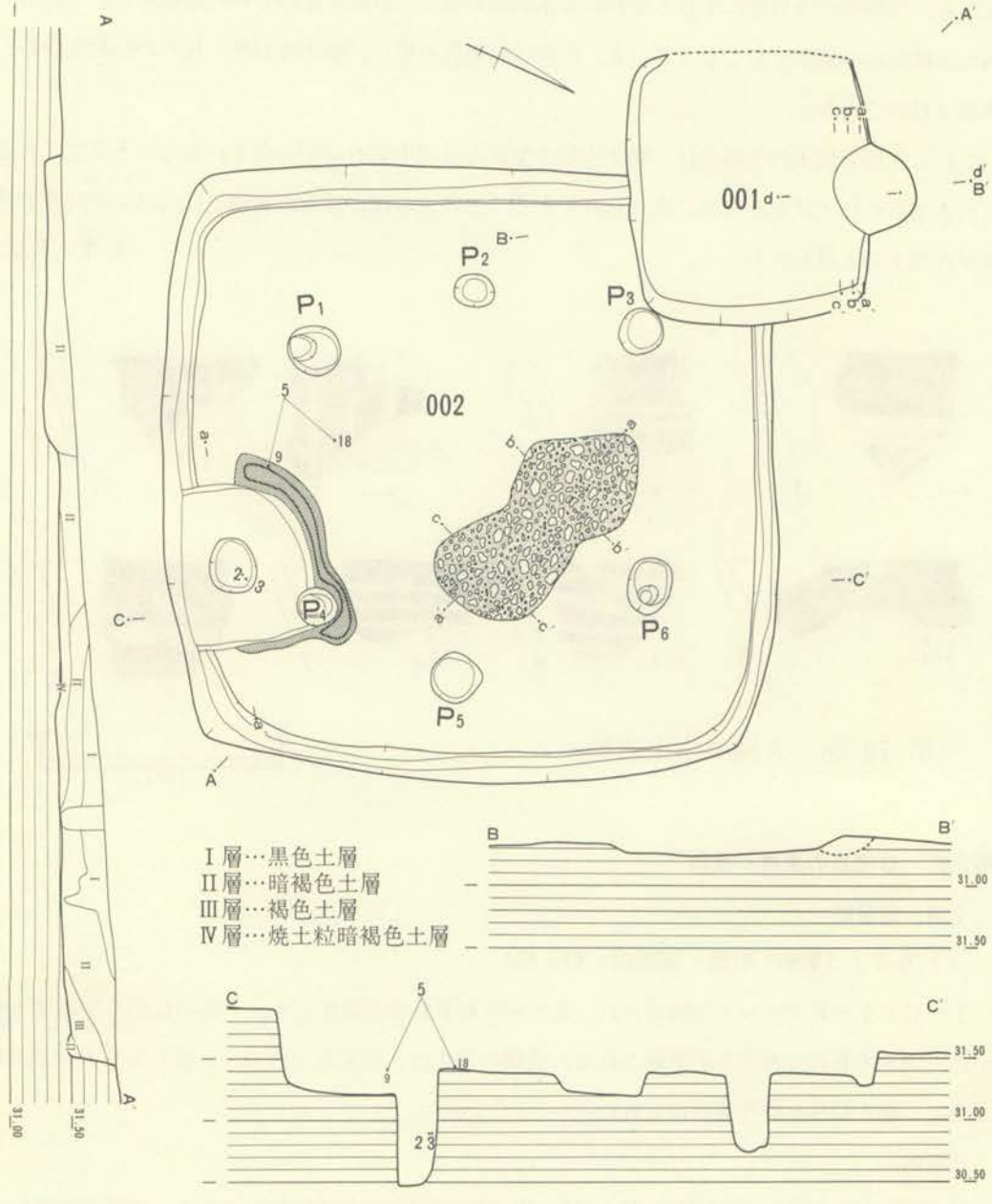
平面形は方形を呈し、中心軸は、N－28°－Wで長辺2.2m・短辺2.05mを測る。西壁は傾斜地の

ため不明であった。壁はゆるやかな傾斜でもってたち上がる。壁溝は検出できなかった。床面はよくふみかためられている。ピットは精査したが検出できなかった。

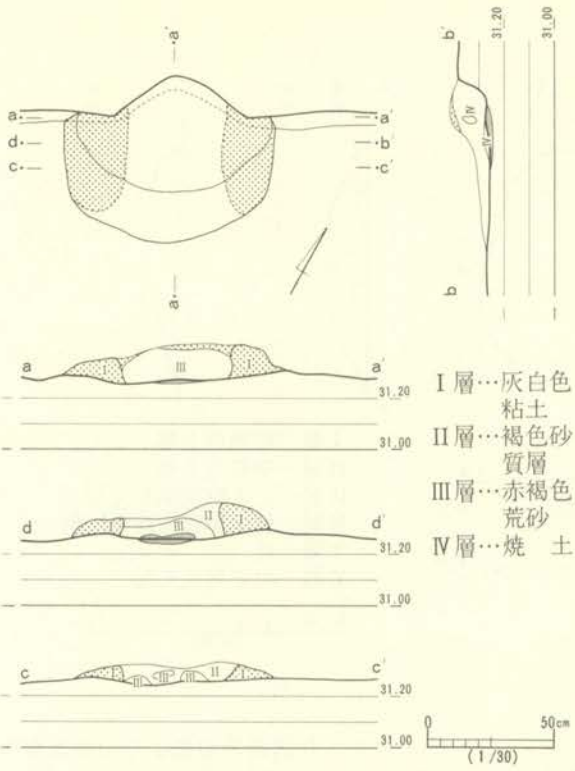
〈カマド〉

遺構が浅いためカマドの遺存状況も良好でなかった。カマドの位置は、北側壁の中央部に位置し、構材は暗褐色土を多く含む灰白色粘土である、壁への切込みは浅い三角形を呈しており50cm×17cmを測る。

袖部は床面に直接粘土を置き、右幅20cm・高さ13cm・左幅23cm・高さ9cm 焚出部は幅40cmを




第80図　001・002住居跡実測図




第 81 図　００１住居跡カマド実測図

測る。燃焼部は全体に平坦であり、30cm×40cmで深さ３cm火床の規模は明確でなく厚さ３cmを測り後方に遺存する。煙道部は明確ではないが、長さ10cm・昇角25°を測る。煙出口は不明、全体に遺存は悪いが、火床面は非常に良く焼けていた。

〈遺物〉　　（鈴木　若雄）

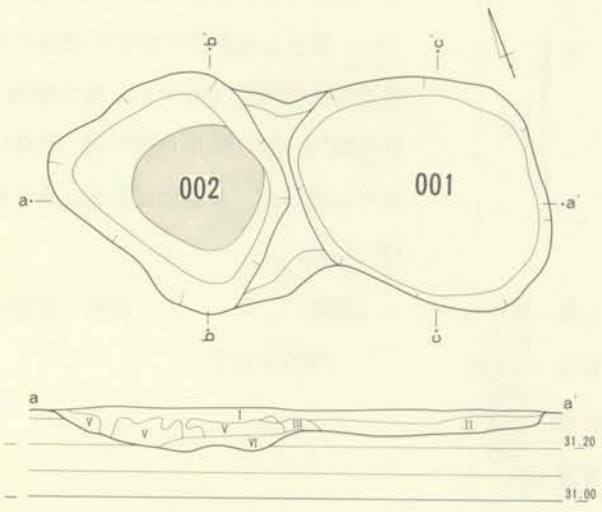
検出されず

（２）　００２（第82・83図・図版67）

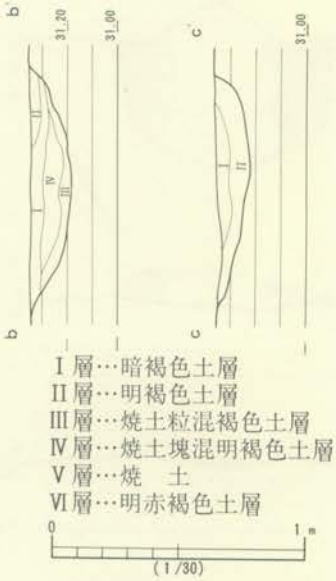
１－Ｆ・１－Ｇ・１－Ｈグリッドで、黒色の落込みを確認した。北西隅に001号跡が重複している。住居跡の埋土は、５層に分けられⅠ層黒色土、Ⅱ層暗褐色土、Ⅲ層褐色土、Ⅳ層焼土粒混暗褐色土である。埋土は、レンズ状の堆積を呈するが、001号住居跡の方向にむかってうすくなっている。

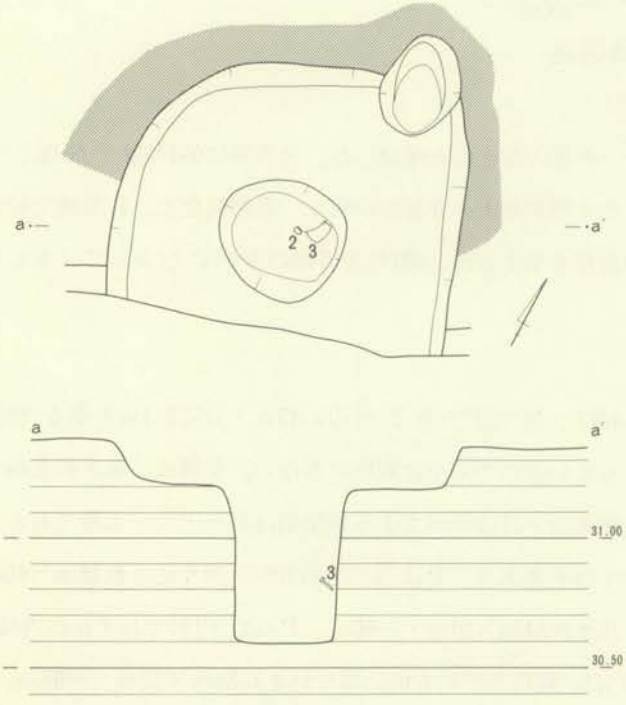
〈遺構〉

平面プランは隅丸方形を呈し、中心軸は、Ｎ－22°－Ｗで、長辺2.45ｍ・短辺2.1ｍを測る。壁は、ほぼ垂直であるが、北壁西壁は低くなっているので完全に観察できない。壁溝は、深さ約５cmで一周する。壁溝底は、凹凸を呈する。床面は、ほぼ平坦であり構築面はハードローム層である。床面の北南部に２個の炉を持つ。ピットは６本あり、$P_1$は円形で斜方向に掘り込まれ48cm×60cm・－65cm、$P_2$は、楕円形で垂直に掘り込まれ34cm×30cm・－60cm、$P_3$は、円形でわずかに内傾して掘り込まれ40cm×40cm・－65cm、$P_4$は、楕円形で斜方向に掘り込まれ38cm×32cm・－65cm、$P_5$は、円形で垂直に掘り込まれており44cm×40cm・－80cm、$P_6$は、楕円形で斜方向に掘り込まれ50cm×38cm・－95cmを測り$P_1$・$P_3$・$P_4$・$P_6$が主柱穴であろう。$P_4$は、貯蔵穴の土手状の内側に位置する。

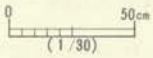



002 住居跡炉跡実測図




002 住居跡貯蔵穴実測図




第 82 図　００２住居跡炉跡・貯蔵穴実測図

〈炉〉

住居跡の中央よりやや北東部によった所に位置し、中心軸N－66°－Wで、２つの炉が重複している。

001炉は、長径1.0m・短径90cm・深さ10cmを測る。埋土は２層に別れており第Ⅰ層暗褐色土、第Ⅱ層明褐色土で第Ⅰ層よりやや明るい。底面はあまり焼けてなく長時間にわたって使用したとは思われない。

002炉は、001炉の西どなりで、連なっている。長径・短径95cm深さ18cmを測る。不整楕円形を呈している。埋土は、３層に別れており第Ⅰ層暗褐色土、第Ⅴ層焼土層、第Ⅵ層明赤褐色土で第Ⅴ層は焼土が充満しており、

第Ⅳ層は焼成を強くうけており赤褐色を呈し硬化している。

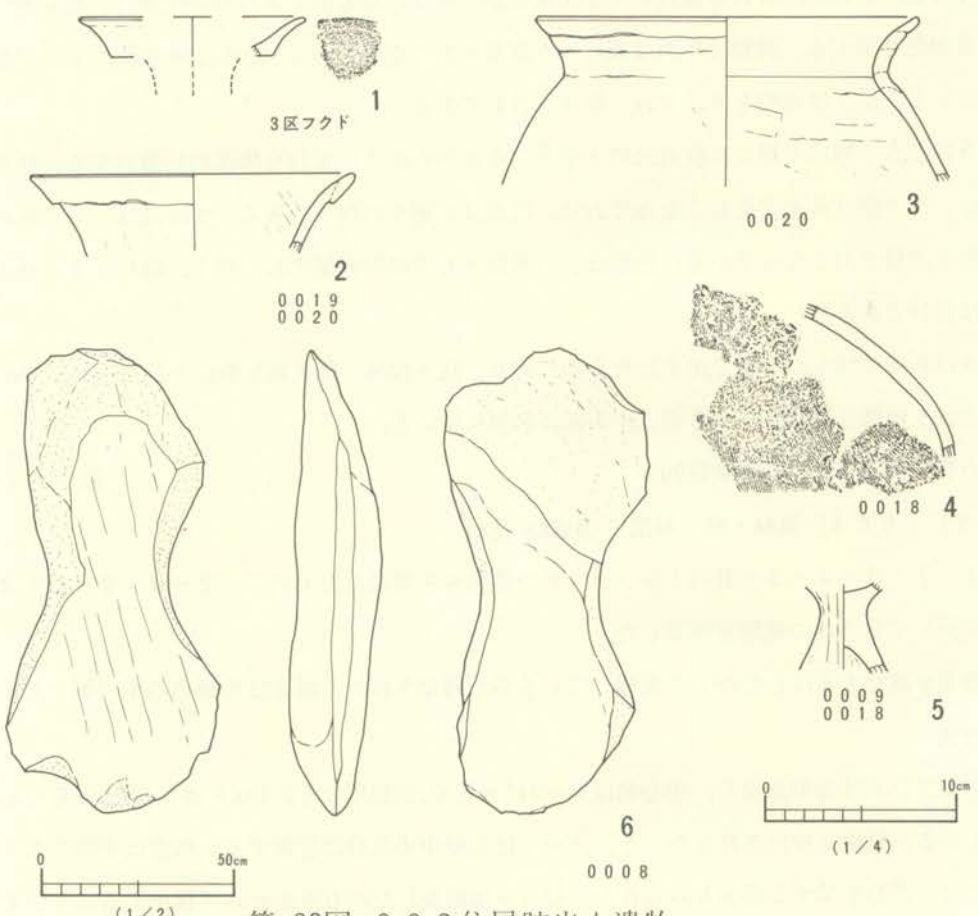
〈貯蔵穴〉

住居跡の南方向に位置するP4をとりかこむように約5cmの粘土の土手がめぐる。掘込みは、長辺1.38m・短辺1.0m・深さ17cmの半略方形を呈する。掘込みの中央部に長径50cm・短径48cm・深さ60cmの円形のピットを有する。ピットの埋土は、中位ぐらいまで黒色土で中位より下位は、褐色土・黒色土十ローム粒の混土であった。また上面から45cmの所に甕の口縁部が検出された。ピットの底面は40cm×30cmの略方形を呈し、平坦であった。

〈遺物〉

遺物は、極めて少量の土器と石斧のみであった。

1は小型壺の口縁部と思われ遺存度は口縁部の小片であった。推定口径は12cmを測る。この壺は、頸部から口縁にかけて大きく広がる形のものであろう。外面の調整は、口唇部付近は横ナデ




第 83図　００２住居跡出土遺物

口縁部は下方向のナデをおこさなている。内面は口唇部にクシ状工具による鋸歯状の沈線を施し、その下方はクシ目を施している。色調は内外とも赤褐色で胎土は細粒を多く含む。焼成は良好である。

2は貯蔵穴内より出土したもので、口縁部約⅓である。推定口径は17cmを測る。壺の口縁部と思われ頸部より口縁部にかけて大きく外反するもので、口唇部は折返えされている。口唇部、口縁部とも横方向へナデで調整されており、内面も同様に横方向のナデである。色調は外面が褐色、内面が赤褐色を呈する、胎土はかなり大きな粒子を多く含む、焼成は普通である。

3は2と同様貯蔵穴出土の土器片で甕の口縁部と思われ遺存は¼である。胴部より口縁部にかけて「く」字状に外反する。口縁部には輪積痕が残る。外面の色調は二次的な火をうけたらしく黒色を呈し内面は赤褐色を呈する。胎土は粒子を多く含む、外面の調整は口縁・胴部ともナデをおこなっており、内面は横方向のヘラによるナデ調整をおこなっている。焼成は普通である。内外面ともかなり器面が荒れている。

4は甕の胴部と思われ貯蔵穴の土手上床面から出土したものであり外面色調は、暗褐色で内面は赤褐色を呈する。調整は外面は細いハケ調整をおこなっており、内面は横方向のナデをおこなっている。胎土は細粒を多く含み、焼成は良好である。

5は器台の脚部と思われ貯蔵穴の土手及び床面から出土しており脚部約½遺存する。外面の調整は、ヘラ削り後ナデをおこなっており、内面は右廻りの削りである。受け部は、ヘラ状の工具で削り調整をおこなっている。色調は、内外面とも淡褐色を呈する。胎土は細粒を多く含み、焼成は良好である。

6は石斧で埋土の上層で出土したものであり、長さ12cm・最大幅5.5cm・くびれ部幅3.1cmであり内面を研磨し調整してあるが、上刃部は破損している。

石質は凝灰質砂岩、重量180g　　（瀬戸　久夫）

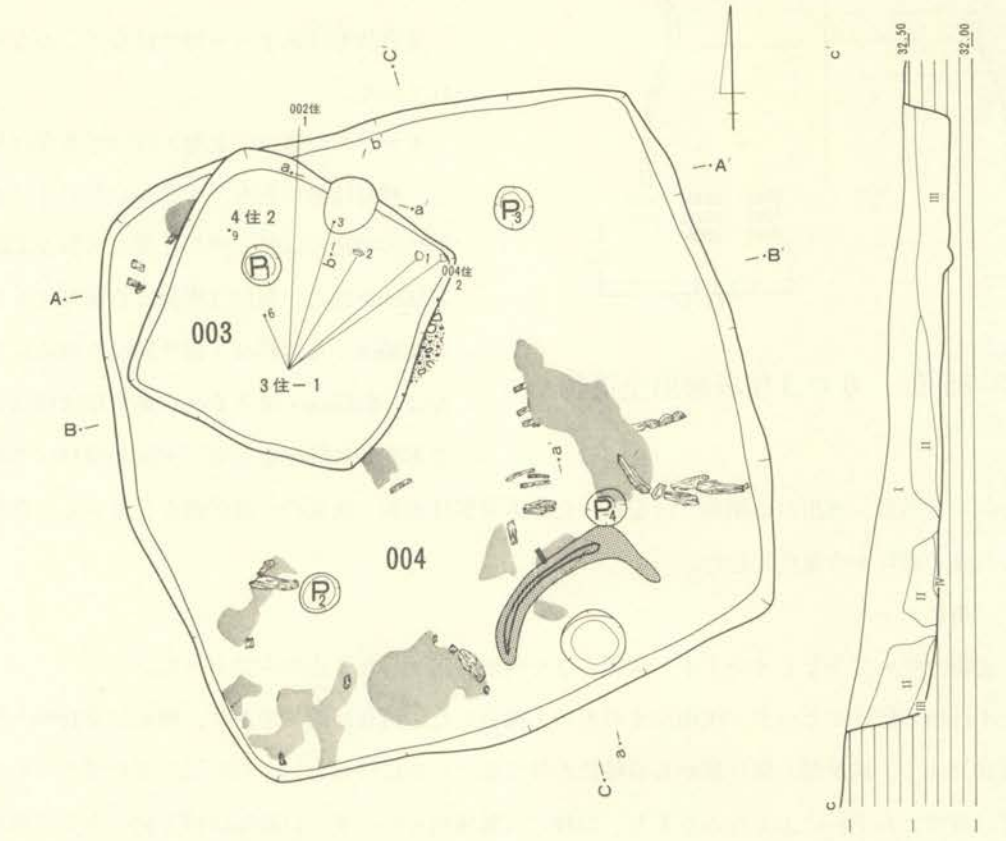
（3）　003（第84・85・88図・図版68・84）

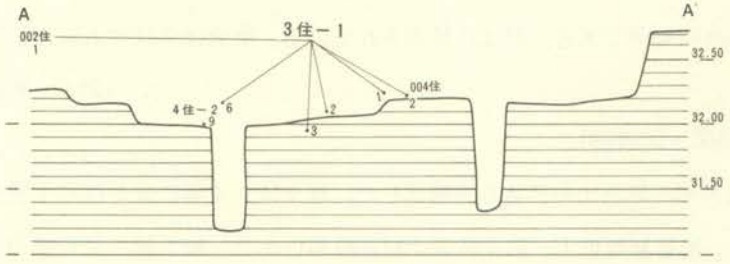
2－I・3－J・3－Hのトレンチで黒い落込みを確認したもので、2－J・2－H・3－Hを拡張して落込みの範囲を確認した。

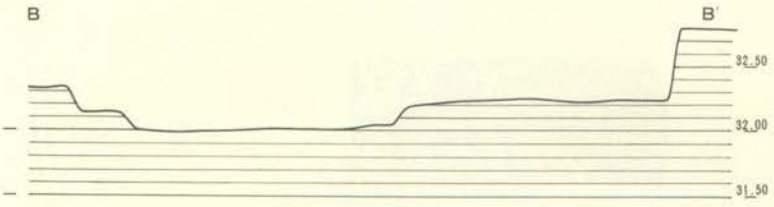
精査が進行するにしたがって重複している事が確認された。埋土は黒褐色の単一層であった。

〈遺構〉

平面プランは方形を呈し、中心軸はN－24°－Eで、長短辺とも2.1mを測り、壁はゆるやかに立ち上がる。壁溝は検出されなかった。カマドは北壁中央部分に位置する。床面は平坦であり部分的には、凹凸を呈する部分もみられた。ピットは精査したにもかかわらず検出することができなかった。



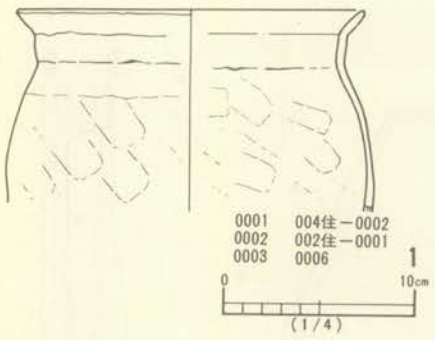




I 層…黒色土層
II 層…暗褐色土層
III 層…褐色土層
IV 層…焼土粒混褐色土層

第 84 図　００３・００４住居跡実測図

0　2m
(1/60)




第 85 図　００３住居跡出土遺物

〈カマド〉

遺存状態はあまり良好ではなく、かなり流れていた。

カマドの位置は、北壁のほぼ中央部に位置し、構材は黒褐色を多く含む白色粘土である。壁への切込みは略三角形を呈しており125cm×58cmを測る。袖部は床面は直接粘土を置き、右幅30cm・左幅45cm・高さ50cmを測る。焚出部は、幅60cm・深さ８cm、燃焼部はほぼ平坦であり50×50cmを測る。火床の規模は明確でない。煙道部、煙出口は明確ではなかった。天井部は前面・後面の一部が遺存している。燃焼部より甕の破片が少量出土した。

〈遺物〉

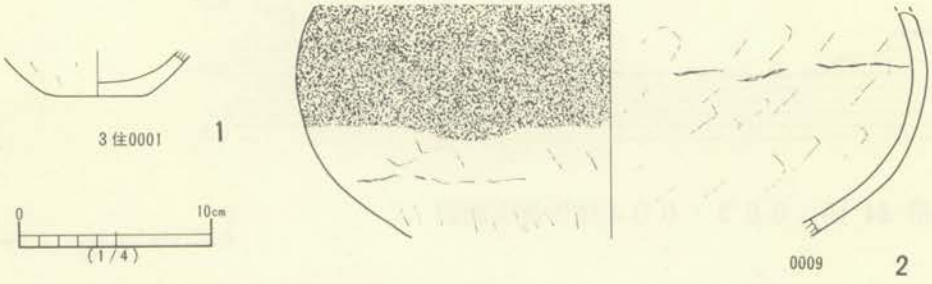
遺物は極めて少なくカマド中、床面の２か所から出土した２点のみであった。

１は甕の破片でカマド、床面出土のものと接合した。遺存は約½であり、推定口径18cm・推定高10.5cmで、胴が弱く張り肩から口縁にかけてなだらかに移行し「く」形を呈して口縁へ移る、頸部口唇部にわずかにふくらみをもち、口縁には輪積痕をのこす。口縁部は横方向のナデで調整し、胴部は斜方向のヘラ削りである。内面口縁部は横方向のナデ、胴部は斜方向のヘラ削り調整である。外面色調は褐色で内面は暗褐色である。胎土は精選されている。焼成は良好である。器厚は非常に薄手である。

（鈴木　若雄）

（４）　００４（第86・88図・図版68）

トレンチを拡張した結果方形の黒色土の落込みを確認した。埋土は、４層に分かれ第Ⅰ層黒色土、第Ⅱ層黒色土＋褐色土、第Ⅲ層褐色土、第Ⅳ層焼土粒混暗褐色土で、最下層の第Ⅵ層および床直上には炭化材、焼土などが堆積している。




第 86 図　００４住居跡出土遺物

〈遺構〉

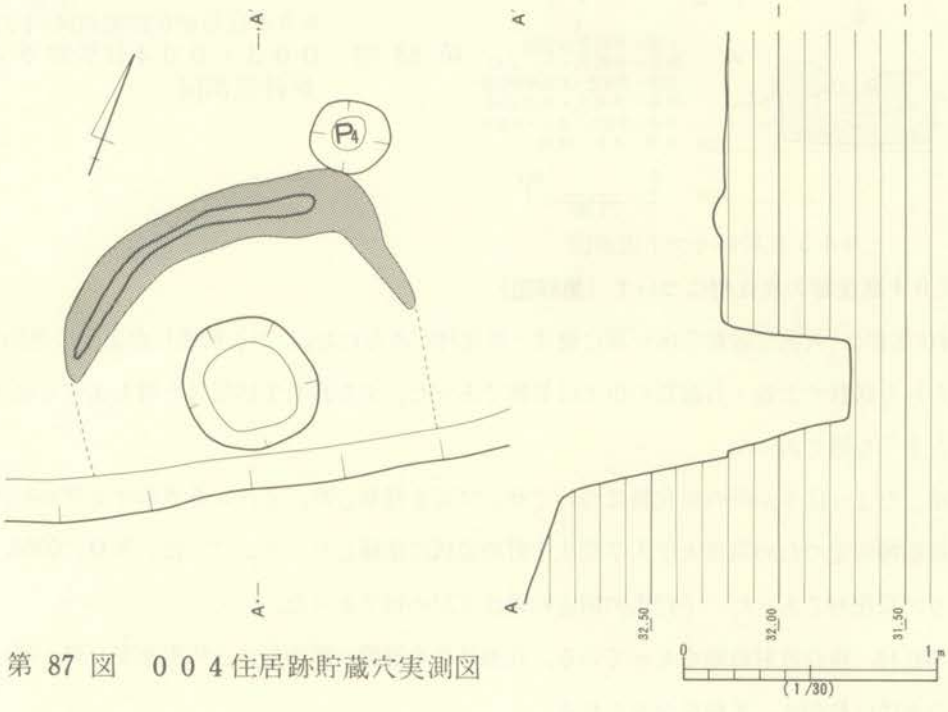
平面プランは、略方形で、中心軸は、N－16°－Wで 長辺5.0m、短辺4.8mを測る。壁はわずかかに傾斜する。南壁 60cm・北壁40cmで北 西に傾 斜している。　床面上には、炭化材・カヤ・焼土が堆積していた。床面はほぼ平坦であった。床面の中心よりわずかに北によった位置に、003跡によって切断された炉が½遺存していた。ピットは、4本あり、$P_1$は、30×30cm・－80cm・$P_2$は、34×30cm・－85cm・$P_3$は、34×30cm・－85cm・$P_4$は、34×32cm・－104cmを測る。住居跡の南壁に貯蔵穴が位置する。

〈炉〉

住居跡の中央よりやや北方向によった所に位置するが、003号住居跡に切られ½遺存する。推定では、70cm×60cmの楕円形と思われる。埋土は3層に分かれ、第Ⅰ層焼土・第Ⅱ層暗褐色・第Ⅲ層暗褐色土十焼土粒である。中央部の上面に焼土が見られ、底面に熱をうけた粘土が見られた。

〈貯蔵穴〉

住居跡床面精査時に、粘土集積、黒色落込みを確認し精査をおこなった。南壁面直下に上面54cm×50cmのほぼ円形のピットがあり、深さ50cmで、底面は、35cm×35cmの略円形を呈しており、平坦である。土手は、$P_4$をかすめるようにめぐり、4cmの高さを測る。掘込みは1m×1.4m の範囲で確認でき、掘込面は、住居跡の床面レベルとほぼ同じである。




第 87 図　００４住居跡貯蔵穴実測図

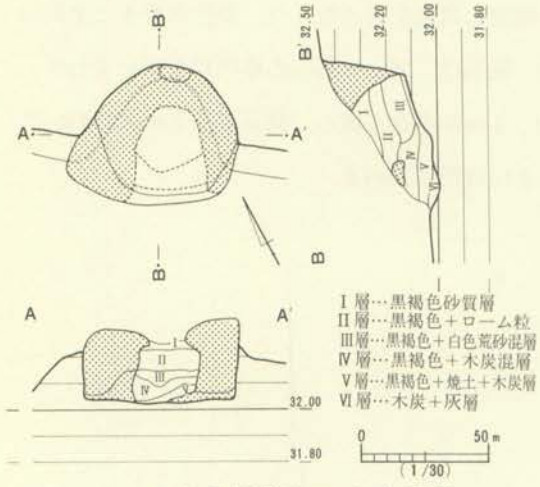
〈遺物〉

焼土、炭化材の堆積から、火災住居跡と推測し遺物の検出を期待したが、遺物は極めて少量であった。

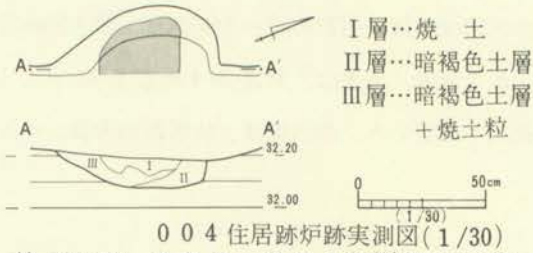
1は甕の底部で遺存度は、約½である。推定底径5cmを測る。外面調整は縦方向のヘラ削りで、内面は、横・縦方向のナデである、外面色調は、淡褐色内面は、赤褐色を呈する。胎土は、細粒を含み、焼成は普通である。

2は壺の下半部であろうと思われる。この遺物は、003住居跡の面床西下から出土したもので、従来004住居跡のものであったものが、003住居跡構築の際上部を削られてしまったのではないかと判断したい。

遺存度は、胴部⅓で推定胴径3.4cmで上半分に炭化物以外は暗褐色で、内面は淡褐色である。内面、外面とも輪積痕をのこし、外面調整は斜方向のヘラ削りで、内面は同様に斜方向のヘラ削りである。胎土は粒砂をかなり含む、焼成は良好である。　　（瀬戸　久夫）




003住居跡カマド実測図




004住居跡炉跡実測図(1/30)

第88図　003・004住居跡カマド・炉跡実測図

004居住跡の炭化材について（第89図）

004住居跡は、火災住居跡で床一面に焼土・炭化材がみられた。しかし前述したように遺物は、持ち去られた状態で土器・石器類の出土は皆無であった。すなわち生活用具を持ち去った後火をはなったような感であった。

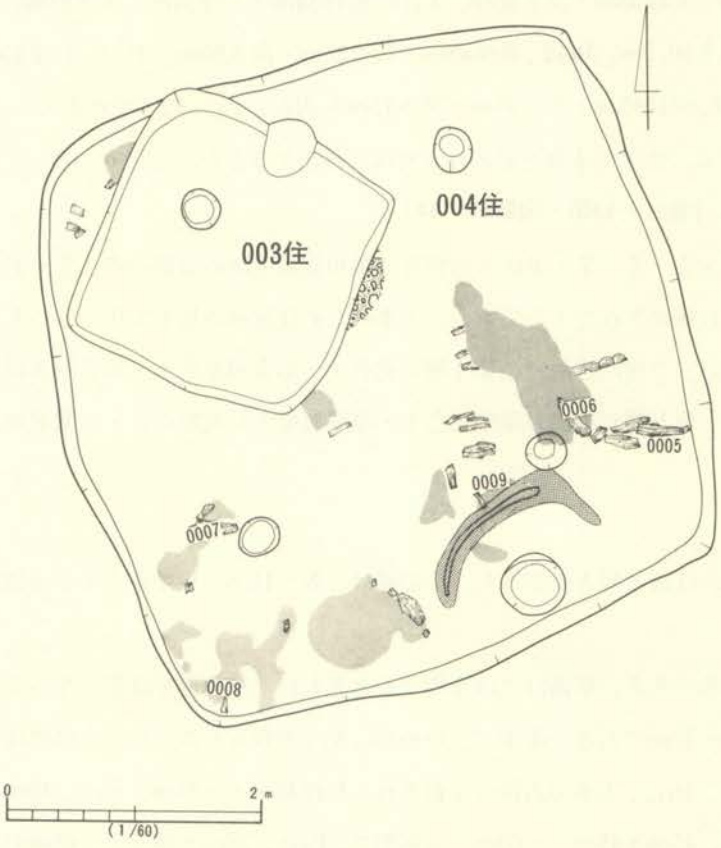
図示したように5か所の炭化物についてサンプルを採集した。それら5点のサンプルの内2点を木炭樹種同定のため筑波大学大学院生千野裕道氏に依頼した。サンプルは、NO、0006, 0009の2点の炭化材であった。千野氏の同定結果は下記の様であった。

一環孔材。複合放射組織をもっている。孔圏外の小道管の断面形は、円形を呈し膜が厚い。大道管の直径は約40μ。年輪界がみられる。

クヌギ　Qvercus acutimassi Carruth　以上0006, 0009両サンプルともに同一樹種である。

以上の分析結果を得た。近年古環境復元の一環として、炭化材による種同定などがおこなわれているが、まださほど報告された例はない。今後このよう試みが必要となってくるだろう。

004住居跡の屋根材全てがクヌギであったろうとは断定できない。また同時期の住居跡から多くのデーターを得ることが必要であろう。それらの畜積によってより古環境の復元ができるのではなかろうか。




第 89 図　００４住居跡炭化物サンプル採収状態図

００４居住跡の炭化材のC[14]測定について

5か所のサンプリングのうち、前述したように0006, 0009は木炭樹種同定に使用し、0005, 0007の2サンプルは、C[14]測定に使用した。C[14]測定は、学習院大学に依頼した。測定結果は下記のとうりである。

| Code NO | 記<br>試　料 | B.P.年代(1950年よりの年数) |
|---|---|---|
| GaK−7405. | Wood f om Heta Site.<br>No.0005<br>201−003.　10/8. | 2190±120<br>240 B.C. |
| GaK−7406. | Wood from Heta Site.<br>No.0007.<br>201−003.　10/8. | 1450±90<br>A.D. 500 |

（5）　００５（第90図・図版69）

２－Ｇ、２－Ｈ、２－Ｉグリッドにかけて検出され、第Ⅲ層上面でピット列だけ確認されたものである。プランは確認できなかった。出土遺物も検出しなかった。

ピットは、８個ほぼ円形にならび、ほぼ北方向のＰ１・Ｐ５は4.5ｍを測る。東西方向のＰ３・Ｐ７は５ｍを測る。Ｐ１は、長径45cm・短径38cm・深さ70cm、Ｐ２は、長径35cm・短径30cm・深さ75cm、Ｐ３は、長径35cm・短径33cm・深さ65cm、Ｐ４は、長径34cm・短径34cm・深さ65cm、Ｐ５は、長径34cm・短径27cm・深さ50.5cm、Ｐ６は、長径43cm・短径35cm・深さ80cm、Ｐ７は、長径43cm・短径40cm・深さ59cm、Ｐ８は、長径45cm・短径35cm・深さ75cmを測る。Ｐ２～Ｐ６までの各ピットの間隔は、約1.9～2.0ｍを測る。焼土や床面と思われる所は、検出できなかった。　（鈴木　若雄）

（6）　００６（第91～93図・図版69・84）

調査区域の４・５・６・７・８区の西側を工事用仮設道路の設置の際、７－Ｆ・８－Ｆトレンチにかけて削られ確認されたものである。工事のため住居跡の½を欠損している。

住居跡の埋土は、７層に分かれ、第Ⅰ層暗褐色土・第Ⅱ層褐色土・第Ⅲ層黒褐色土・第Ⅳ層ローム粒混褐色土・第Ⅴ層ローム粒混暗褐色土・第Ⅵ層焼土粒混黒褐色・第Ⅶ層焼土粒混褐色土である。

〈遺構〉

平面プランは、ほぼ方形と推測され、中心軸は、Ｎ－11.5－Ｗで現存する南辺は3.7ｍ、東辺は４ｍを測る。

壁面はほぼ垂直である。壁溝はほぼ全周すると思われ北壁の部分は広くなっている。幅15cm～10cm・深さ５cm～６cmである。床面は、中央部に粘土の残置がみられ、その他は平坦である。ピットは４本あり、Ｐ１は、工事用道路に半截され、長径45cm・－34cm、Ｐ２は、45cm×40cm・－60cmの円形で、Ｐ３は、45cm×45cm・－60cm、の円形で、Ｐ４は、38cm×38cm・－65cmの円形である。

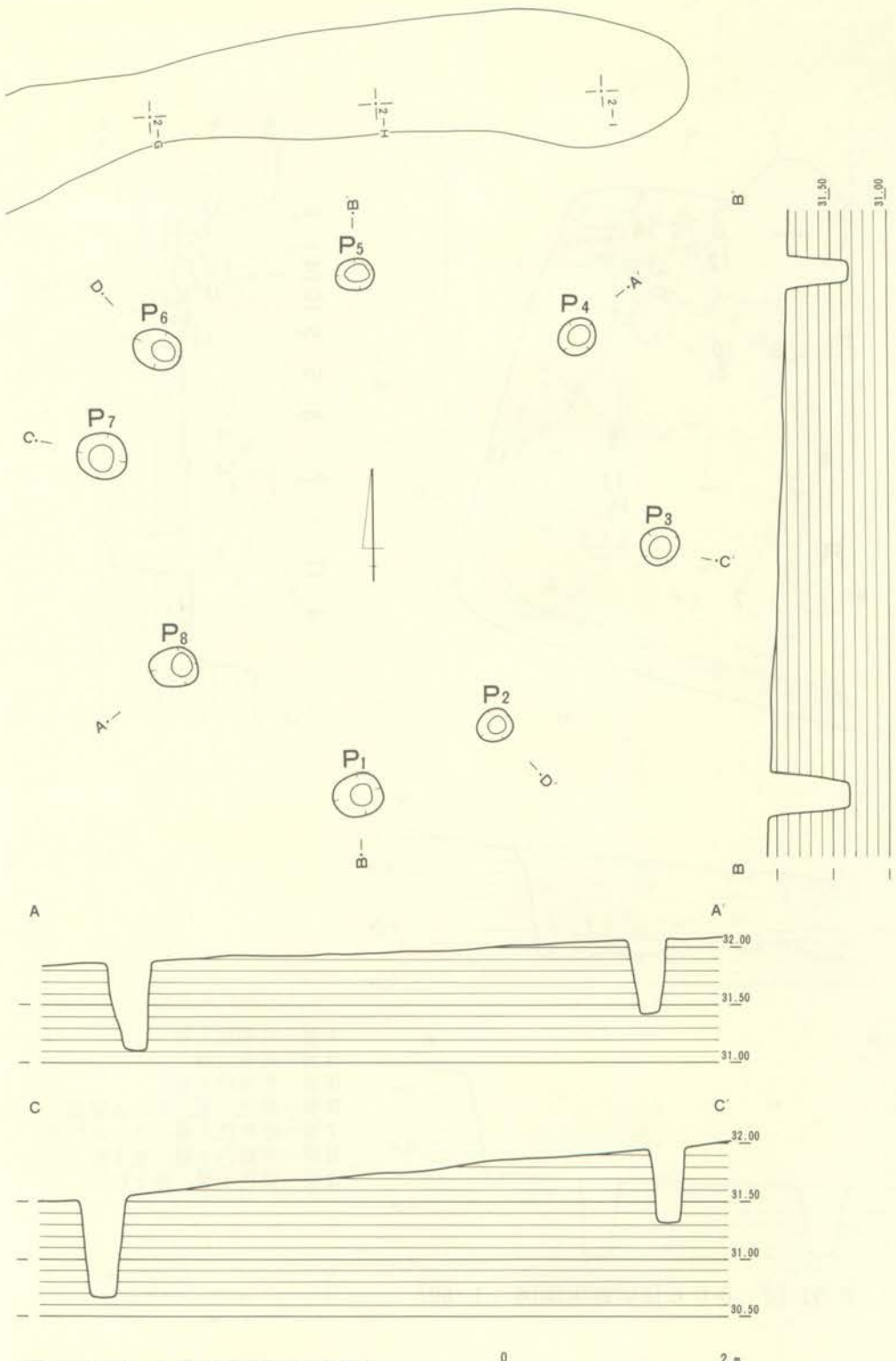
北壁の中央部にカマドが位置し、西側袖部は、破壊されていた。

〈カマド〉

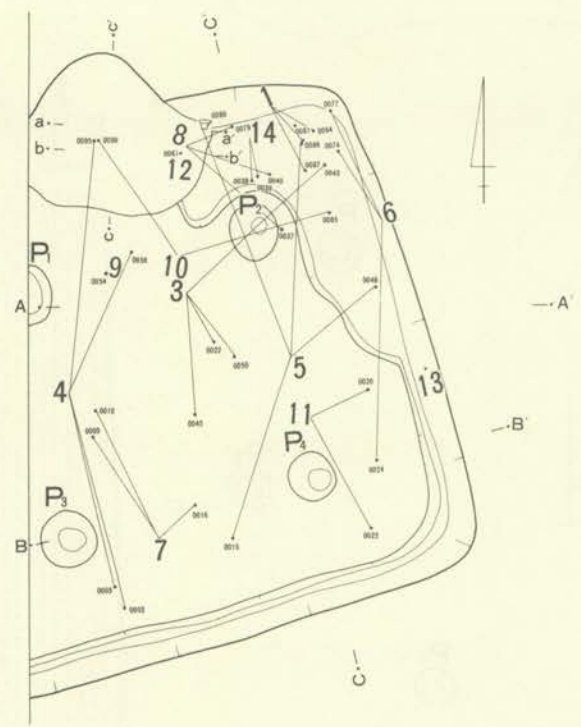
遺存状況は、西側の袖部を壊された以外は良好である。位置は北壁の中央に位置し、構材は、褐色粘土で壁への切り込みは、三角形を呈し80cm×45cmを測る。袖部は、床面に直接粘土を置き、右幅１ｍ・高さ１ｍを測る。焚出部は、幅70cm・深さ10cm，燃焼部はわずかに上っており、70cm×75cmを測り、火床の規模は明確ではない。煙道部はほぼ直線的に立ちあがり、長さ1.45ｍ、昇角62°前後である。煙出部は赤褐色に円形を呈しており35cm×35cmであった。天井部は後面の一部が遺存している。壁溝は両脇で切れる。右袖に甕の口縁部が出土した。

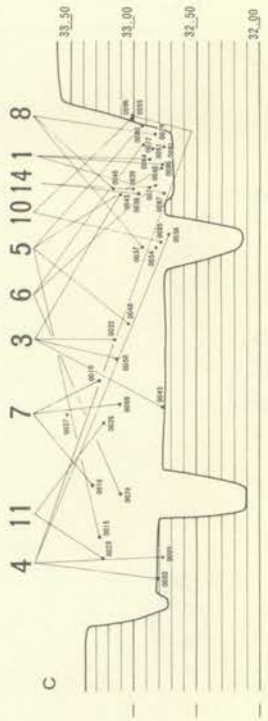
〈遺物〉

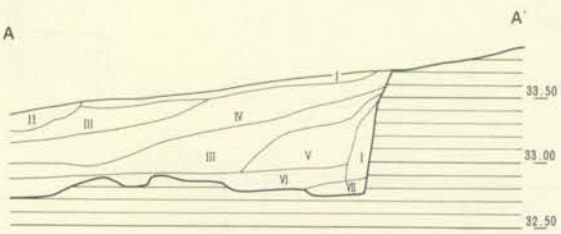
床面の全体的に出土したが、特にカマドの右側に集中していた。

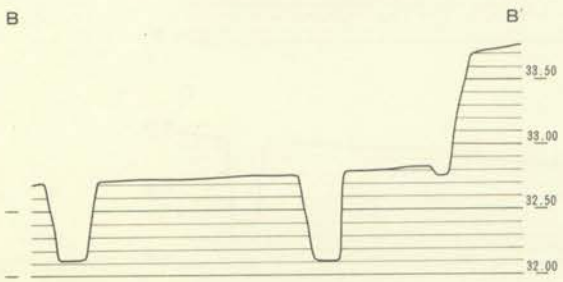



第 90 図　００５住居跡実測図



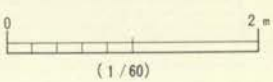



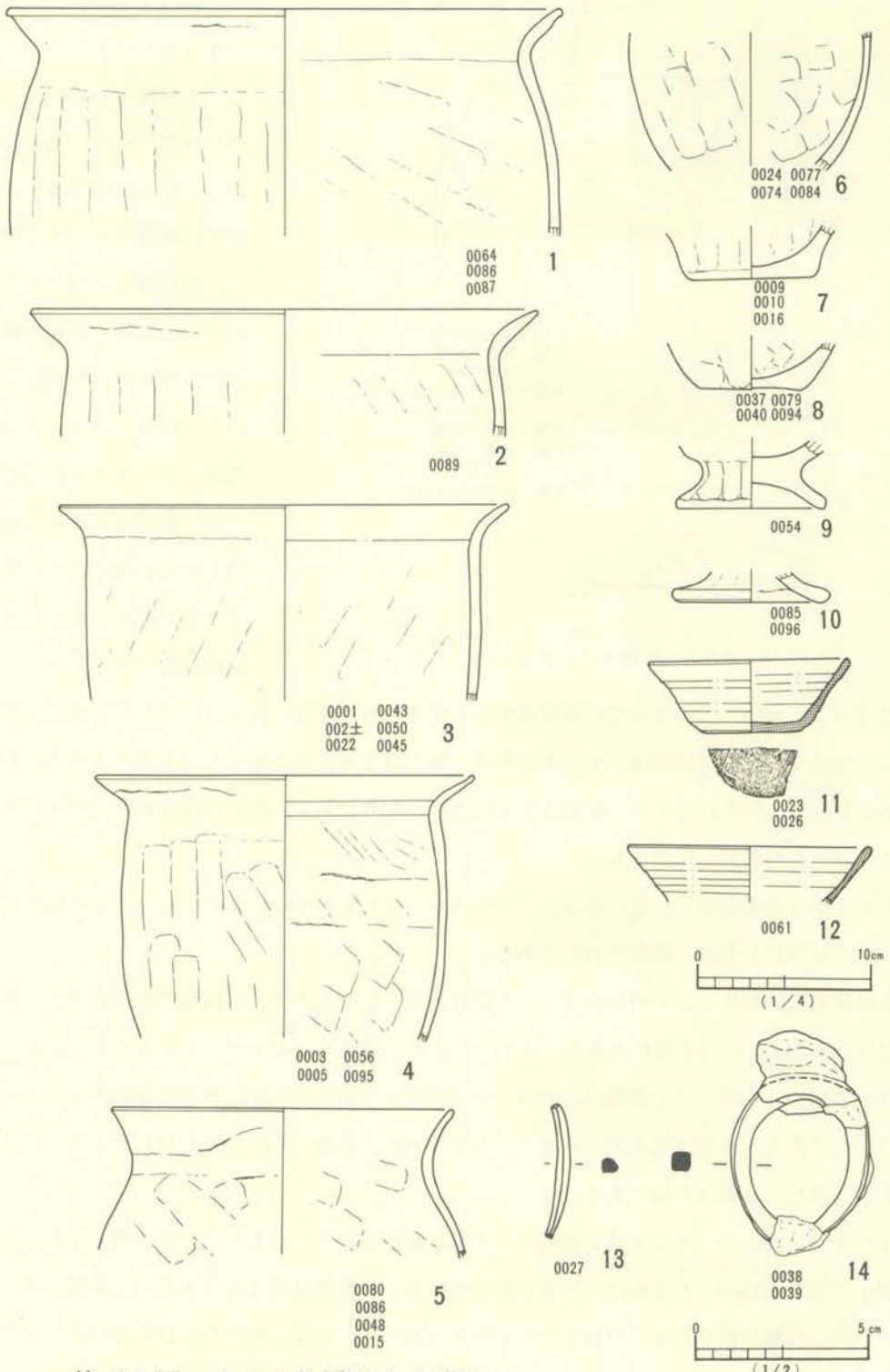



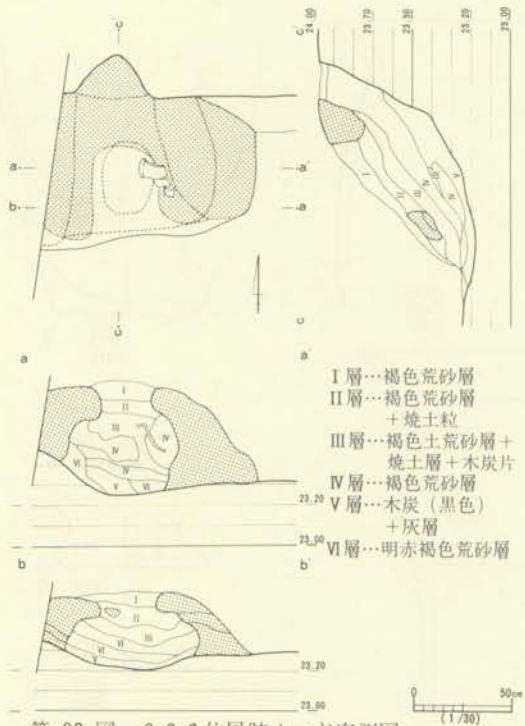

第 91 図　００６住居跡実測図（１/60）

Ⅰ層…暗褐色土層
Ⅱ層…褐色土層
Ⅲ層…黒褐色土層
Ⅳ層…褐色土層，ローム粒混
Ⅴ層…暗褐色土層，ローム粒混
Ⅵ層…黒褐色土層，焼土粒混
Ⅶ層…褐色土層，焼土粒混






第 92 図　００６住居跡出土遺物



第 93 図　００６住居跡カマド実測図

甕（１～９）

１はカマド右側の広くなっている壁溝中から出土したもの口縁部の破片で¼遺存しており、推定口径32cmで大型の甕で口縁部が「く」形に開く形で、口唇部に面取りしてあり、わずかに返る。外面口縁部の調整は横ナデ、胴部は下方向のヘラ削りである。内面口縁部は、ヘラナデをおこなっている。色調は外面が暗褐色、内面が褐色を呈している。胎土は細い粒子を多く含み、焼成は良好である。

２はカマド右側の広くなっている壁溝中から出土した口縁部の破片で、約⅛遺存する。推定口径は、29cmである。口縁部は、「く」形に開き、胴部はふくらみをもたないものであろう。口縁部の外面整形は、横方向のナデ、胴部は下方向のヘラ削りである。内面口縁は横方向のヘラナデをおこなっており胴部も同様である。

外面色調は赤褐色を呈しているが、二次的火をうけたものではなかろうか。内面は暗褐色である。胎土は細粒を含み、焼成は良好である。

３は床面上の破片と、中層から出土した破片と接合したもので、口縁部で¼遺存する。推定口径は26cmを測る。ほぼ直線的な胴部をもつと思われ、ゆるやかなカーブをもちながら開く、外面口縁部の調整は、横ナデで胴部は、斜方向のヘラ削りである。内面は外面同様横ナデ、斜方向のヘラ削りである。色調は二次的な火をうけたと思われ、表裏とも暗褐色を呈している。胎土は砂粒を多く含む。焼成は普通である。

４はカマド内出土、カマド焚口部近く、南側床面から出土したもので、約½遺存する。推定口径22cm、遺存高15cm、わずかにふくらむ胴部をもち、口縁部は角度の大きな「く」を呈する。口縁部・胴部には輪積痕を残す。口縁部の外面整形は横ナデ、胴部は縦方向及び斜方向のヘラ削りをおこなっている。内面口縁は外面と同様横ナデ、胴部はヘラナデ斜方向の削りをおこなっている。

色調は内外面とも赤褐色である。胎土は砂粒を多く含み、焼成は良好である。

５はカマド右袖上、東壁壁溝、南側床面上より出土した破片が接合したもので約⅙遺存する。

この甕は、胴部のかなりふくらむ形で口縁部はゆるるやかに外反する。口縁部外面調整はていねいな横ナデ、胴部は横および斜方向のヘラ削りである。内外も面面と同様ていねいな横ナデ、胴部のヘラ削りなどの調整である。色調は内外面とも赤褐色を呈し、胎土は粒子を多く含むもので、焼成は良好である。

6はカマド右側の広い壁溝、南東部分から出土した破片が接合した甕の胴下部で、約½である。推定胴径14cmである。調整は表裏ともヘラ削り調整で、色調は外面が暗褐色を呈し、二次的火をうけた可能性も考えられる。内面は暗褐色である。胎土は粒子を多く含み焼成は良好である。

7は南側の部分の中層から出土したものであり、甕の底部である。底径7cmを測り調整をヘラ削り、色調は外面が黒褐色で内面は暗褐色を呈する。胎土は粒子を多く含み、焼成は良好である。内外面とも器面が荒れている。

8はカマド右側周辺から出土した破片が接合した甕の底部で底径6cmを測る。表面はヘラによる荒い調整がのこり内面もヘラ痕が見られる。底部の調整はヘラによる一方向からの削り調整である。色調は内外とも赤褐色で、胎土は粒子を多く含むもので、焼成は良好である。

9はカマドの焚口部付近で出土した台付甕の底部と思われ、底径8.5cmを測る。器面は荒い面取りで調整されている。色調は内外面とも赤褐色を呈し、胎土は細い粒子を含み、焼成は普通である。

高杯（10）

10はカマド内・カマド右側壁溝中から出土した破片が接合したもので、高杯の底部と思われ底径8.5cmを測る。裾部がわずかにあがるものと思われる。外面はヘラによる削りをおこなわれている。色調はカマドの中の出土からみてやはり二次的な火をうけていると思われ暗褐色を呈する。胎土は砂粒を多く含み、焼成は普通である。表裏とも二次的火をうけ器面が荒れている、

坏（11～12）

11は東側の中層から出土し須恵器の杯である。⅓遺存し推定口径11.5cm、器高4.2cm、底径5.5cmを測る。体部はゆるやかに広がり口唇部はわずかに肥厚する。調整は水引きで底部は切り離し後ヘラ削りをおこない整形している、底部近くの体部はヘラにより整形している。内面は水引きにより調整をおこなっている。色調は内外面とも青灰色を呈し、胎土は精選され焼成は良好である

12はカマド右袖上と覆上中層から出土した破片が接合した須恵器の杯で、⅓遺存する。推定口径14cm測る。調整は水引きで内外面ともていねいな作りである。色調は内外面とも青灰色である。胎土は精選され焼成は良好である。

金属製品（13～14）

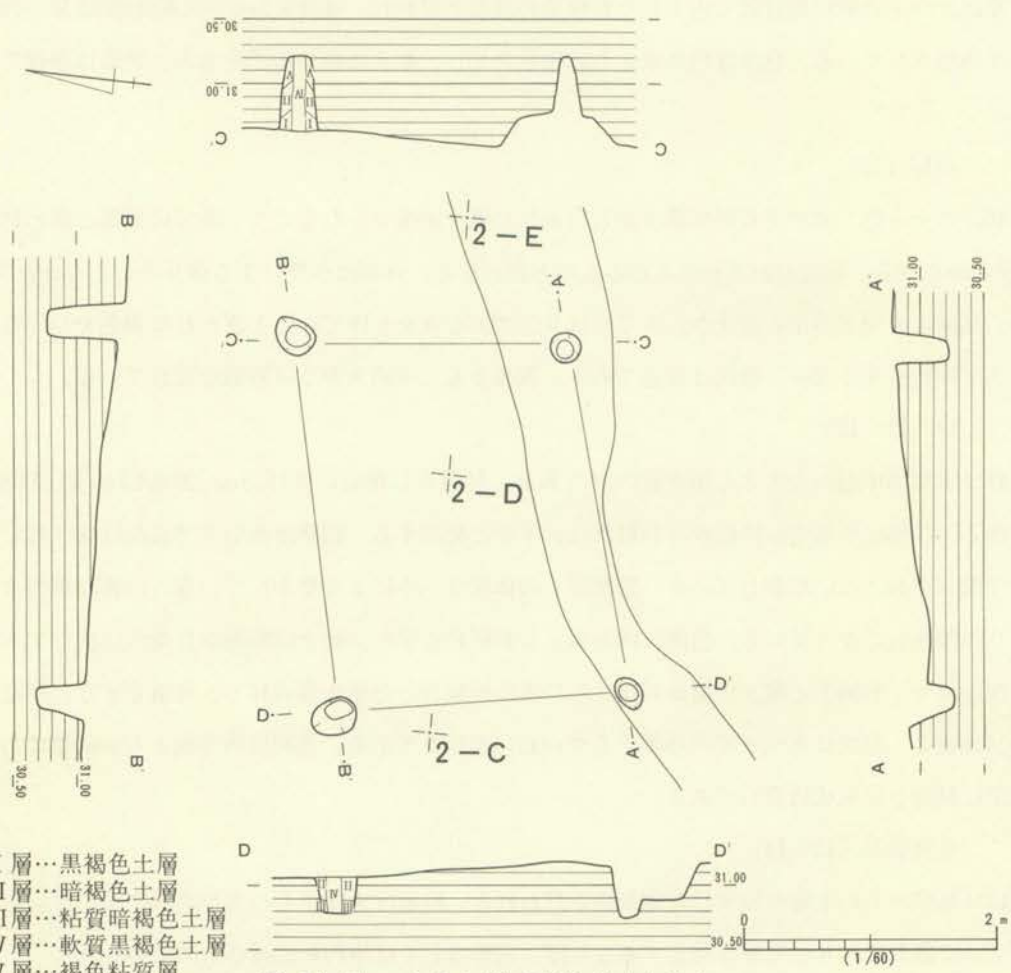
13は東壁近くの上層で出土した銅製品と思われる。断面は丸味をもつ変形△形を呈している。わずかに弧形でありこれから想定するならば、円形もしくは半円形に近いものであろう。

14はカマド右側の壁溝内から出土したもので、卵形を呈した鉄製品である。断面形は、「口」形で下方がわずかに広くなっている。上方はサビのため観察することはできない。長外径4.8cm、長内径3.8cm、短外径4cm、短内径2.8cm、厚さ0.5cmを測る。（瀬戸　久夫）

### 2項　掘立建物跡

#### （1）　001（第94図・図版70）

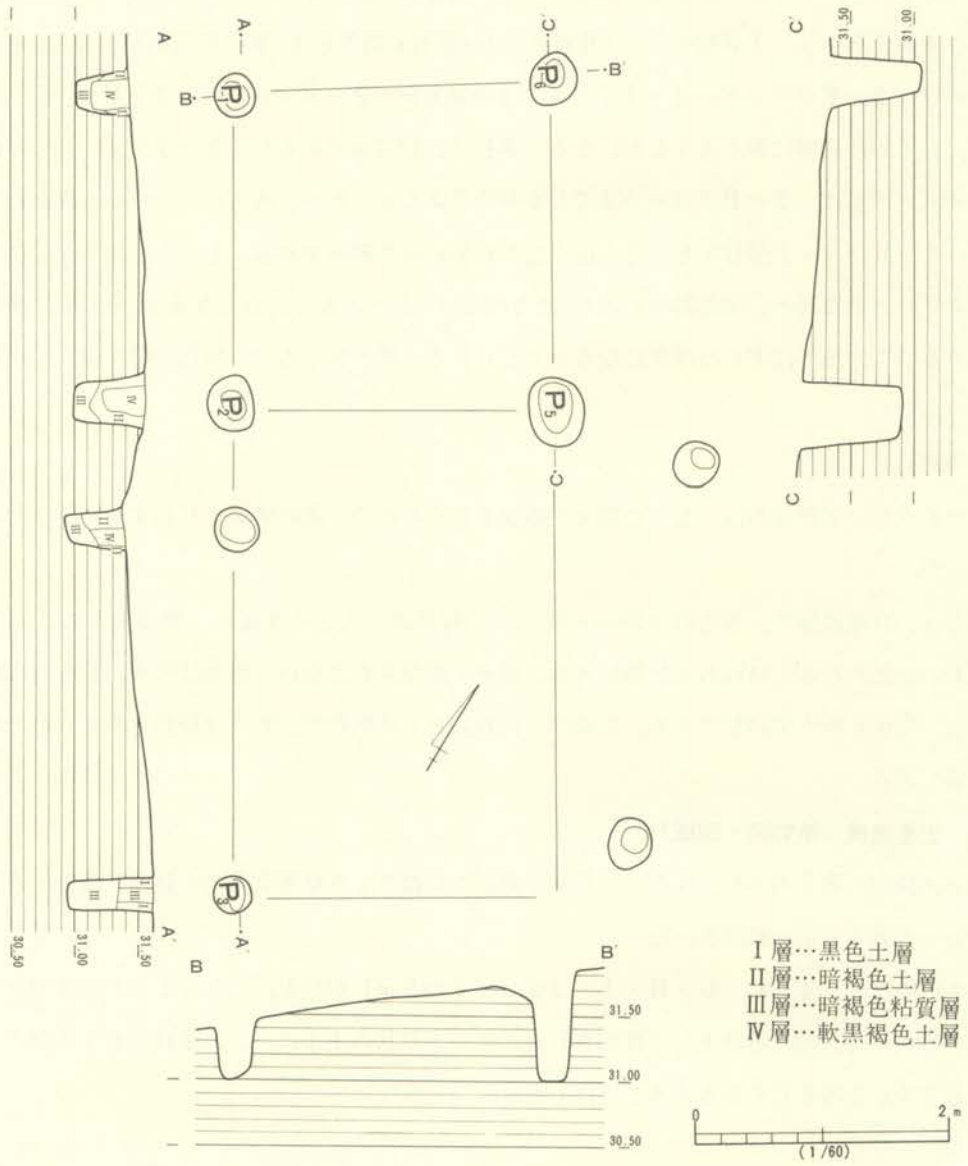
1－D・2－D・1－E・2－Eグリッドのソフトローム面で確認された。$P_2$と$P_3$は、溝状遺構中で検出した。$P_1$は長径35cm・短径30cm・深さ30cmを測り、ほぼ垂直に穿たれている。$P_2$は溝中に切り込んでおり長径25cm・短径20cm・深さ35cmを測り、ほぼ垂直に穿たれている。$P_3$も溝中に在り長径25cm・短径25cm・深さ45cmを測り、ほぼ垂直に穿たれているが、$P_2$・$P_3$と溝中であるので本来の規模は不明である。$P_4$は長径35cm・短径28cm・深さ60cmを測る。ピット中の埋土は、5層にわかれ第Ⅰ層黒褐色土・第Ⅱ層暗褐色土・第Ⅲ層粘質暗褐色・第Ⅳ層軟質黒褐色土・第Ⅴ褐色粘質土である。$P_1$・$P_2$の距離は2.3m、$P_2$・$P_3$は2.7m、$P_3$・$P_4$は2.2m $P_4$・$P_1$は2.85mを測る。主軸方向はほぼ東西を指す。




第 94 図　001 掘立建物跡実測図

(2) 002 (第95図・図版70)

2－D・2－E・2－Fグリッドで確認されたもので、ピットは5本検出できたが1本不明であった。$P_1$は長径35cm・短径33cm・深さ43cmを測り垂直に穿たれている。$P_2$は長径40cm・短径38cm・深さ55cmで垂直に穿たれている。$P_3$は長径30cm・短径30cm・深さ70cmを測　。このピットは深く穿たれている。$P_5$は長径53cm・短径 5cm・深さ80cmを測る。$P_6$は長径40cm・短径35cm・深さ75cmを測る。$P_1$～$P_2$の距離は2.4m・$P_2$～$P_3$は3.8m・$P_5$～$P_6$は2.6m・$P_6$～$P_1$は2.5mを測る。主軸方向はN－35°－Eである。ピットの間隔も画一性でなく建物跡といえるかどうか




第 95 図　002掘立建物跡実測図

不明である。調査時の不手際も否めないものがあろう。ピットの土層は、4層で第Ⅰ層黒色土・第Ⅱ層暗褐色土・第Ⅲ層暗褐色粘質層・第Ⅳ層軟黒褐色土である。しかしP1・P2については掘込みから柱のぬき取り痕であろうと思われる軟黒色土を確認した。しかし明瞭な判定はできない。

（鈴木　若雄）

### 3項　溝遺構

#### （1）　001（第96・97図・図版7）

〈遺構〉

1・2区を境にするように検出されたもので、第Ⅱ層下部で暗褐色の落ち込みを確認した。埋土は、4層にわかれ、Ⅰ層暗褐色土・Ⅱ層黒色土・Ⅲ層粘質黒色土・Ⅳ層粘質褐色土層となる。溝の方向は、2－Fグリッド～2－Iグリッドまで東方向で2－Bグリッド～2～Eグリッドの部分は、わずかに北側に寄るような形になる。溝長は、13.7mであるが、2－Iグリッドで終息する。調査区内では、2－Bグリッドまでしか検出できなかったが、西方向にのびると思われる。溝は、2－Hグリッド部分がもっとも広くなり1.5m、深さ50cmを測る。もっとも狭くなる部分は、2－Pグリッドで70cm、深さ30cmを測り、西方向にいくにしたがって浅くなるが、地形的に西方向に落ちるので、地形に準じた深さになると考えられる、溝の掘込みは、幅広い凹を呈している。

〈遺物〉

1.須恵器

2－Eグリッド付近の浅くなった部分で確認されたもので、溝の底面よりわずかに浮いた状態であった。

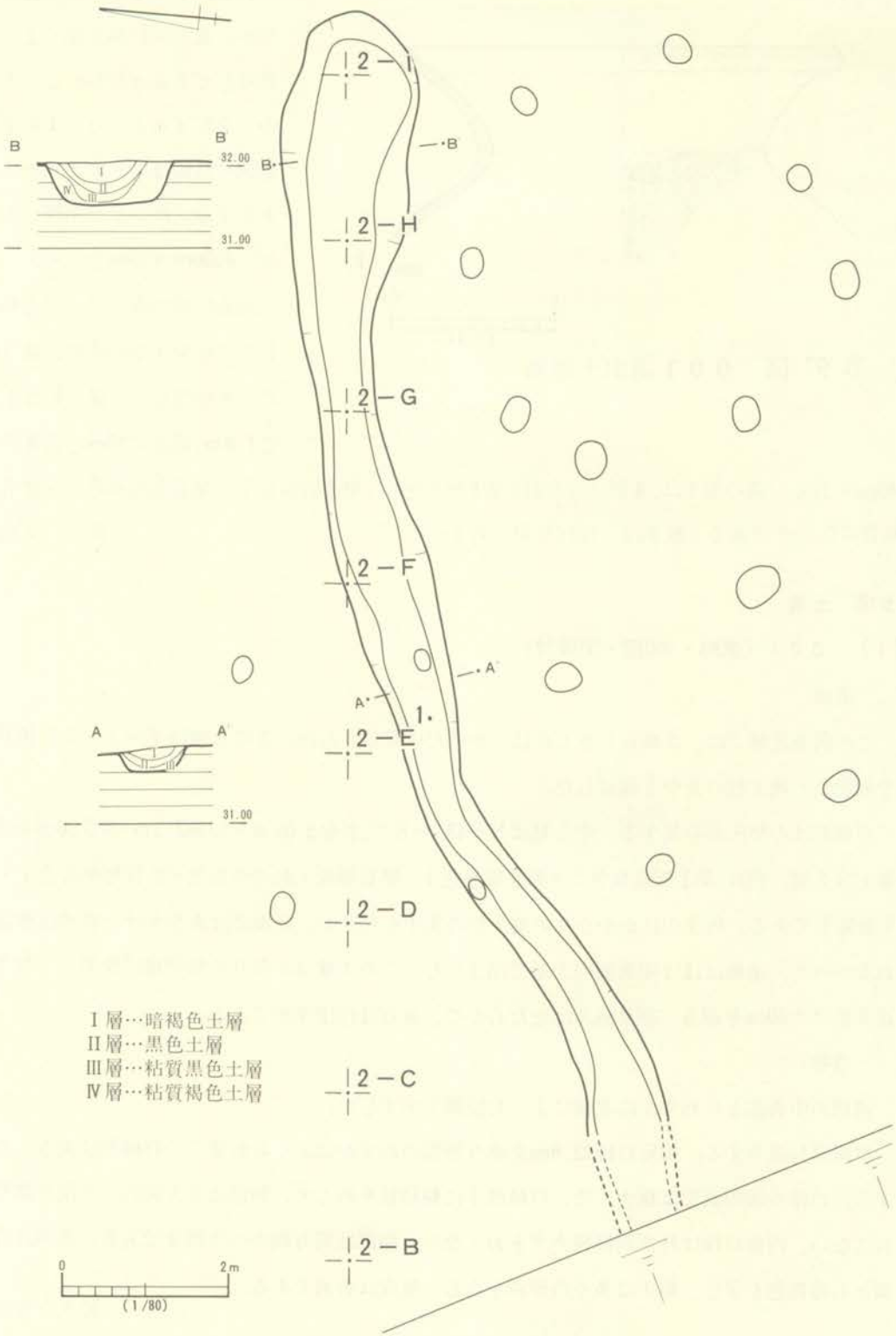
遺存は、口縁部½で、推定口径26cmを測る。口縁部は、大きく外反し、肥厚である。肩部は張るものと思われる。口縁および頸部外面は横ナデ調整をおこない、肩部は叩き調整をおこなっている。内面も横ナデ調整である。色調は、内外面とも淡褐色で、胎土は砂粒を多く含む、焼成は普通である。

（鈴木　若雄）

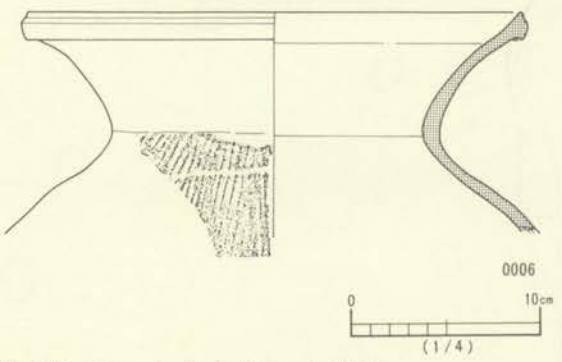
### 4項　土塁遺構（第98図・図版71）

調査区域内の雑草刈の時、小さな土塁状が確認され踏査した結果東方の山林部と西方向の谷部にむかってめぐる事が確認された。

調査区内には、4－F・G・H・I・Jグリッドの5mしか対象にできなかったがこの5m部分も立木伐採時、搬出道路として使用されたので、土塁状の土手は、こわされており山林内に遺存する土手から推定して調査することにした。




第 96 図　００１溝実測図




第 97 図　００１溝出土遺物

測量図を見るかぎりでは、わずかに北方向に弧を描くように築造してあると思われる。土塁のすそ幅４ｍを測り、上幅１ｍを測り断面は「へ」のカマボコ形を呈する。高さは、明確でないが、約50cm～80cmを測る。

調査区域の５グリッドを精査しその結果土塁の南側に溝（堀？）を検出した。溝の幅は上部で1.8ｍ、底部で35cm、深さ35～40cmを測る。溝の埋土は、４層に分かれ、第Ⅰ層黒色土・第Ⅱ層褐色土・第Ⅲ層暗褐色土・第Ⅳ層粘質暗褐色土である。底面は、ほぼ平坦である。（瀬戸　久夫）

### ５項　土壙

#### （１）　００１（第99・100図・図版72）

〈遺構〉

この調査区域では、土壙らしきものは一か所だけ確認された。この土壙は７－Ｊ・Ｉの第Ⅱ層で黒色土・焼土粒の集中を確認した。

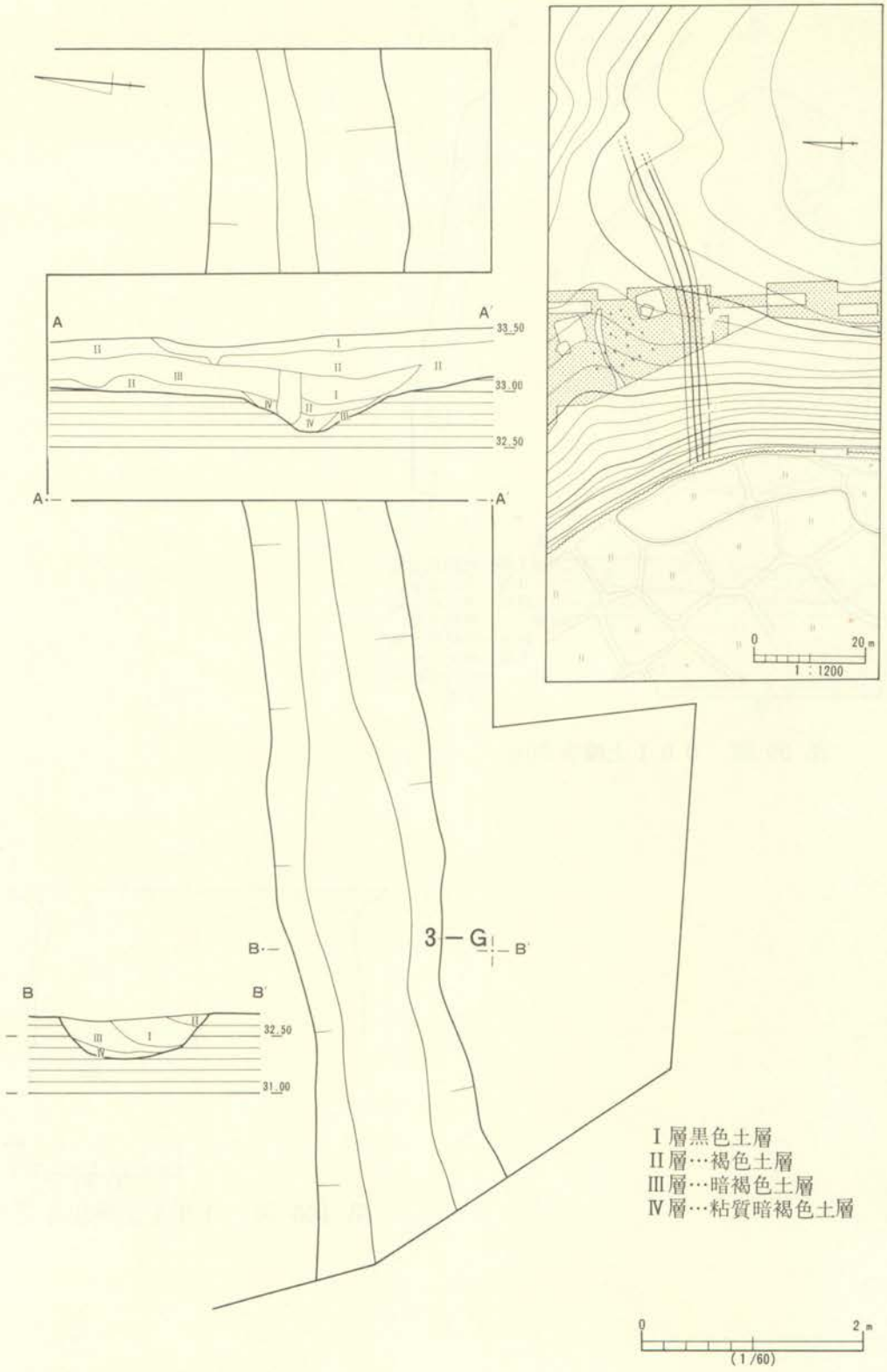
平面形は不整円形を呈する。中心軸はＮ－45°－Ｅで、長軸3.05ｍ・短軸2.5ｍ・深さ30cmを測る。埋土は５層に別れ、第Ⅰ層暗褐色土・第Ⅱ層黒色土・第Ⅲ層焼土粒混暗褐色・第Ⅳ層明褐色土・第Ⅴ層焼土である。埋土中にかかなりの焼土粒の集中を見たが、底面には火をうけた痕跡は確認されなかった。遺物はほぼ中央部の上層で出土した。この土壙はかなりの傾斜地に位置しており、比高差は±80cmを測る。掘り込みはなだらかで、底面はほぼ平坦である。

〈遺物〉

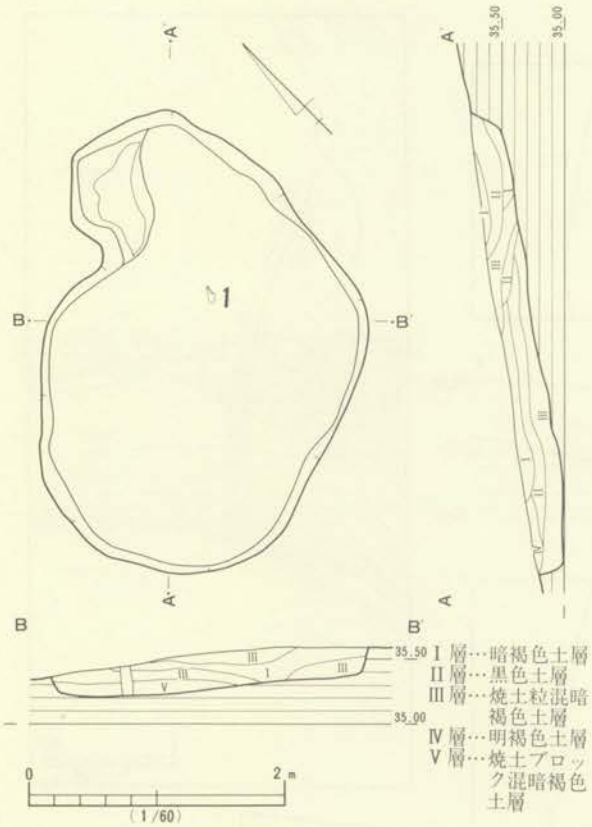
遺構の中央部よりわずかに北側によった位置で出土した。

口縁部⅕遺存する。推定口径22.8cmを測り胴部のわずかにふくらむ甕で、口縁部は大きく外反する。口縁外面の調整は横ナデで、口縁部下に輪積痕をのこす。胴部は下方向のヘラ削り調整をおこない、内面口縁は外面同様横ナデをおこない、胴部は斜方向のヘラ削りである。色調は内外面とも暗褐色を呈し、胎土は多くの砂粒を含む、焼成は普通である。

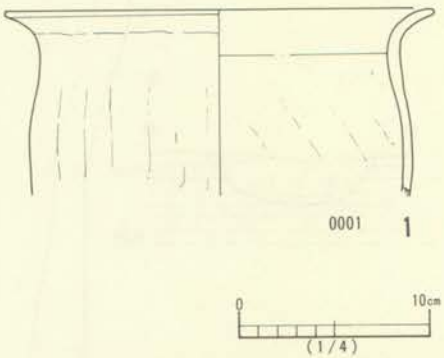
（鈴木　若雄）




第 98 図　土塁遺構実測図




第 99 図　００１土壙実測図

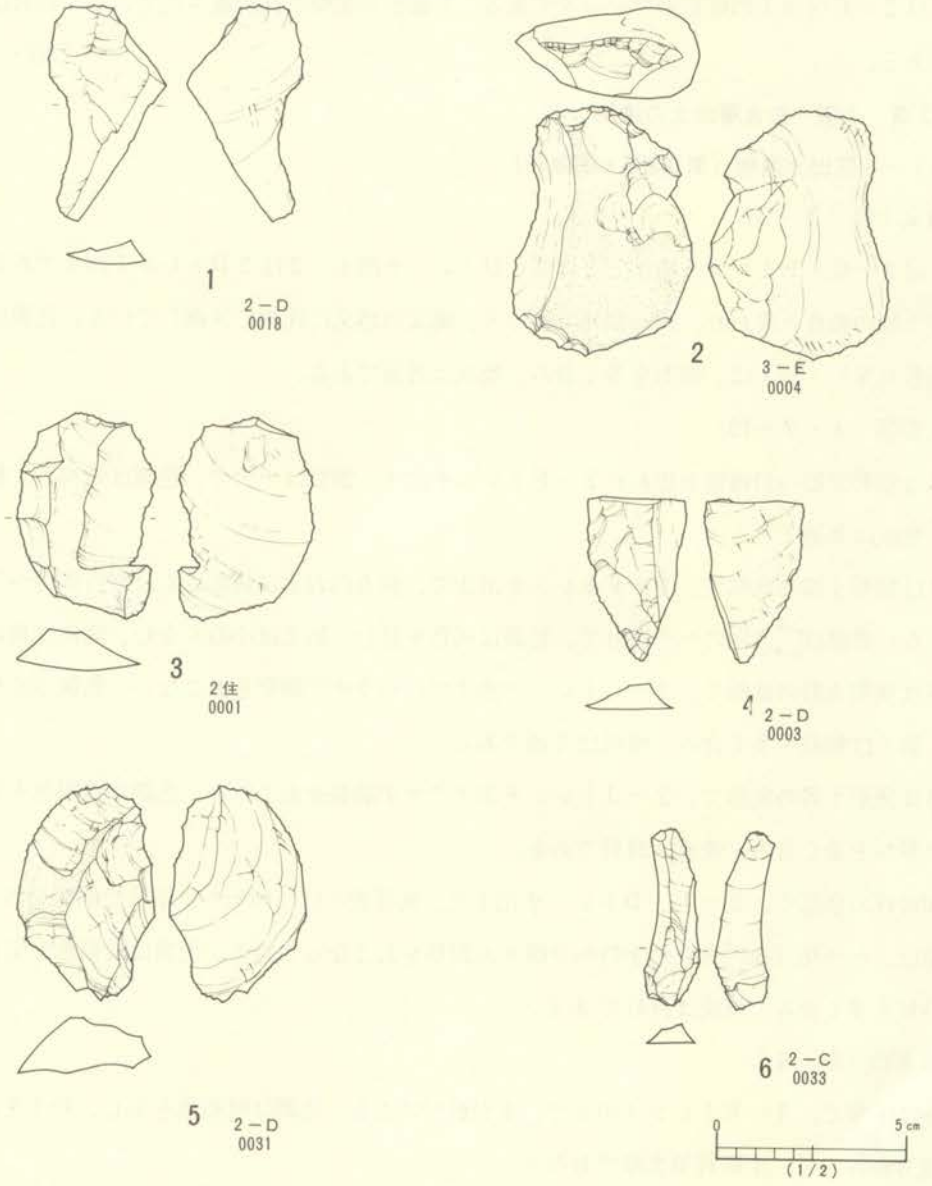



第 100 図　００１土壙出土遺物

### 6項　先土器時代遺物（第101図・図版83）

先土器時代の遺物は、2－D・2－Cを中心とした区から出土しており総数6点をかぞえた。出土地点は谷に傾斜しはじめる場所で、土層は第二黒色帯直上であった。谷に傾斜しはじめる所のためハードローム層の厚さが薄く、表土・ソフトローム・ハードローム・第二黒色帯という層序であった。

1は2－D区から出土した縦形のフレークで、上面から剝離されたものと思われ、石質は硬質の粘板岩である。




第 101 図　先土器時代遺物

2は3－E区から出土したもので、表皮を残し、先端部に刃部がみられる。母岩を打ちかいたあと、この剥片に刃部を付し利用したものであろう。スクレイパーと考えられ、石質はチャートである。

3は002住居跡調査時覆土の上部から出土したものである。中形の縦形のフレークであり、上部から加撃され剥離されたものと思われ、石質は粘板岩である。

4は2－D区出土でやはり縦形のフレークである。加工痕はみられない。石質は粘板岩である。

5は2－D区出土のフレークで、表皮をのこすものでかなり不整形である。石質はチャートである。

6は2－C区出土の縦形のフレークである。上面から加撃され剥離されている。石質はチャートである。（瀬戸　久夫）

**7項　7項　包含層出土の遺物**

**(1) 1～4区出土遺物（第102図・図版86）**

縄文土器（1～3）

1は2－C・Eトレンチ出土、2は2－Dトレンチ出土、3は2Dトレンチ出土である。甕形土器の破片と思われ、同一個体であろう、縄文の地文に沈線で区画している。色調は、全て赤褐色を呈し、胎土は、細石を多く含み、焼成は普通である。

土器師（4・7～10）

4は壺形土器の口縁部と思われ2－Eトレンチ出土、調整はナデで、色調は赤褐色、胎土は荒く、焼成は普通である。

7は甕形土器の底部で、1－Fトレンチ出土で、斜方向および底部近くは横方向のヘラ削りをおこない底部は↕方向のヘラ削りで、色調は褐色を呈し、胎土は小石を含む、焼成は良好である。

8は甕形土器の底部で、2－Cトレンチ出土で、ヘラナデ調整をおこない、色調は赤褐色を呈し、胎土は細粒を多く含み、焼成は普通である。

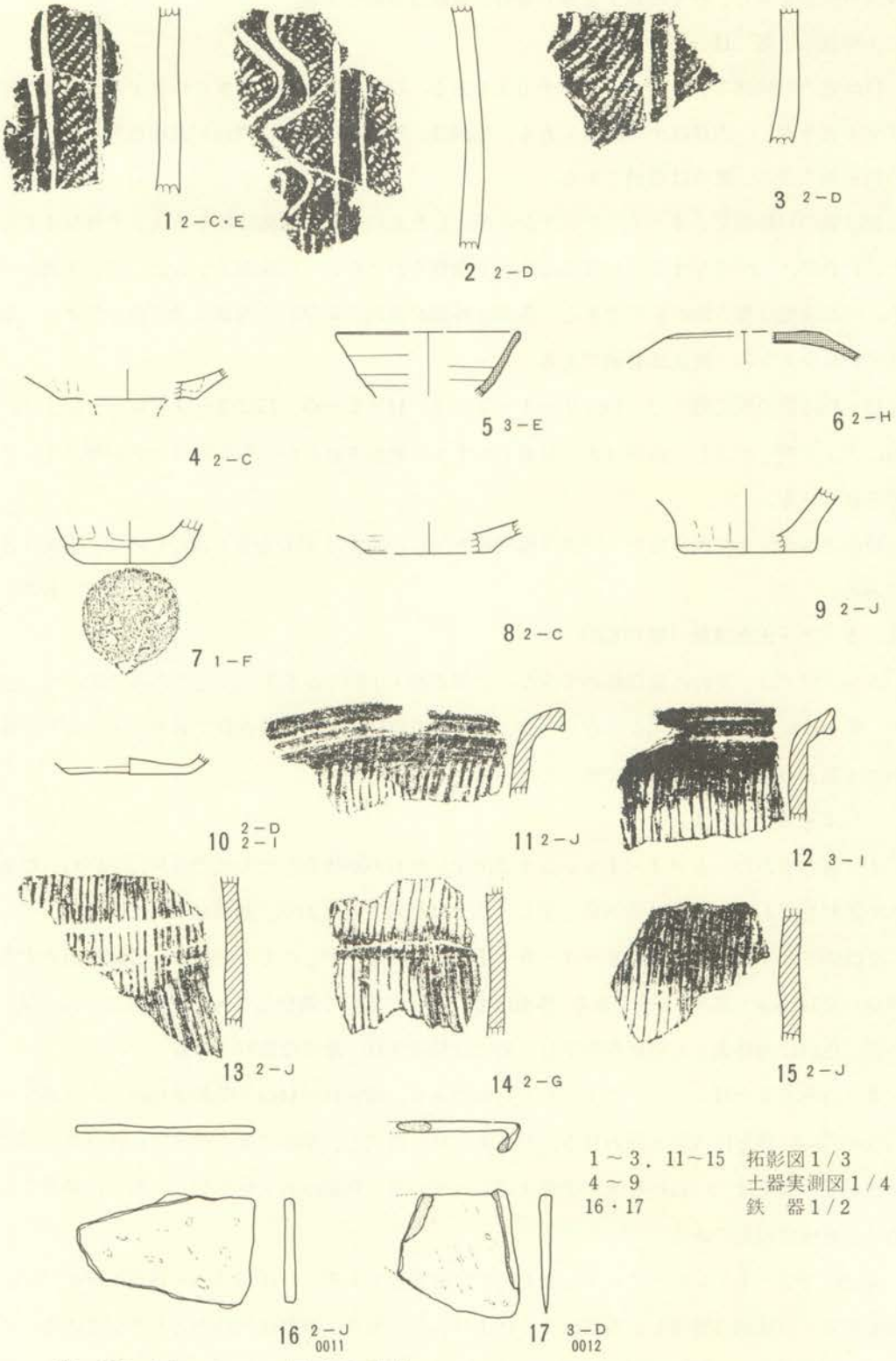
9は甕形土器の底部で、2－Jトレンチ出土でナデ調整をおこない、色調は淡褐色を呈し、胎土は砂粒を多く含み、焼成は良好である。

10は坏の底部で、2－I、Dトレンチ出土で、底部近くは、回転ヘラ削りで調整をおこない、底部は、ヘラ切り後↕方向の手持ヘラ削りの調整をおこなっている。色調は暗褐色を呈し、胎土は砂粒を多く含み、焼成は良好である。

須恵器（5・6）

5は坏片で、3－Eトレンチ出土で、水引痕がのこる、色調は暗褐色を呈し、粒子を多く含み焼成等からみて、土師質須恵器であろう。

6は坏蓋片で、2－Hトレンチ出土で調整は水引きで、天井部付近は回転ヘラ削りである。色




1～3，11～15　拓影図1／3
4～9　土器実測図1／4
16・17　鉄　器1／2

第 102 図　1～4区出土遺物

調は青灰色を呈し、胎土は粒子を多く含む、焼成は良好である。

土師質須恵器（11～15）

11は甕の口縁部で、2－Jトレンチ出土である。口縁部は短かく大きく外反する。口縁部下にタタキ痕を有し、内面はナデ調整である。色調は、外面が暗褐色、内面が黒褐色を呈し、胎土は砂粒を多く含み、焼成は普通である。

12は甕の口縁部で、3－Iトレンチから出土したもので、口縁部は短かく大きく外反するもので、口唇部は「コ」を呈する。口縁部は横ナデ調整をおこない、口縁部下からは、タタキ痕がのこる。内面調整は横方向のナデである。色調は外面が黒灰色を呈し、内面は淡褐色を呈する。胎土は砂粒を多く含み、焼成は普通である。

13～15は甕の胴部破片で、13は2－I・2－J、14は2－G、15は2－Jトレンチ出土で、外面にタタキ痕をのこし、内面はあて具痕もかすかに観取されるが、横方向のナデ調整によって整形されている。

色調は外面は全て黒灰色を、内面は暗褐色を呈し、胎土は砂粒を多く含むもので、焼成は普通である。（鈴木　若雄）

(2)　5～7区出土遺物（第103図）

5～7区では、遺物の量は極めて少なく、須恵器・土師等が若干出土したのみであった。しかし、5～6区の東側に古墳が存在するが、送電線の鉄柱建設で破壊されており、それらと関係のあると思われるものがこの区で出土している。

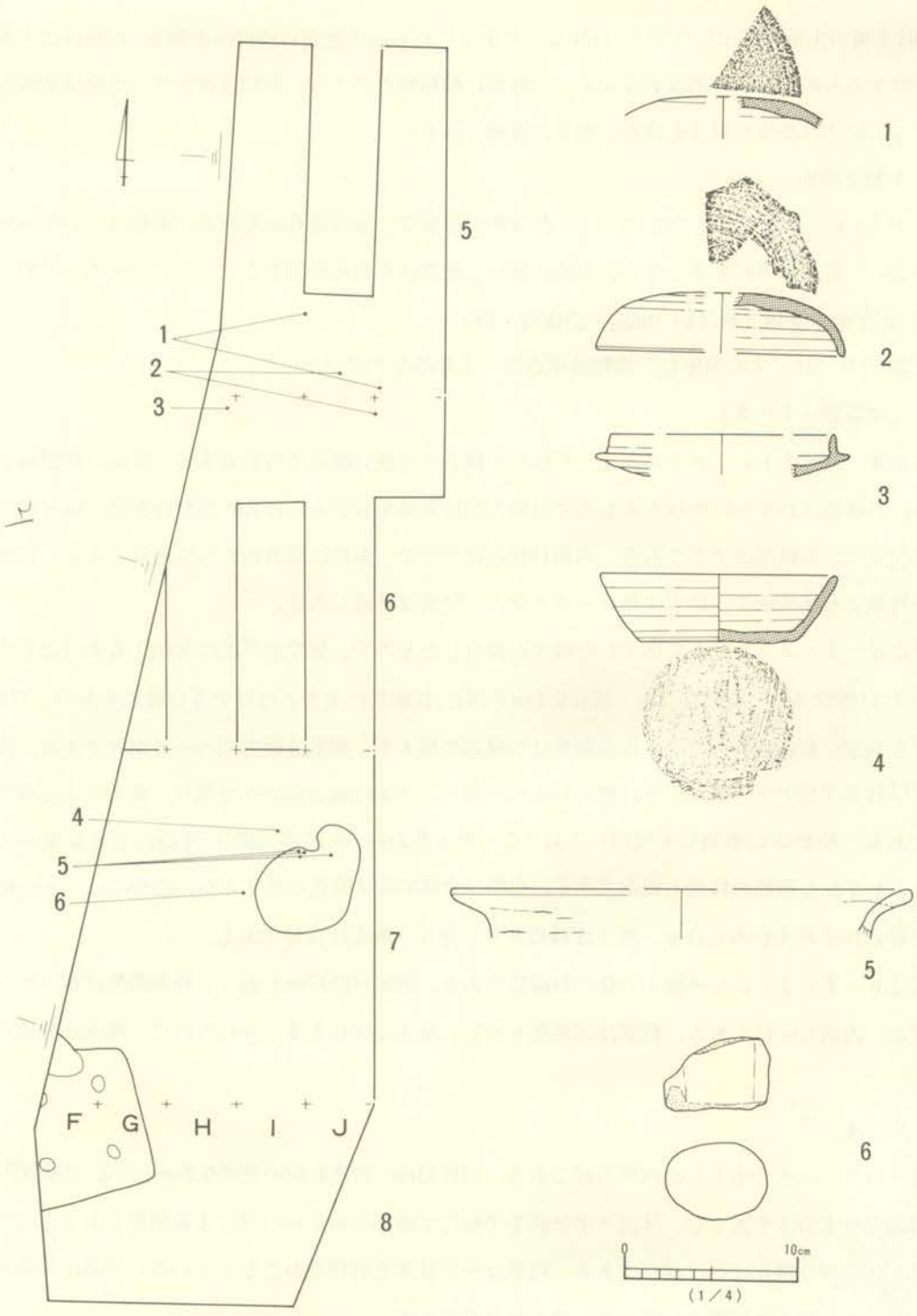
須恵器（1～3）

1は蓋と思われ、5－J・Iトレンチで出土したものが接合したものであり、ていねいな水引きで調整してある。色調は青灰色を呈し、胎土は精選されており、焼成は良好である。

2は蓋で、1と似るもので6－J・5－Iトレンチで出土したものが接合しほぼ⅓遺存する。推定口径14.5cm・器高3.5cmである。外面はていねいな水引で調整してあり、内面は凹凸を呈している。色調は内外面とも青灰色を呈し、胎土は精選され、焼成は良好である。

3は坏身で6－Hトレンチで出土したものである。推定口径14cm・受部径15cm・たちあがり高1.2cmである。器形は浅形と思われる。たちあがりは直立し、端部は丸く仕上げられ受部はほぼ水平である。調整はていねいな水引で仕上げられている。色調は青灰色を呈し、胎土は精選されてあり、焼成は良好である。

4は坏で7－Iトレンチで出土したものでほぼ完形である。口径13.5cm・器高3.8cm・底径9cmを測る。口縁部は外反し、端部は丸く仕上げられており、調整は内外面とも水引である。底部の調整は手もちヘラ削りで↕の方向である。色調は白灰色を呈し、胎土は細石を多く含み、焼成は普通である。




第 103 図　5～7区出土遺物

土師器(5)

001土壙の上面で出土した甕で、口縁部のみ出土したもので推定口径27cmを測る。口縁部は大きく外反するもので、口唇部は肥厚する。口縁部に輪積痕をのこし、調整は横ナデで色調は赤褐色を呈し、胎土はかなり粒子を含み、焼成は普通である。

土製支脚(6)

7－Iトレンチで出土したもので、土製支脚の部分で、現存径6cmを測る。調整はていねいではない。胎土は砂粒を多く含み、焼成は悪い、色調は赤褐色を呈する。　　（鈴木　若雄）

（3）8区出土遺物（第104・105図・図版72・87）

8区のG・H・Jに集中し、遺物は須恵器・土師器などが出土した。

土師器甕（1～3）

1は8－H・Iトレンチから出土した破片が接合した甕口縁部で⅓遺存する。推定口径22cmを測る。口縁部はわずかに外反するもので口唇先端は丸味をおびる。外面の調整は胴部で縦方向のヘラ削りで、口縁部はナデである。内面口縁部はナデで、胴部は斜方向のヘラ削りである。色調は内外面とも淡褐色で、胎土は細粒を多く含み、焼成は普通である。

2は8－I・Jトレンチで出土した破片が接合したもので、甕で部分的に欠損するがほぼ完成であり、口径22.5cm・器高27.5cm・底径6.2cmを測る。長胴形に大きく外反する口縁部をもつ、口唇部下と胴部に輪積痕をのこす。外面調整は口縁部で横ナデ、胴部は縦方向のヘラ削りである。内面は口縁部で横ナデ、胴部上半は横方向のヘラ削り、下半は縦方向のヘラ削り、底部近くは横方りである。整形時は敷物状を使用しておこなったと思われ、底部周辺部は、摩察による荒廃がみられ、わずかな砂粒の移動も観取できる。色調は全体的に淡褐色を呈するが、部分的に二次的使用と思われる異変がみられる。胎土は砂粒を多く含み、焼成は良好である。

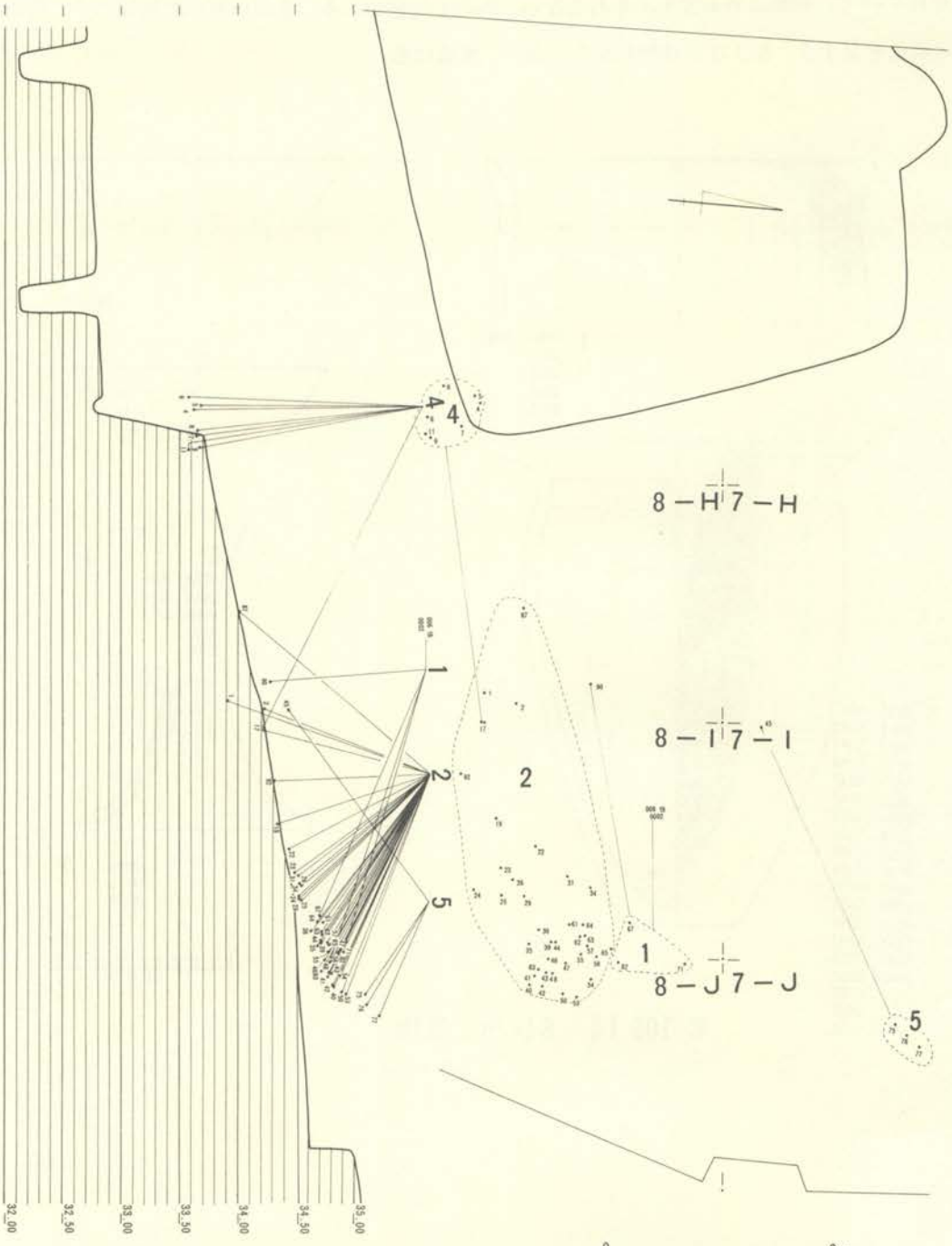
3は8－I・Jトレンチ出土で甕の口縁部である。推定口径17cmを測り、外面調整は横ナデを呈する。内面も同様である。色調は赤褐色を呈し、胎土は砂粒を多く含むもので、焼成は普通である。

坏（4）

8－Gトレンチで出土した内黒の杯である。口径15cm・器高4.5cm・底径6.5cmを測る。外面調整は口縁部は水引きであるが、体部下半は杯を半転して底部方向からヘラによる調整をおこなっている。底部切り離しはヘラ切りである。内面はナデ後黒色処理をおこなっている。色調は外面淡褐褐色を呈し、胎土は精選されており、焼成は良好である。

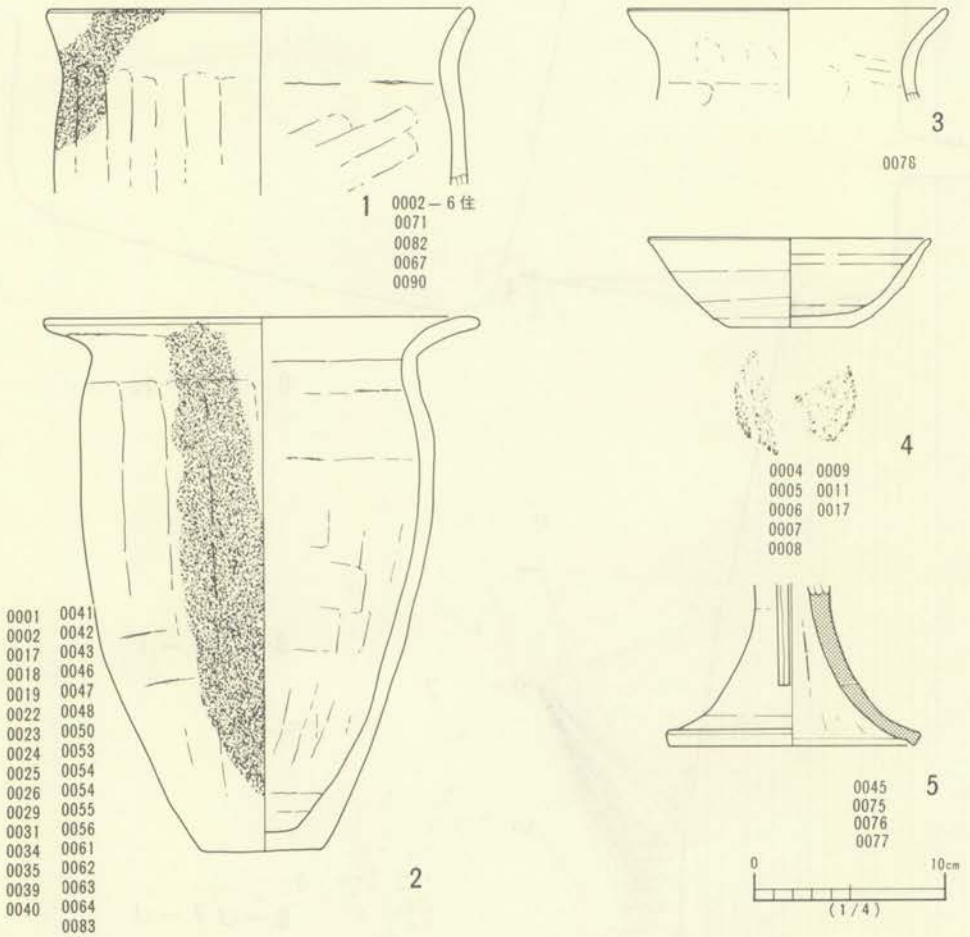
須恵器脚部(5)

7－J・Iトレンチで出土したもので、脚部が遺存する。脚底部径13cmを測る。脚底部は大きく開き、脚部近くで直線的になり脚底部となる。脚底部3cmの所に長方形の三方スカシが外から穿




第 104 図　8区遺物出土状態図（1/60）

たれている。調整は外面でナデをおこない、内面も同様である。色調は外面で灰褐色で、内面は淡褐色を呈する。胎土は雲母細粒を多く含み、焼成は悪い。　（瀬戸　久夫）




第 105 図　8区出土遺物

## 第Ⅳ節　まとめ

1．遺跡について

本跡は、道路幅18m～15mの区間を調査したにしかすぎず、遺跡の極く1部を調査したといわざるをえまい。

A地点は調査の結果遺構は不明であった。遺物も少量であり流れ込みの感をうけた。またこの地点は谷部にあたり、梅雨期には水流もあると聞く。ここで出土した遺物は、後背地にある遺跡の流れ込みであろう。

B地点は標高30mの舌状台地の縁辺部に位置している。古墳は舌状台地がA地点の谷に開折された尖端部に位置する。A地点では住居跡6軒検出されたが、本来の住居跡群は標高30m～35mの間の後背地にかなりの平坦部が見られる。遺跡の主体はこの間に構成されている可能性が高い。また5～7区の東側に古墳があるが現在古墳上には、東京電力の送電線塔が建っており、破壊されているが、5～7区には古墳のものらしい遺物も見られた。古墳の立地にしろ、住居跡にしても良好な場所であろう。

2．遺構について

縄文期住居跡……1軒

古墳時代住居跡……2軒

歴史時代住居跡……3軒

掘立建物跡……2軒

溝状遺構……1か所

土塁状遺構……1か所

土壙状遺構……1か所

縄文時代の住居跡

005号住居跡1軒でピットが円形にならぶもので出土遺物・床面や他の付随する施設も検出できなかったが一応縄文期の住居跡と考えたい。この住居跡の破壊は、古墳築造時の盛土採取のため周溝からかなり広い範囲で地山成形されたのではないかと考えたい。

古墳時代住居跡

002・004号住居跡の2軒検出された。この住居跡は中央部よりわずかに北方向に寄った所に炉をもち、南壁に貯蔵穴を有する。貯蔵穴の周辺には粘土で作った低い土手が見られプランは略方形を呈する。このような遺構の状態から考えて、弥生期末に属する様相であるが、貯蔵穴出土の土器を見ると古墳時代（五領式）の範中に入るのではないかとも考えられる。004号住居跡も同じ様相を呈す。

歴史時代住居跡

001・003・006号住居跡の3軒である。

001号跡については、出土土器もなく時期決定は明確さを欠くが、プランは小方形で柱穴はみられない。カマドは北壁面に位置する。

003号跡はカマド中から出土した土器のみである。おそらく国分期の範中に入るものと思われる。プランは小方形で柱穴はみられない。カマドは北壁面に位置する。

006号跡は土器の出土が多く甕・土師杯・須恵器杯などが出土した。プランは方形であるが、西部分を工事によって切断された。ピットは4か所、カマドは北壁部に位置する。出土土器の中には若干古手の土器もみられるが、主体は国分期が中心である。

以上3軒の住居跡を列記したが時期的には、国分期の範中に入ると考えられる。

掘立建物跡

2軒の建物跡を検出したが、プランも定型でなく、柱穴も小規模であまり大型の建物跡ではなかろう。これに供伴すると思われる遺物は出土しなかったが後述する土塁状遺構となんらかの関係が想定される。

溝状遺構

この調査区域内ではこの溝状のみであったが、出土遺物は土師片、弥生土器片などであったが、時期決定できるものではなかった。この断面形は、VおよびUの型を呈する。この遺跡の中でこの溝状遺構がどのような意味をもつかは不明である。

土塁状遺構

舌状台地の基部を分断するように低い土手状のものがめぐっており、急傾斜の谷部から水田面まで見られる。この土塁状の外側つまり台地側に空掘と思われる小溝が付随する。この空堀からは、遺物は出土しなかった。この調査範囲の中でこの土塁状の遺構とを合せて考えると、台地先端部の古墳を物見台として利用し台地側に土塁状遺構、先述した掘立建物跡がこれに付随する施設ではなかろうか。

土壙状遺構

6区で確認されたもので、確認時には粘土粒が集中的に在ったもので、プランは浅い皿状を呈しており、出土遺物は土師甕であった。しかし焼土も流れ込んだような状態であった。また立地している場所もかなりの傾斜面であり、この土壙の意味、在りかたなど不明な点が多い。

3．遺物について

各遺構からの出土遺物については、ここでは除外するとして、各区域で出土したものを記する。

1～4区では、縄文土器・土師片・石器等が出土した。ここの調査区域の中では縄文土器の出土は少なかった。土師片では、歴史時代に属すると思われる須恵質土師とよばれているものが主流であった。特記すべきは、鉄器2個片が出土したことで、おそらくこれは鉄鎌の1部であろう

と考えられる。住居跡内からの出土はなかったが台地上の住居跡群の中に鉄器を有する住居跡もあることが推定される。

5～7区では、土師・須恵器の杯などが出土した。須恵器杯は、在地の須恵器ではなく良質のものである。この5～7区は、傾斜地である後背地に古墳（送電線塔のため破壊）が立地するがこの古墳に伴う遺物と思われる。

8区では、土師甕・須恵器杯、土師器杯などの破片が一面に出土していた。これらの出土遺物は国分期の範中であろう。しかしこの遺物の出土状態は、いかにも上部から投げ捨てられたように思われた。上部の平坦面に生活跡が存在すると思われるがそれら一連の行動としてとらえられていいものであろうか。（瀬戸久夫）

# 第八章　清　水　作　古　墳

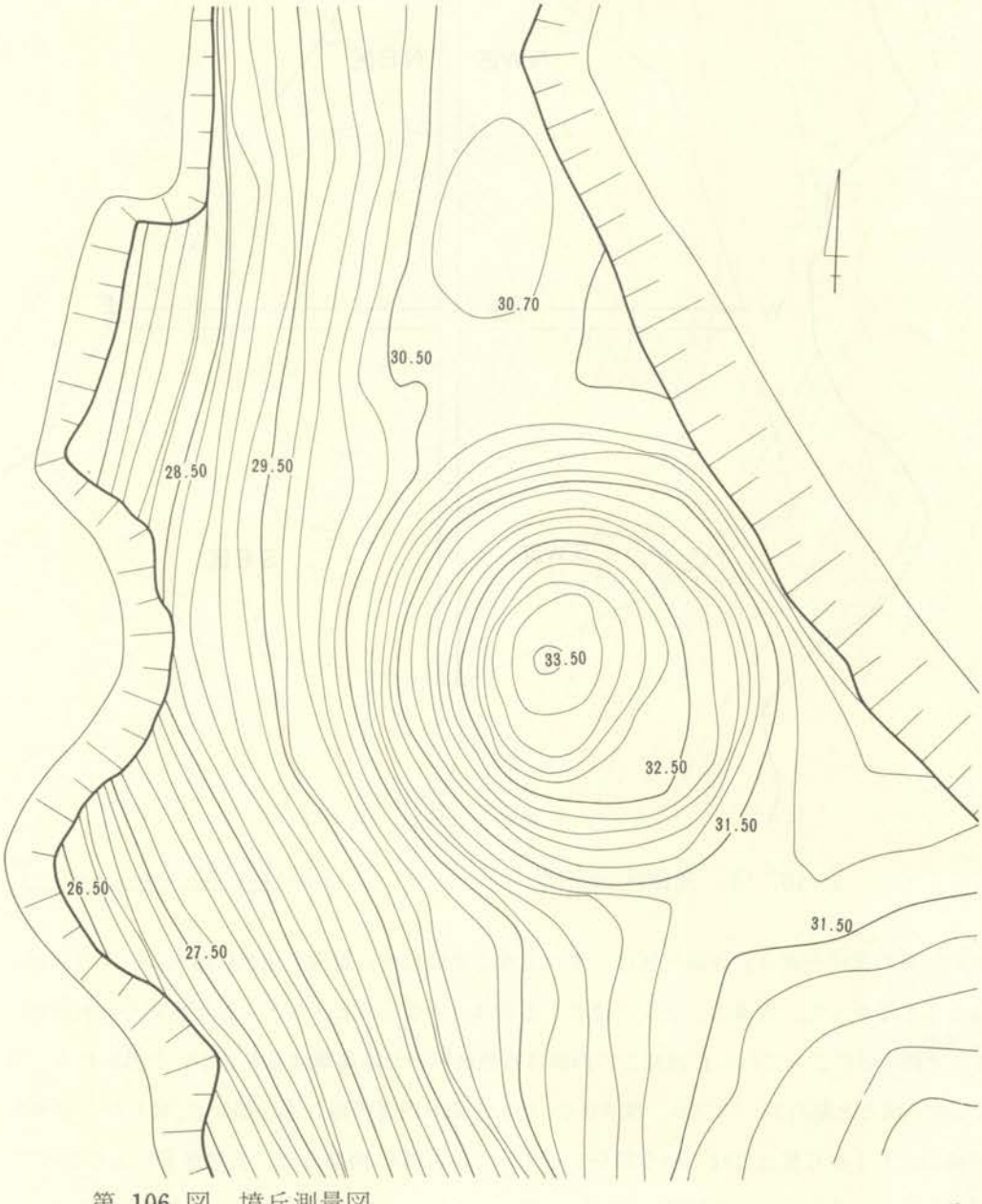
## 第1節　古　　墳

### 1項　墳丘および周溝（第106・108・109図・図版73～77）

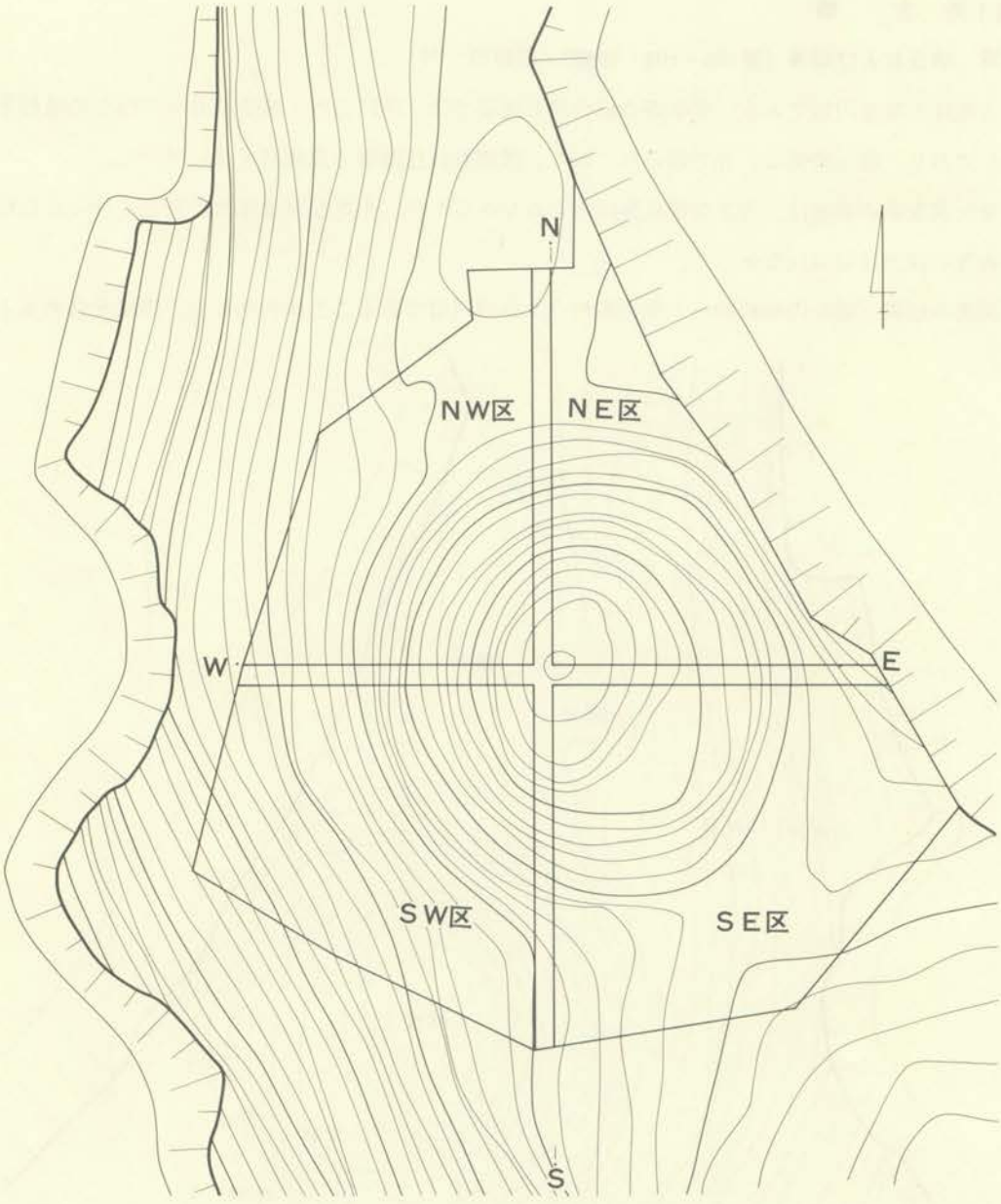
清水作古墳は円墳である。発掘調査前の墳丘測量では、径17.5m・高さ3.0mの円形の隆起を呈しており、墳丘東側は、谷で削られており、西側も自然地形で急傾斜を呈していた。

発掘調査前の墳丘は、大きな攪乱等はみられなかったが、小さな凹地は数か所見うけられたが遺物等の露出は見られなかった。

調査の結果、墳丘内径約20m・現在高約3.0mの円墳であることが判明した。周溝を含めると

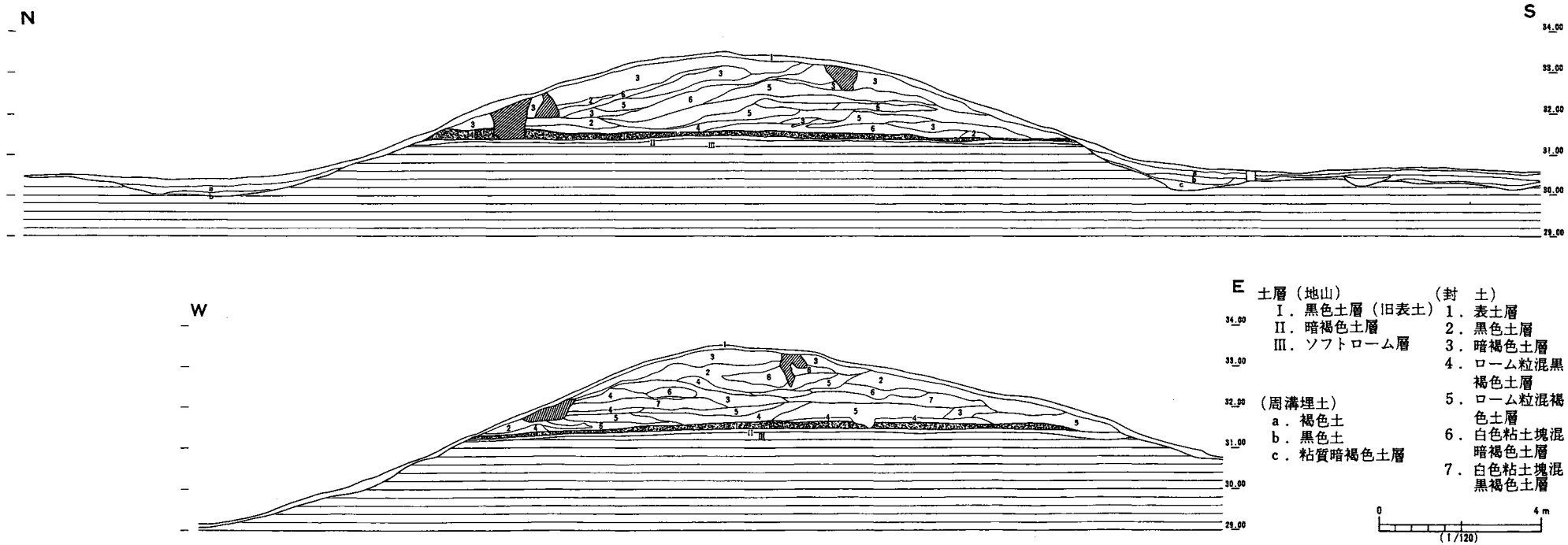



第106図　墳丘測量図




第 107 図　発掘区設定図

径約28ｍの規模を測る。周溝内部は、すべて埋土で墳丘から周溝へ急激に落ちる。テラス状の分は存在しなかった。周溝は、完全に遺存する所は、少なくＳＥ・ＮＥ・ＮＷ区の中心付近の一部で、東側は谷によって削られ消滅し、西側は自然地形のため周溝は存在しないと思われる。遺存する所を測ると幅約3ｍ～4.5ｍ、深さ0.6～10ｍを測り内側の落ち込み部分は、墳丘から急傾斜で外側の立ち上がり部分は緩やかな傾斜を示す。この古墳の西部分は、自然地形による要因で、周溝は、設定せず東部分のみ周溝を設けたと思われる。この周溝の設定から考えて、墳丘の盛土は

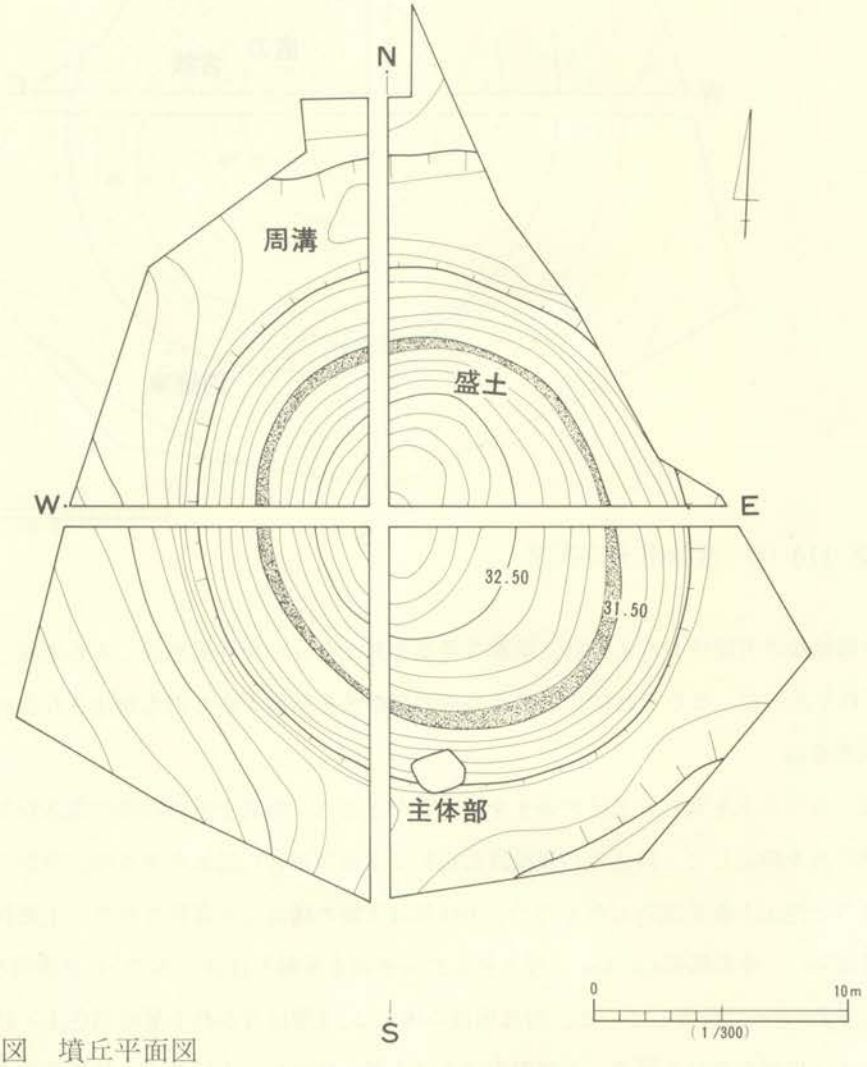

N
S
34.00
33.00
32.00
31.00
30.00
29.00
W
E
34.00
33.00
32.00
31.00
30.00
29.00
土層（地山）
Ⅰ．黒色土層（旧表土）
Ⅱ．暗褐色土層
Ⅲ．ソフトローム層
（周溝埋土）
a．褐色土
b．黒色土
c．粘質暗褐色土層
（封　土）
1．表土層
2．黒色土層
3．暗褐色土層
4．ローム粒混黒褐色土層
5．ローム粒混褐色土層
6．白色粘土塊混暗褐色土層
7．白色粘土塊混黒褐色土層
0
4m
(1/120)

第 109 図　墳丘断面図

周溝堀削の土砂量だけでは築成不可能と考えられ、周辺から不定分の調達を行なったと考えられる。築成と方法は、まず旧地表面を円形に残し、その周辺部からまず盛土をはじめている。すなわち封土築成の第1段階は成形しない円形部に環状の高さ約0.4mの土塁を形成し、第2段階はその内面および上面に高さ約0.4mまで土砂を築成し平坦面を形成したようである。その後は前記したような方法をくりかえしながら築成をおこなって約3mの墳丘に形成したと推測される。

周溝の埋土は2ないし3層に分けられ、おそらくこの時点で周溝は埋まり、以後は墳丘外からも土砂が流入したものと推測される。西側部分は地形的な急傾斜面のため自然流となり谷へ流出したものであろう。

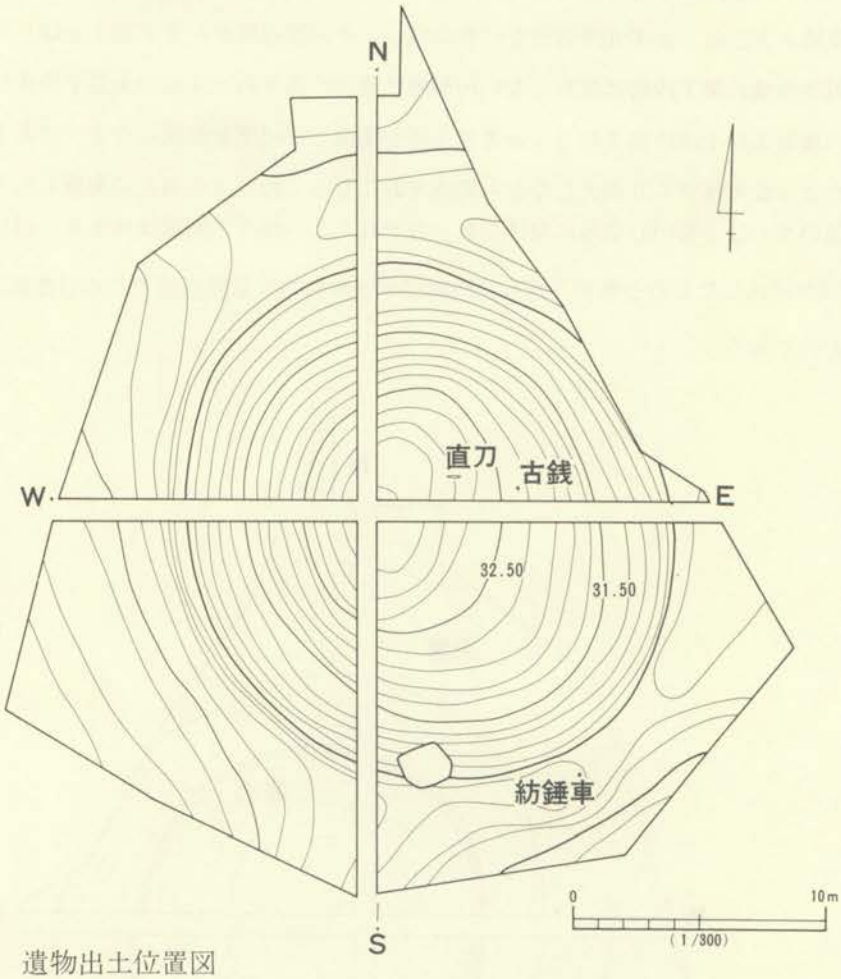
（瀬戸　久夫）




第108図　墳丘平面図

## 2項　外部施設および内部施設（第111図・図版78・79）

### 外部施設




第 110 図　遺物出土位置図

外部施設の可能性も考えられ、慎重な発掘をおこなったが外部施設である埴輪、葺石などは検出されなかった。またそれに代る墳丘外面の装飾性を具備するものも検出されなかった。

内部施設

Ｎ－Ｓベルトを残しＳＥ区の表土を排土したところ、旧表土下の周溝に落込む部分に暗褐色土の落込みを確認した。落込みの規模は長辺約 2.2ｍ短辺約1.55ｍを測る略長方形であった。この堀込みは地山を直接掘込んだもので、主体部は土壙の構造は平面長方形で、上面長約1.9ｍ、底面長 1.65ｍ 、 中央部幅約0.6ｍ 、深さ約0.25ｍを測る長軸方位は 、N75° Ｅを指向し、壙底面は現表土下約0.6ｍに位置している。内部施設の埋土は、3 層に分かれＩ層暗褐色土・II層暗褐色混白色粘土・III層白色粘土層で、土壙内の埋土は 3 層に分かれ、Ｉ層粘土・II層黒色土・III層黒色土混白色粘土である。土壙内の長辺の両端には、白色粘土が観取された。土壙内の出土遺物は皆無であった。

（鈴木　若雄）

### 3項　遺物の出土状態（第110図）

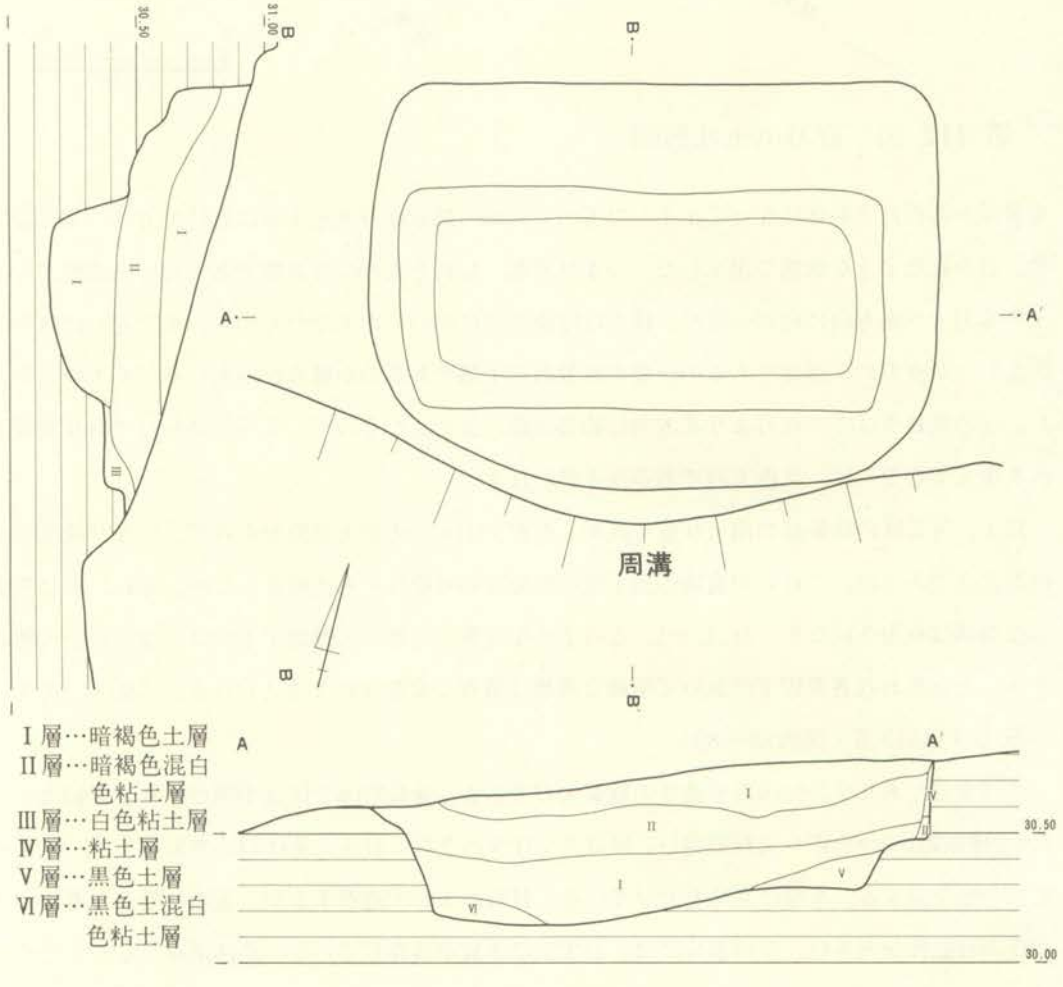
古墳に関する遺物は、直刀、鉄鏃片であり共に墳丘盛土中から破片となって出土した。遺物は全てＮＥ区の墳頂より0.4ｍさがった所で出土したもので、直刀はほぼ中央から折れ刃部を下方に向けて出土した。鋒はほぼ西方向を指す。表土を排土した直後出土したものである。また、他に縄文土器片、磨石、土師器、カワラケ、古銭、紡錘車などが出土した。縄文土器片は、ＮＥ区より磨石は、ＳＥ区、土師器はＳＥ区、古銭はＮＥ区、紡錘車はＳＥ区周溝の埋土中より出土した。

（鈴木　若雄）

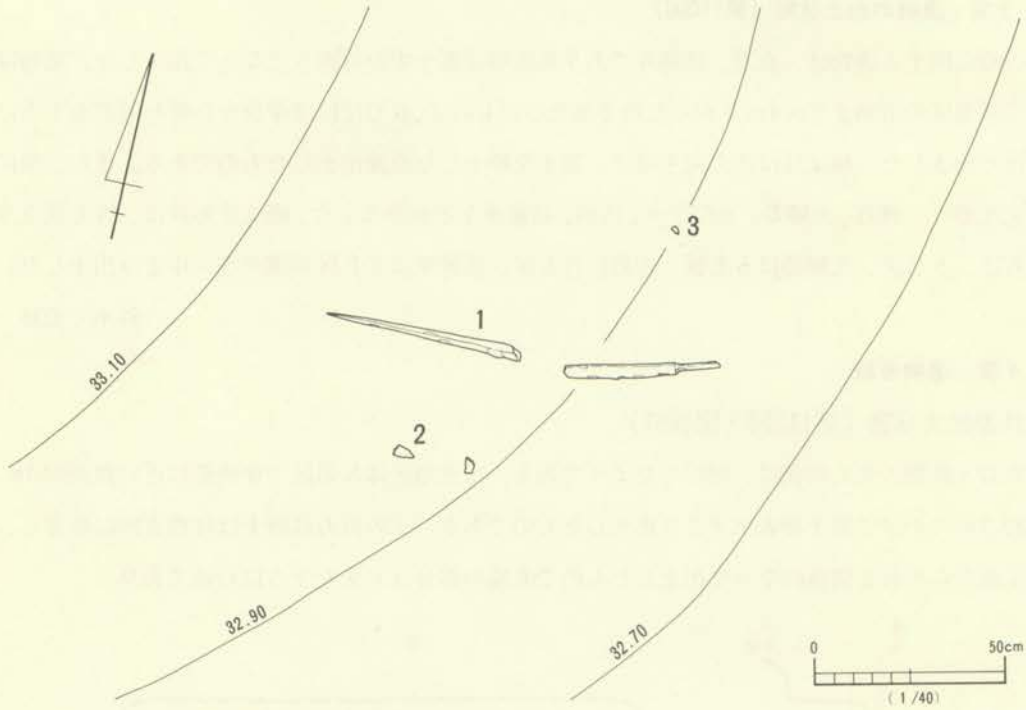
### 4項　遺物各説

鉄器出土状態（第112図・図版81）

直刀・鉄鏃の出土状況は、図示したようである。出土地区はＮＥ区で中央部に近い標高33.1m～32.7ｍにかけて第１層表土下より出土したものである。(1)の直刀は鋒をほぼ西方向に位置し、中央部から折れ２個体になって出土したもので先端の部分は刃先を下方にむけており




第 111 図　内部施設



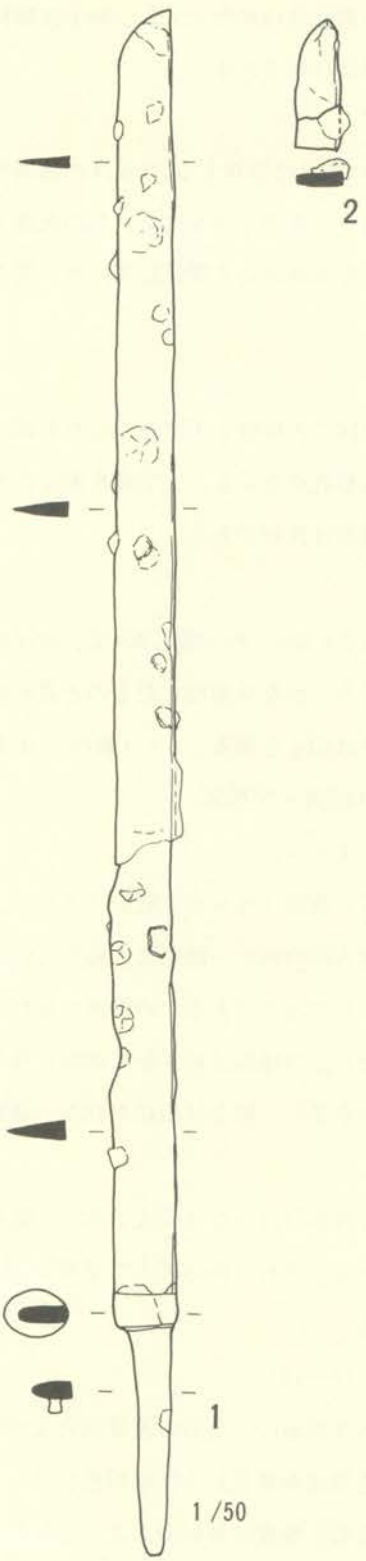

第 112 図　直刀出土状態図

中央部から折れ２個体になって出土したもので先端の部分は刃先を下方にむけており、茎部分は横におかれたような状態で出土した。つまり刃部・むねを表出した状態であった。(2)の直刀片は(1)の直刀より南方向に約30cm離れ、鋒をほぼ南方向に向いて出土したもので、すぐ近くに鉄片が出土したが直刀の１部分であるのか他の鉄製品の１部であるのか腐食がいちじるしく不明であった。(3)の鉄鏃片は(1)の直刀より北方向に約35cm離れ出土したもので、先端部は折れており先端方向を復元するならば、北西方向であろうと思われる。

以上、ＮＥ区の鉄製品の出土状態を説明したが、(1)・(2)の出土状態からみて、かなり攪乱をうけたようであった。これらの遺物の出土後内部施設の可能性を考え精査したが、それにあたるような遺構は検出されなかった。しかし、このような位置・状態から推測するには、なんらかの施設があったと思われ各要因下において明確な遺構は遺存しなかったと考えられる。（瀬戸　久夫）

直刀（第113図・図版88・89）

１は直刀であり全長92cmの平造りの鉄製大刀である。身長77cmで区は不明であり、刀幅は 3.6cmで棟幅約1.0cmを測り比較的薄い。鋒は丸く作り出されており、茎は13.5cmを測り茎の断面は略長方形を呈する。茎端は丸味をおびている。目釘は１か所遺存するが、茎の状態から考えて２か所の可能性が大きい。茎の部分には、わずかに木質が残存している。鍔は遺存しなかったが、




第 113 図　古墳出土遺物(1)

鞘金具が遺存しており、長径3.0cmの卵形を呈する。このような状態遺存から考え木製鞘、木柄であろうと考えられる。

2は直刀の鋒部破片で1より細身でゆるやかな角度で丸みをおび、平むねを呈し棟幅は1cmである。

3（第114図9）は鉄鏃片で先端部は欠損しており、両丸造りで幅1.3cm・厚さ0.4cmを測る。鑿箭式であろうと思われる。

土師器（第114図1・2・4・5）

1は杯でSE区で出土したもので約1/3遺存する。口径13.5cm・器高4.5cm・底径8.5cmを測る。底部はヘラ切り後周辺をヘラナデで調整しており、底部周辺の体部もヘラナデにより調整をおこなっている。体部の内外面とも水引きで、ていねいに調整されている。色調は暗褐色を呈する。胎土は細粒を多く含み、焼成は良好である。

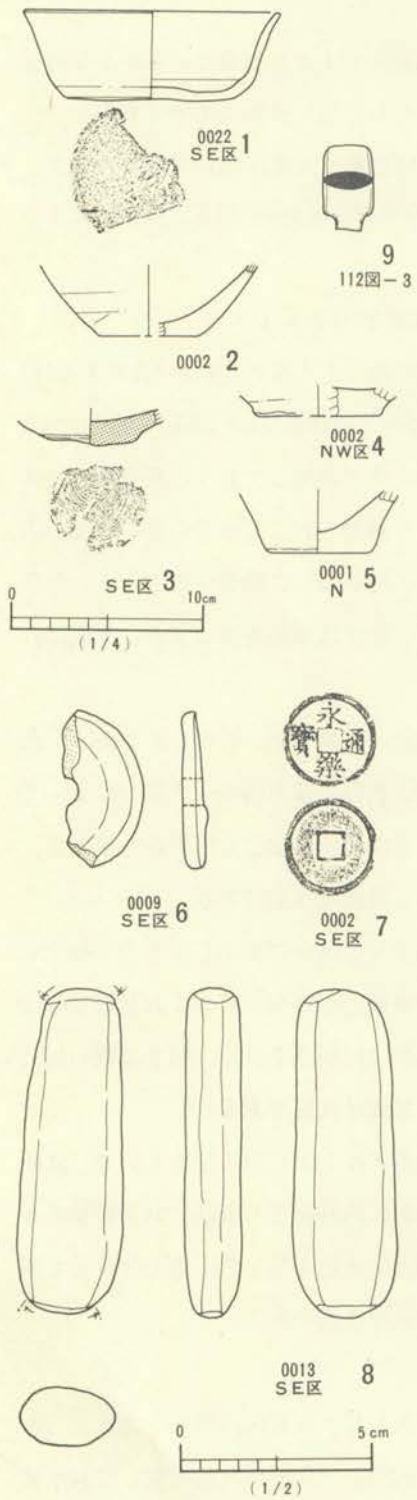
2は甕の底部付近の破片と思われるものである。底部はヘラ削り調整、胴部は横方向のヘラ削りによって調整されており、色調は内外面とも明褐色を呈する。胎土は細粒を含み、焼成は普通である。

4は甕の底部片でNW区から出土したもので推定底径6.5cmである。内外面とも器面が荒れており調整痕は明瞭ではない。色調は暗褐色を呈し、胎土は細い長石などを多く含む、焼成は良好である。

5は甕の底部でNベルトから出土したもので、底径は5.5cmを測る。器面は内外面とも荒れており調整痕も不明である。色調は明褐色を呈する。胎土は粒子を多く含むもので、焼成は普通である。

中世陶器(3)

坏か皿の類だと思われ、SE区の墳丘上で出土したもので、底径4.5cmを測り、底面は凹凸を呈しており底部は糸切り痕を残し調整痕は見られない。内面はナデ




第 114 図　古墳出土遺物（２）

痕が見られる。色調は淡白褐色を呈し、胎土は細粒をかなり含む、焼成は良好である。

紡錘車(6)

滑石製の紡錘車で約1/2遺存する。ＳＥ区の周溝内で出土したものである。直径４cmを測り、孔の直径 0.7 cmを測る。遺存する表面はよく摩滅している。重さは 12ｇを測る。

古銭(7)

永楽通宝でＮＥ区の古墳盛土上で出土したもので径 2.4cmで0.6cmの方形孔を有する。文字は片面にのみ鋳出されている。遺存は良好である。

磨石(8)

ＳＥ区出土で長さ8.4cm・断面幅1.4cmで、両端面はかなり摩滅しており、かなり使用したものと思われる。石質安山岩、重さは60ｇを測る。　・（瀬戸　久夫）

縄文土器（第115図・図版90）

撚糸文系土器（１～９）

口縁部（１～５）胴部（６～８）底部（９）で、口縁部・胴部とも縦方向の細かい撚糸文を施している。全体的に盛土中からの出土であるため器面が荒れており施文も明瞭でない。口縁部はわずかに肥厚し外反する。色調は明褐色を呈し、胎土は細粒を含み、焼成は良好である。

底部は尖底となり器厚はかなり厚大する。底部近くまで施文されている。これらから考えて早期の夏島式土器と考えられる。

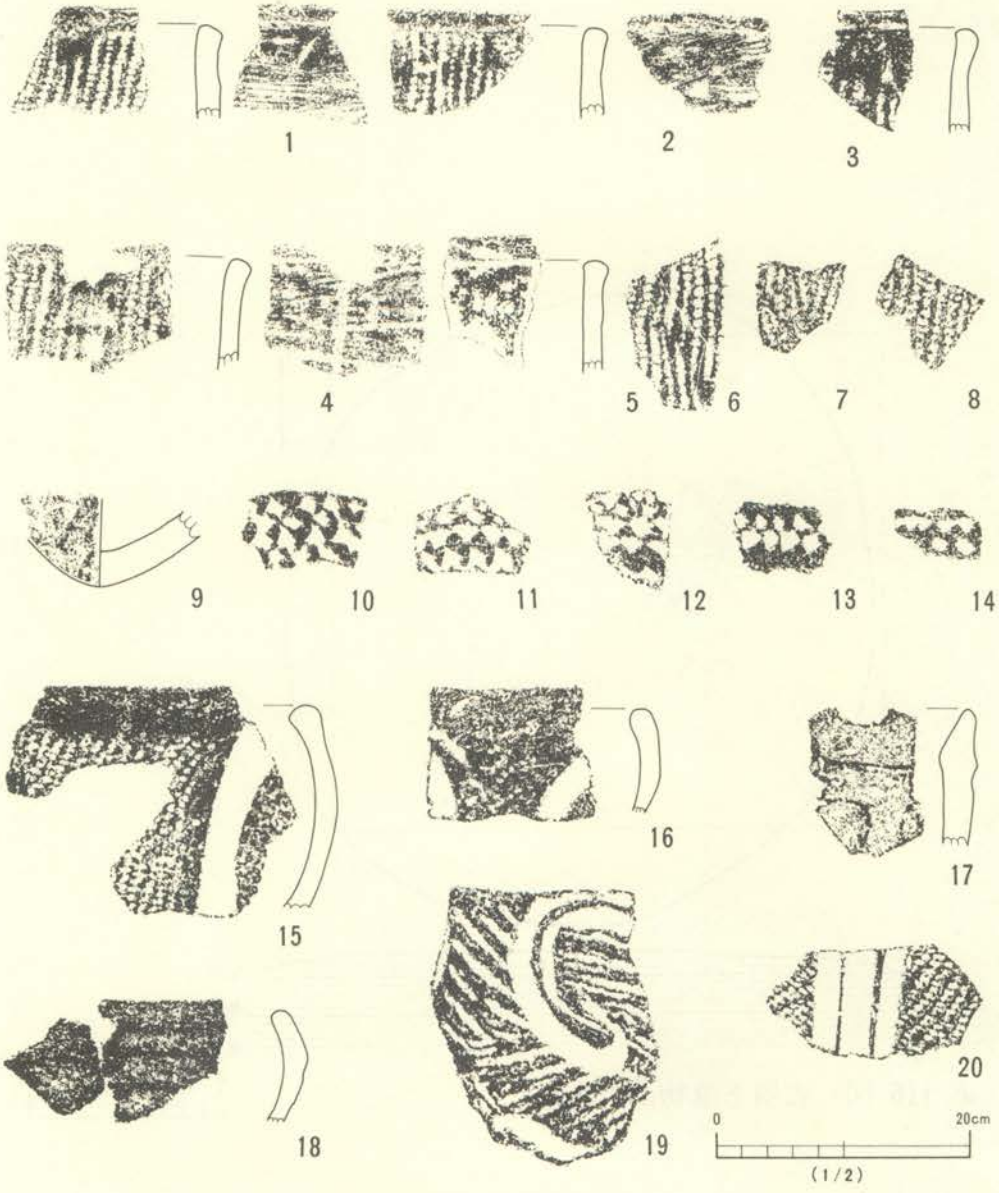
竹管文系土器（10～14）

すべて小破片であり器面に三角形の連続刺突文が施文されている。色調は赤褐色および暗褐色を呈し、胎土は砂粒を多く含む。焼成は良好である。これらの１群の土器は、前期後半の浮島式土器であろう。

隆起線文系土器（15～20）

ここの土器群では、隆起線の区画外に縄文があるもの(15)、縄文をすり消しているもの（16～18）とに大別できる。土器は全体的に荒廃しており縄文の施文等も明確ではない。15は口縁部が肥厚し内湾するもので、色調は内外面とも暗褐色である。16・18は口縁部は肥厚するが口唇部はうすくなりほぼ直線的になる。これらの土器片は砂粒を多く含み、色調は暗褐色が主体である。焼成は普通である。これらの土器は、中期末の加曽利ＥⅢ式の範中であろうと思われる。

（鈴木　若雄）

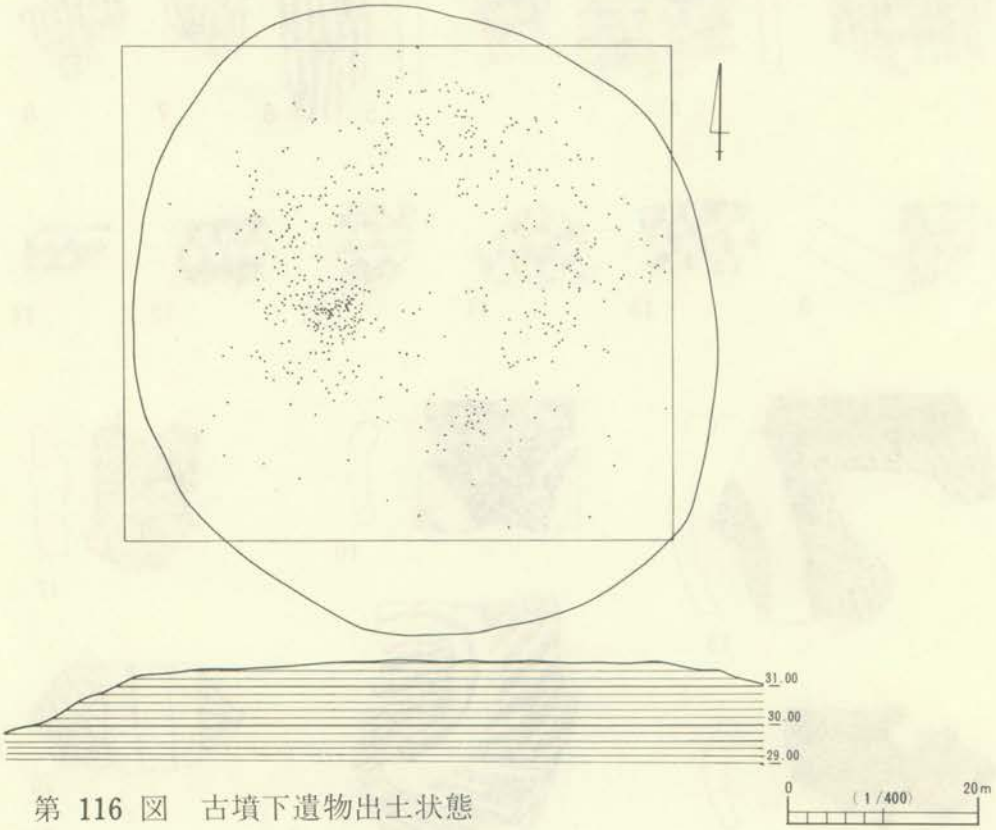



第 115 図　古墳盛土出土縄文土器

## 第Ⅱ節　古墳下の遺構

### 1項　遺物出土状態（第116図・図版81）

古墳の盛土を撤去した後、旧表土（黒色土）下から土器片・石片が多数出土した。古墳の地山成形されなかった部分のほぼ全面から出土したが、特に中央部に集中しておりＳＥ・ＮＥ区はわずかに少なかった。出土した遺物は、土器片117個・石片480個であり石片が土器に比べて多量であった。土器片は接合の結果５個体であった。石片中からは製品・半製品は確認されず剥片だけだけであった。剥片の材質はすべてチャートであった。これらの剥片から38個体の接合資料が確認された。




第 116 図　古墳下遺物出土状態

## 2項　遺物各説

### 土器（第117・119図・図版90）

1は甕で、口径21.5cmを測る。口縁部はわずかに内湾し口唇部は肥厚し丸味をおびる。口唇部はていねいにナデられ成形され口唇部下から縄文帯を有する。縄文帯の幅は口唇部下で1.5cm、その他の部分は1.0cmである。この縄文帯は上半部に縄文の地文を施したあとで摩消し隆起帯状縄文を作り出したものと思われる。口縁部には6個の浮文がはりつけられており浮文の部分には、縄文は見あたらない。胴下半部は、縦・斜方向のヘラ削りにより成形されている。内面は上部が横方向のナデにより形成されている。色調は外面が赤褐色および黒褐色を呈し内面は赤褐色である。胎土は細い粒子を含み、焼成は良好である。

2は甕の口縁部である。約1/2遺存する。推定口径28.5cmを測る。口縁部はわずかに開き、口唇部は丸味をおびる。口唇部上に2個2対の突起が作り出されている。2個の突起はわずかな間隔があり、その間隔の部分に張り付け文がつけられており張り付け文の上部には太い刻目が入る。文様は口縁部から施され口縁部直下に弧状の摩消し帯がある。この摩消し帯は張り付け文との間に見られるものと思われる。内面の形成は、ナデによるていねいな成形をおこなっている。色調は外面が暗褐色、内面が淡褐色を呈している。胎土は細粒を多く含み、焼成は良好である。

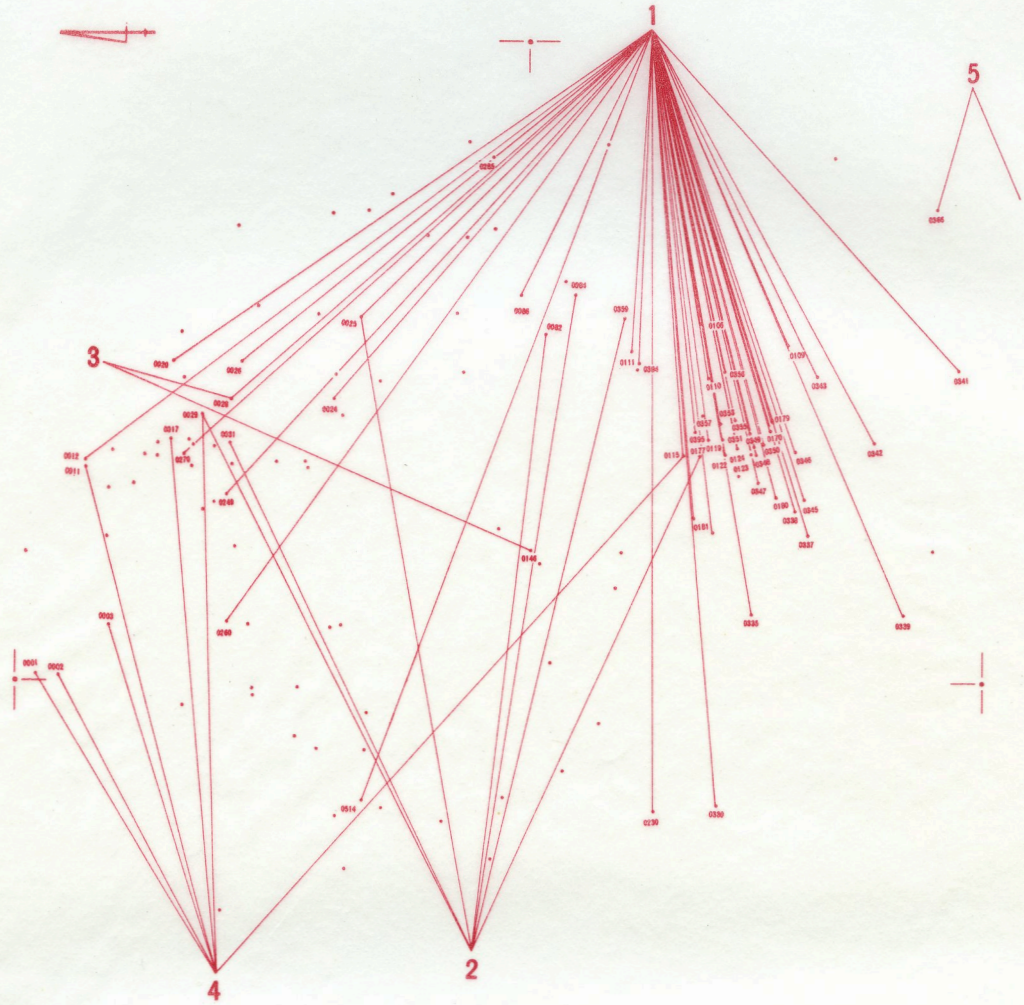
3は甕の口縁部で、推定口径29cmを測り、口唇部はわずかに肥厚し内湾する。口縁部に2条の横走する深い擦痕を有し地文は、斜方向の引掻文が施されている。内面の整形はていねいなナデがおこなわれている。色調は外面が褐色および暗褐色を呈し、内面は部分的に黒褐色も見られるが、ほとんど褐色を呈している。胎土は細粒を多く含む、焼成は良好である。

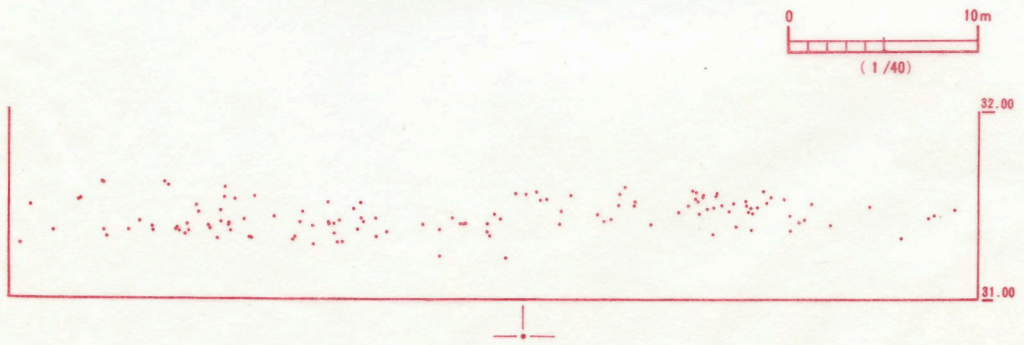
4は深鉢で1/3遺存しており、口径20.5を測り、口縁部はわずかに外反し、胴部中位までほぼ垂直で胴下半部より内側にすぼむ。口縁部直下から胴部中位にかけて4本の刻目帯を有し2本目の刻目帯には山形の張り付け文を有し、3本、4本目の刻目帯には、3個1体の山形張り付け文を有する。2、2本の刻目帯の間にはていねいにナデが施されている。他の間はていねいにナデられている。胴下半は斜弧状の引掻文が施されている。内面の調整はていねいなナデが施されており胴下半部に弱い稜をもつ。色調はは内外面とも淡褐色を呈している。胎土は細粒を含むもので、焼成は良好である。

5は小型の鉢であろうと思われる。わずかに開く形で口縁部に2個1体の張り付け文を有し口縁文下より2本の縄文帯を有する。2本の縄文帯の間に縦2条1体の刻目が約1cm間隔で2体ありその中間に凹のある張り付け文を有する。縄文帯の間はていねいなナデによって削られており胴下半部より縄文の地文帯となる。内面の成形はていねいに仕上げられており光沢も有する。色調は赤褐色から暗褐色である。胎土は細い粒子を含み、焼成は良好である。

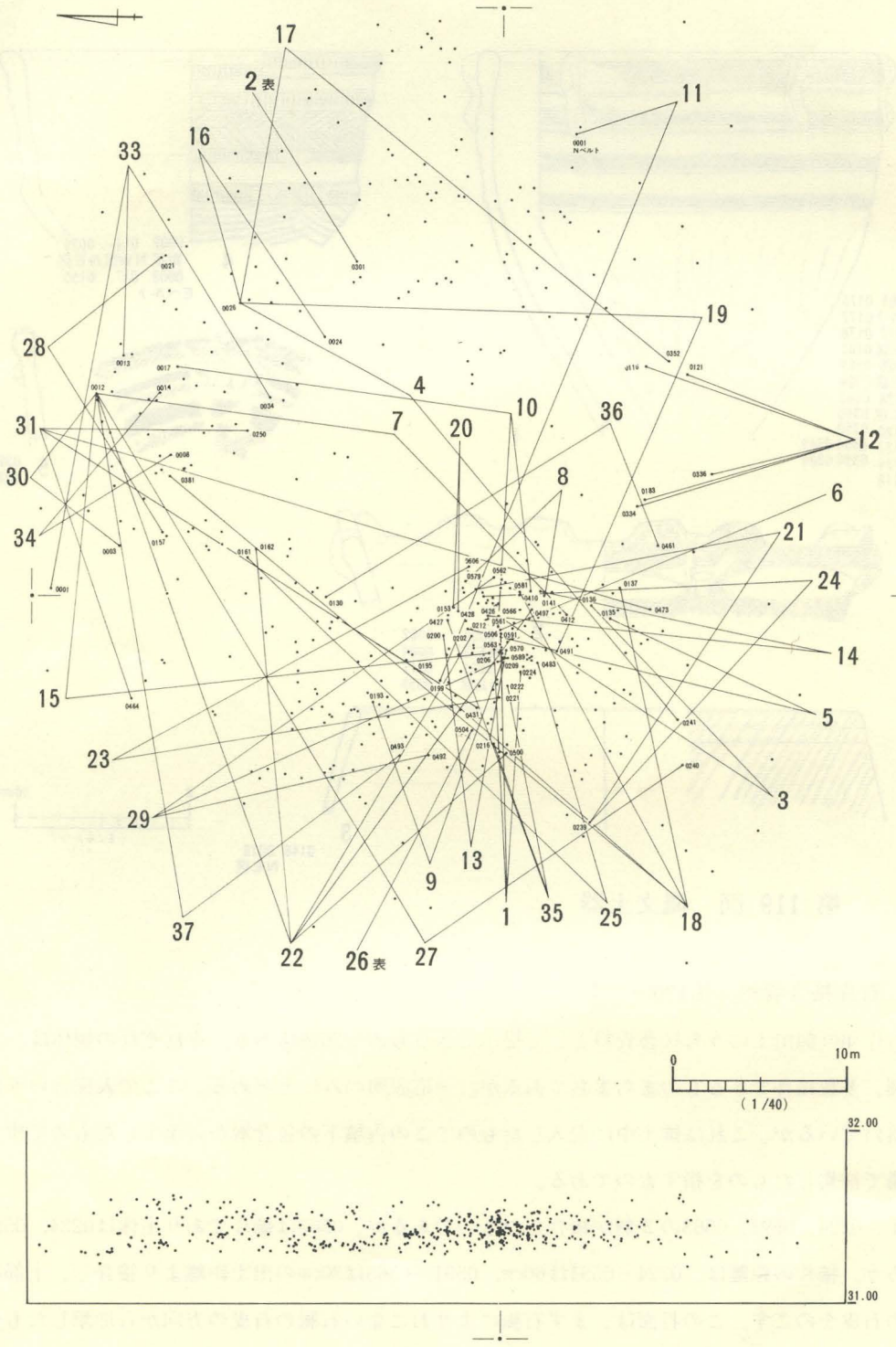
これら5個体の土器を記述したが、これらの土器は、文様構成・手法・成形などから考えて、縄文後期の時期にあたるものと解したい。

（瀬戸　久夫）

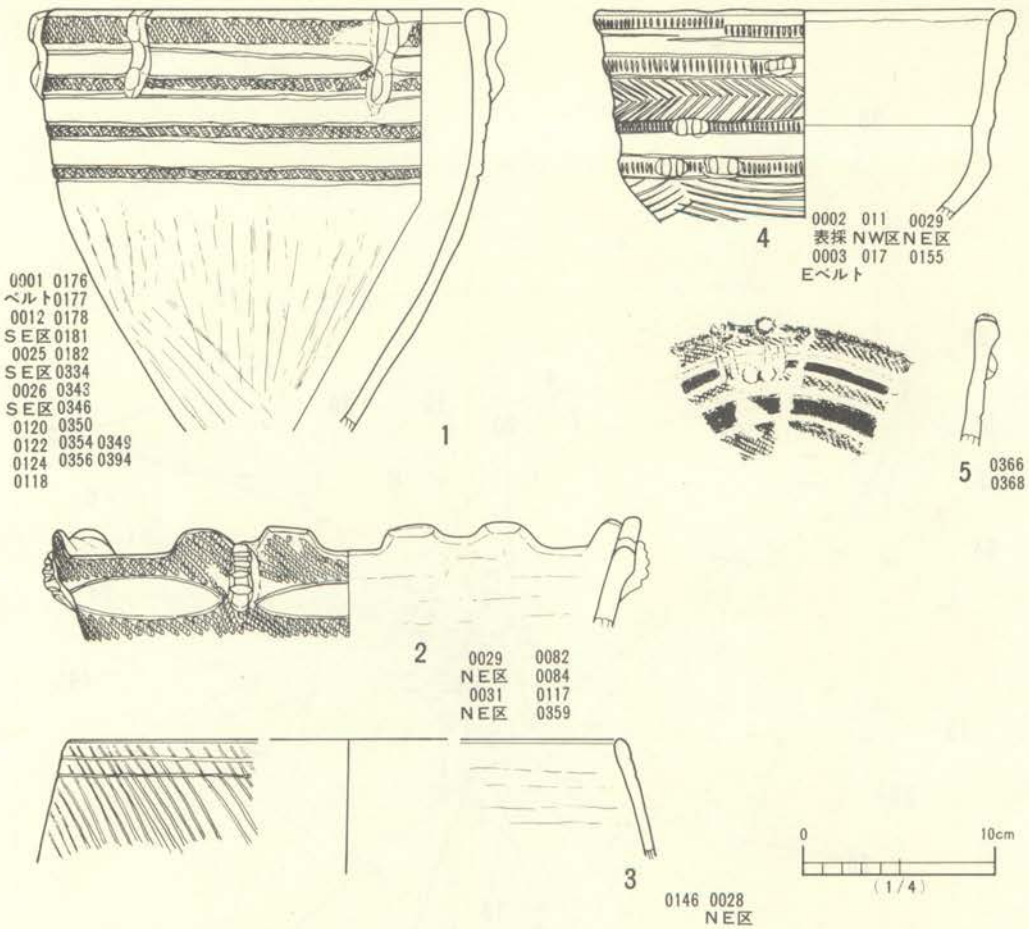



第 117 図　土器片出土状態図




第 118 図　石片出土状態図




第 119 図　縄文土器

石片接合資料（第120～124）

石片 480 個出土のうち接合資料として提示できるものが36個体ある。それぞれの個体は、２個３個、多数接合できるものまちまちであるが、一応説明のみにとどめる。ここで表採という表現を用いているが、これは排土中に混入したものでこの古墳下の包含層から出土したもので排土集積場で採集したものを指すものである。

１．0224，0591，0563の３個が接合したものであるが、0563は細片であり主体は0224，0591であろう。接片の距離は、0224－0591は60㎝，0591－0563は30㎝の出土距離より接合し、上部に石脈の石皮をのこす。この打面は、まず石脈によりおこない石脈の石皮の方向から加撃したものと思われる。

２．0301，表採の２片が接合したもので、この２個は母岩の表皮を残すもので、最初荒割されるときのものであろうか。それも１と同様、上部方向から加撃されたものと思われる。

3．0066，0136の2片が接合したものであり、石片の距離は 134 cmを測る。この資料も石脈の石皮をのこし、上部から加撃され縦方向に剥離されたものと思われる。

4．0026，0241の2片が接合したもので、接片の距離は 820 cmとかなりの距離がある。この石片は、0241が大きく上部には石脈の石皮がみられ、打面は横方向から加撃されて横方向の剥離面が見られる。

5．0212，0125の2片が接合したもので、接片の距離は 206 cmを測る。この接合資料の上下面とも石脈の石皮が残存し、この資料の石脈の厚さは 1.4cmを測る。打面は上面加撃である。

6．0506，0506と同一地点のものであり、この資料も5の資料と同様上下面に石皮を有しておりこの資料の場合石脈の厚さは 1.9 cmを測る。加撃は上方向からである。

7．0012ＮＷ，0412の2片が接合したもので、接片の距離は 748 cmとかなりの距離を測る。この資料も両面に石皮をのこす。石脈の厚さ 2.5 cmを測り加撃面は上方向からである。

8．0501，0590の2片が接合したもので接合片の距離は 116 cmを測る。上面に石脈の石皮をのこす。加撃の方向は上方面からである。

9．0193，0209の2片が接合したもので接合片の距離は 200 cmを測る。接合体の上下面とも石脈の表皮を残すもので、この資料の石脈の幅は 3 cmを測る。加撃の方向は上方面からである。

10．0561，0410，0017ＮＥ区の3片が接合したもので接合片の距離は、0410－0017ＮＥが70cm 0017ＮＥ－0561が 596 cmとかなりの距離を測る。上面に石皮を残す0561－0410は上方から加撃を加えているが、0410－0017ＮＥのものは前斜方向から加撃しているが、この2片の間には石脈があり加撃時その石脈から剥離している。

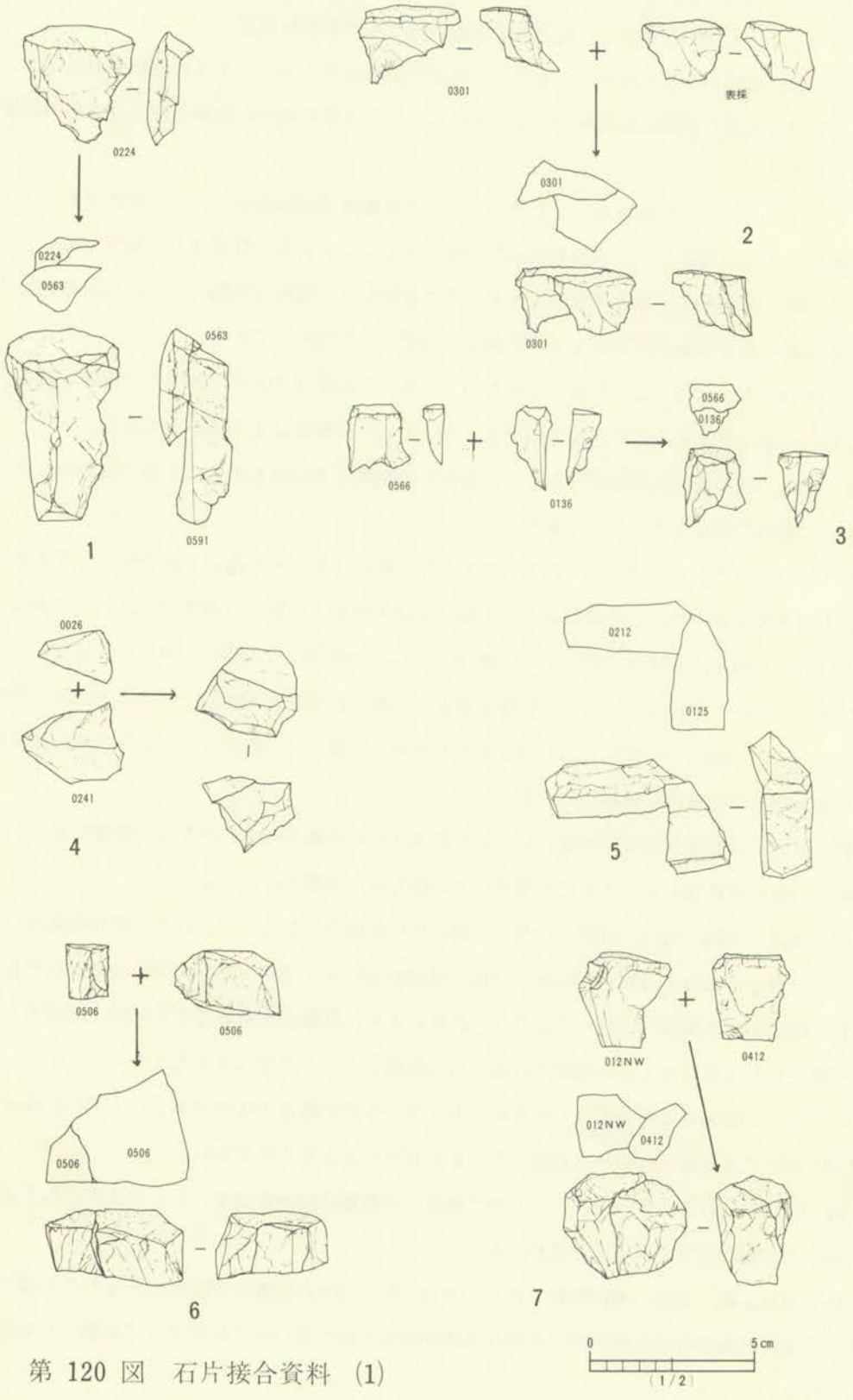
11．0199，0001ＮＥの2片が接合したもので接合片の距離 814 cmとかなりの距離を測る。0199は縦形の長い剥片である。上面に石皮を残すが前方から加撃されている。

12．0121，0334，0116，0183，0336の5個の石片が接合したもので、石片の接合距離は、0121－0116が14cm、0334－0116が 116 cm、0116－0183が 202 cm、0116－0336が 204 cmをそれぞれ測る。0116と0334がこの個体では母片であろうと思われるが、打撃面が明瞭でなく0183，0336の方向から打撃されたと思われ1回の加撃で石脈方向に剥離していくのではなかろうか。

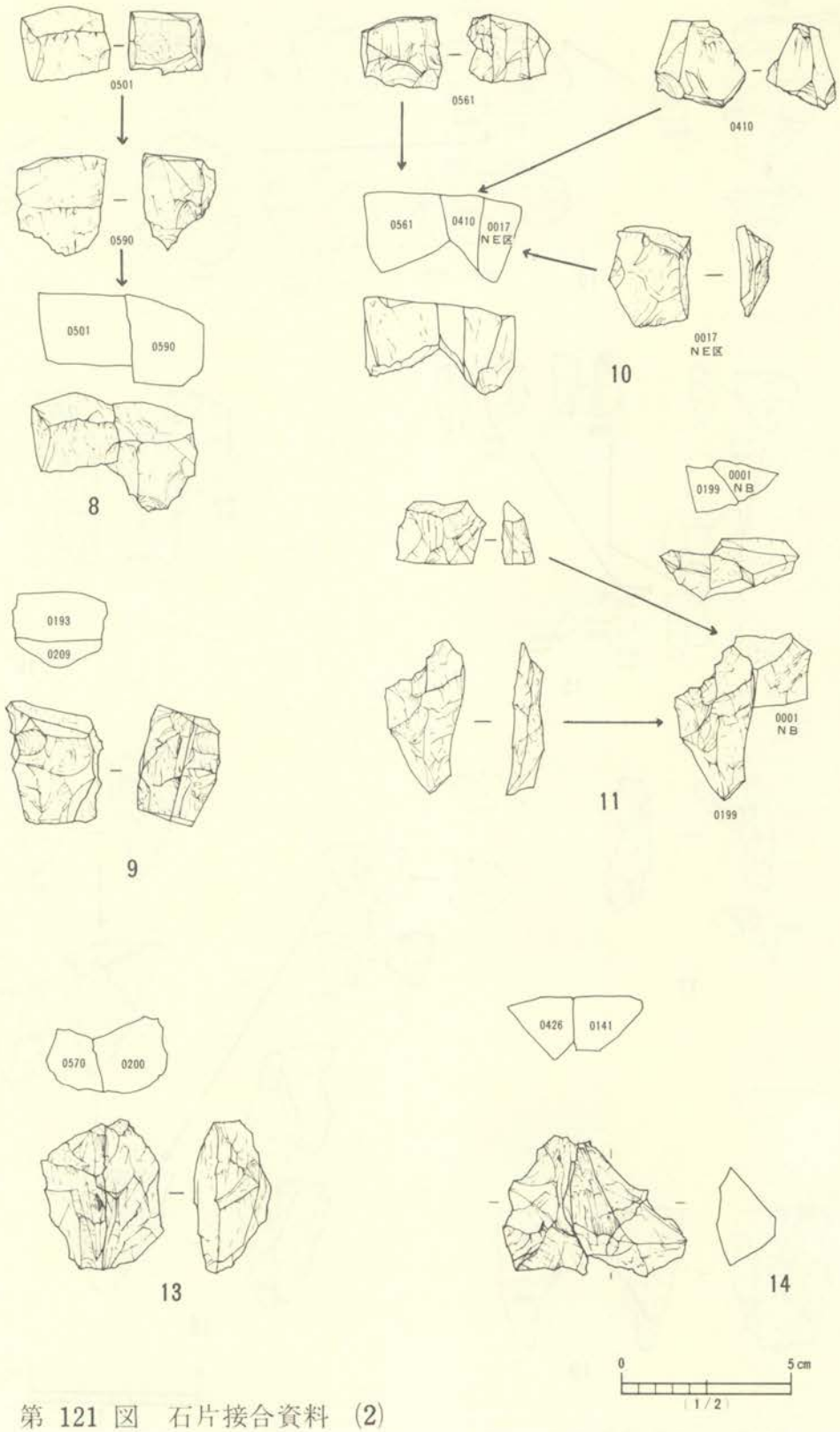
13．0570，0200の2片が接合したものであり接合片の距離は 194 cmである。上部に石皮を残す縦形の剥片であり石面は細かく剥離しているが石材によるものと思われる。

14．0426，0141の2片が接合したもので接合片の距離は92cmを測る。かなり大形の縦形の剥片である。打面は上面であろうと思われる。

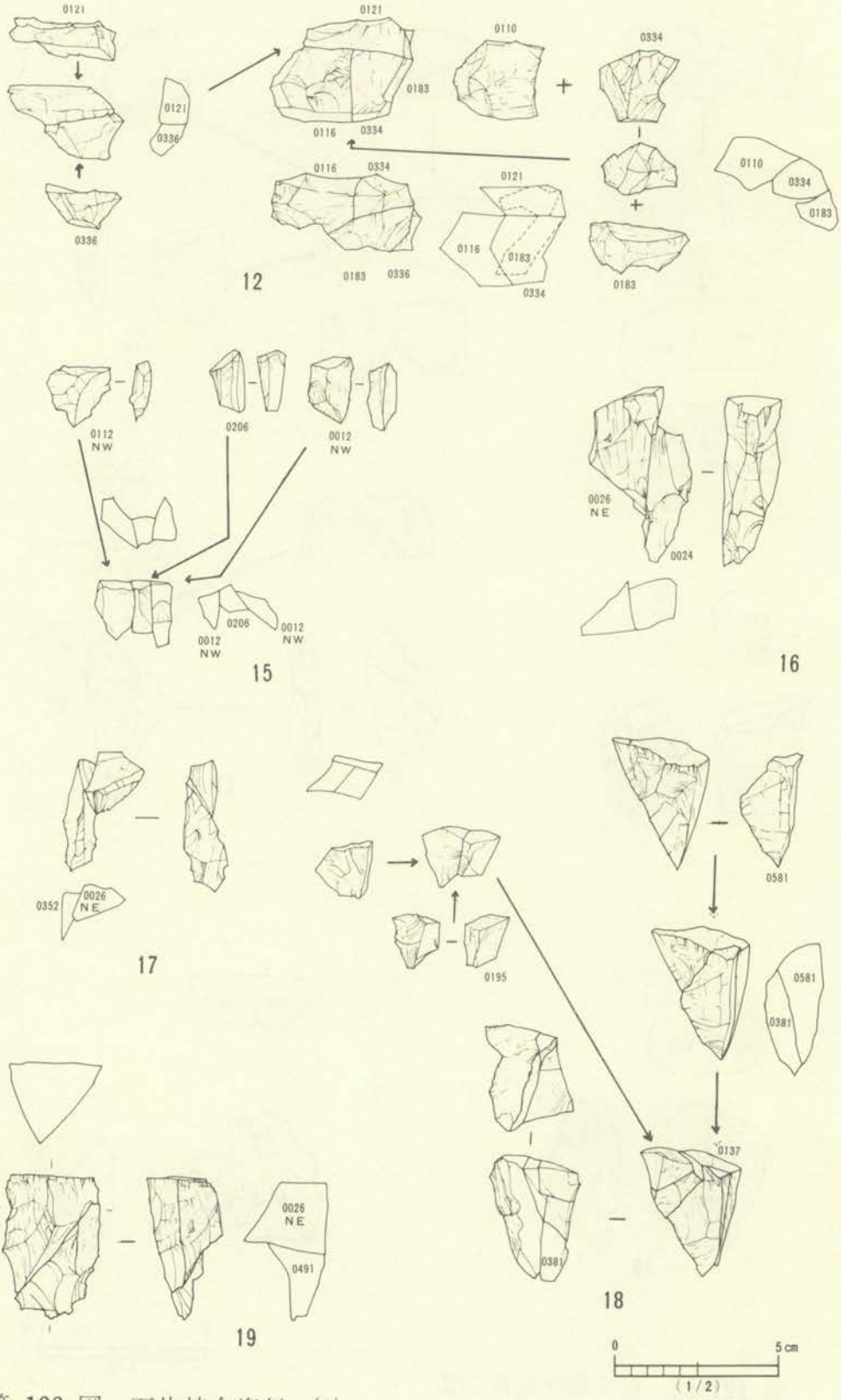
15．0012ＮＷ，0206，0012ＮＷであり、0012ＮＷ－0206の距離は 678 cmのかなりの距離である。接合上面に石脈の石皮を残すが、各剥片の接合面も石脈が見られこれにそって剥離したものと考えられる。



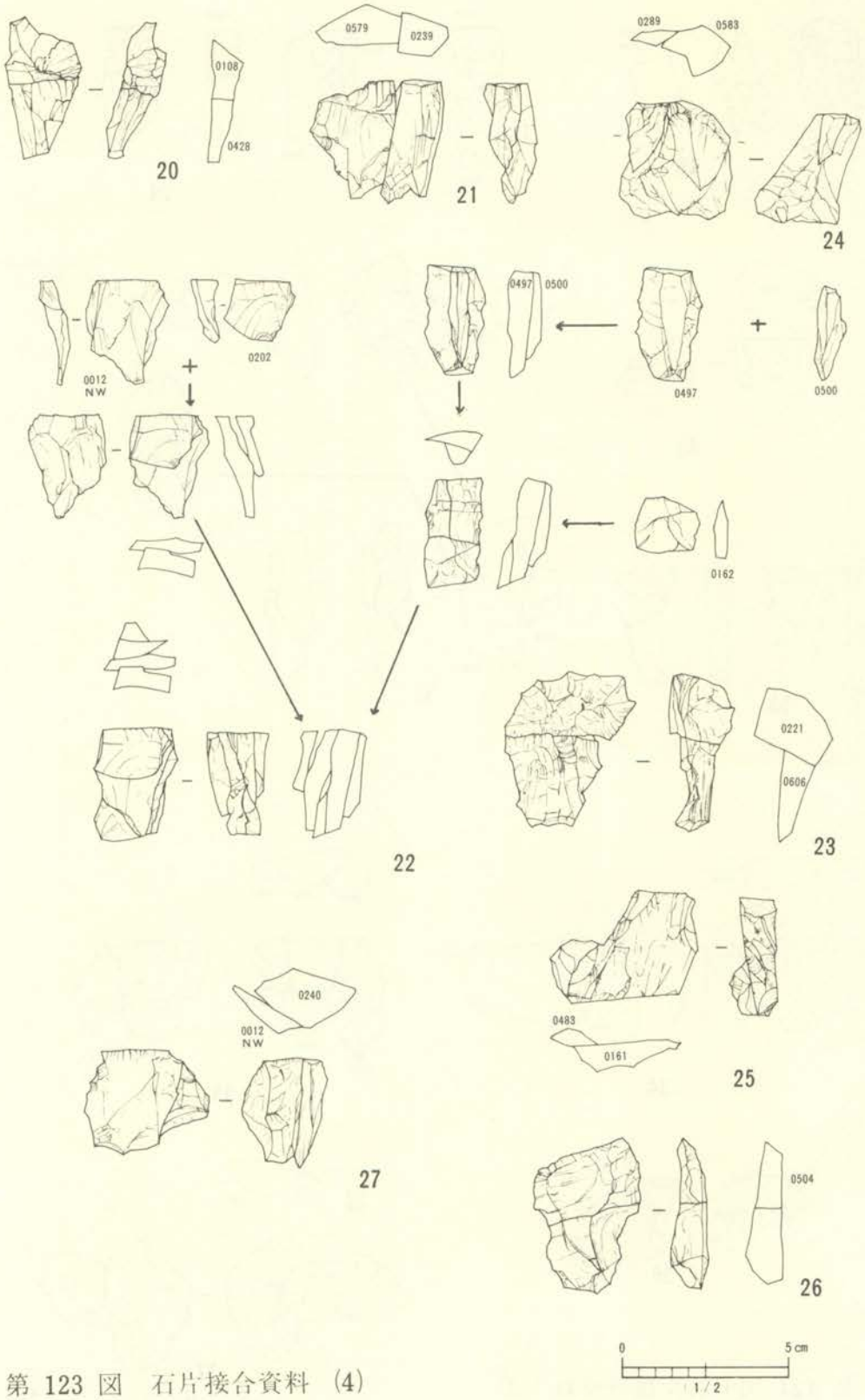

第 120 図　石片接合資料 (1)



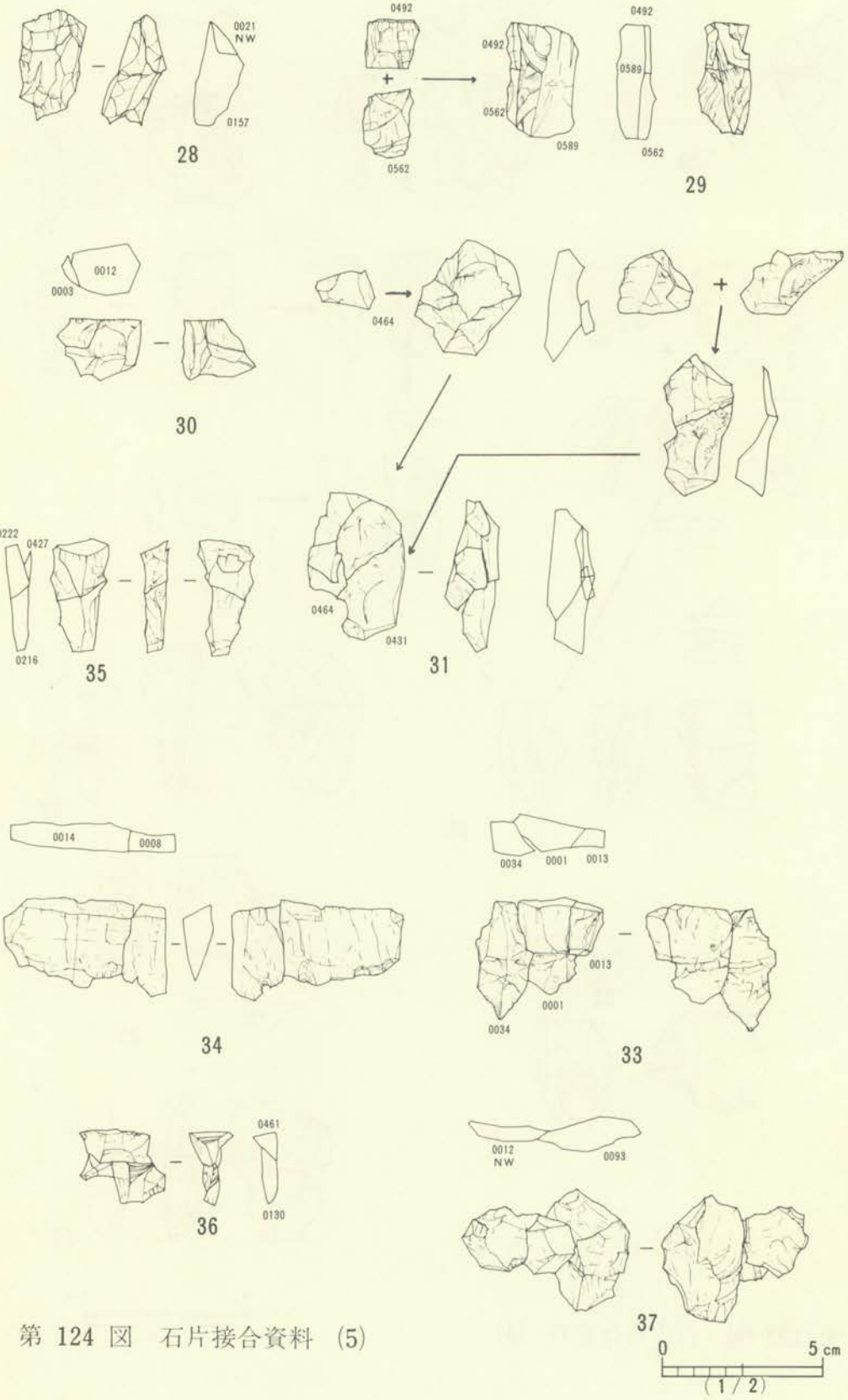

第 121 図　石片接合資料 (2)




第 122 図　石片接合資料 (3)




第 123 図　石片接合資料 (4)




第 124 図　石片接合資料 (5)

16．0026ＮＥ，0024の２片が接合したものであるが、接合片の距離は 130㎝である。0026ＮＥの上部は石皮を残す、かなり各方向から加撃されている。

17．0026ＮＥ，0352の２個が接合したもので、接合片の距離は 624㎝とかなりの距離である。縦形の剝片である。上部はフラットな面をのこし、0026ＮＥ面には細長い剝離が見られる。

18．0137，0581，0195，0381の４個が接合したものであり接合片の距離は0137－0195は 190㎝ 0581－0195は 530㎝、0195－0381は 318㎝を測る。接合体の上部は表皮を残す。側面の直線的に剝離している所は石脈である。中形の縦形の剝片が母体となっており、他の２個は小片である。

19．0024ＮＥ，0491の２個が接合したもので、接合片の距離は 682㎝と距離がある。上部は石皮をのこす。上面からの加撃において剝離されている。

20．0153，0428の２個の石片が接合したもので、接合片の距離は８㎝と非常に近距離である。横形の剝片であるが、剝離面が石脈になっている。加撃の方向は不明である。

21．0239，0579の２個の接合で、接合片の距離は 376㎝を測る。中形の縦形の剝片で接合体の上部は石皮を残す。上部からの加撃による剝片であろうと思われる。

22．0202，0012ＮＷ，0500，0497，0162の５個の石片が接合したもので、各間の距離は0202－0500は 320㎝、0012ＮＷ－0500は 642㎝、0500－0497は 700㎝とかなりの距離であり、0500－0162は 786㎝とこれもかなりの距離である。0497，0500，0012ＮＷの石片は縦形の剝片である。接合体の上下面とも石皮を残すもので、この石皮石脈の幅は３㎝を測る。これらの石皮の剝離は、大部分が上部加撃であるが、0162だけが下方からの加撃であろう。しかし石脈で割った石材は各方向から加撃しているように考えられる。

23．0221，0606の２個の石片が接合したものであり、接合片の距離は 196㎝を測る。中形の横形の剝片であり表面は細い剝離面をのこす。

24．0239，0583の２片が接合したもので、接合片の距離は 376㎝を測る。中形の剝離に小片の0239が接合するもので剝離は、上面から加撃されたものであろう。

25．0483，0161の２片が接合したもので、接合片の距離は 446㎝を測る。接合体の上下面とも石脈の石皮をのこす。この石材の石脈の幅は３㎝である。0483，0161の接合面も石脈であろうと思われ直線的に剝離している。

26．0504，表採の２個が接合したものであり横形の剝片である。

27．0240，0012ＮＷの２個が接合したもので、接合片の距離は 998㎝を測る。接合体の上部は石皮をのこす縦形の剝片である。

28．0157，0021ＮＥの２個の石片が接合したものである。接合片の距離は 394㎝を測る。0021ＮＥは横方向から打撃された剝片である。

29．0492，0562，0589の３個の石片が接合したものであり、それぞれの距離は0492－0589は27

2㎝で、0589－0562は 144㎝である。３個とも縦形の剥離である。この剥片は0492と0562は１体の剥片で、剥離した後ほぼ中央部から折断したものと思われる。

30．0003，0012の２個が接合したもので、接合片の距離は 220㎝である。接合体の上部は石皮をのこすが、0003は下方から加撃され剥離されたものであろう。

31．0250，0473，0431，0464の４片が接合したもので、それぞれ距離は、0250－0473は 636㎝ 0437－ 431は 518㎝、0437－0464は 420㎝を測る。0473，0250の剥片は１個の縦形の剥片であったものを折断したものと思われる。かなり各方向からの加撃があったと思われる。

33．0034，0001，0013の３個が接合したもので、それらの距離は0034－0001は 220㎝で、0001－0013は 420㎝を測る。縦形の薄い剥片である。接合体の上面は石皮をのこす。剥離は上面加撃と思われるが、各方向からの剥離がみられる。

34．0014，0008の２個の接合で、接合片の距離は90㎝を測る。この接合体は横形の剥片であったものを折断したものであろう。

35．0222，0216，0427の３個体が接合したもので、それぞれの距離は0216－0222は96㎝で、0222－0427は 188㎝である。この接合体が下方から加撃されてできた剥片であり、それを中央部から折断したものと思われる。接合体の上下方面とも石皮をのこす。この石材の石脈巾は 3.2㎝を測る。

36．0461，0130の２個が接合したもので、２個の剥片は 194㎝を測る。不定形の剥片である。

37．0012ＮＷ，049の2個が接合したもので、接合片の距離は 684㎝とかなりの距離を測る。横形と縦形の剥片である。各方向から加撃されている。

以上36個の接合体を記述したが、前述した土器と同一レベル上で出土しており土器の時期と同一時期としたい。

（瀬戸　久夫）

## 第3節　まとめ

### 1．古　墳

調査の結果、清水作古墳は、内径20cmの円墳であることが判明した。墳丘の築造は、径約20mの円形部を残して外側の旧表土を削平して深さ約1m・幅3.5mの周溝を堀削することによって墳形を確している。堀削によって生じた土は封土として利用されたと考えられる。埴輪・葺石等の外部施設は確認されなかった。内部施設は、南側の周溝内に近い部分に設けられ主軸は東方向であった。古墳に関連ある出土遺物は墳頂部付近で出土した直刀・鏃のみである。しかしこの直刀は出土状態が不自然であり盗堀をうけた可能性も考えられる。清水作古墳の内部施設は、前述した如く墳丘裾部に地山を穿つた土壙である。近くに存在する中原古墳群の内部施設は、ほとんどが墳丘裾部に偏在しており、本古墳もこの中原古墳群との関係も考えられ、特に中原古墳群のII号墳と類似するのではなかろうか。中原古墳群は内部施設のあり方からいわゆる変則的古墳と云われるが、本古墳もそれと同様に把えられよう。本古墳の築造時期は、中原古墳群などとの関連から考え、墳丘裾部の土壙の時期は、6世紀末葉から7世紀初めと考えたい。しかし墳頂部の出土遺物を考えるならば、出土した場所に土壙より古い時期の内部施設の存在が考えられるのではなかろうか。　調査時に精査を試みたのであるが、土壙の痕跡も確認されなかった。しかるに本古墳は6世紀末から7世紀初めより以前に築造されたと考えられる。少なくとも2期にわたって使用されたのであろうと考えたい。また6世紀末葉から7世紀初め以後、歴史時代に入ってから土塁状遺構と関連するものとして利用され、物見台としての利用も考えられる。前述したように古墳の表土から中世陶器片なども出土していることから考えられる。本古墳は、舌状台地の先端部に位置する築造物として、本来の聖域としての機能から軍事的施設としての転用も考えられる。

〔参考文献〕

・武田宗久・後藤和民・庄司　克・「第3節　古墳時代」『千葉市史』原始古代中世編　昭和49年　千葉市

・千葉市史編纂委員会「第4節　古墳時代」『千葉市史』史料編1　原始時代中世　昭和51年　千葉市

・中村恵次・市毛　勲「千葉市中原古墳群調査報告」『古代』37号　昭和36年　早稲田大学考古学会

・市毛　勲「東国における墳丘裾に内部施設を有する古墳について」『古代』41号　昭和38年　早稲田大学考古学会

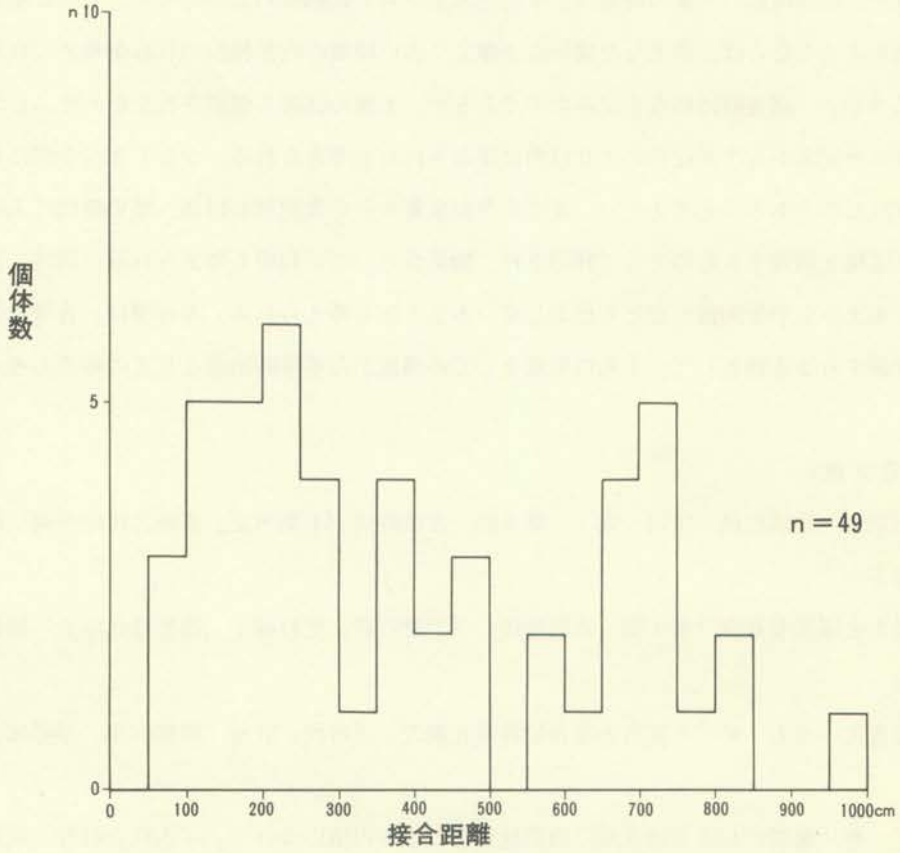
・谷沢良光・小澤清男「千葉市平山町新山遺跡発堀調査概報」昭和53年　新山遺跡発堀調査団

・折原繁・杉山晋作・瀬戸久夫「千葉市築地台貝塚・平山古墳」昭和53年千葉県文化財センター

2．古墳下

古墳下の旧表土黒色土下より、石片・土器片の多数の出土を見た。先述したように石片480個・土器片117個の出土を見たもので、黒色土下に焼土粒（スコリア）混黒色土にもっと多く存在した。これと同様な土層は、本遺跡から北方向約4kmに築地台貝塚が見れるがこの調査現場から同様な層位と、同時期の土器片・住居跡などがみられる。また特に出土した石片480個の内38個体が接合した。出土した土器片から考え縄文後期末葉の時期であろう。古墳としてこの地域が分断される以前は、この舌状台地部分は狭い平担地を形成しており、縄文後期末葉の生活面で石鏃等の加工の場所として利用していたのではなかろうか。調査範囲内で縄文時代と考えられる住居跡は、1軒確認されたがこの後期末葉のものとは断定できない。しかし可能性は大であろう。

土器の分布と接合関係について（第125図）

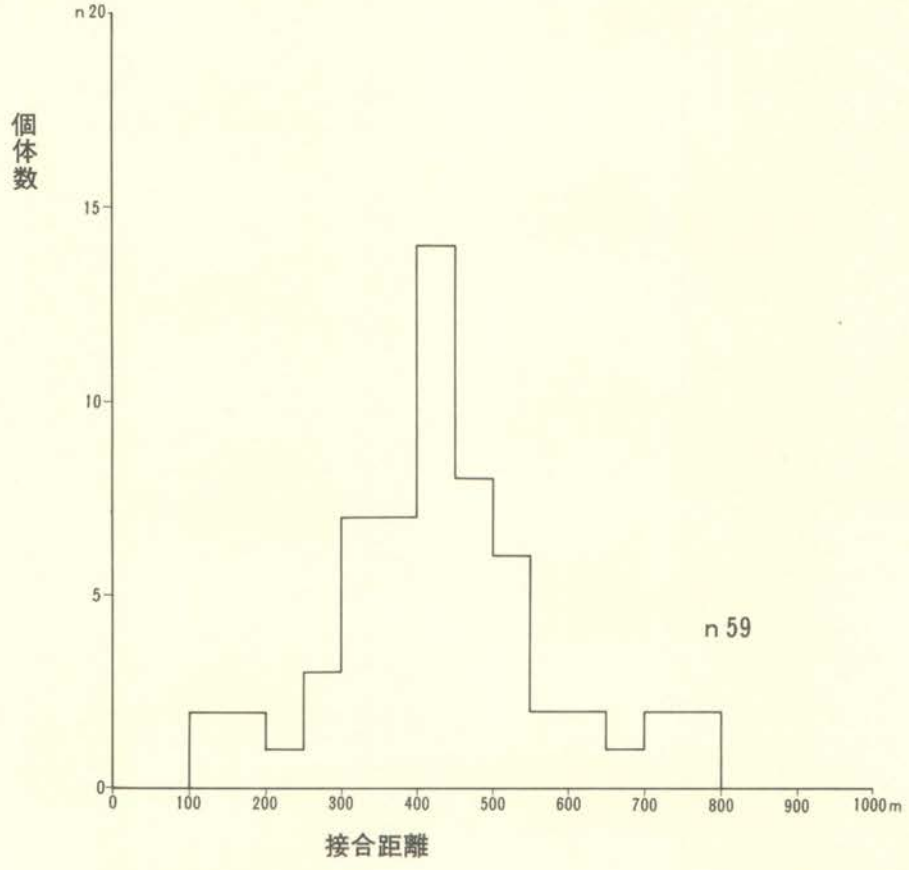



第 125 図　古墳下出土石片接合分布図

古墳下の出土遺物は全点出土状態を記録して分布図を作成した。前述したように土器片 117 個について接合関係を試みたので若干の考えを述べてみたい。接合できた土器は67個であるが、他の土器は細片などで接合不可能のものもあった。ここでは、土器片の接合距離を測定し、この古墳下包含地における接合距離の分布図を作成してみた。個体数は59個であるが、同地点で出土したものもある。その結果、第125図のように300cm～550cmの間に集中しておりこの間の個体数は42個で71%である。この距離について私考するならば、集中する300cm～550cmの間を中心区としてピークである400cm～450cmを中心として土器片の拡散する距離は、300cm～350cmの距離であるとこの場合は理解したい。このような分布図を他の出土遺物に応用し各資料を提示し試行するのも1つの方向であろうと考える。

石片の分布と接合関係について（第126図）

総数 480 点以上の石片が出土したのであるが、その内接合数36個体である。それらの接合片の距離の分布図を作成してみると、3つのピークが見られ100～300cm，350～500cm，650～750cmで




第 126 図　古墳下出土土器片接合分布図

ある。100～300cmの割合は、40%，350～500cmの割合は、18%，650～760cmの割合は、18%である。半径50cm～150cmの間に最も集中分布する割合がたかく、これは1つの作業工程の中の広がりと見る事ができよう。今回時間的制約のためできなかったが、重量を加えた分布図を作成して考えればより好資料が得られるのではなかろうか。

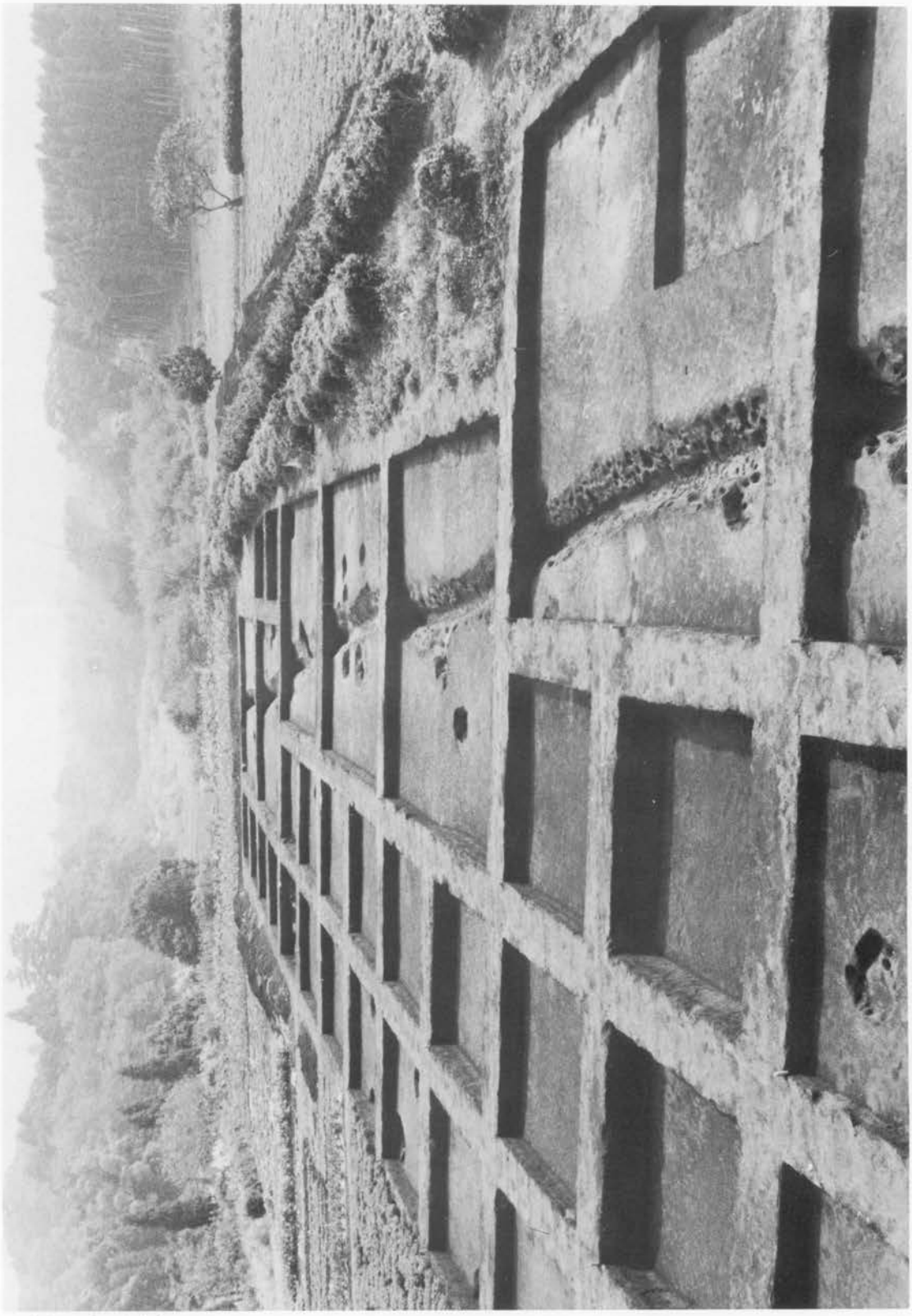
（瀬戸　久夫）

# 奈木台第5遺跡

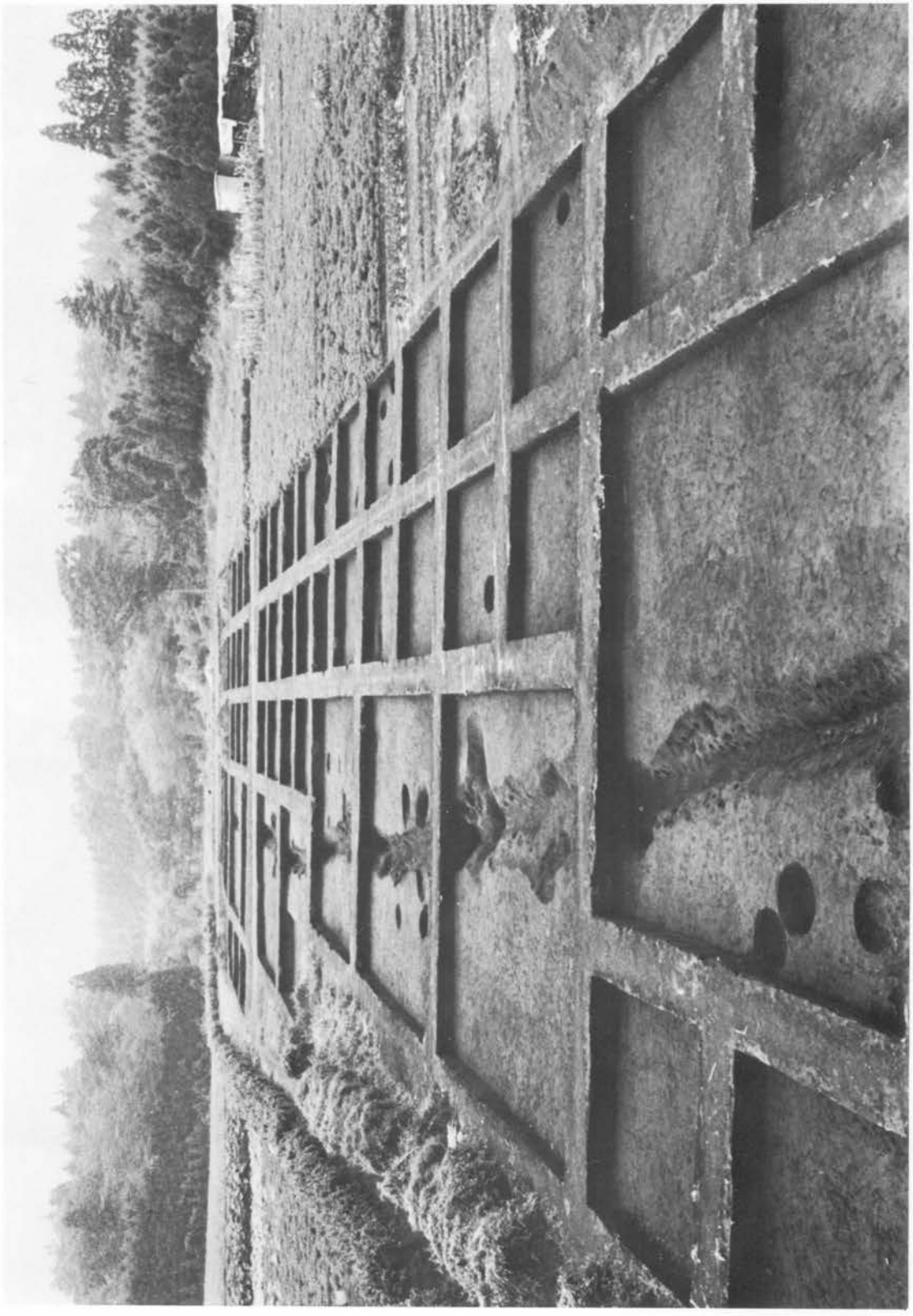
1．北から調査区をのぞむ（発掘前）

2．南から調査をのぞむ（発掘前）

奈木台第5遺跡

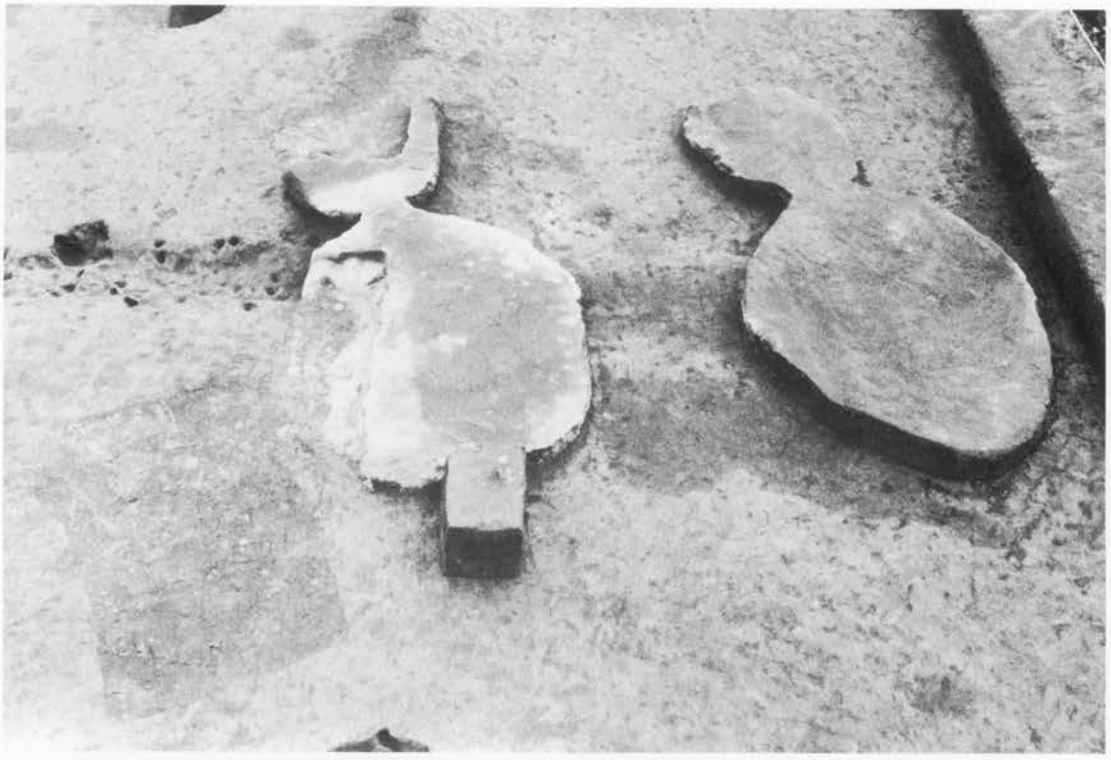


調査完了（北方向）

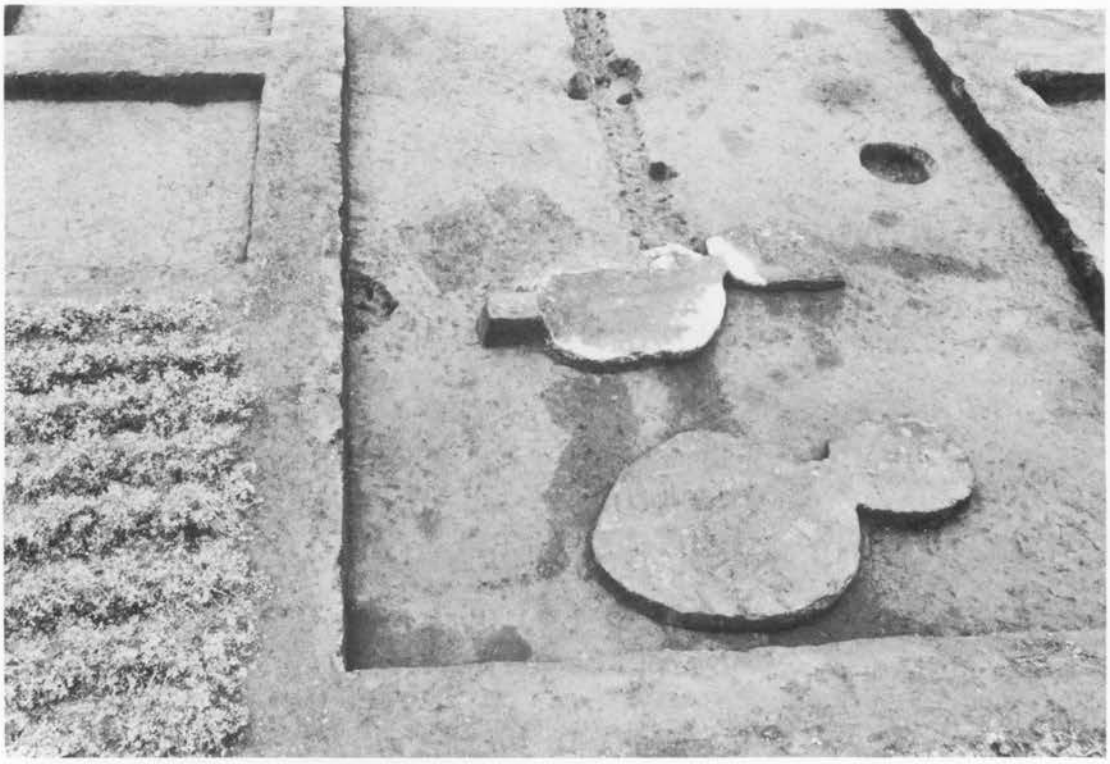


調査完了（南方向）

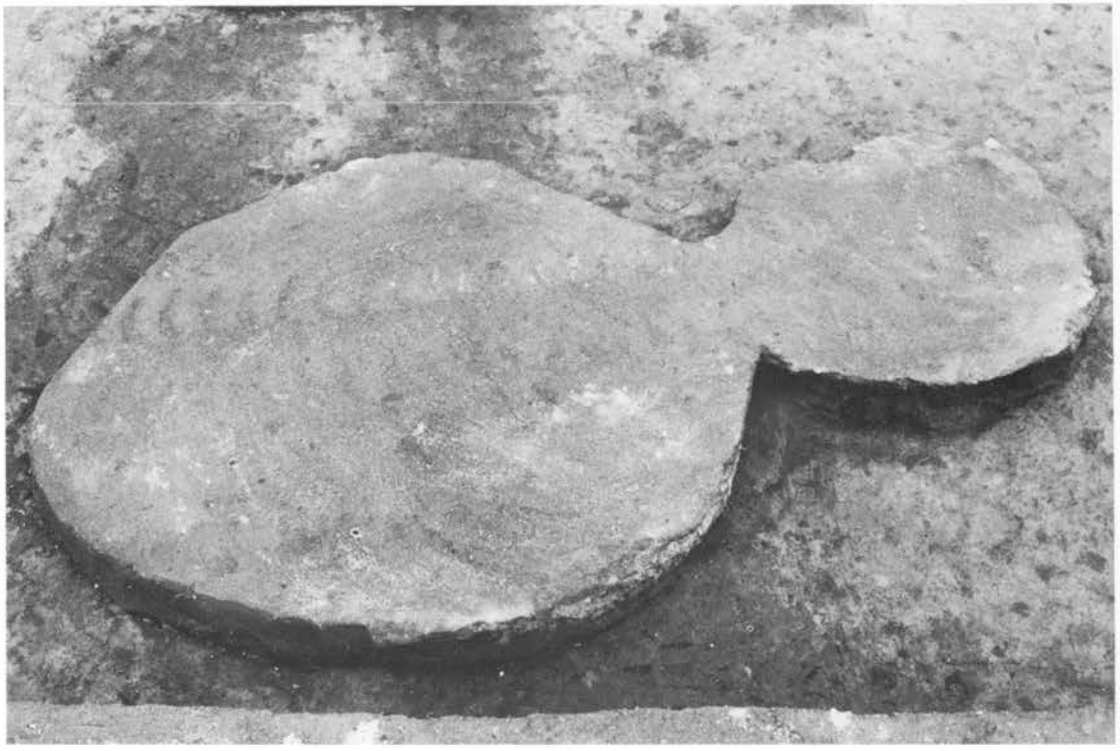
図版四　遺構



1．００１・００２・００３遺構配置図（北から）



2．００１・００２・００３遺構配置図（西から）



１．００１遺構

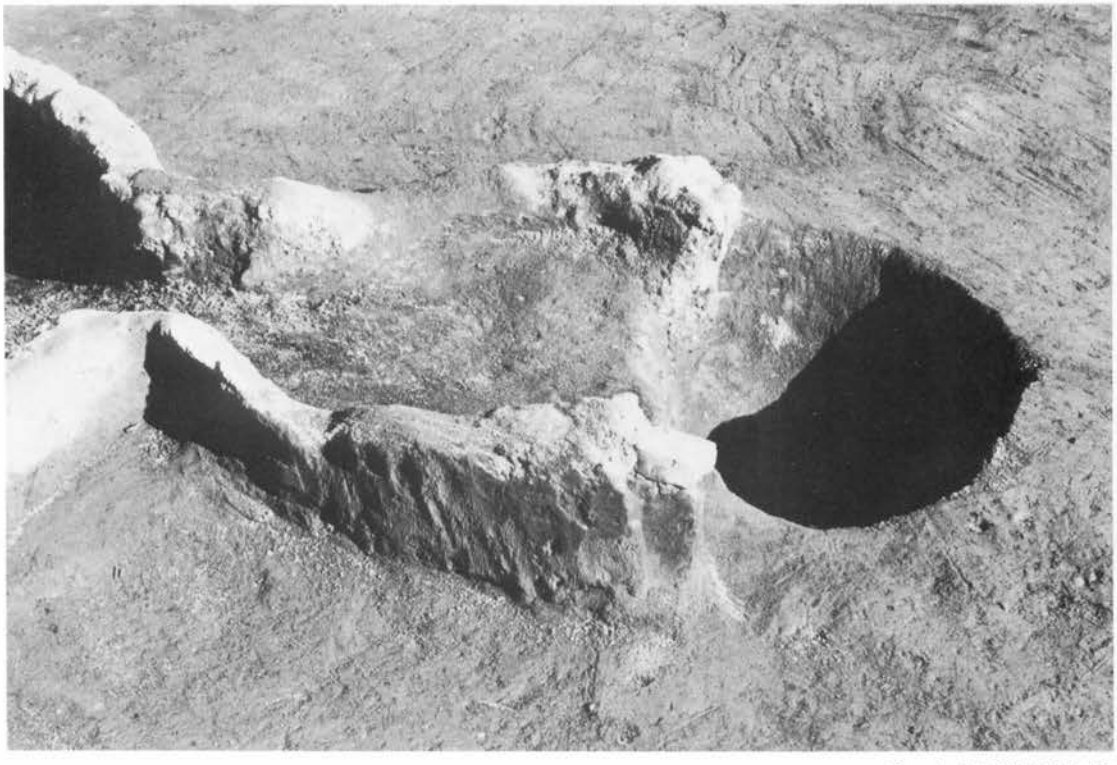
２．００１遺構断面

図版六　遺構

１．００１遺構完掘

２．００１遺構煙道状態

１．００１遺構煙道

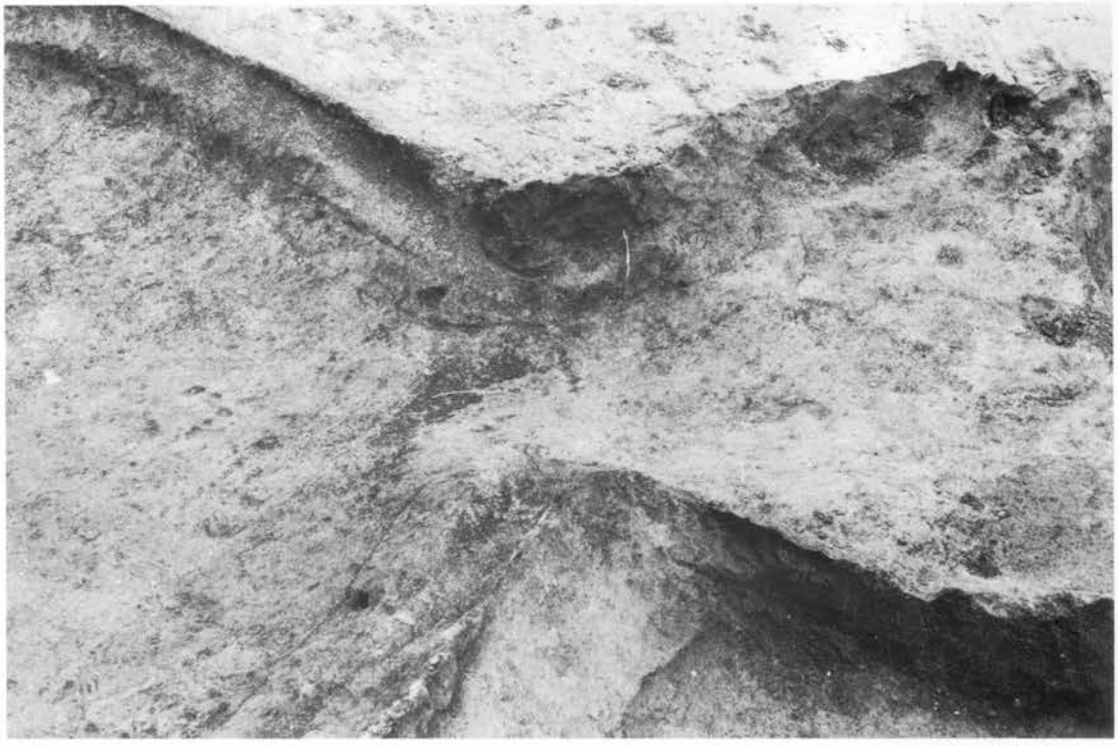


２．００１遺構焚出部

図版八　遺構

１．００１遺構窯壁断面

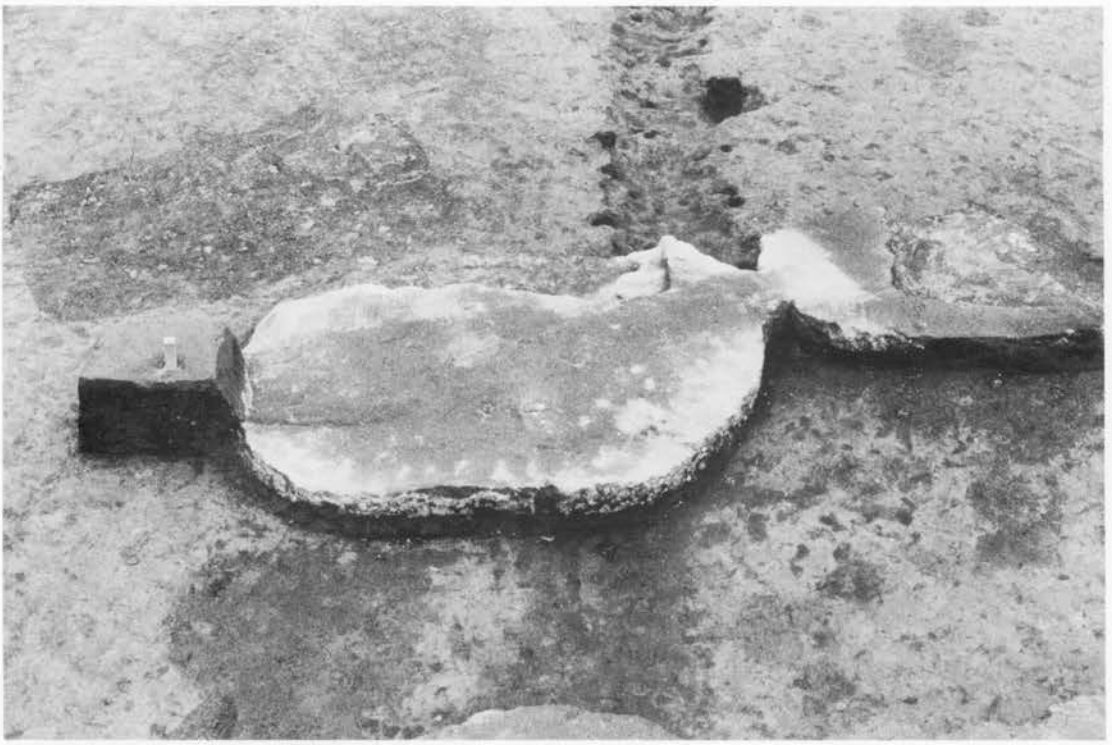
２．００１遺構窯壁断面



１．００１遺構焚出部堀込み

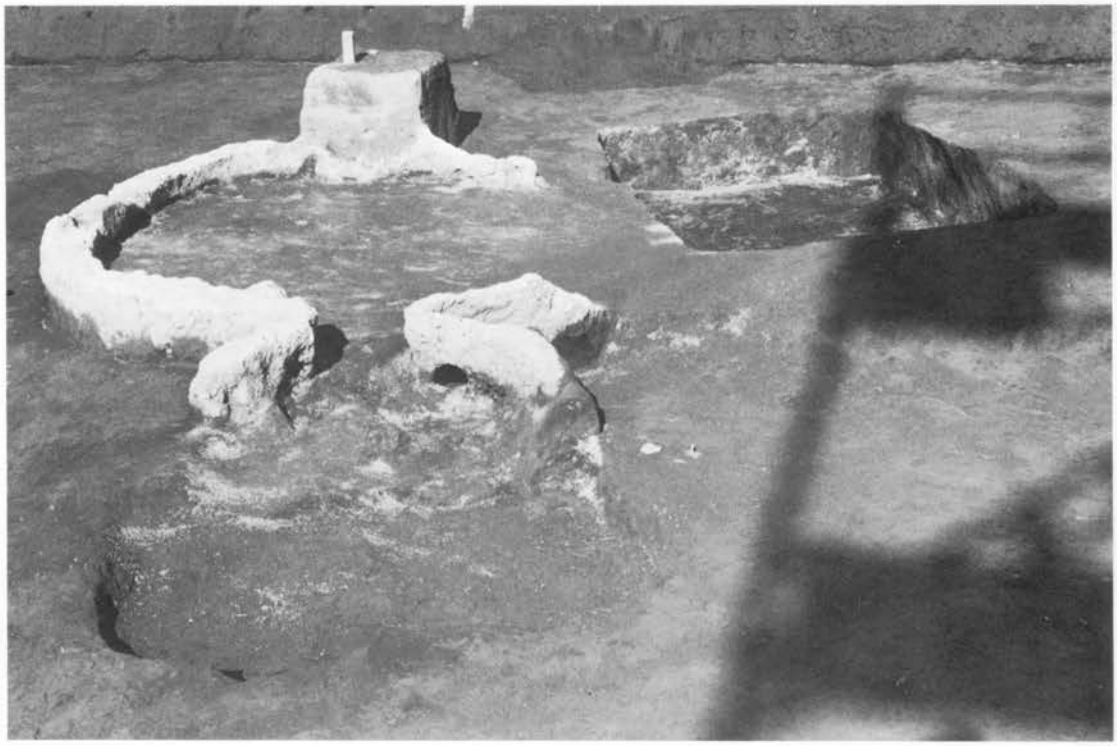
２．００１遺構完掘

図版十　遺構



１．００２・００３遺構配置状態

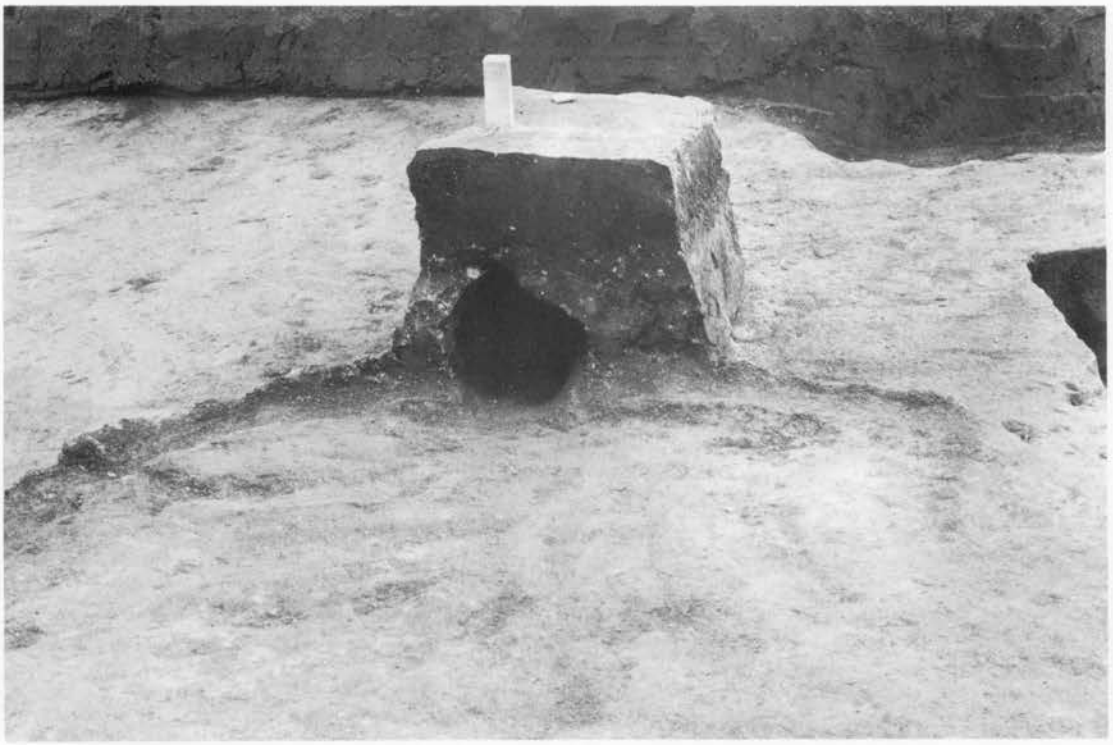
２．００２・００３遺構断面



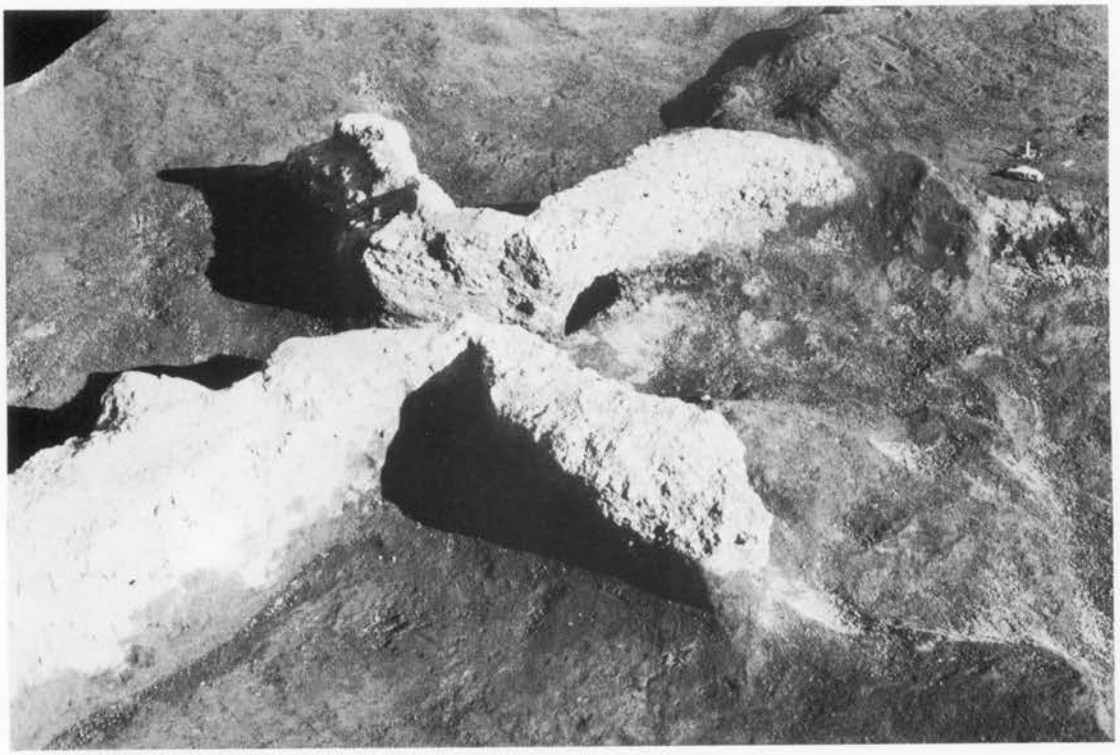
１．００２・００３遺構完掘

２．００２遺構窯壁断面

図版十二　遺構

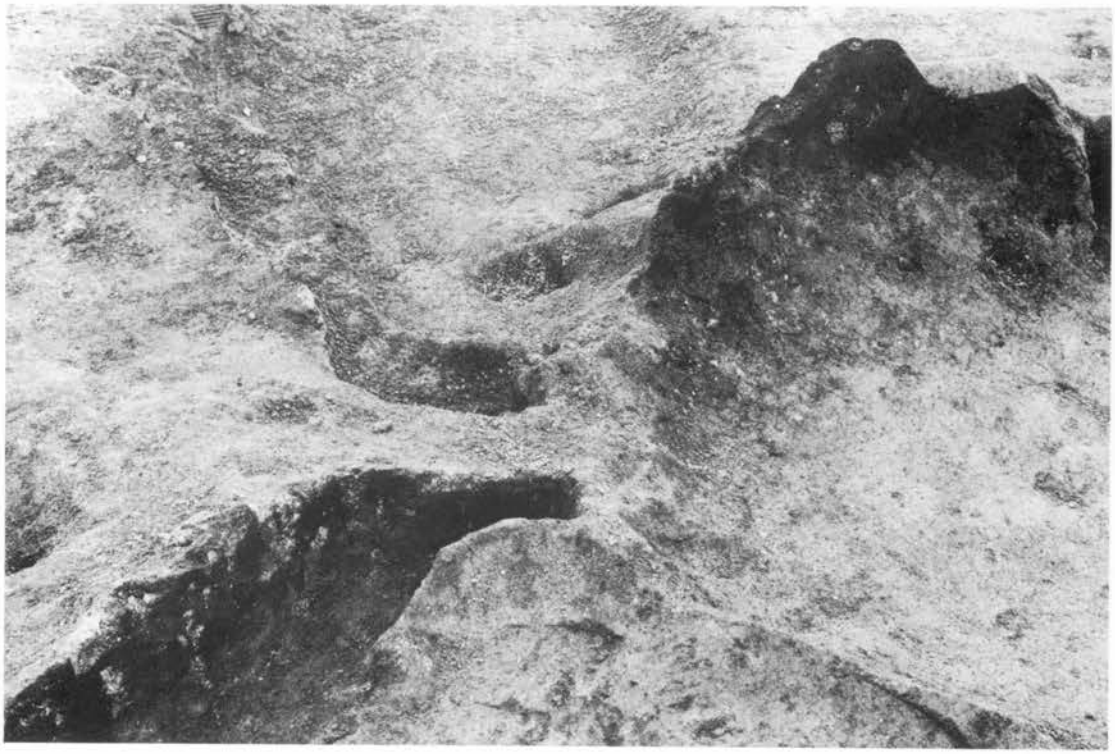


１．００２遺構堀込み



２．００２遺構焚出部

１．００２・００３遺構完掘

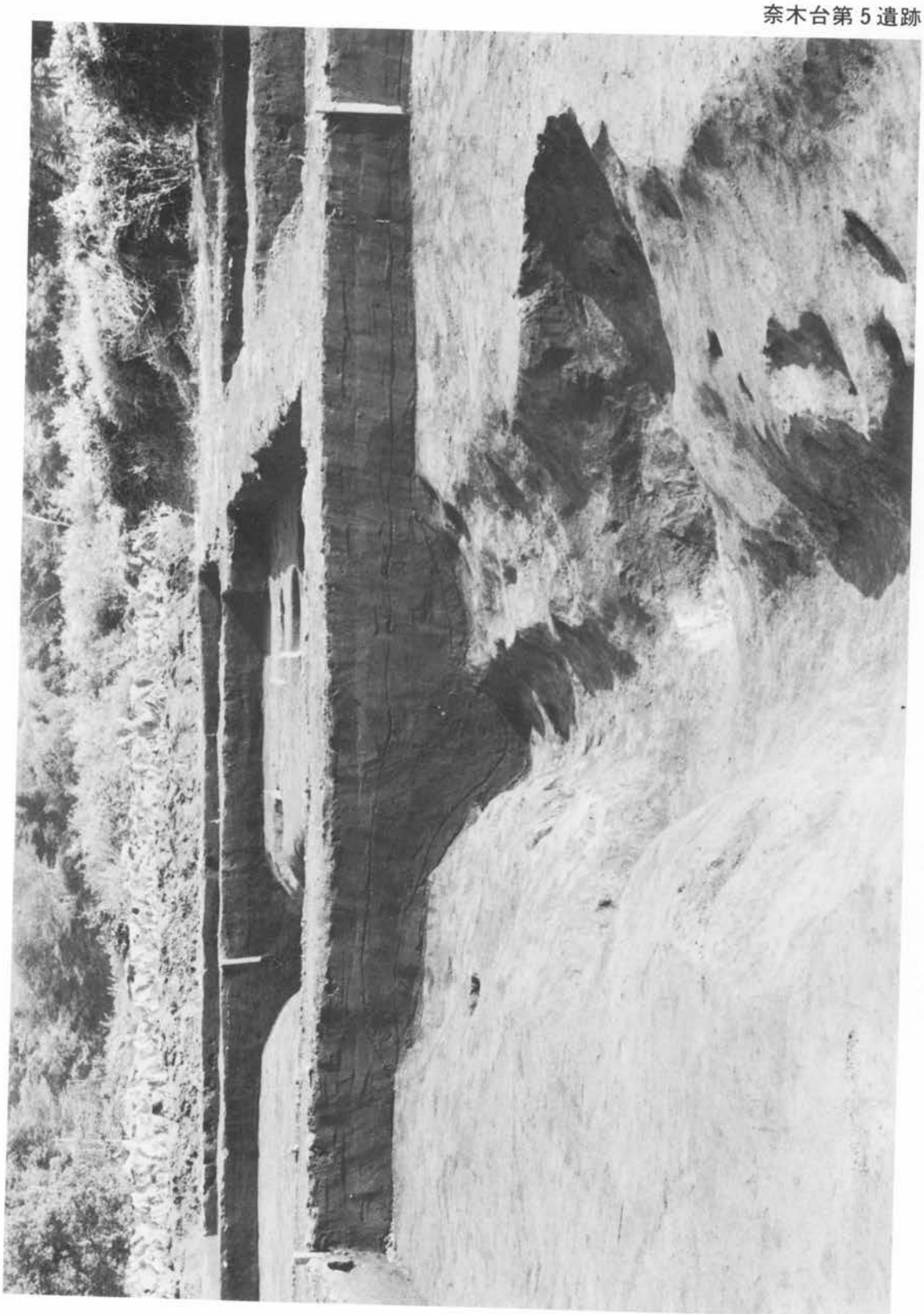


１．００２遺構焚出堀込み

図版十四　遺構

1．溝状遺構近景

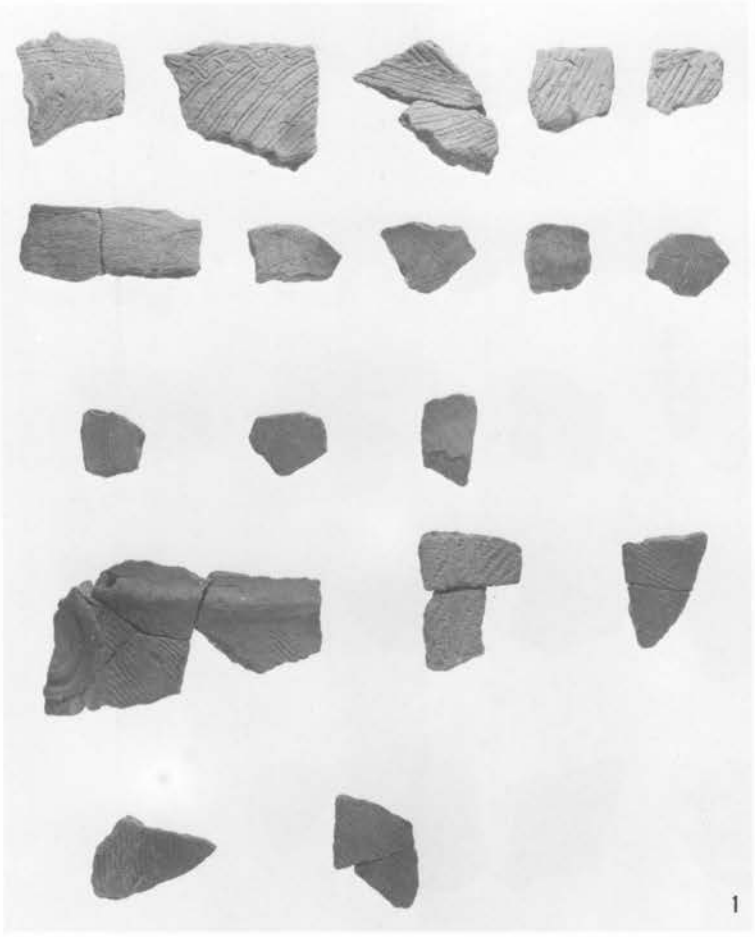
2．土壙



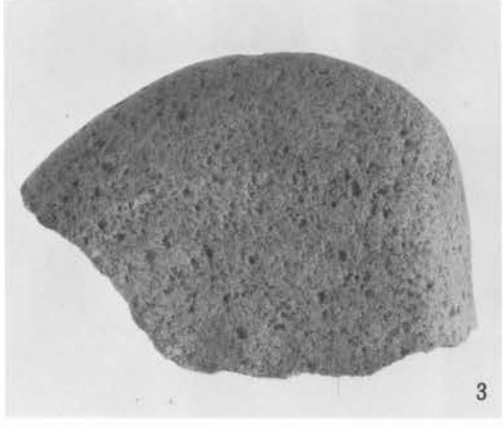
溝状遺構

図版十六　遺物

先土器時代遺物


1

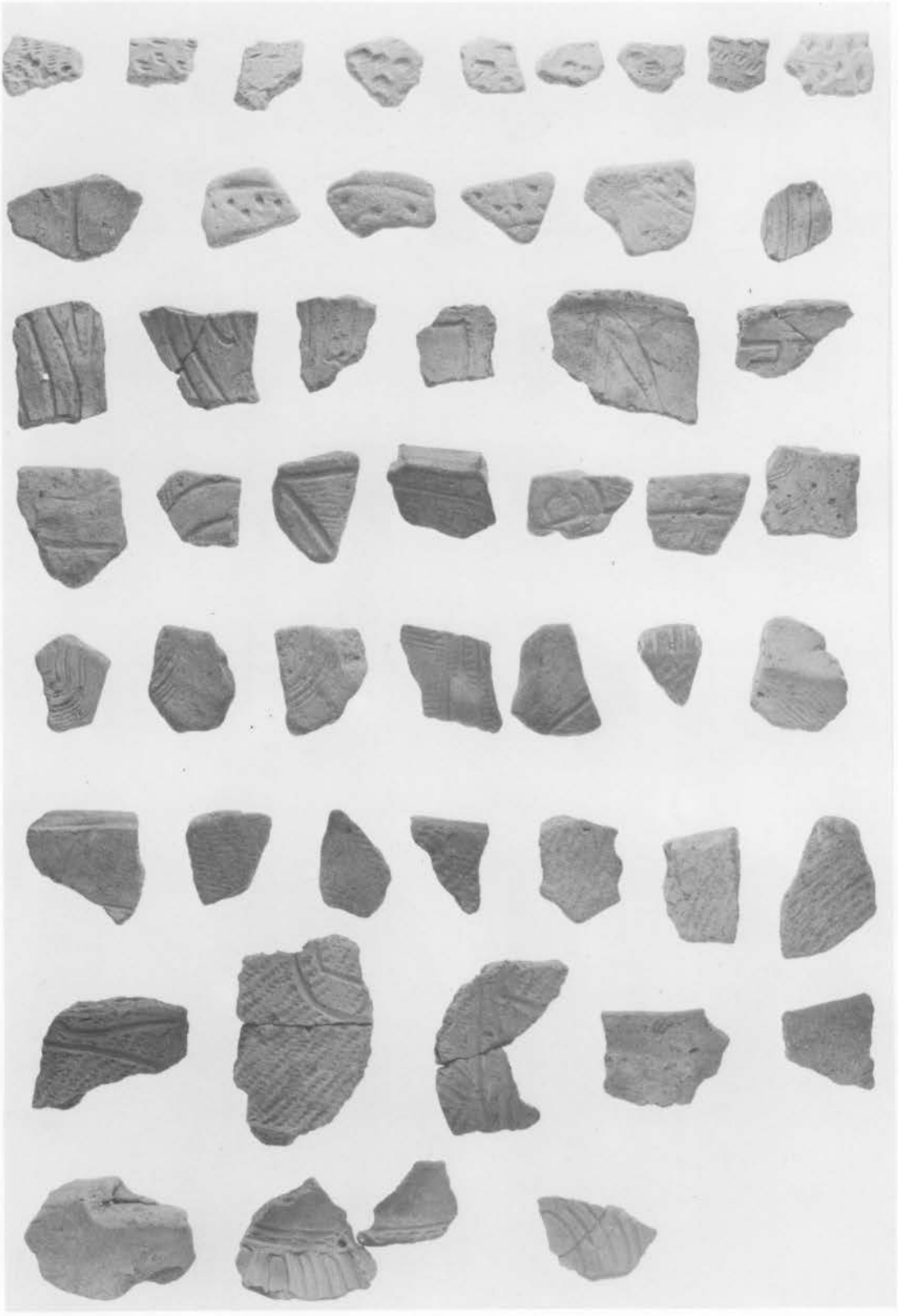
2


3

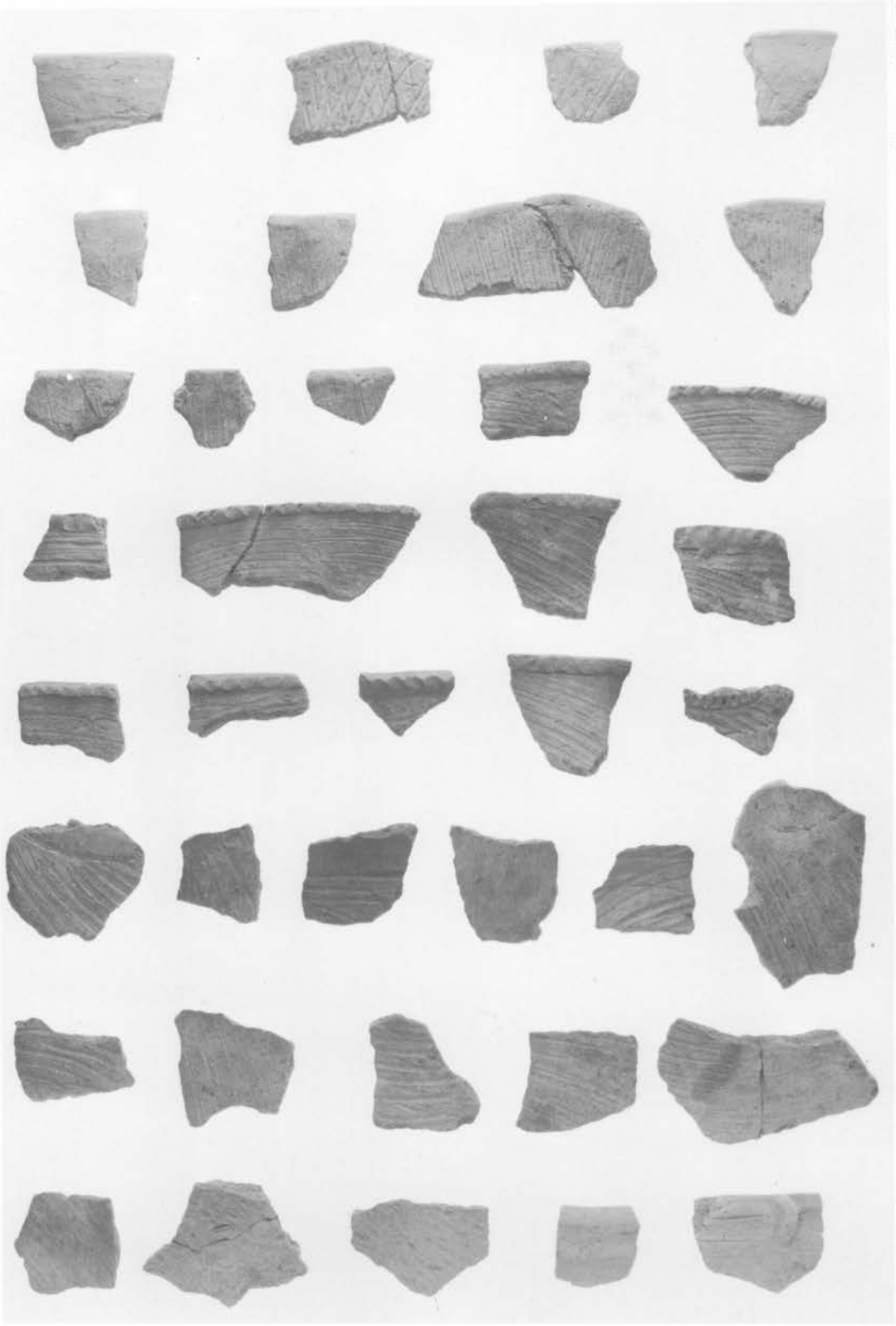
4

1．縄文土器(1)　2．4．縄文土器(5)　3．石皿

図版十八　遺物



縄文土器（2）



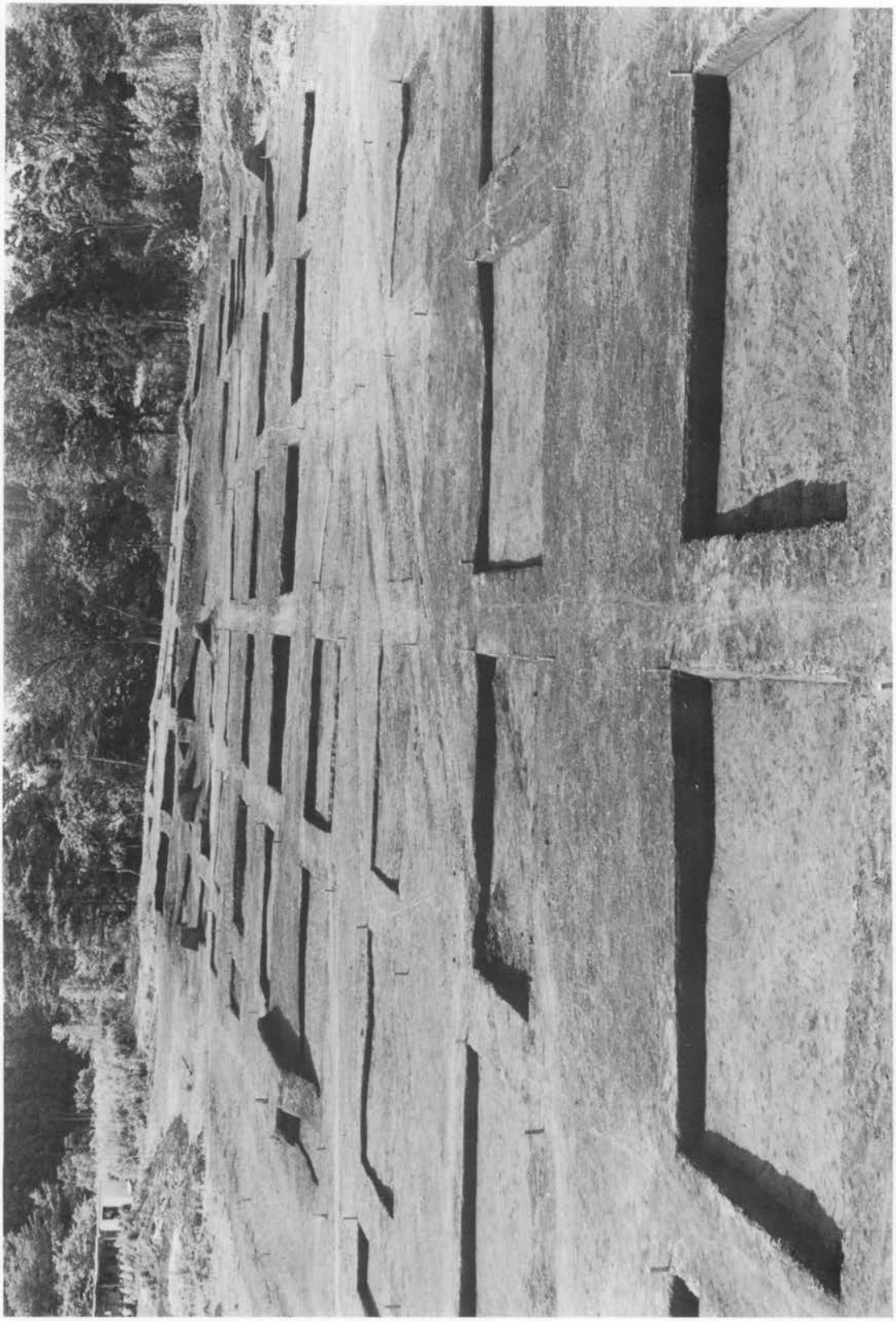
縄文土器(3)

# 奈木台第6遺跡

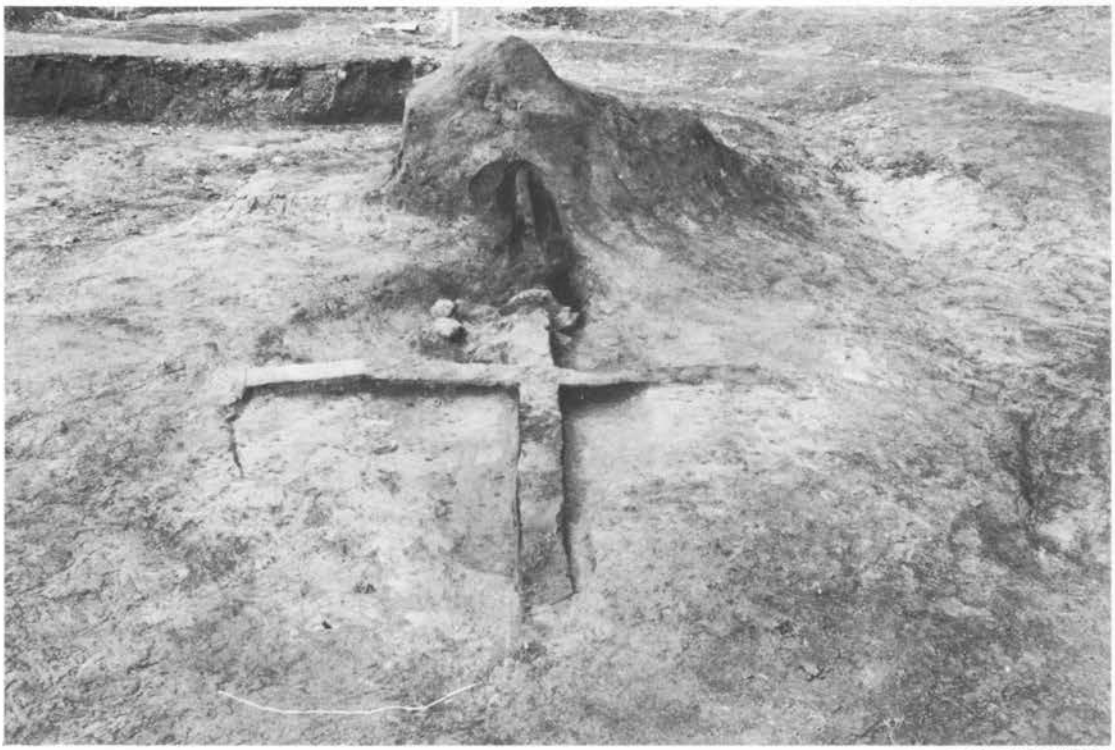
1．調査区全景（調査前）

2．遠景（東方向から）

奈木台第6遺跡



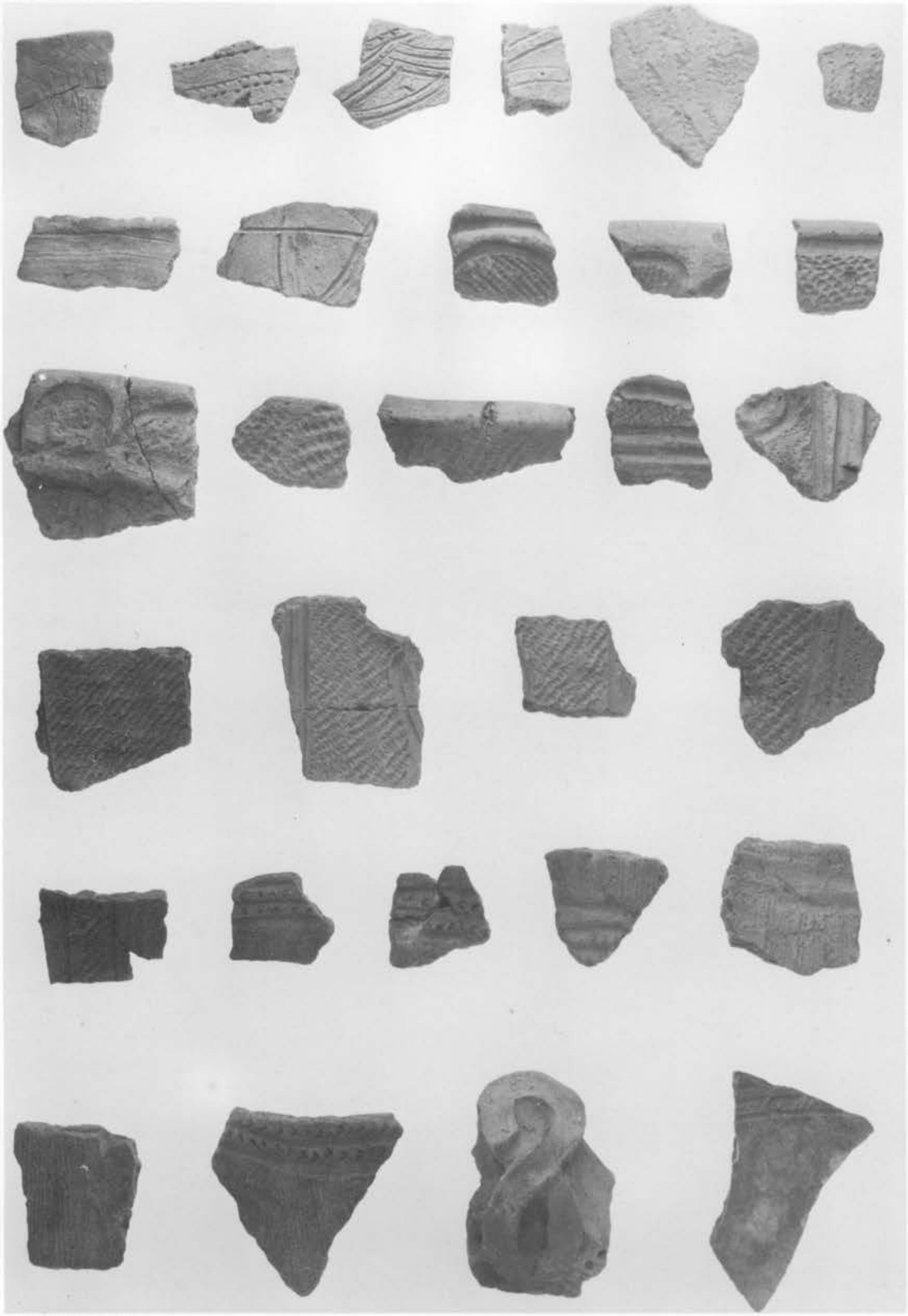
調査完了



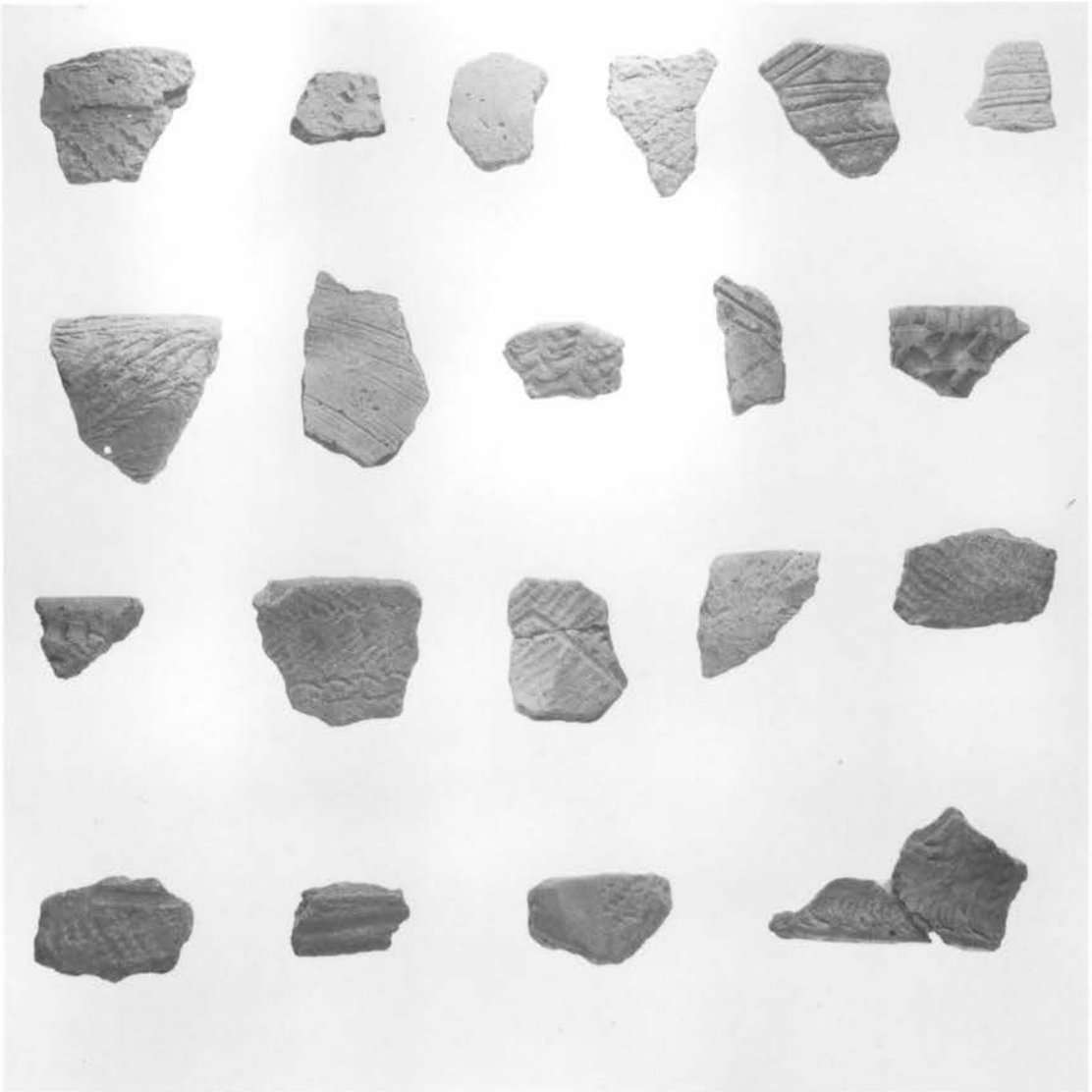
１．００１遺構断面

２．００１遺構完掘

図版二三　遺物



縄文土器（1）



縄文土器（２）

# 藤　沢　遺　跡

1．調査区全景

2．遺構確認

図版二六　遺構

1．調査完了

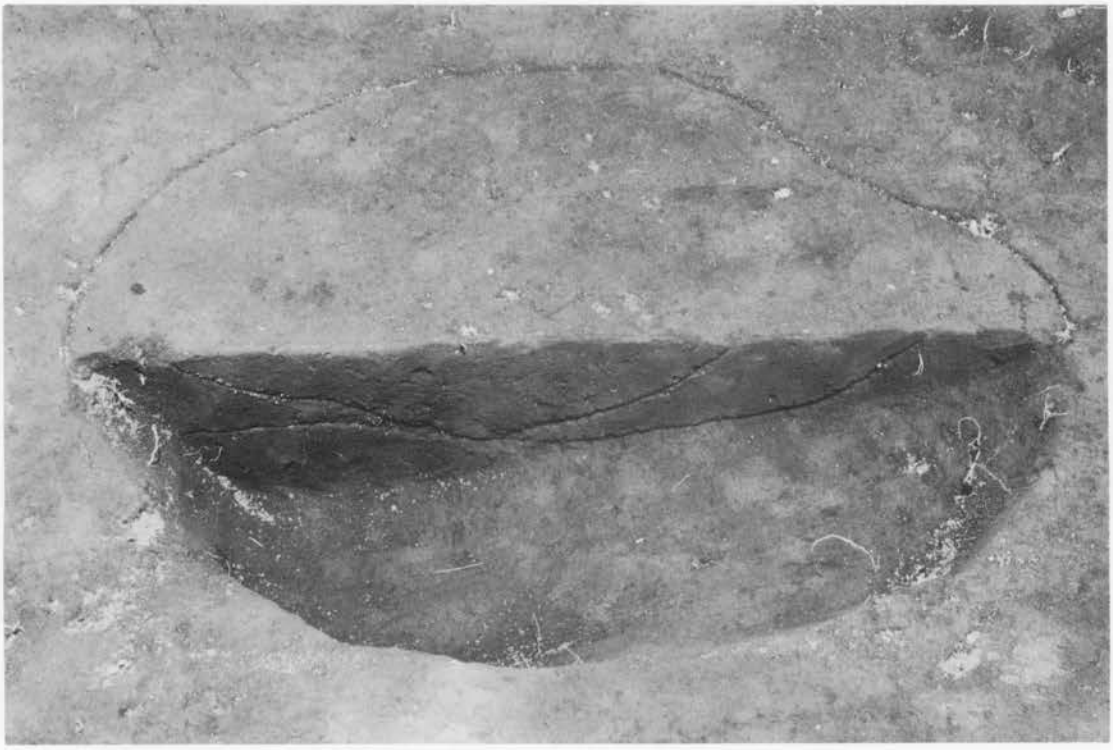
2．００５遺構完了

1．008遺構断面

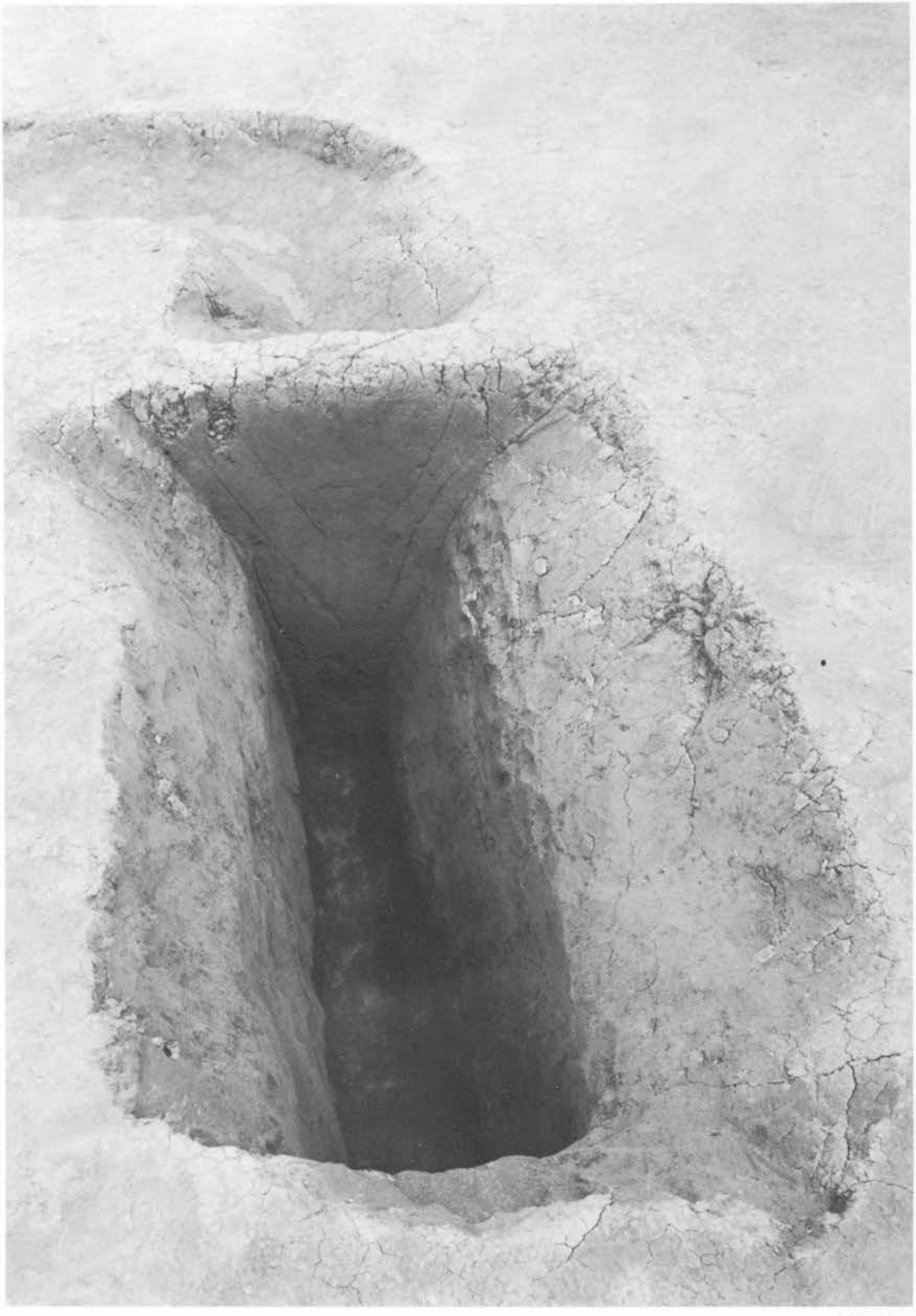
2．005遺構完掘

図版二八　遺構

1．００６遺構確認状態



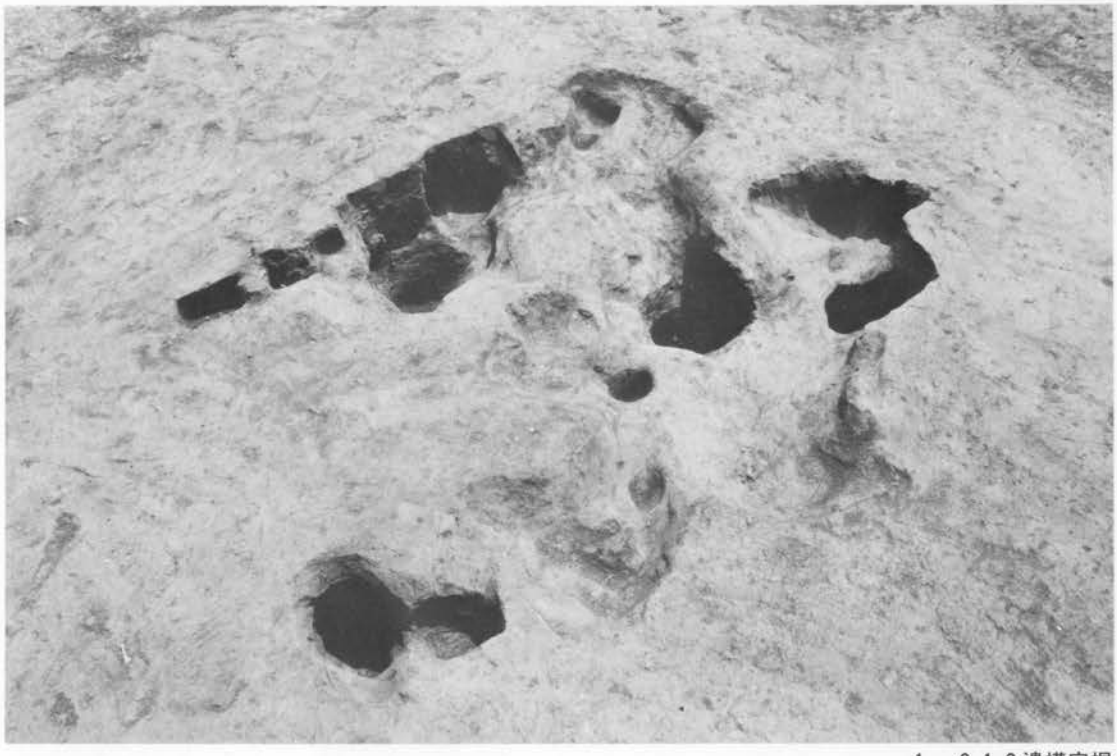
2．００６遺構断面



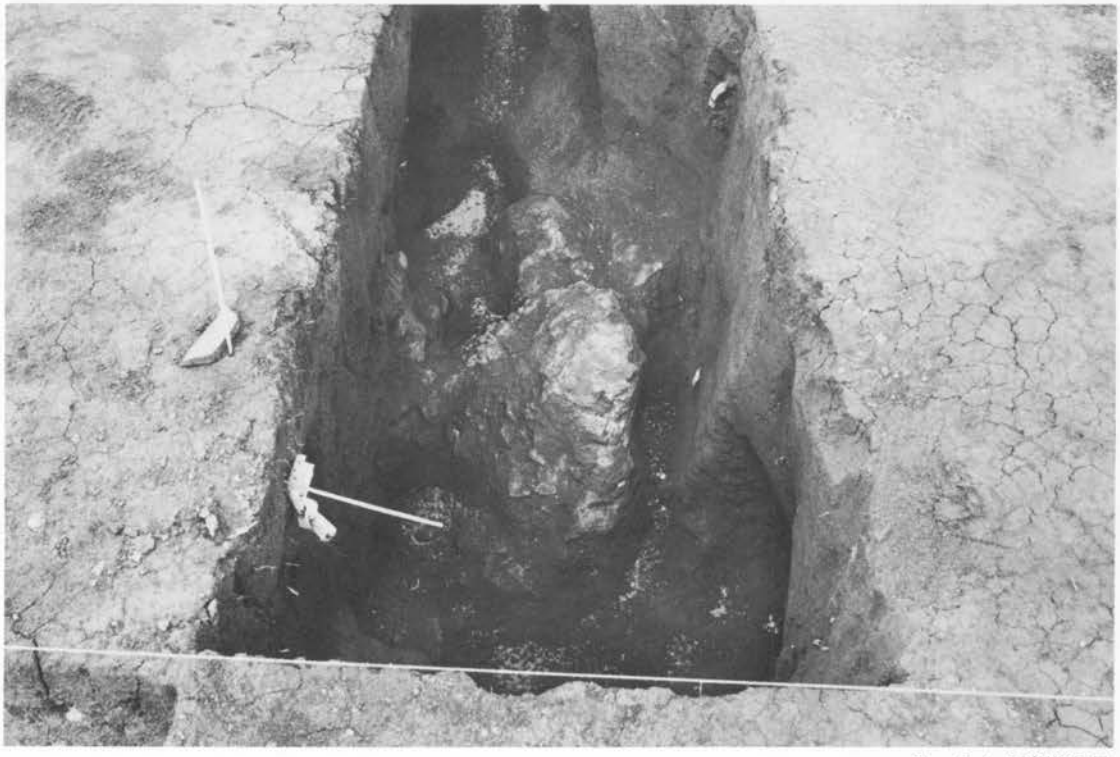
００７遺構断面

図版三〇　遺構

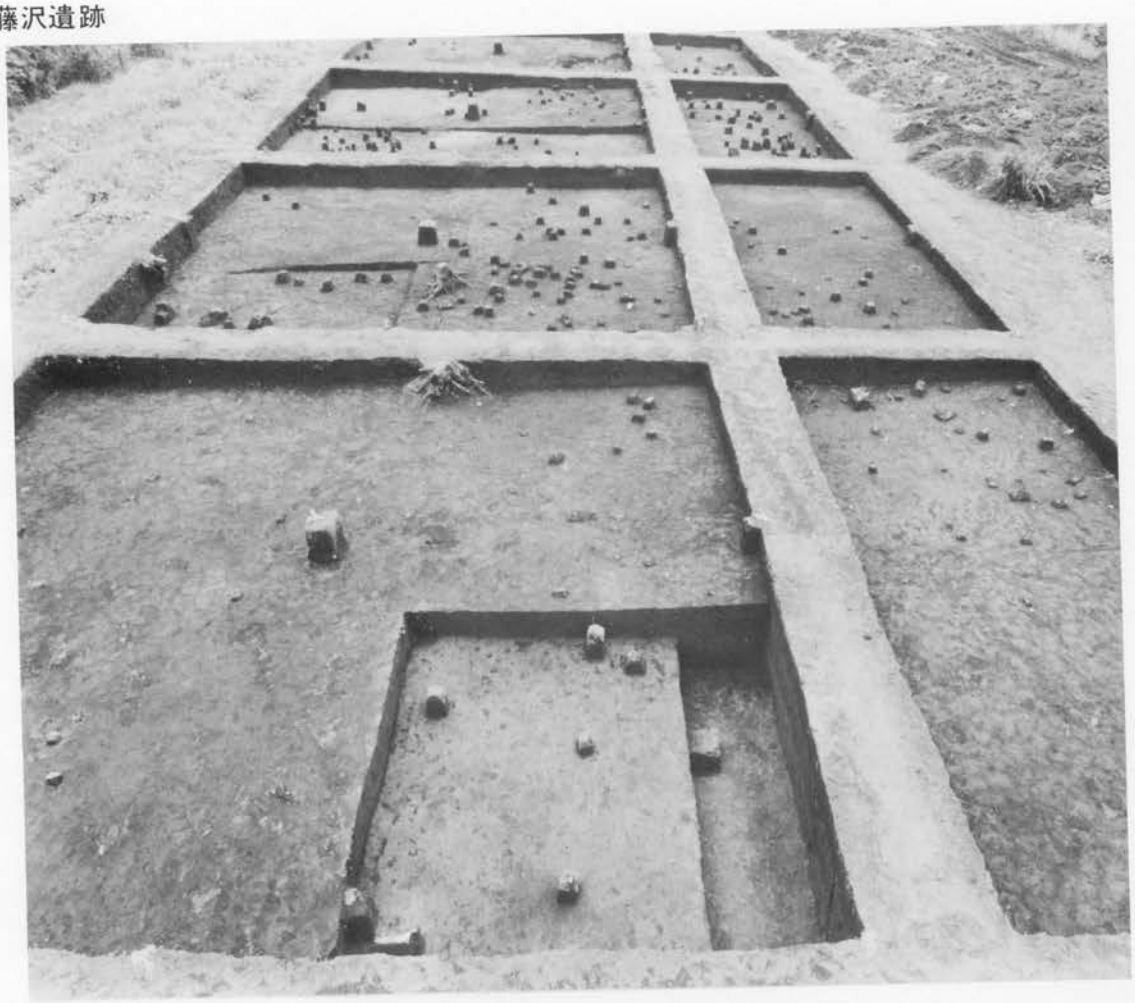
００７遺構完了



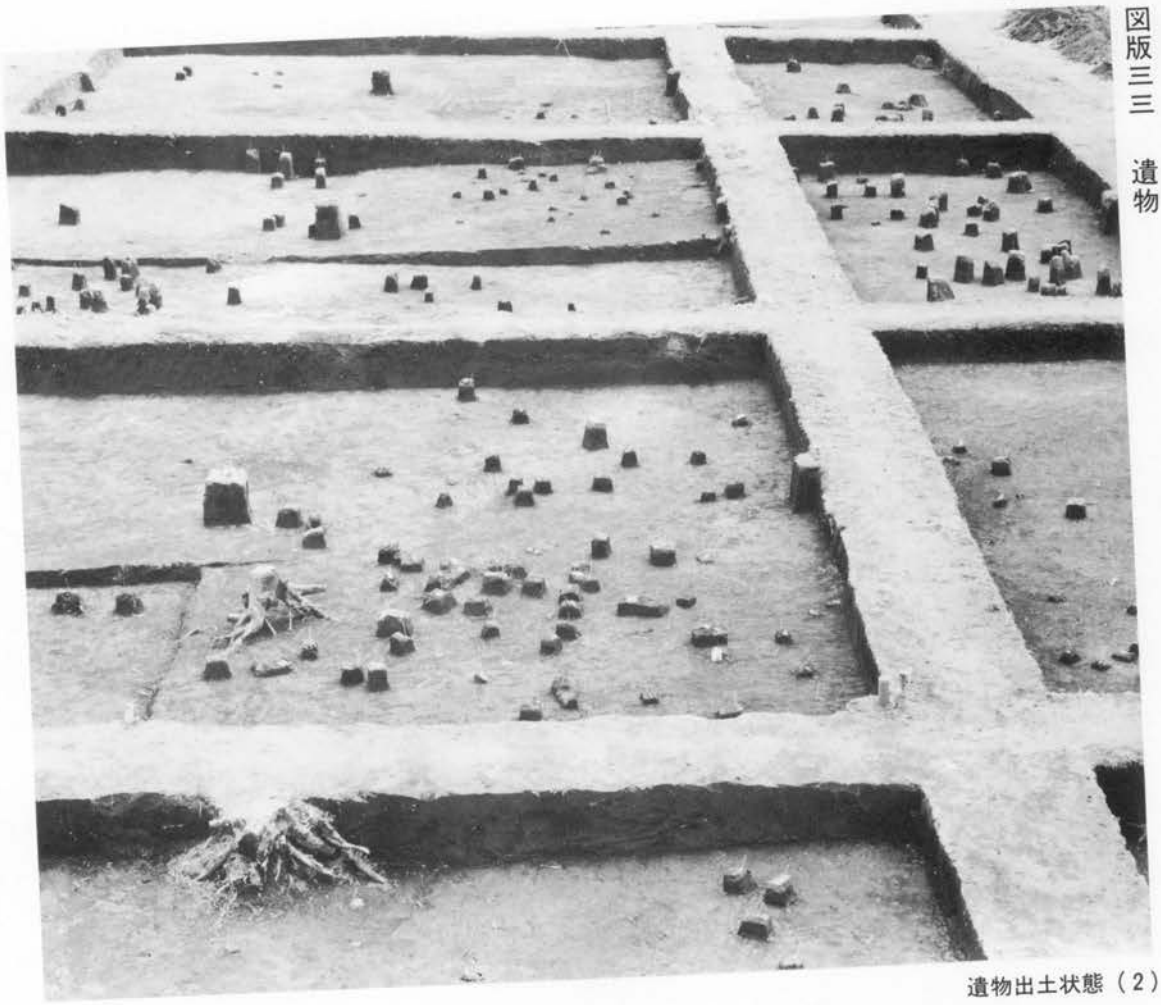
1．013遺構完掘



2．013遺構近景



遺物出土状態（1）

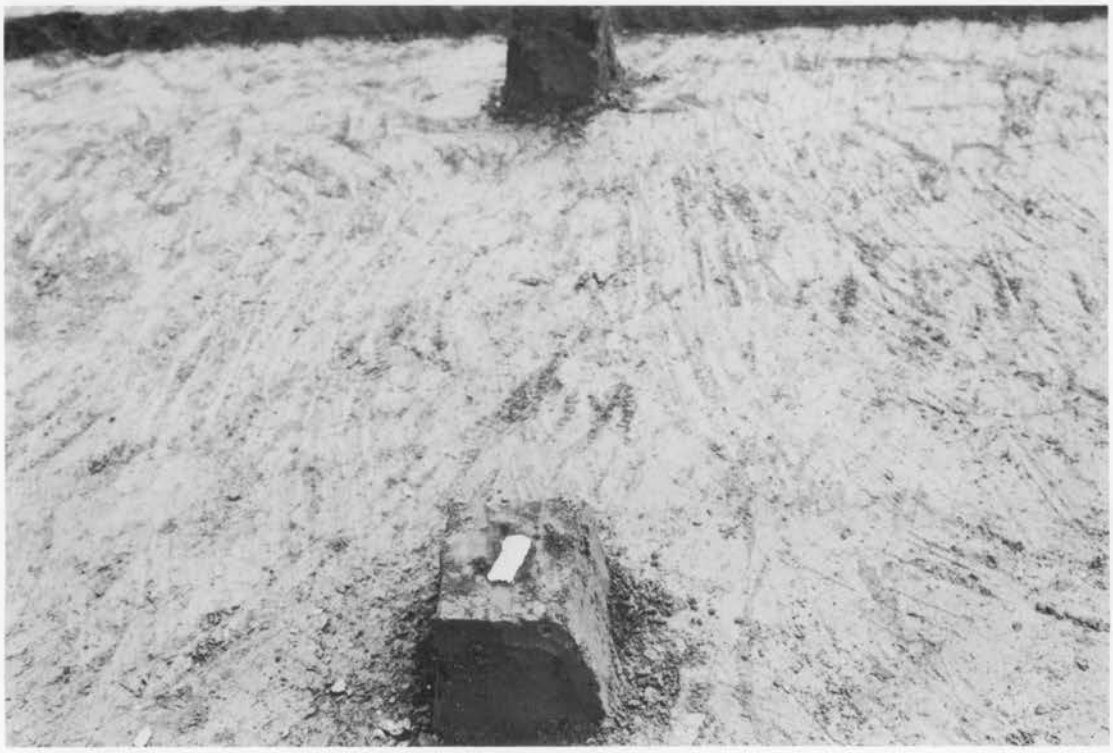


遺物出土状態（2）

藤沢遺跡

図版三四　遺物

1．先土器時代遺物出土状態（1群）

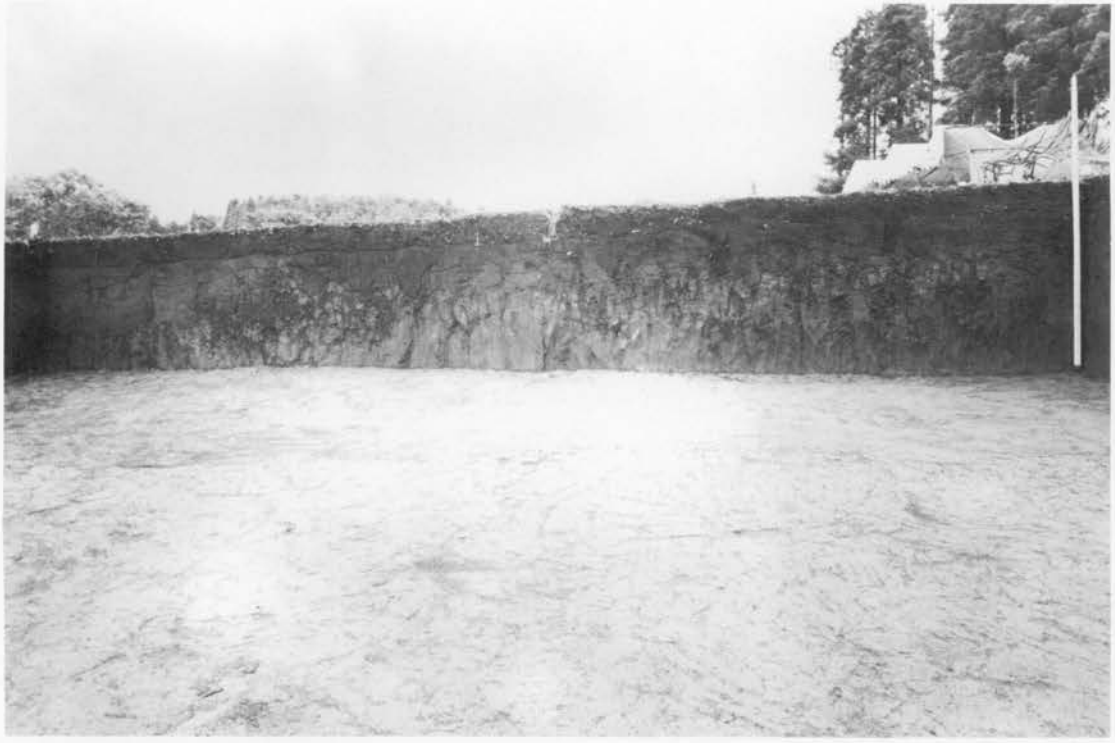


2．出土遺物

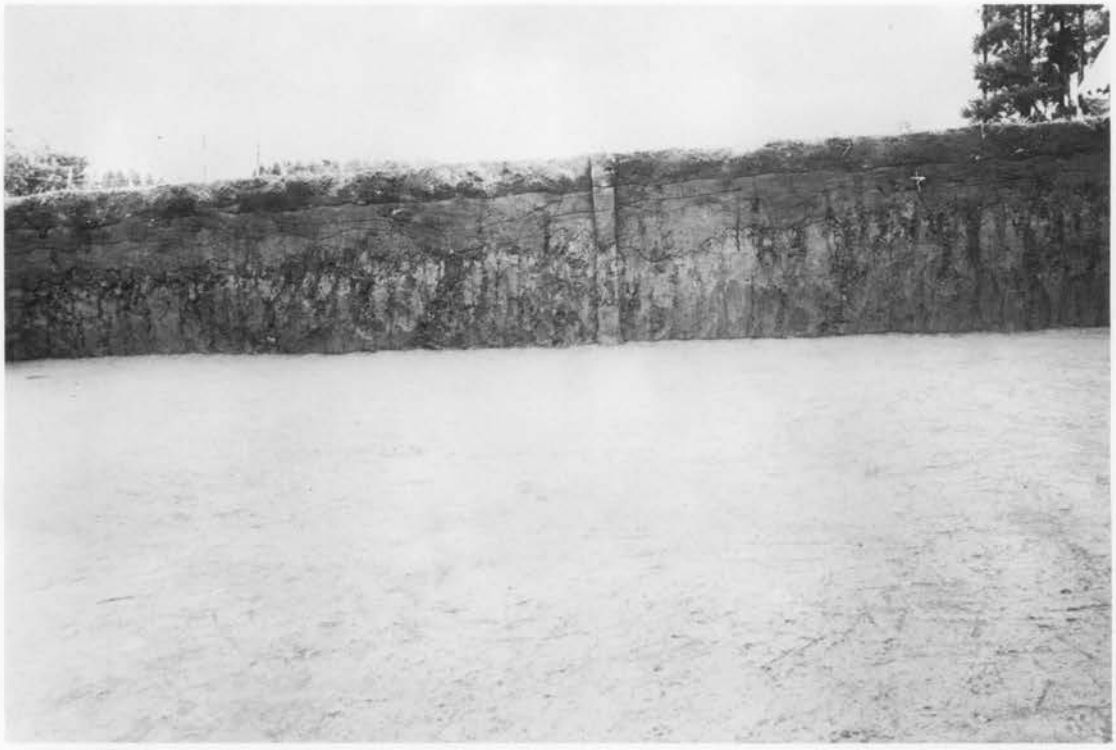
1．先土器時代遺物出土状態（2群）

2．出土状態（東方向）

図版三六　遺構



1．土層断面（B・C－23）

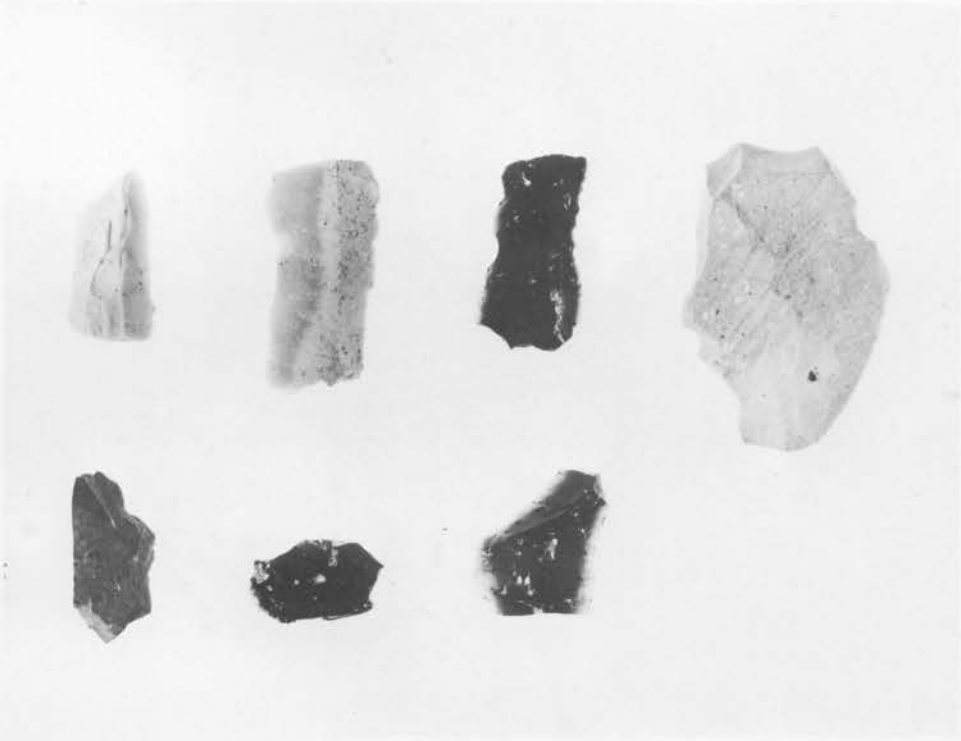


2．土層断面（A・B－21）

1．土層断面（B－22・21）

2．土層断面（B－20・19）

図版三八　遺物

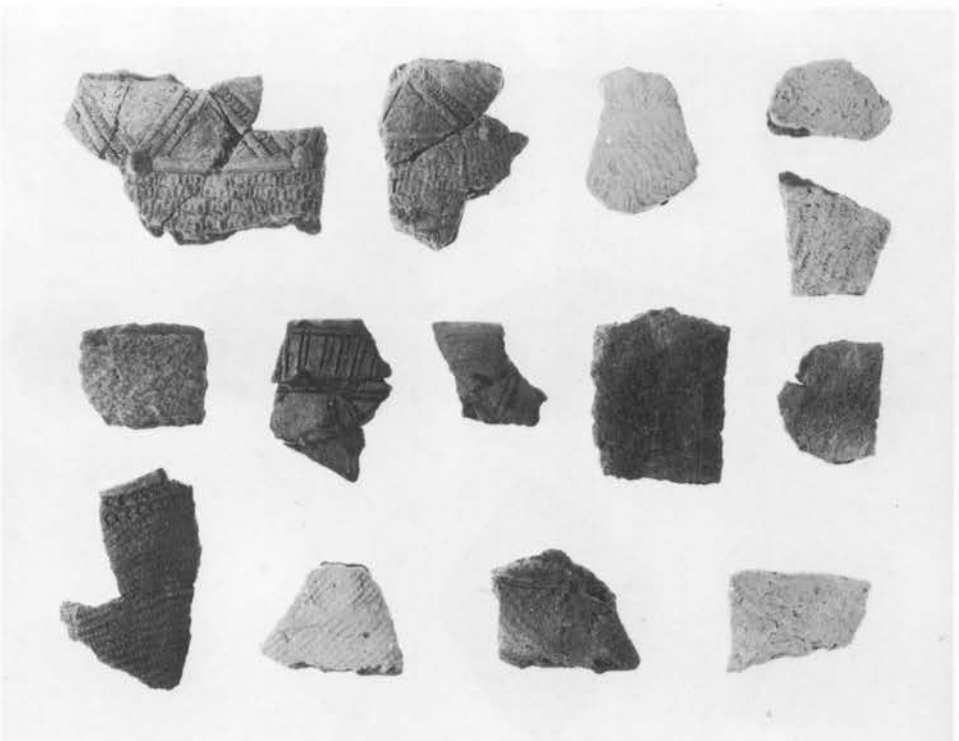


1．先土器時代遺物（1群）

2．先土器時代遺物（2群）

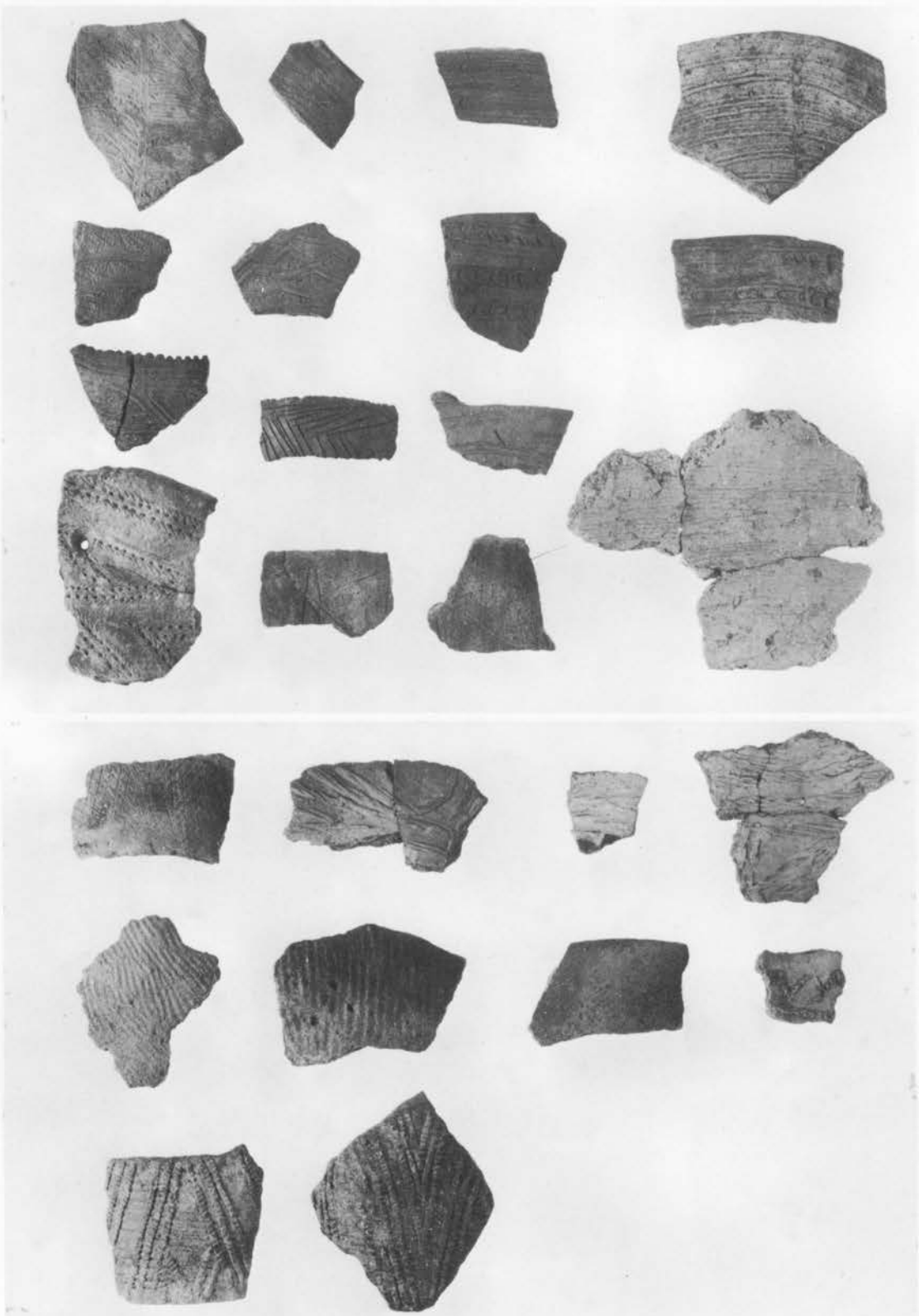
図版三九　遺物

1．石　鏃

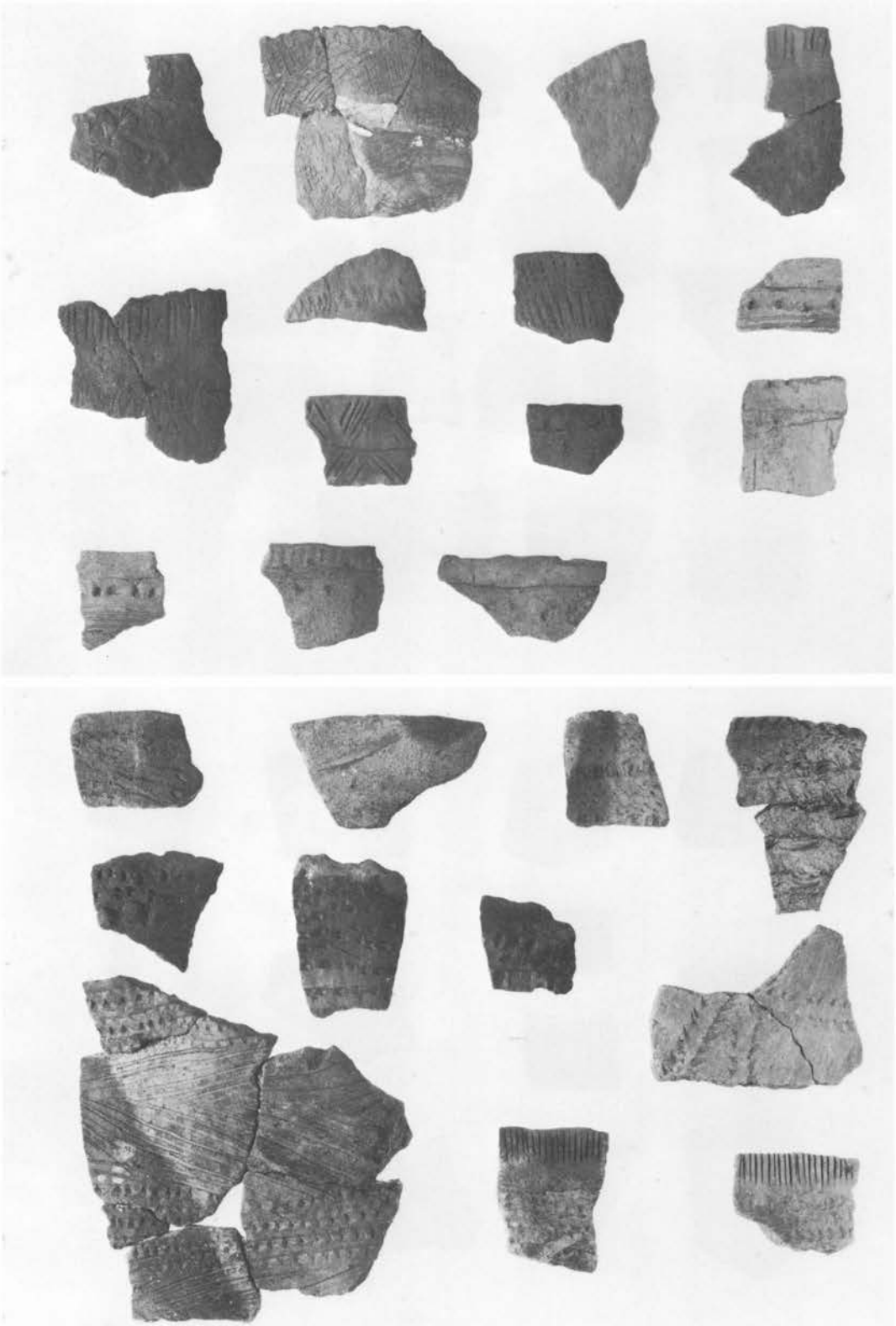


2．縄文土器

図版四〇　遺物

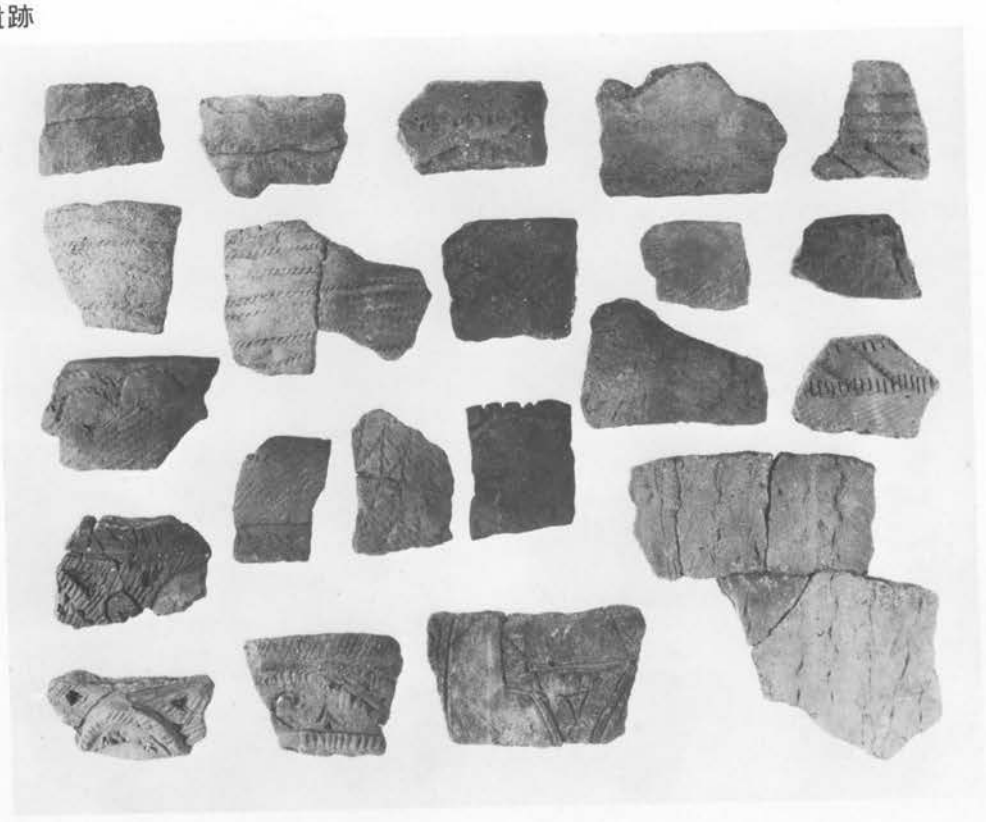


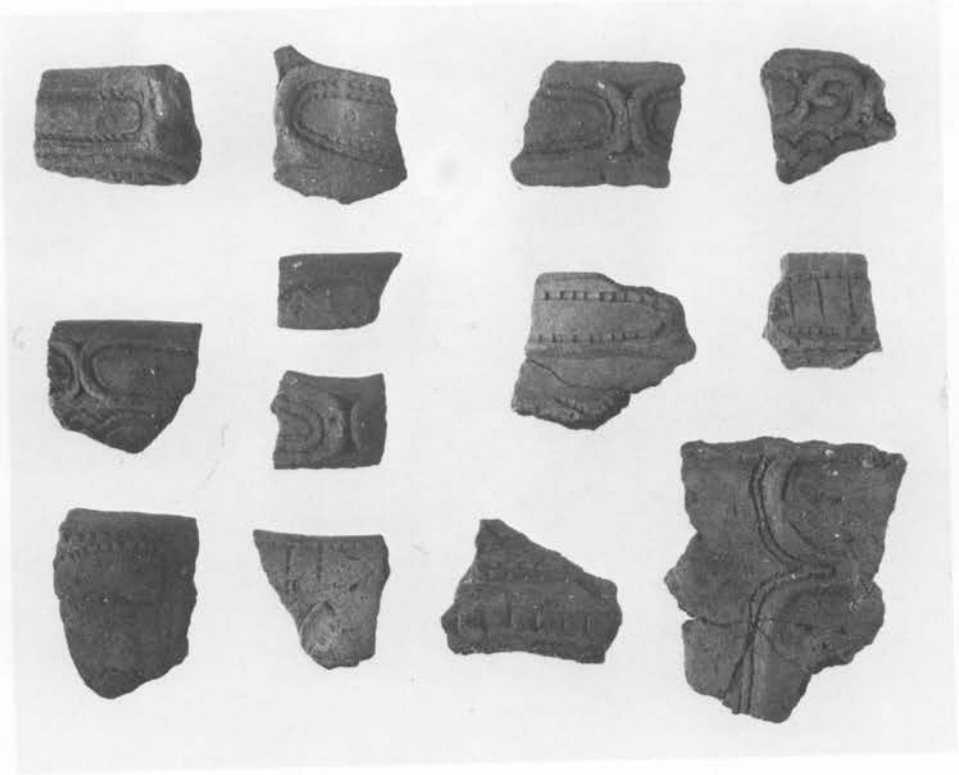
縄文土器(1)



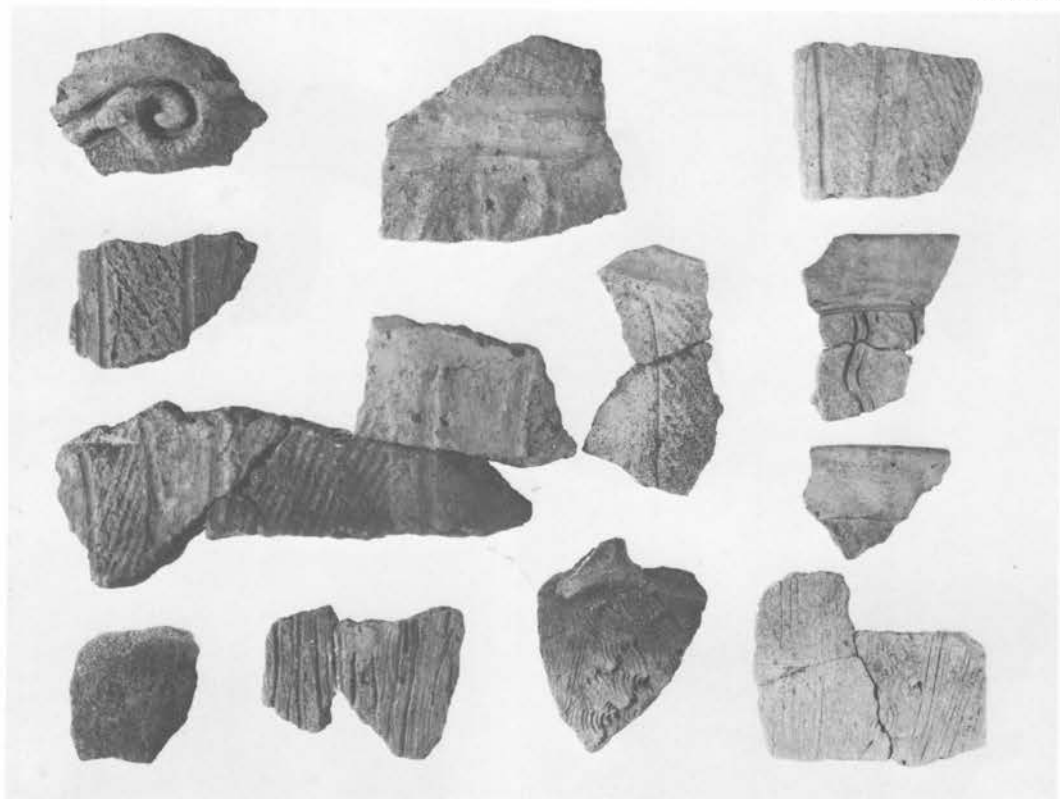
縄文土器（2）

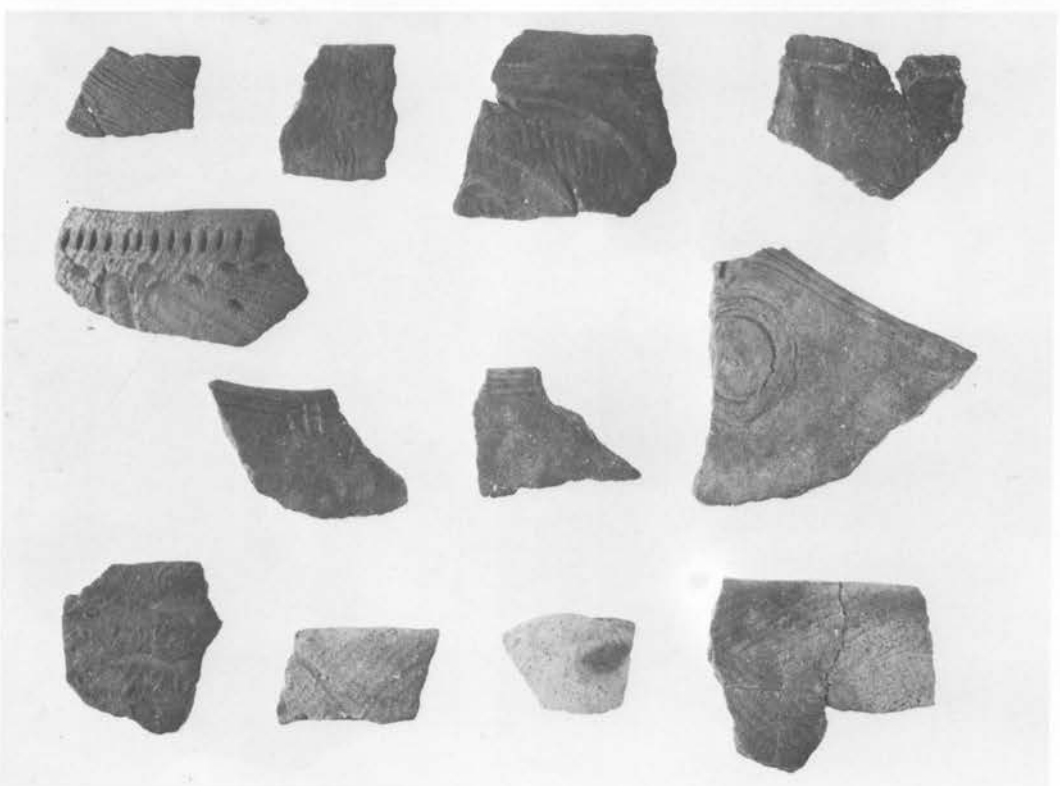
図版四二　遺物





縄文土器（3）





縄文土器（4）

図版四四　遺物

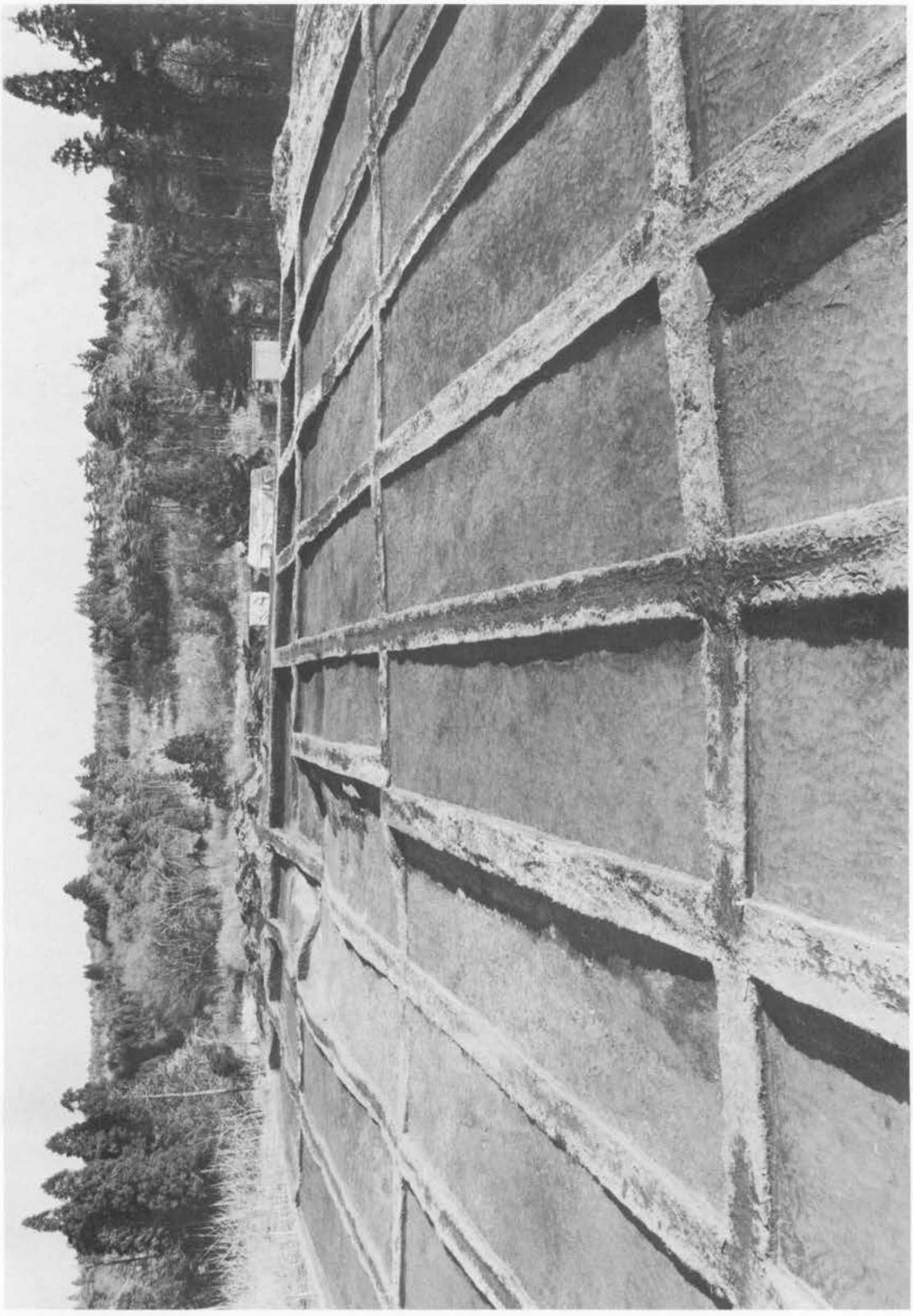
縄文土器（5）

縄文土器（6）

# 中芝遺跡第1次

調査全景（東方向）

中芝遺跡第１次

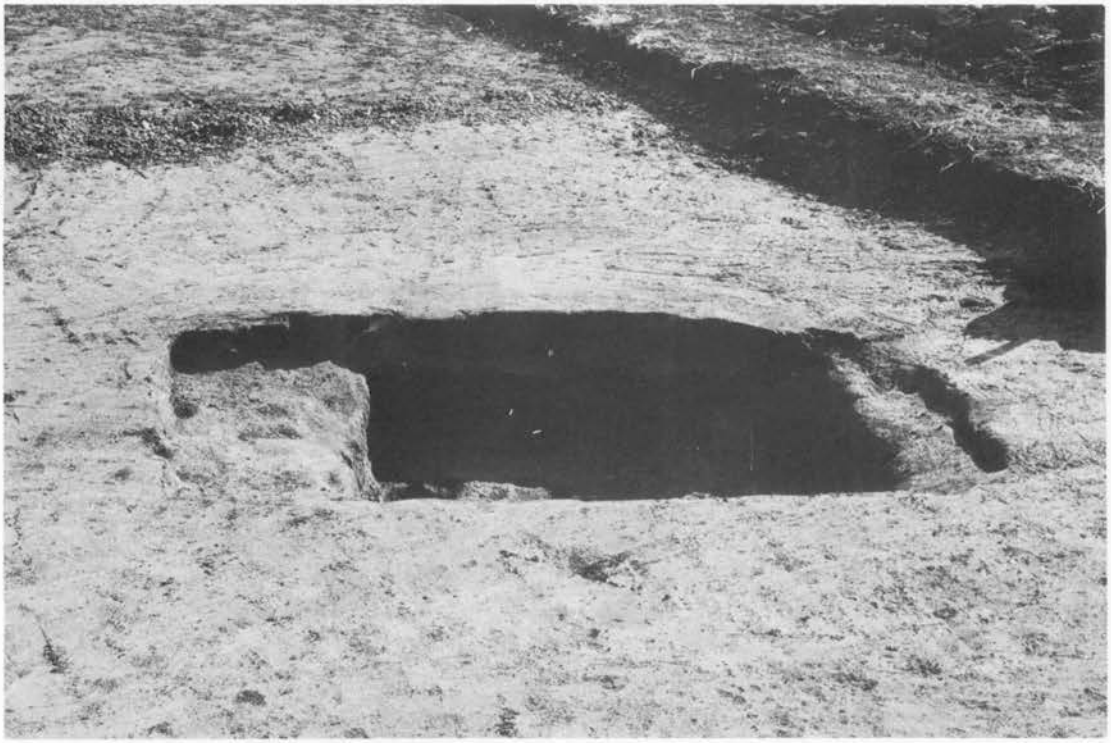


調査完了

１．００１遺構確認状態

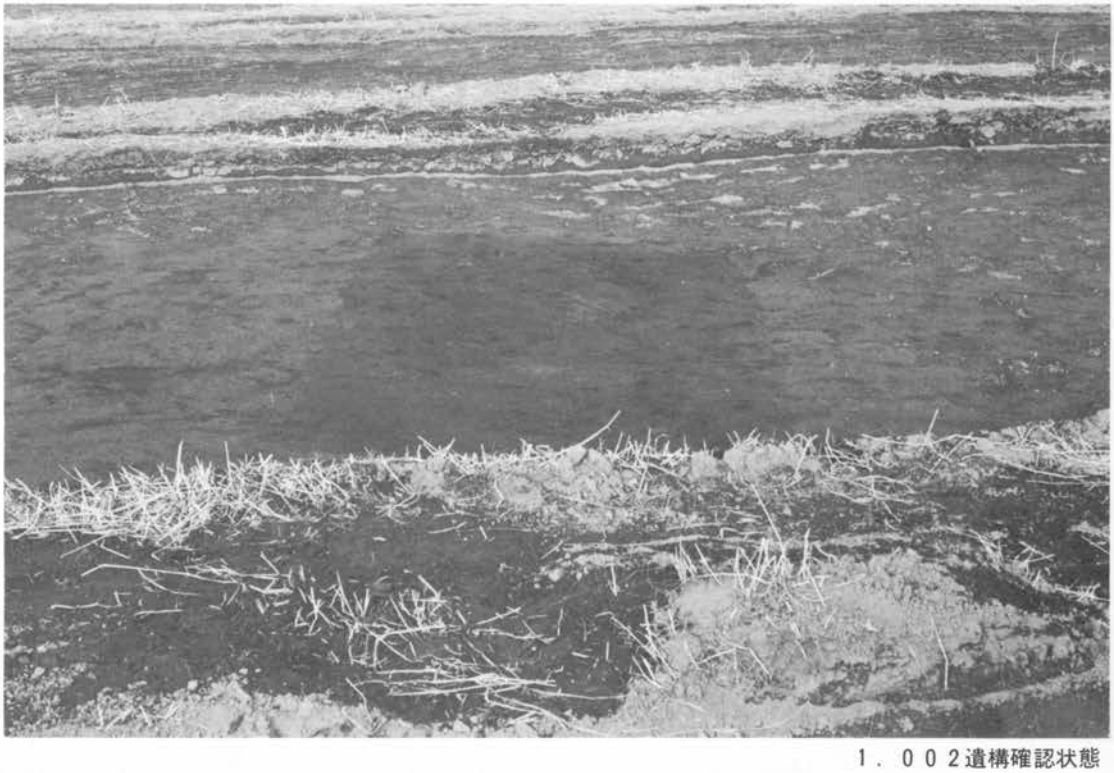
２．００１遺構断面

図版四九　遺構



１．００１遺構完掘（西から）

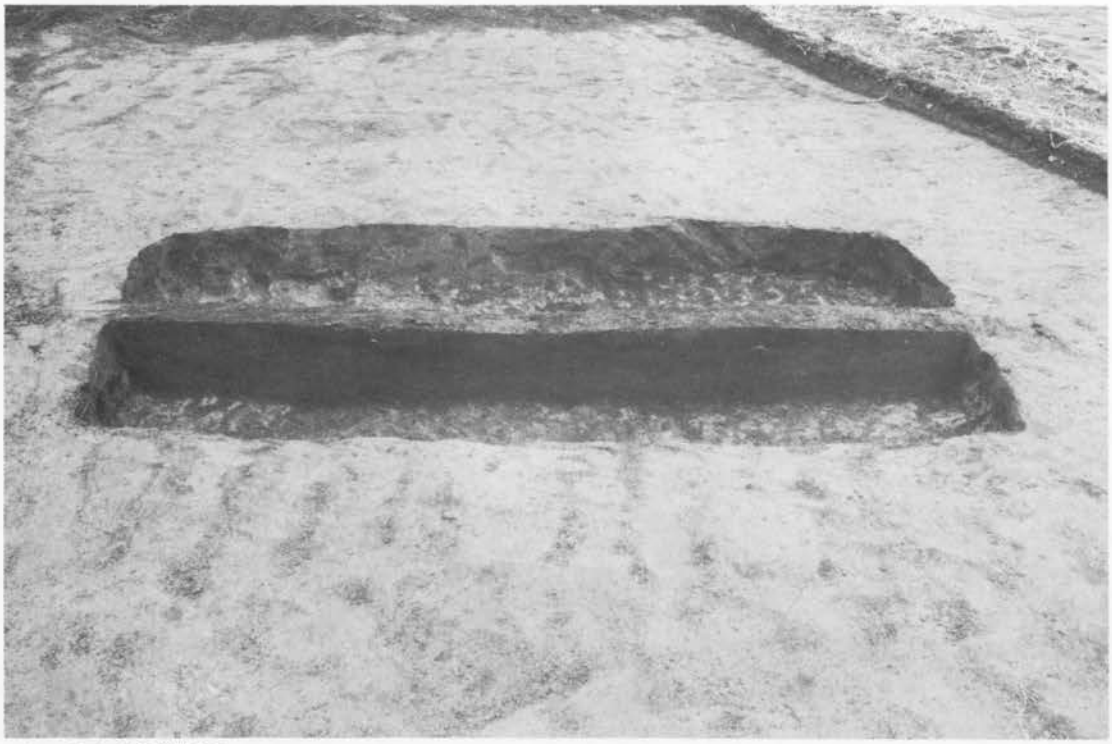
２．００１遺構完掘（南から）



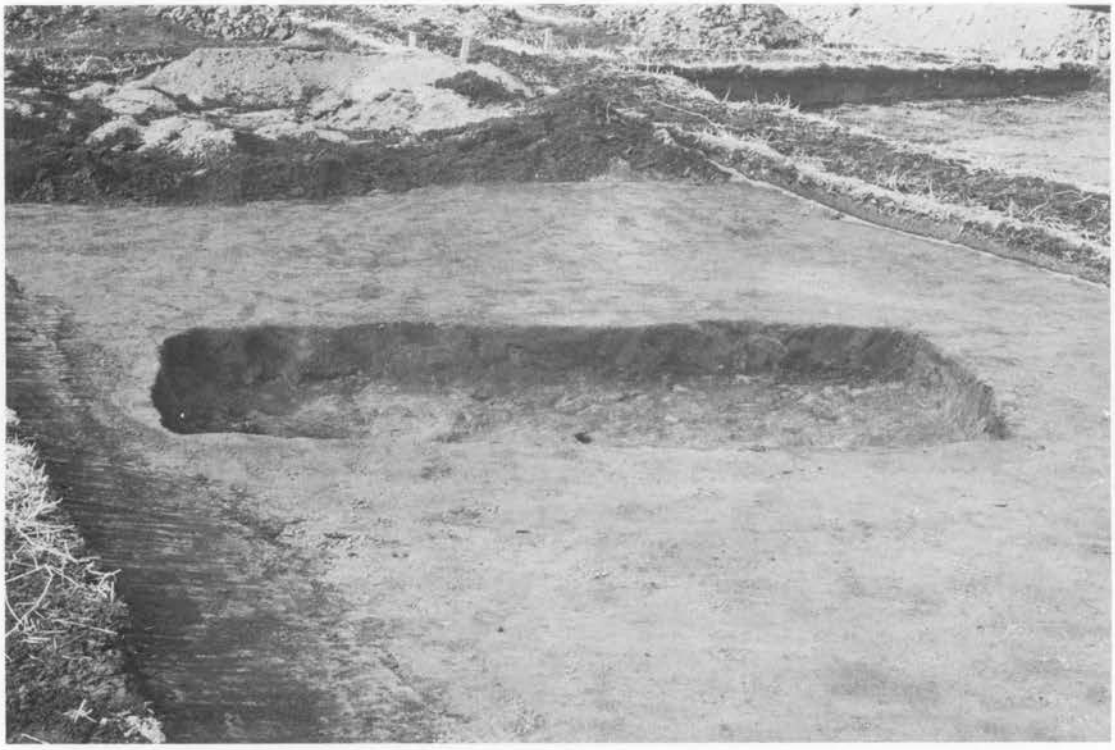
１．００２遺構確認状態

２．００２遺構完掘（南から）

図版五一　遺構



１．００２遺構断面



２．００２遺構完掘（西から）

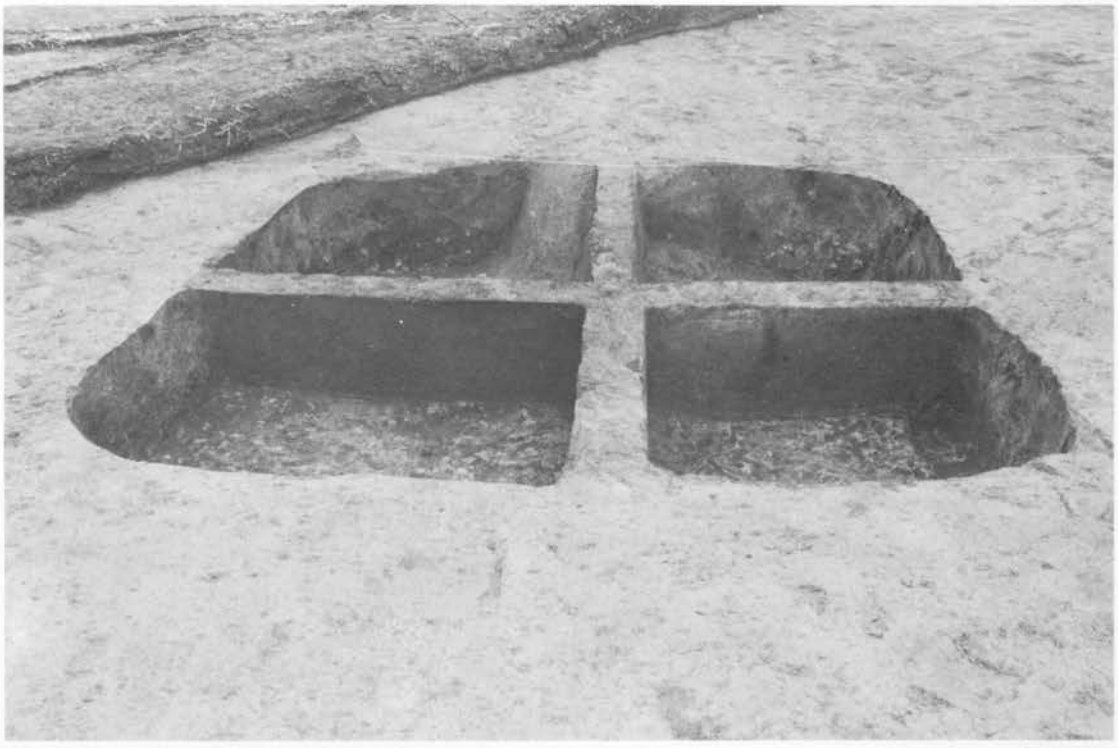
１．００３遺構確認状態

２．００３遺構断面

図版五三　遺構

１．００４遺構確調状態

２．００４遺構断面

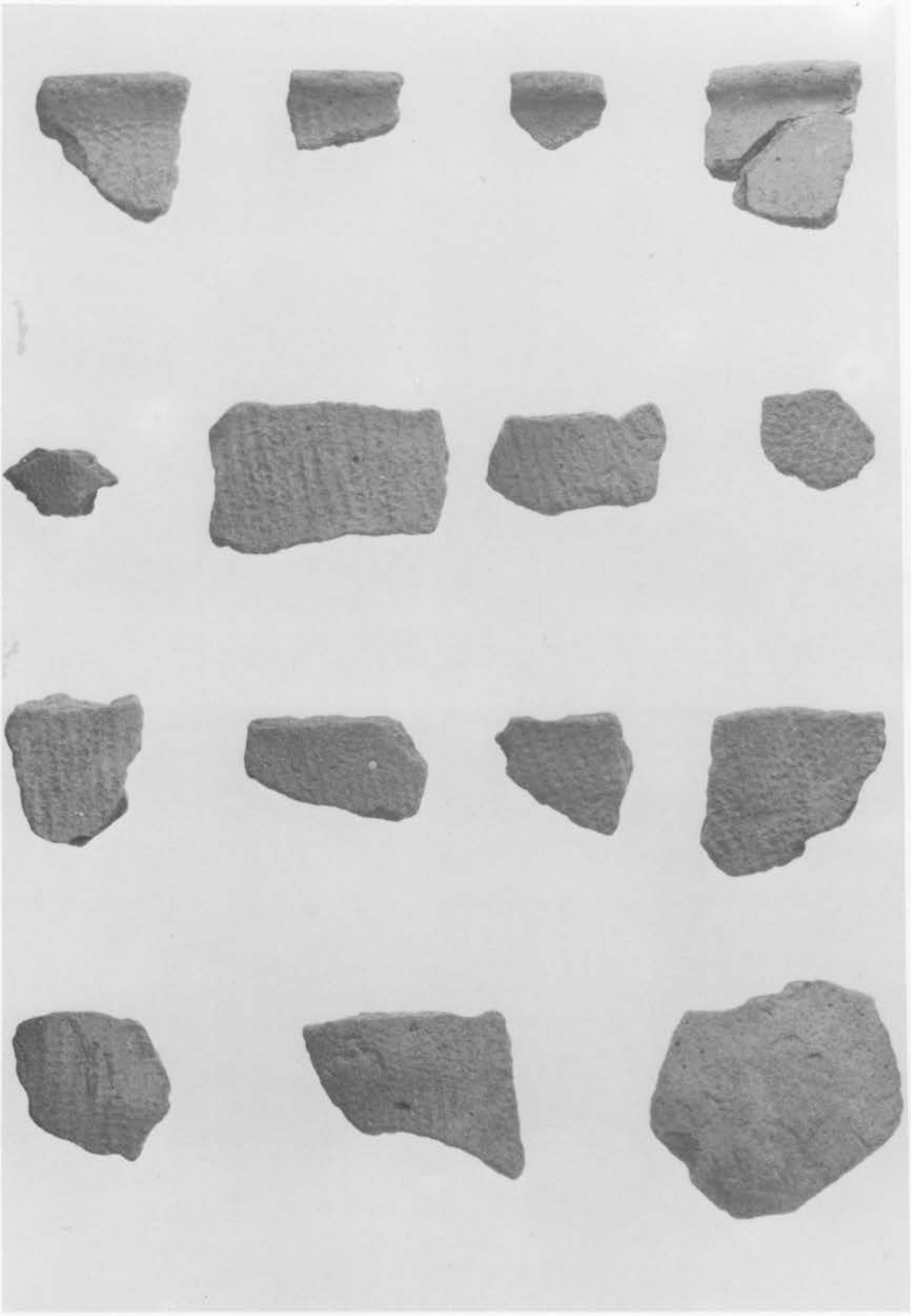


１．００７遺構断面

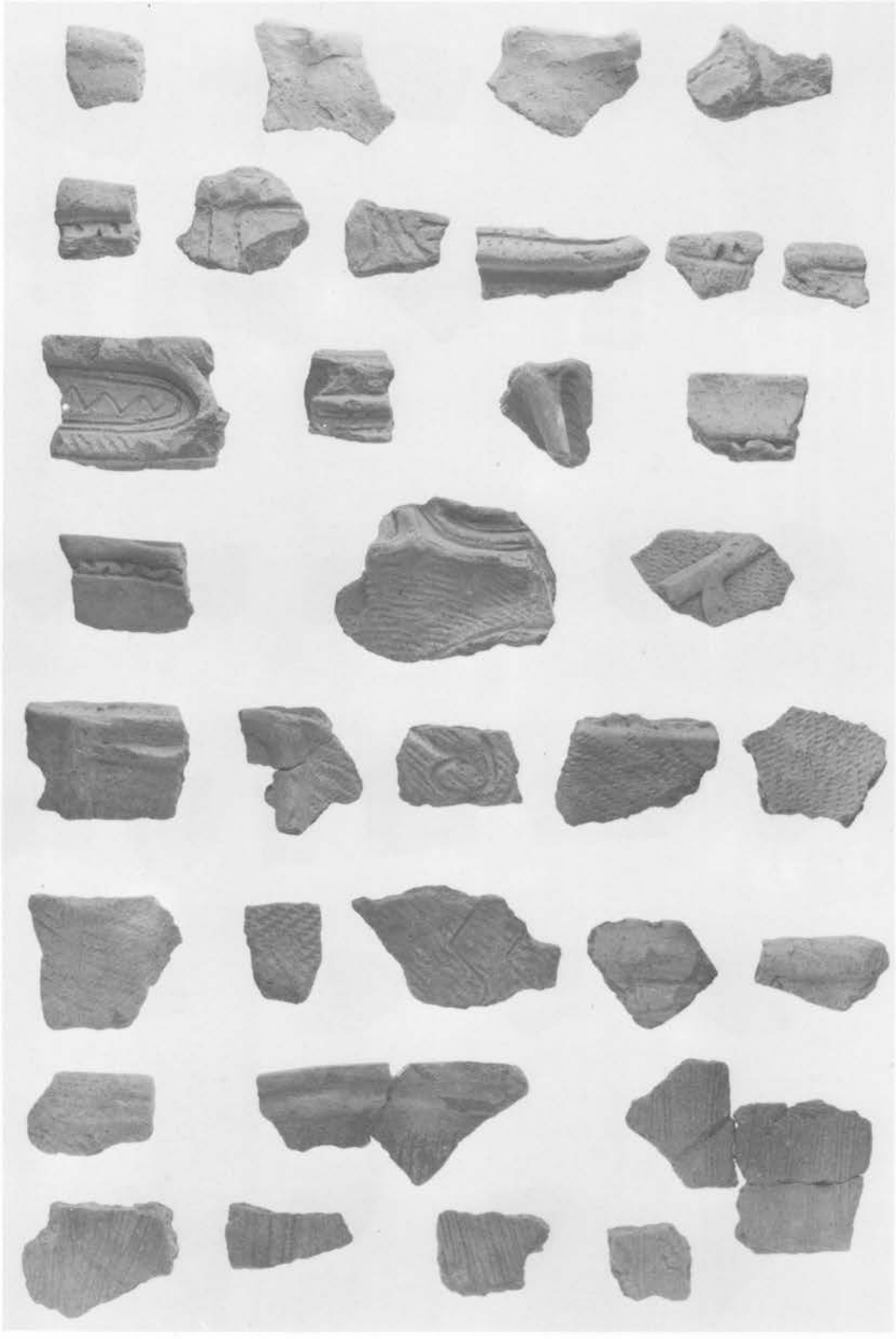
２．００７遺構完掘

中芝遺跡第１次

図版五五　遺物

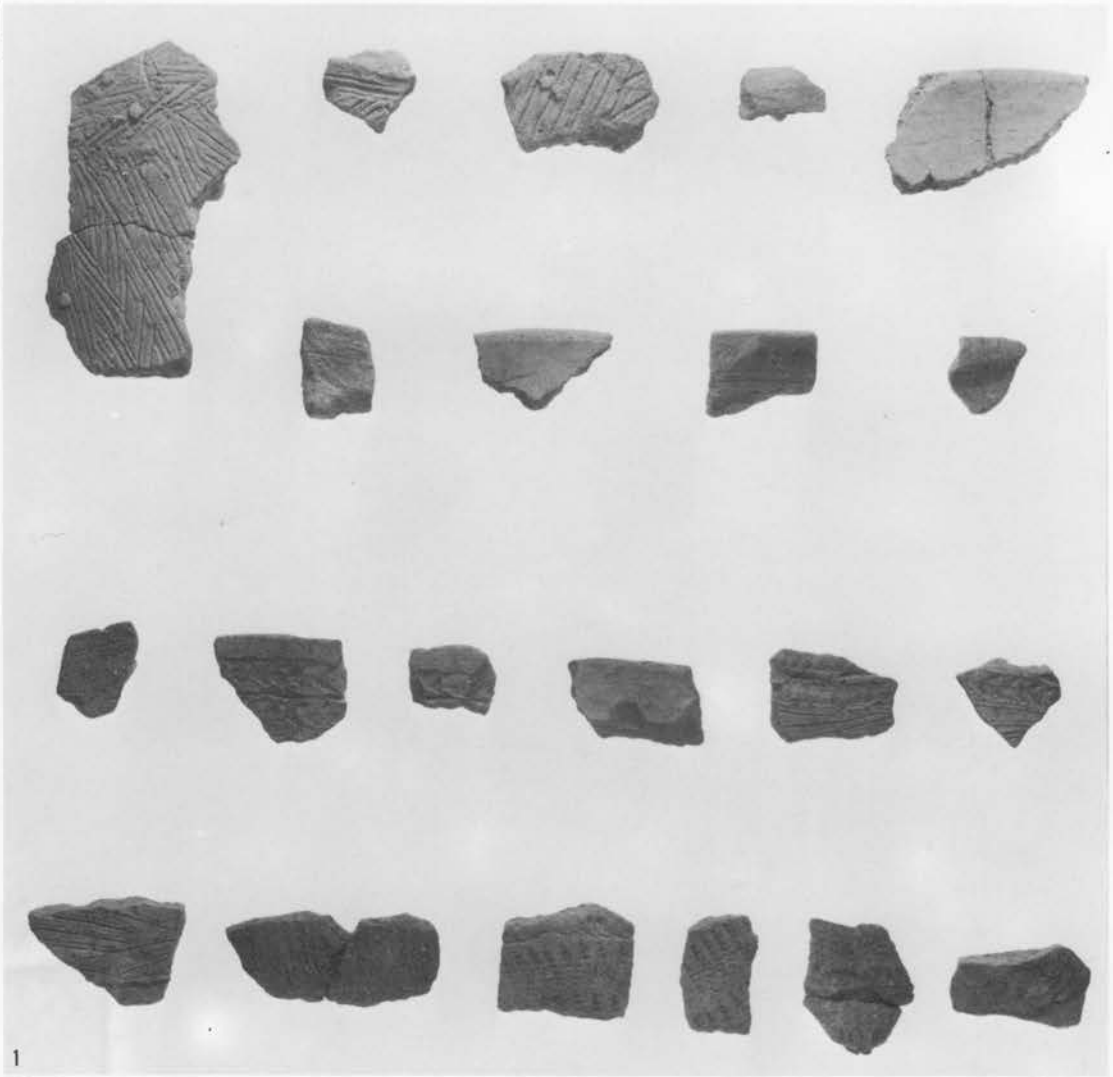


縄文土器（１）



縄文土器（２）

図版五七　遺物



１．縄文土器（１）　２．縄文土器（２）

# 中芝遺跡第2次

１．遠景（東から）

２．調査区全景（西から）

中芝遺跡第２次

図版五九　遺跡

１．調査完了（西から）

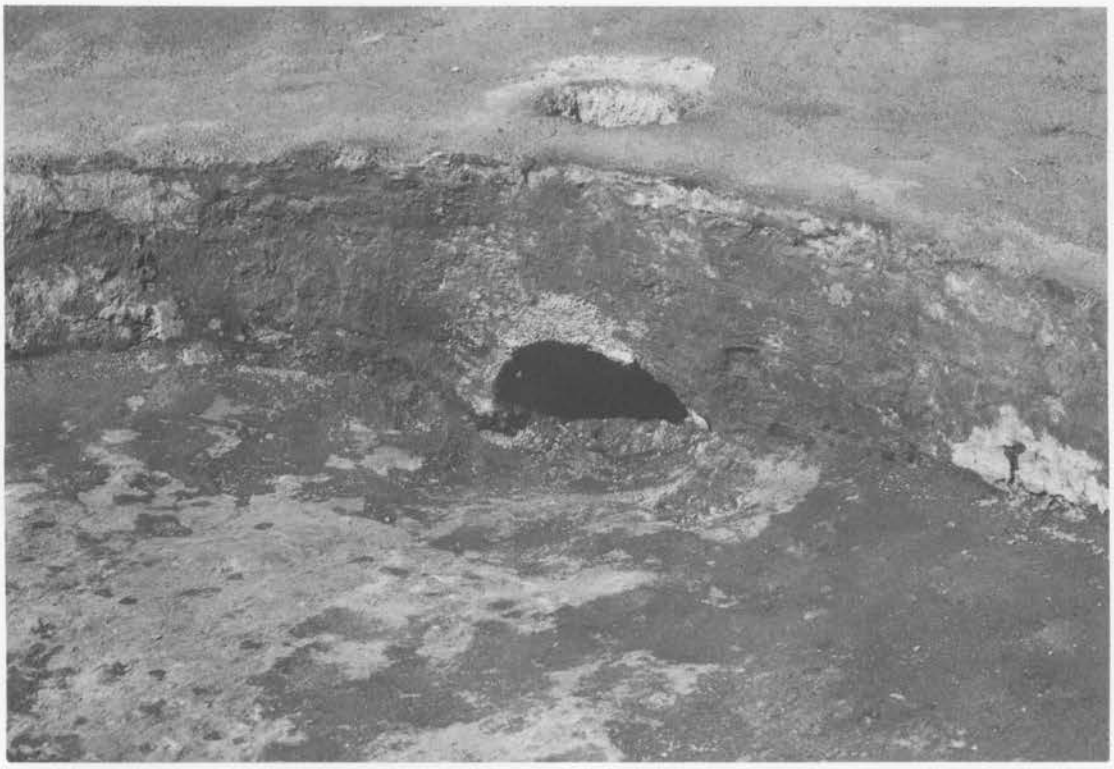
２．００１遺構確認状態

１．００１遺構断面

２．００１遺構断面

図版六一　遺構

１．００１遺構煙道部



２．煙道部近景

図版六二　遺構

１．００１遺構焚口

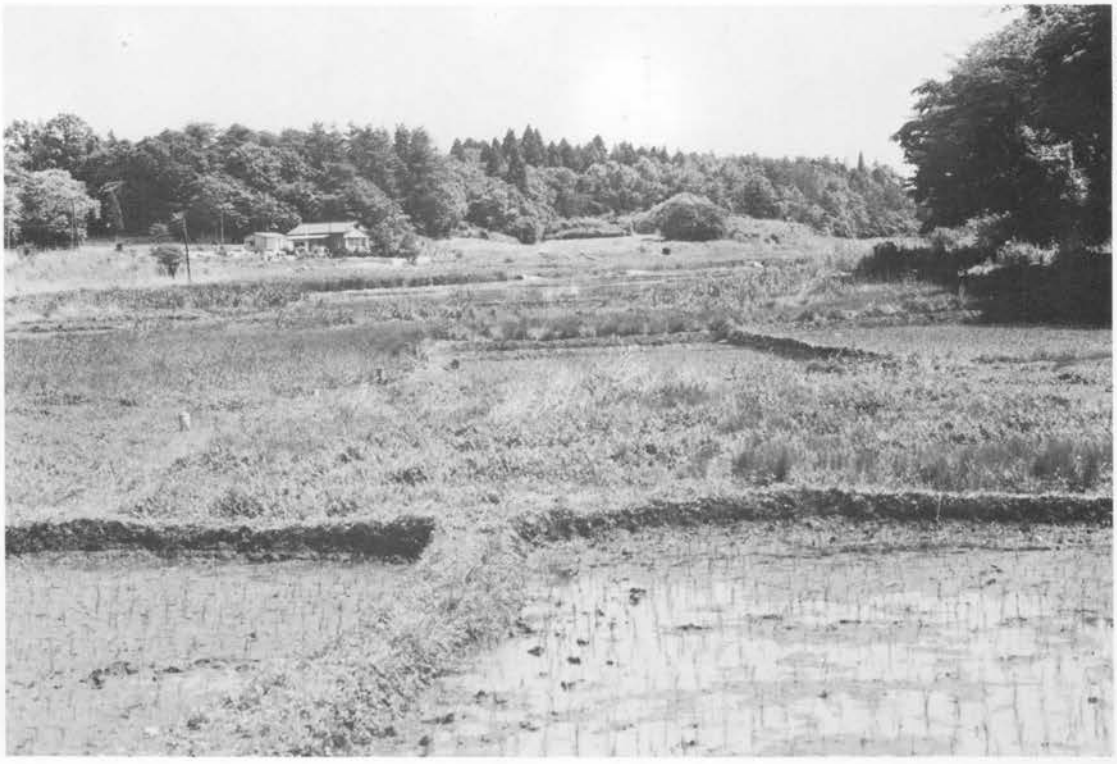
２．００１遺構焚出部

図版六三　遺構

１．００２遺構近景

２．００２遺構

# 清水作遺跡



1．遺跡遠景

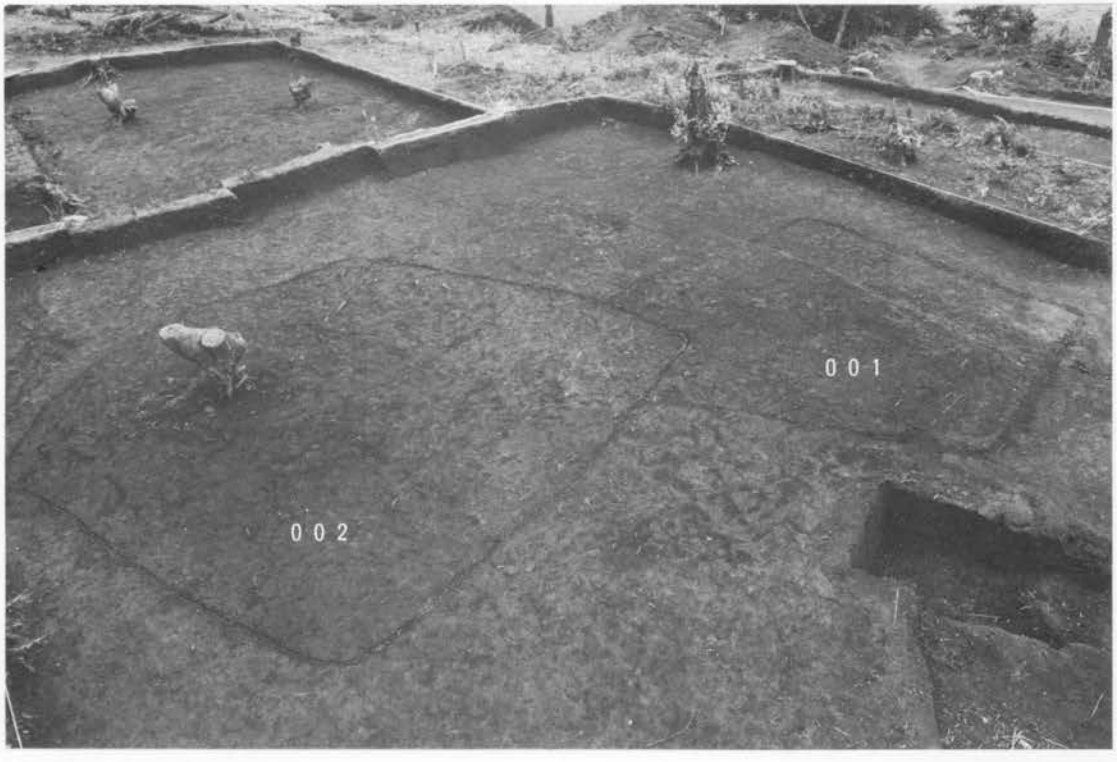
2．遺跡近景

清水作遺跡

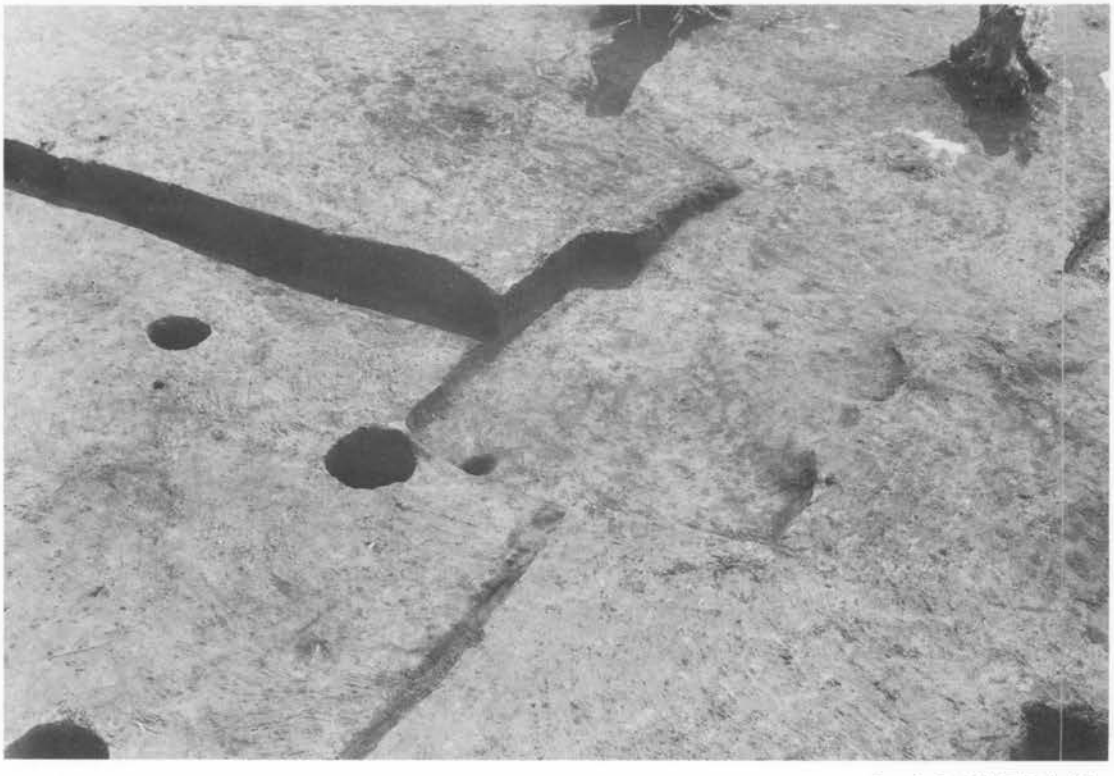
図版六五　遺跡

1．清水作Ａ地点（調査前）

2．Ａ地点調査完了




1．001、002住居跡確認状態



2．001住居跡完掘

清水作遺跡

図版六七　遺構

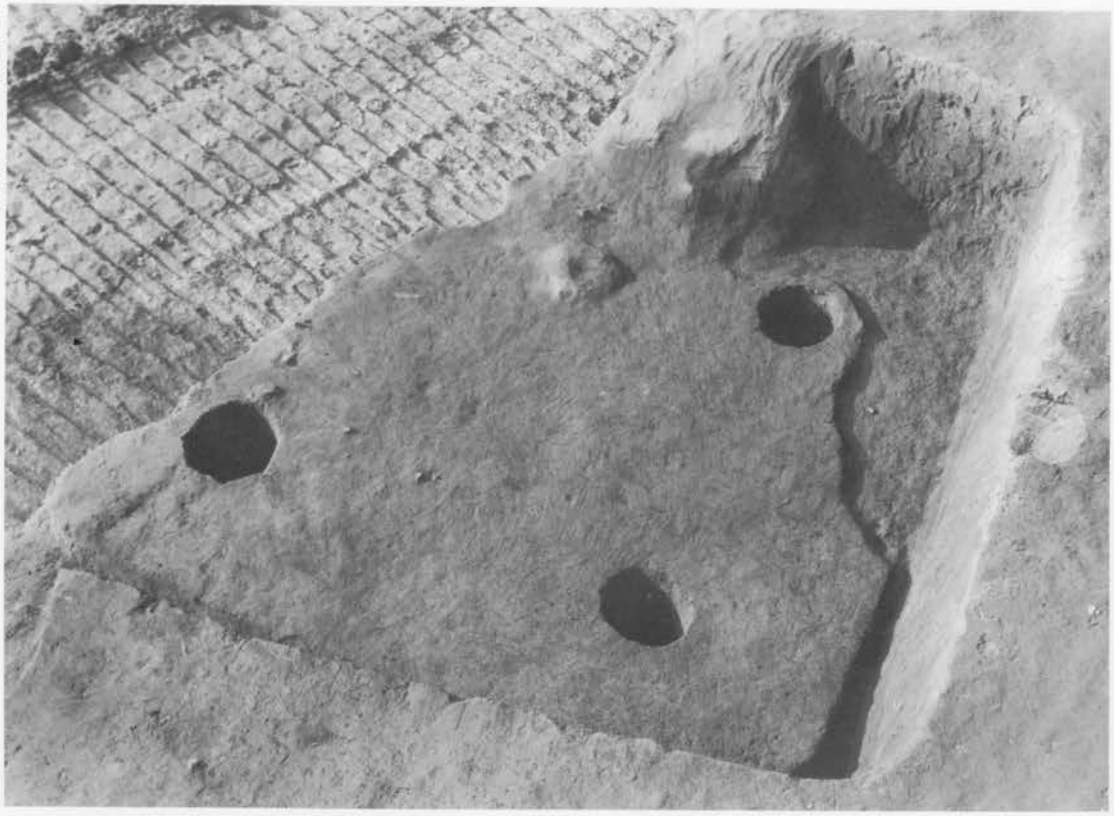
1．001，002住居跡完掘

2．002住居跡貯蔵穴

1．003，004住居跡確認状態

2．003，004住居跡完堀

図版六九　遺構



1．006住居跡完掘

2．005住居跡完掘

1．001，002堀立建物跡

2．001溝遺構

図版七一　遺構

土塁遺構

1．001土壙

2．8区遺物出土状態

清水作遺跡

図版七三　遺構

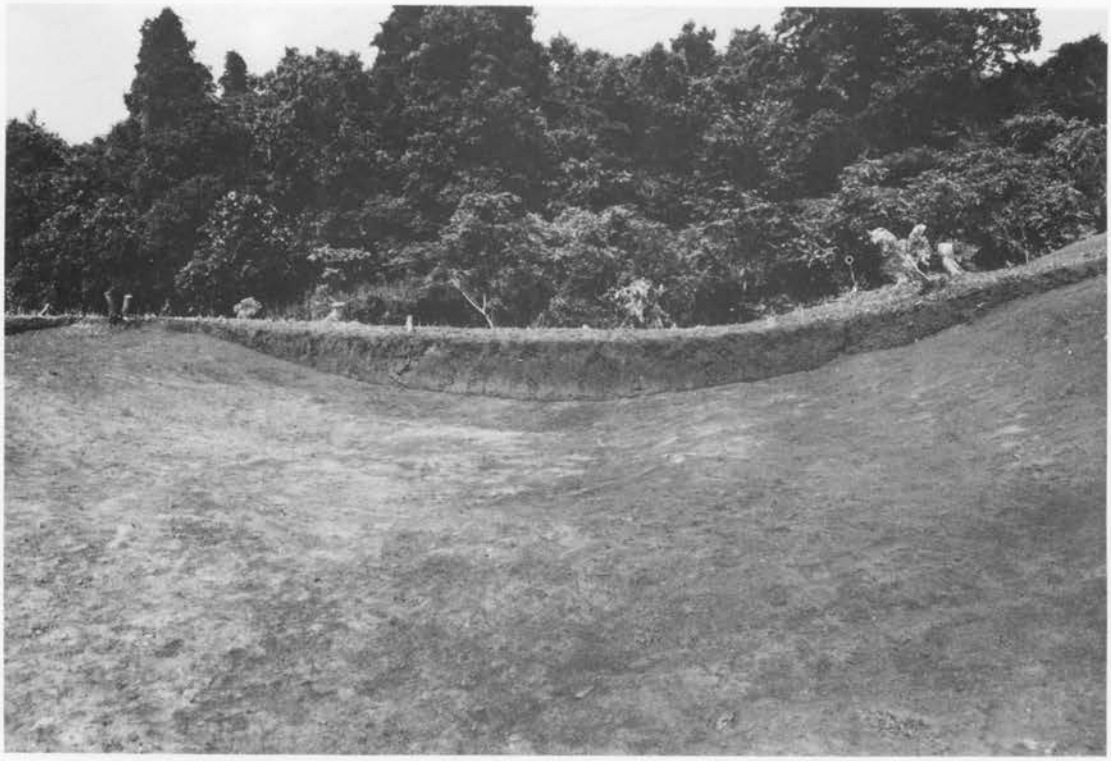
1．古墳遠景

2．古墳近景

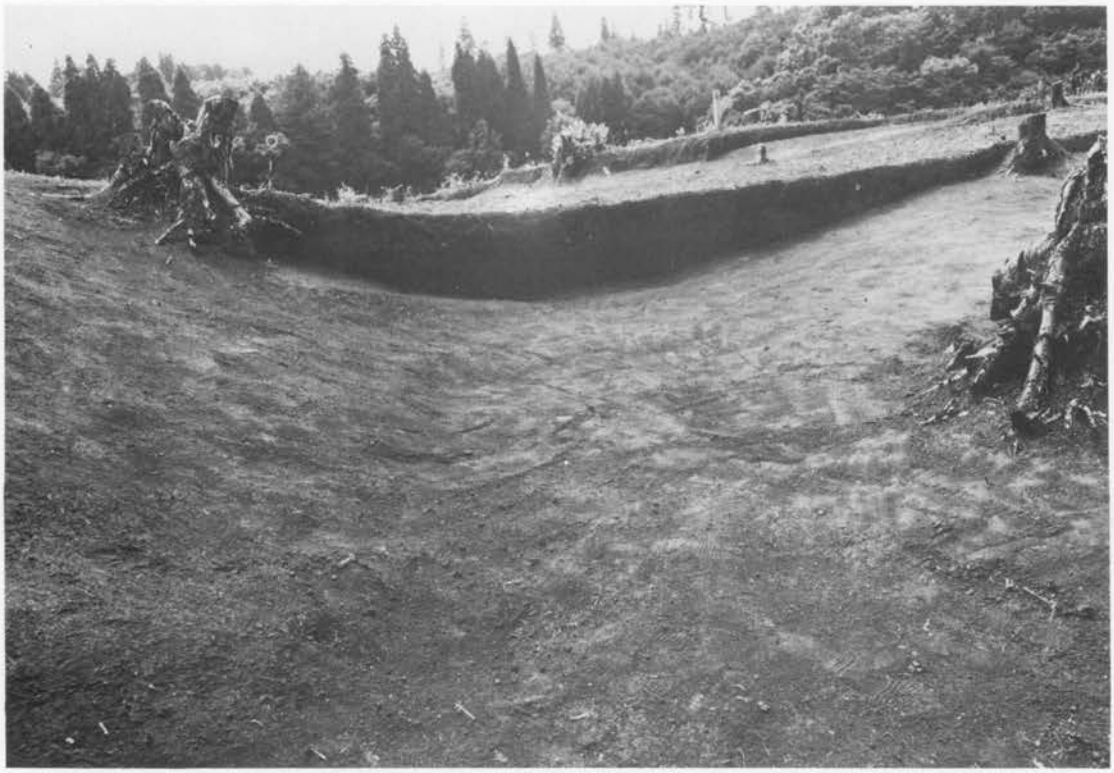
1．西側周溝（南から）

2．東側周溝（南から）

図版七五　遺構

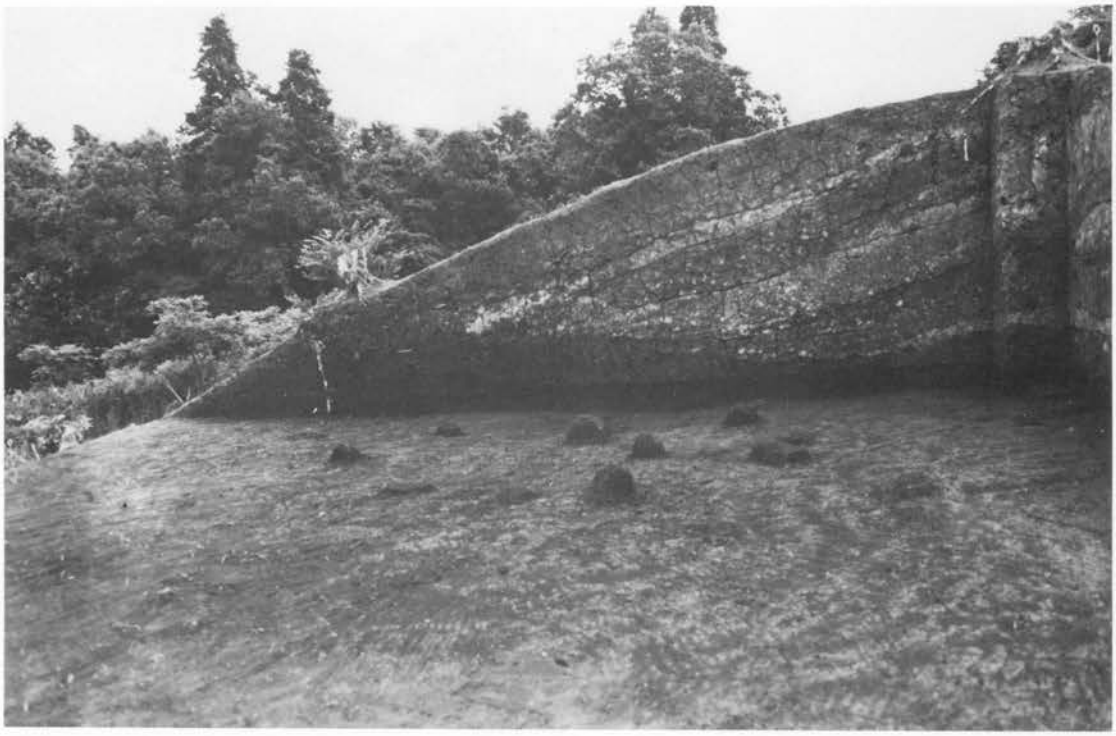


1．北側周溝（西から）



2．南側周溝（西から）

図版七六　遺構



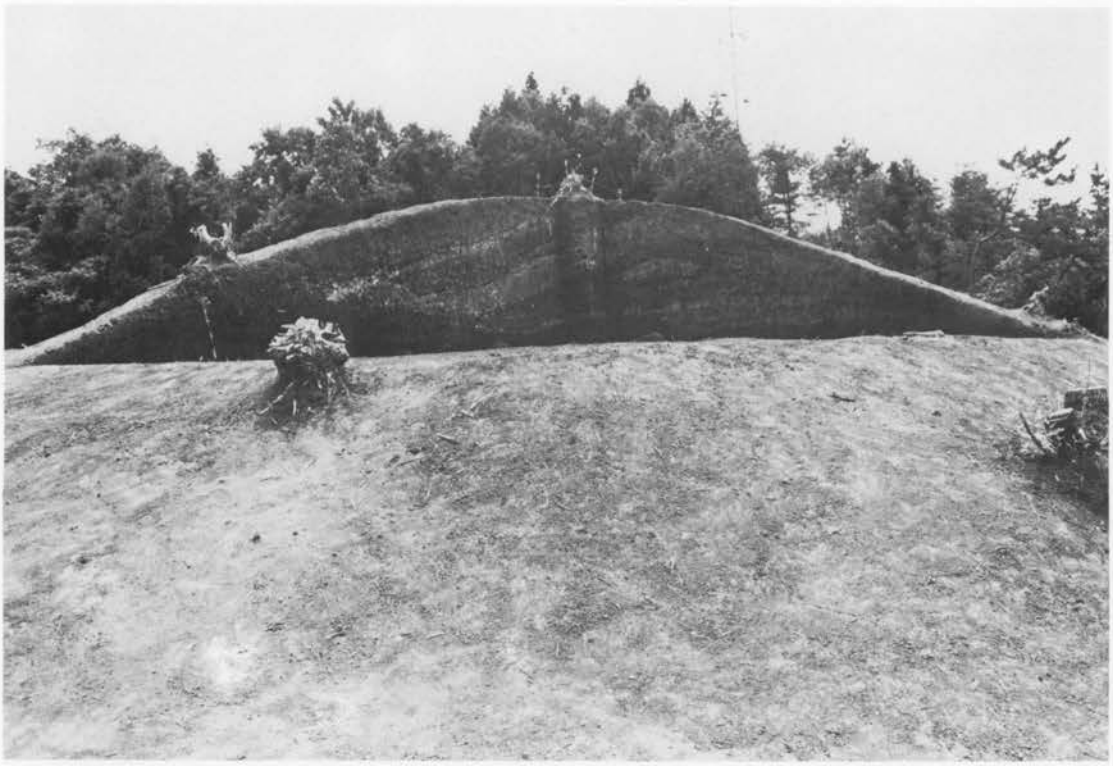
1．墳丘東側断面

2．墳丘西側断面

清水作遺跡

図版七七　遺構

1．墳丘南側断面



2．墳丘北西断面

図版七八　遺構

1．内部施設

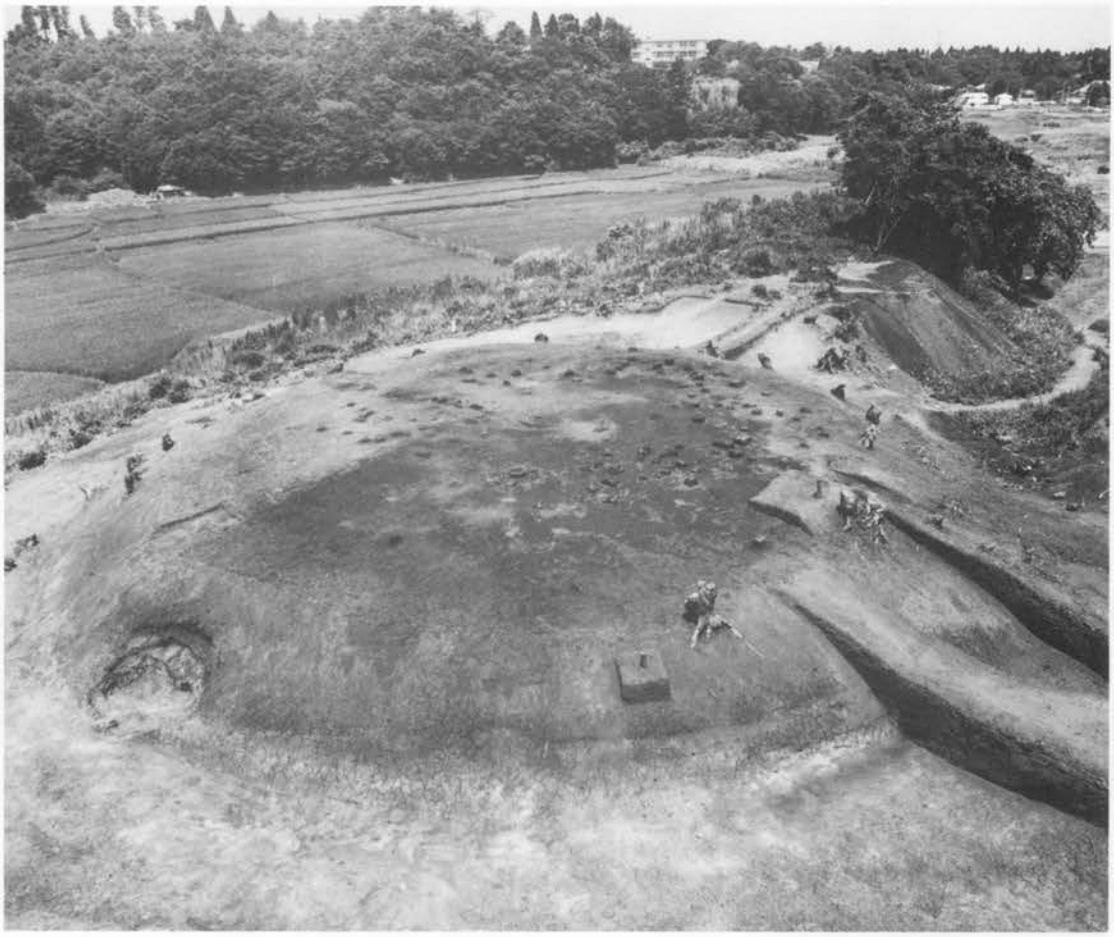
2．内部施設遠景

清水作遺跡

図版七九　遺構

1．内部施設近景（墳丘から）

2．内部施設近景（周溝から）



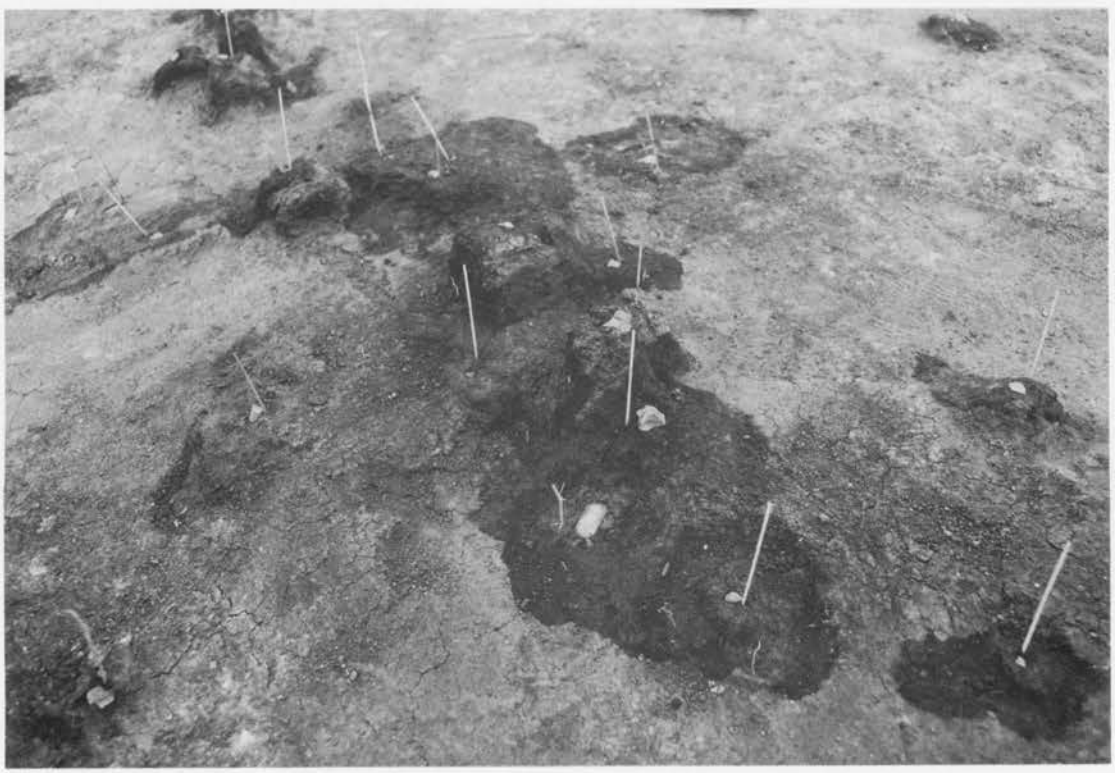
1．発堀後墳丘（南上から）

2．発堀後墳丘（南から）

清水作遺跡

図版八一　遺物

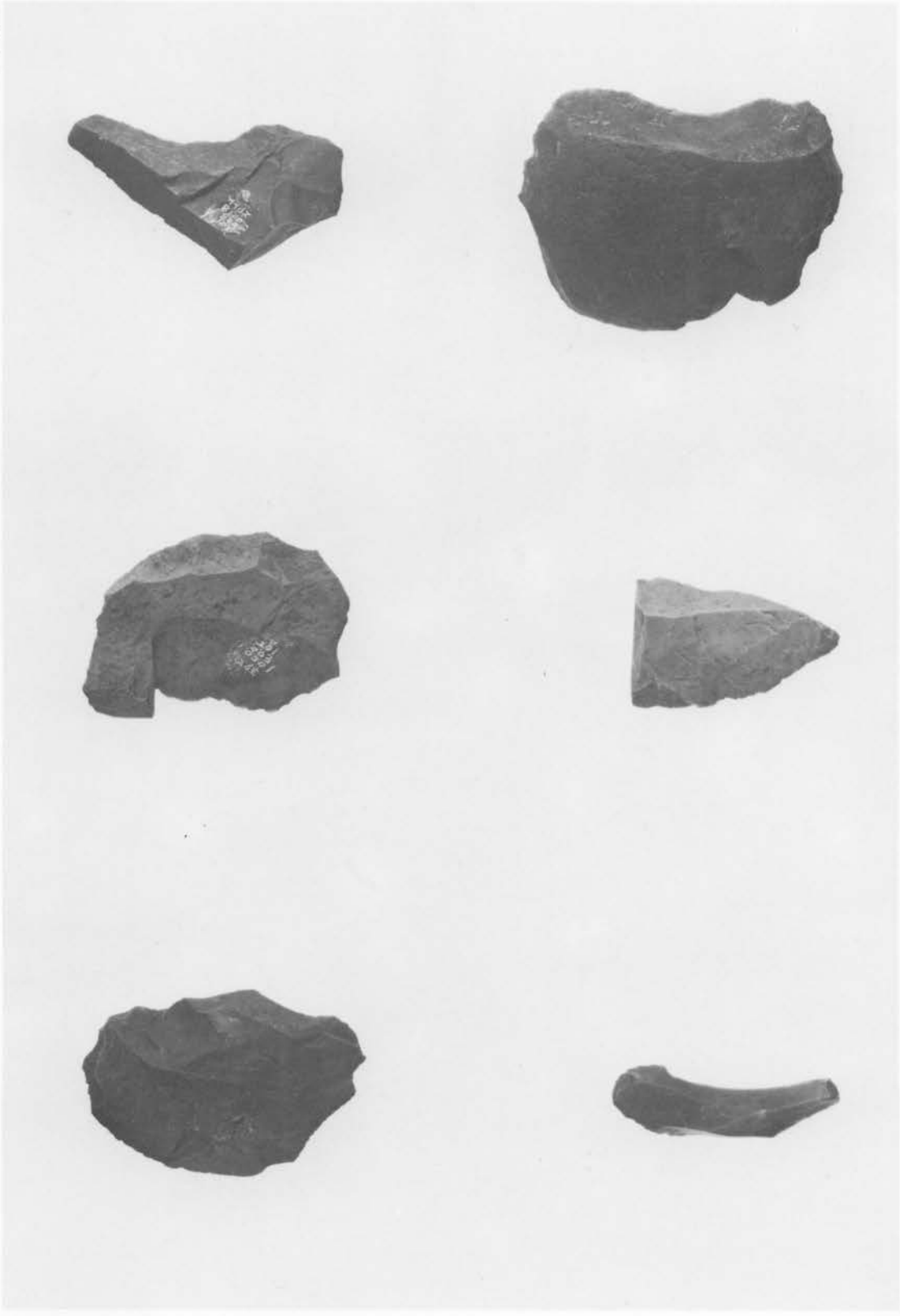
1．直刀出土状態



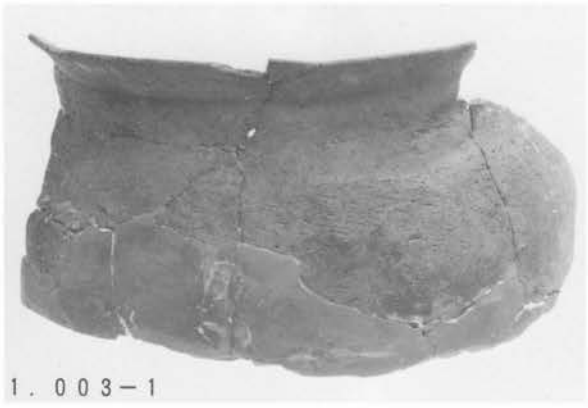
2．古墳下遺物状態

A地点出土遺物

図版八三　遺物



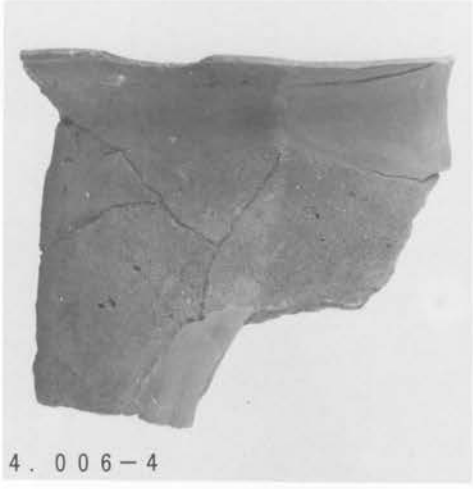
先土器時代遺物



1．003－1

2．006－3

3．004－2



4．006－4

5．006－1

6．006－13　　7．006－14

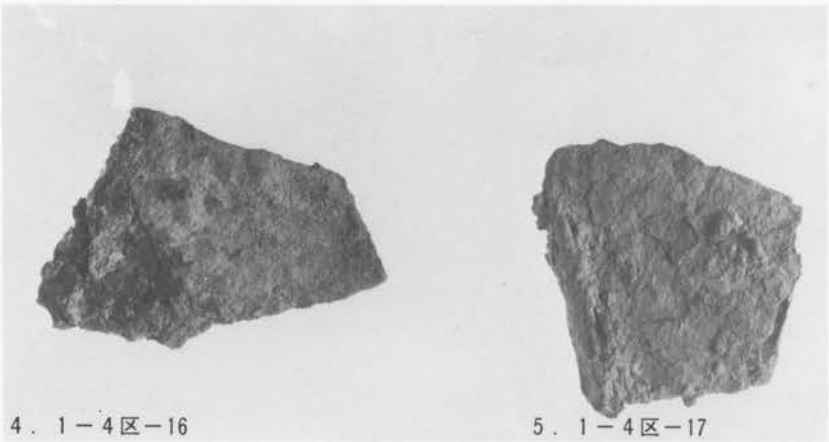
住居跡出土遺物

図版八五　遺物

1．001－2

2．001－3

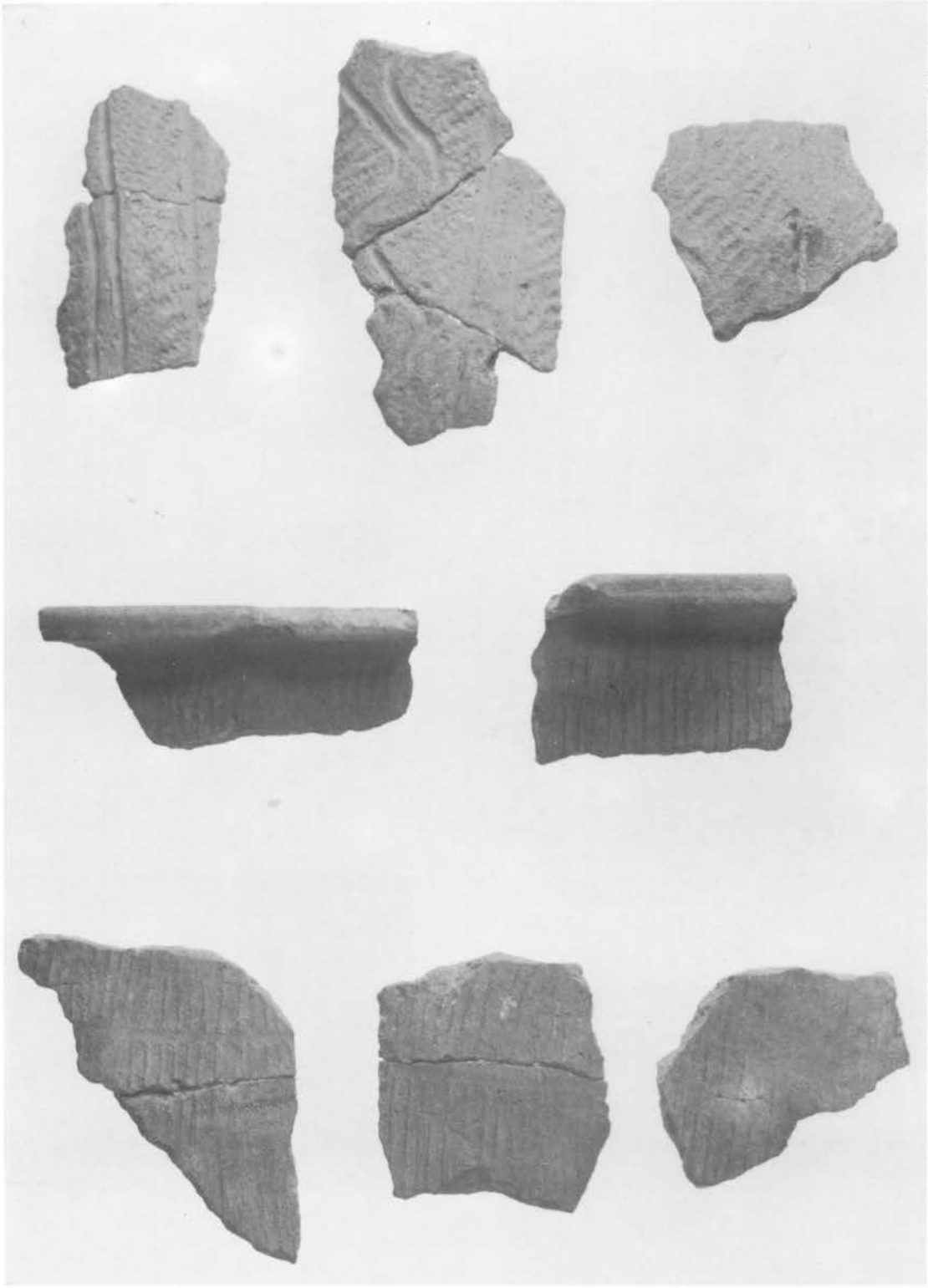
3．7区－4



4．1－4区－16

5．1－4区－17

住居跡・グリッド出土遺物



1～4区出土遺物

図版八七　遺物

1

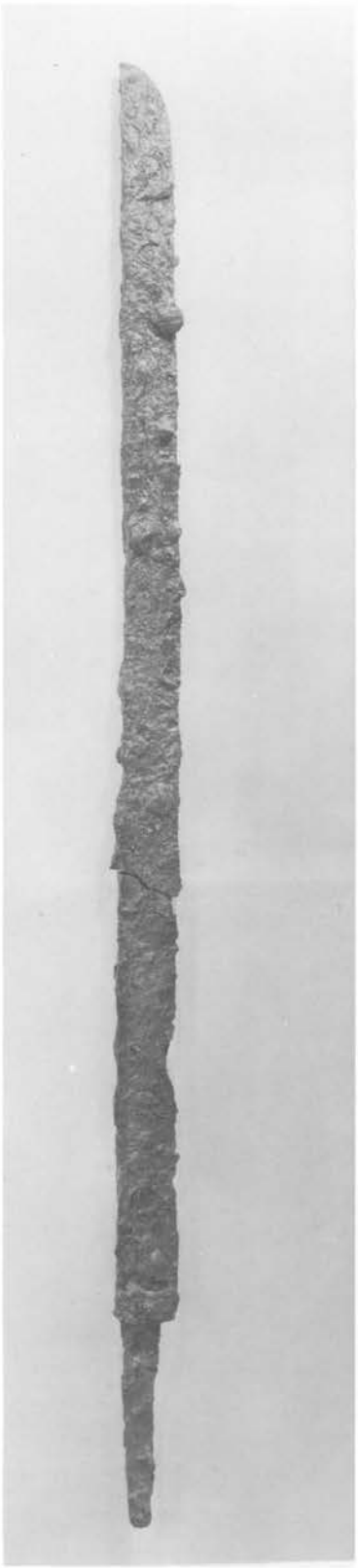
4

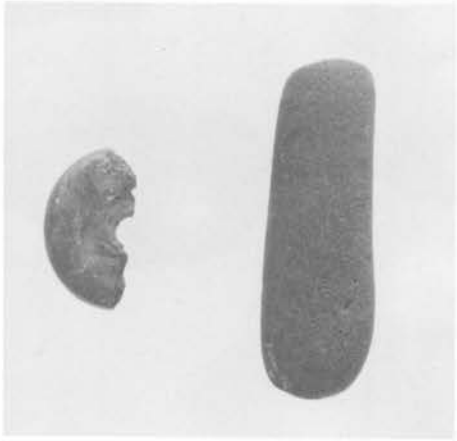
2

5

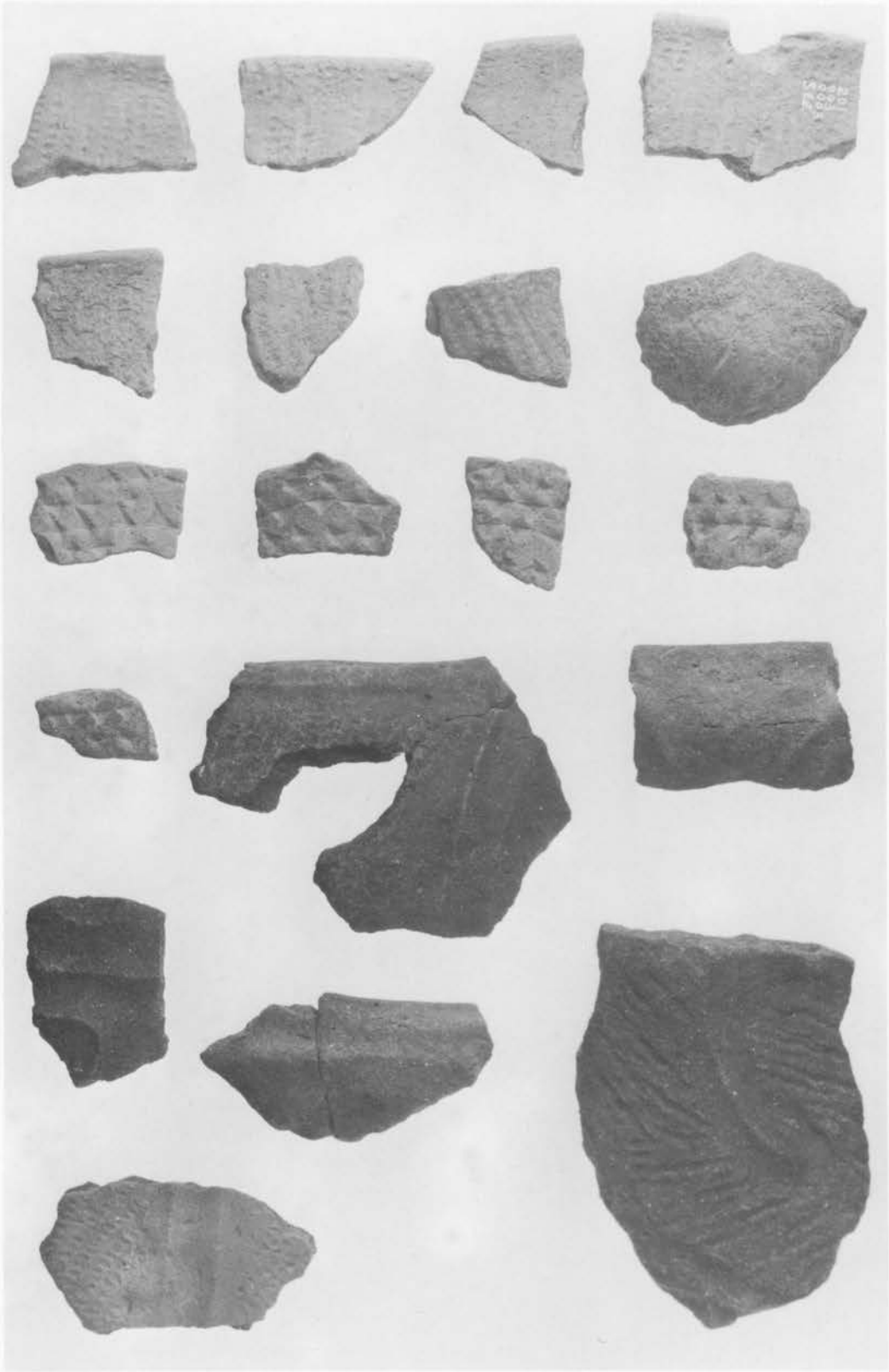
3

図版八八　遺物



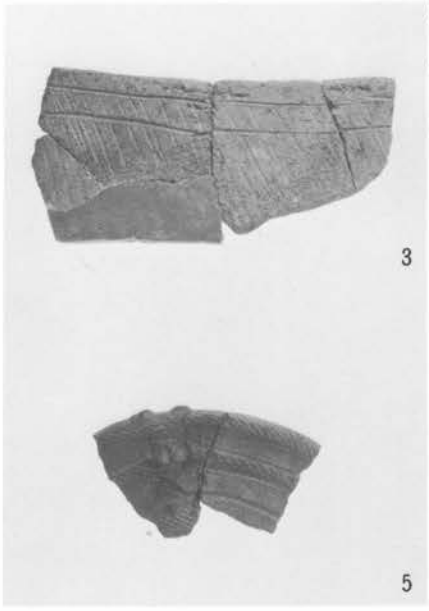


図版八九　遺物



古墳出土遺物（2）

1


3

5

4

2

古墳下出土土器

昭和54年３月15日印刷
昭和54年３月31日発行

千葉市奈木台・藤沢・中芝
清水作遺跡

著者
編集　財団法人千葉県文化財センター
発行　千葉県道路公社
印刷　株式会社太陽堂印刷所
千葉市末広町1-4-27 ☎0472-22-1121